

Oracle® Identity Manager

管理およびユーザー・コンソール・ガイド

リリース 9.1.0.1

部品番号 : B53779-01

2009 年 4 月

Oracle Identity Manager 管理およびユーザー・コンソール・ガイド, リリース 9.1.0.1

部品番号 : B53779-01

Oracle Identity Manager Administrative and User Console Guide, Release 9.1.0.1

原本部品番号 : E14057-01

原著者 : Lyju Vadassery

原協力者 : Debapriya Datta, Javed Beg

Copyright © 2009, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

制限付権利の説明

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントが、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供される場合は、次の Notice が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, the use, duplication, disclosure, modification, and adaptation shall be subject to the restrictions and license terms set forth in the applicable Government contract, and, to the extent applicable by the terms of the Government contract, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software License (December 2007). Oracle USA, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このソフトウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアは、危険が伴うアプリケーション（人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む）への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する場合、このソフトウェアを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性 (redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したことに起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

Oracle は Oracle Corporation およびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

このソフトウェアおよびドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても、一切の責任を負いかねます。

目次

はじめに	xv
対象読者	xvi
ドキュメントのアクセシビリティについて	xvi
関連ドキュメント	xvi
ドキュメントの更新	xvi
表記規則	xvii
サポートおよびサービス	xvii
第 I 部 一般機能	
1 管理およびユーザー・コンソールの概要	
1.1 ユーザー・ロールと機能	1-2
1.2 リソース・モデルの概要	1-2
1.2.1 承認プロセス	1-3
1.2.2 プロビジョニング・プロセス	1-3
2 管理およびユーザー・コンソールを使用した自己登録	
2.1 Oracle Identity Manager アカウントの作成	2-2
2.2 パスワードの変更	2-3
2.3 自己登録リクエストのトラッキング	2-3
2.4 管理およびユーザー・コンソールへのログイン	2-4
2.5 管理およびユーザー・コンソールのログアウト	2-4
3 管理およびユーザー・コンソールの使用	
3.1 管理およびユーザー・コンソールの検索	3-2
3.1.1 検索（問合せ）の作成	3-2
3.1.2 ワイルドカードの使用	3-2
3.1.3 検索の動作	3-3
3.2 管理およびユーザー・コンソールにおけるデータ表示のカスタマイズ	3-3
3.2.1 テキスト・エントリの切捨て	3-3
3.2.2 プロセス・フォームでの子表の表示	3-5
4 アカウントの管理	
4.1 アカウント・プロファイルの表示と変更	4-2
4.2 パスワードの変更	4-2

4.3	パスワードの変更および取得のための質問と回答の指定	4-3
4.4	代行者への担当業務の委任	4-3
5	リソースの管理	
5.1	リソースの表示	5-2
5.2	リソース・リクエストの表示	5-3
5.3	新しいリソースのリクエスト	5-4
6	リクエストの管理	
6.1	リクエストの作成と管理	6-2
6.1.1	リソースの許可	6-3
6.1.2	リソースの無効化	6-5
6.1.3	リソースの再有効化	6-7
6.1.4	リソースの失効	6-8
6.2	リクエストのトラッキング	6-10
6.2.1	リクエストの検索	6-11
6.2.2	承認の詳細の表示	6-12
6.2.3	プロビジョニングの詳細の表示	6-12
6.2.3.1	ユーザーまたは組織ごとのプロビジョニングの詳細の表示	6-13
6.2.3.2	リソースごとのプロビジョニングの詳細の表示	6-13
6.2.4	リクエストのコメントの表示	6-13
6.2.5	リクエスト・ステータス履歴の表示	6-14
7	To-Do リストの管理	
7.1	保留中の承認の確認	7-2
7.1.1	保留中の承認の表示の管理	7-3
7.2	オープン・タスクの管理	7-3
7.2.1	オープン・タスクの表示	7-3
7.2.2	却下されたタスクの再試行	7-4
7.2.3	オープン・タスクの再割当て	7-5
7.2.4	オープン・タスクへのレスポンスの設定	7-5
7.2.5	却下されたタスクの手動による完了	7-5
7.2.6	オープン・タスクの表示の管理	7-6
7.3	アステーション・リクエストの管理	7-7
7.3.1	アステーション・リクエストの表示	7-7
7.3.2	アステーション・アクションの保存	7-8
7.3.3	コメントと委任の更新	7-9
7.3.4	アステーションの送信	7-9
8	ユーザーの作成と管理	
8.1	ユーザーの作成	8-2
8.1.1	ユーザー・プロファイルの編集	8-5
8.1.2	ユーザーの無効化	8-5
8.1.3	ユーザー・パスワードの変更	8-5
8.2	ユーザーの管理	8-6

9 組織の作成と管理

9.1	組織の作成	9-2
9.2	組織の管理	9-2
9.2.1	組織の検索と表示	9-2
9.2.2	組織の有効化	9-3
9.2.3	組織の無効化	9-3
9.2.4	組織の削除	9-3
9.3	組織詳細の管理	9-4

10 ユーザー・グループの作成と管理

10.1	グループの作成	10-2
10.2	グループの管理	10-2
10.2.1	ユーザー・グループの検索	10-2
10.2.2	ユーザー・グループの削除	10-3
10.2.3	ユーザー・グループの表示と管理	10-3
10.2.3.1	メンバーとサブグループ	10-3
10.2.3.2	メニュー項目	10-4
10.2.3.3	管理グループ	10-4
10.2.3.4	アクセス・ポリシー	10-6
10.2.3.5	メンバーシップ・ルール	10-6
10.2.3.6	データ・オブジェクト権限	10-7
10.2.3.7	許可されたレポート	10-17

11 アクセス・ポリシーの作成および管理

11.1	アクセス・ポリシーの機能	11-2
11.2	アクセス・ポリシーの作成	11-3
11.3	アクセス・ポリシーの管理	11-5

12 リソースの使用

12.1	リソースの詳細の表示	12-2
12.2	リソースに関連付けられている組織に関する作業	12-3
12.3	「リソース管理者」オプションの使用	12-3
12.3.1	リソースの管理者としてのユーザー・グループの割当て	12-4
12.3.2	管理者グループの作成	12-4
12.3.3	管理グループの権限の更新	12-5
12.4	「リソース認可者」オプションの使用	12-5
12.5	「リソース・ワークフロー」オプションを使用したワークフローの表示	12-6
12.5.1	ワークフロー・ビジュアライザを開く	12-6
12.5.2	ワークフロー・ビジュアライザの要素	12-7
12.5.2.1	ワークフロー定義の「プロビジョニング」イベント・タブの使用	12-9
12.5.2.1.1	「プロビジョニング」タブ	12-9
12.5.2.1.2	「リコンシリエーション」タブ	12-9
12.5.2.1.3	「サービス・アカウント」タブ	12-10
12.5.2.1.4	「ユーザー・イベント」タブ	12-10
12.5.2.1.5	「組織イベント」タブ	12-10
12.5.2.1.6	「リソース・イベント」タブ	12-10
12.5.2.1.7	「フォーム・イベント」タブ	12-10

12.5.2.1.8	「アテステーション」タブ	12-10
12.5.3	ワークフロー・ビジュアライザの操作	12-11
12.5.3.1	要素の並べ替え	12-12
12.5.3.2	展開ノードの使用	12-14
12.5.3.3	タスク詳細へのアクセス	12-15
12.5.3.3.1	「一般」タブ	12-15
12.5.3.3.2	「自動化」タブ	12-16
12.5.3.3.3	「タスクの割当て」タブ	12-16
12.5.3.3.4	「依存先」タブ	12-16
12.5.3.3.5	「リソース・ステータス管理」タブ	12-16
12.6	「リソース・ワークフロー」オプションを使用したワークフローの作成および変更	12-17
12.6.1	ワークフロー・デザイナを開く	12-17
12.6.2	ワークフローの作成	12-18
12.6.3	ワークフロー・デザイナのメイン・ページ	12-19
12.6.3.1	情報	12-20
12.6.3.2	ツールバー	12-20
12.6.3.2.1	ワークフロー構成	12-20
12.6.3.2.2	タスク・ライブラリ	12-22
12.6.3.2.3	表示オプション	12-23
12.6.3.2.4	イメージの生成	12-23
12.6.3.2.5	凡例	12-24
12.6.3.2.6	リフレッシュ	12-24
12.6.3.2.7	保存	12-25
12.6.3.3	デザイナ・ページ	12-25
12.6.3.4	メニュー・セクション	12-25
12.6.4	タスクおよびレスポンスの作成と管理	12-31
12.6.4.1	一般メニュー・オプション	12-31
12.6.4.2	タスク・オプション	12-31
12.6.4.3	レスポンス・オプション	12-32
12.6.4.4	リンク・オプション	12-32
12.6.4.5	タスクの構成	12-33
12.6.4.6	レスポンスの構成	12-41
12.6.5	データ・フローの構成	12-41
12.6.5.1	フォーム・データ・フロー	12-42
12.6.5.2	リコンシリエーション・データ・フロー	12-43
12.7	IT リソースの作成	12-45
12.8	IT リソースの管理	12-47
12.8.1	IT リソースの表示	12-47
12.8.2	IT リソースの変更	12-48
12.8.3	IT リソースの削除	12-48
12.9	スケジュール済タスクの作成	12-49
12.10	スケジュール済タスクの管理	12-50
12.10.1	スケジュール済タスクの表示	12-51
12.10.2	スケジュール済タスクの変更	12-51

13 デプロイメント・マネージャの使用

13.1	デプロイメントのエクスポート	13-2
13.2	デプロイメントのインポート	13-4
13.2.1	スケジュール済タスクの再インポート時のデプロイメント・マネージャの動作	13-4

13.2.2	XML ファイルのインポート	13-5
13.3	デプロイメント・マネージャの使用に関するベスト・プラクティス	13-6

14 レポートの使用

14.1	操作レポートの概要	14-2
14.2	履歴レポートの概要	14-3
14.3	レポートの実行	14-4
14.4	レポートのデータの表示	14-4
14.5	レポート・フィルタの使用	14-5
14.6	入力パラメータの変更	14-5
14.7	CSV エクスポート	14-5
14.8	詳細ページへのリンク	14-5
14.9	サード・パーティ製ソフトウェアを使用したレポートの作成	14-5

15 アステーション機能の使用

15.1	アステーションについて	15-2
15.1.1	アステーション・プロセスの定義	15-3
15.1.1.1	アステーション・プロセスの制御	15-3
15.1.1.1.1	プロセスの無効化	15-3
15.1.1.1.2	プロセスの削除	15-3
15.1.2	アステーション・タスクのコンポーネント	15-4
15.1.2.1	アステーション受信ボックス	15-4
15.1.3	アステーション・リクエスト	15-5
15.1.4	委任	15-5
15.1.5	アステーション・ライフサイクル・プロセス	15-6
15.1.5.1	第1段階: アステーション・タスクの作成	15-6
15.1.5.2	第2段階: アステーション・タスクに関する作業	15-7
15.1.5.3	第3段階: 送信されたアステーション・タスクの処理	15-8
15.1.6	アステーション・エンジン	15-9
15.1.7	アステーション・スケジューラタスク	15-10
15.1.8	アステーションドリブンのワークフロー機能	15-10
15.1.9	アステーションの電子メール	15-11
15.1.9.1	アステーション・レビューアへの通知	15-11
15.1.9.1.1	変数	15-11
15.1.9.1.2	件名行	15-11
15.1.9.1.3	本文	15-11
15.1.9.2	委任されたレビューアへの通知	15-11
15.1.9.2.1	変数	15-11
15.1.9.2.2	件名行	15-12
15.1.9.2.3	本文	15-12
15.1.9.3	拒否されたアステーション権限についてのプロセス所有者への通知	15-12
15.1.9.3.1	変数	15-12
15.1.9.3.2	件名行	15-12
15.1.9.3.3	本文	15-12
15.1.9.3.4	スペシャル・コメント	15-13
15.1.9.4	電子メールが定義されていないレビューアについてのプロセス所有者への通知	15-13
15.1.9.4.1	変数	15-13
15.1.9.4.2	件名行	15-13

15.1.9.4.3	本文	15-13
15.1.9.4.4	スペシャル・コメント	15-13
15.2	アテステーション・プロセスの設定	15-14
15.2.1	メニュー構造	15-14
15.2.2	システム制御	15-14
15.3	アテステーション・プロセスの作成	15-15
15.4	アテステーション・プロセスの管理	15-17
15.4.1	アテステーション・プロセスの編集	15-18
15.4.2	アテステーション・プロセスの無効化	15-18
15.4.3	アテステーション・プロセスの有効化	15-18
15.4.4	アテステーション・プロセスの削除	15-18
15.4.5	アテステーション・プロセスの実行	15-19
15.4.6	アテステーション・プロセス管理者の管理	15-19
15.4.7	アテステーション・プロセス実行履歴の表示	15-19
15.5	アテステーション・ダッシュボードの使用	15-20
15.5.1	アテステーション・リクエスト詳細の表示	15-21
15.5.2	電子メール通知	15-22
15.5.3	アテステーション猶予期間チェッカー・スケジュール済タスク	15-22

16 診断ダッシュボード

16.1	診断ダッシュボードの概要	16-2
16.1.1	インストールのテスト	16-2
16.1.2	インストール後のテスト	16-3
16.2	診断ダッシュボードのインストール	16-3
16.2.1	Oracle Application Server への診断ダッシュボードのインストール	16-4
16.2.2	JBoss Application Server への診断ダッシュボードのインストール	16-4
16.2.3	IBM WebSphere Application Server への診断ダッシュボードのインストール	16-5
16.2.4	Oracle WebLogic Server への診断ダッシュボードのインストール	16-5
16.2.5	診断ダッシュボードの起動	16-6
16.3	診断ダッシュボードの使用	16-7
16.4	テストの詳細とパラメータ	16-8
16.4.1	Microsoft SQL Server の JDBC ライブラリ可用性のチェック	16-8
16.4.2	Microsoft SQL Server の前提条件チェック	16-9
16.4.3	Oracle Database の前提条件チェック	16-9
16.4.4	WebSphere の埋込み JMS サーバーのステータス	16-10
16.4.5	データベース接続性のチェック	16-10
16.4.6	アカウント・ロックのステータス	16-10
16.4.7	データ暗号化キーの検証	16-11
16.4.8	スケジューラ・サービスのステータス	16-11
16.4.9	Remote Manager のステータス	16-11
16.4.10	JMS メッセージ機能の検証	16-11
16.4.11	ターゲット・システムの SSL トラストの検証	16-12
16.4.12	Java VM システム・プロパティのレポート	16-12
16.4.13	WebSphere のバージョンのレポート	16-12
16.4.14	Oracle Identity Manager のライブラリと拡張機能のバージョンのレポート	16-12
16.4.15	Oracle Identity Manager のライブラリと拡張機能のマニフェストのレポート	16-12
16.4.16	SSO 診断情報	16-13

16.4.17	基本接続性のテスト	16-13
16.4.18	プロビジョニングのテスト	16-13
16.4.19	リコンシリエーションのテスト	16-14

第II部 統合ソリューション機能

17 事前定義済コネクタのインストール

17.1	コネクタのインストール・プロセスの概要	17-2
17.2	コネクタのインストールのためのユーザー・アカウントの作成	17-2
17.3	事前定義済コネクタのインストール	17-3

18 インストールとテストのためのコネクタの構成

18.1	構成 XML ファイルの構造	18-2
18.1.1	connector 要素	18-2
18.1.2	connector-name 要素	18-3
18.1.3	connector-version 要素	18-3
18.1.4	filecopy 要素	18-4
18.1.5	destination 要素	18-4
18.1.6	file 要素	18-5
18.1.7	configuration 要素	18-5
18.1.8	source 要素	18-6
18.1.9	pre-Install 要素	18-6
18.1.10	title 要素	18-7
18.1.11	step 要素	18-7
18.1.12	dependency-connector 要素	18-8
18.1.13	dependency-connector-name 要素	18-9
18.1.14	dependency-connector-version 要素	18-9
18.1.15	サンプル構成 XML ファイル	18-10
18.2	コネクタ用のテスト・クラスの開発	18-10
18.3	コネクタ・パック・ディレクトリの構造	18-11

19 汎用テクノロジー・コネクタの概要

19.1	汎用テクノロジー・コネクタの必要性	19-2
19.2	汎用テクノロジー・コネクタの機能アーキテクチャ	19-2
19.2.1	リコンシリエーション・モジュールのプロバイダおよびデータセット	19-4
19.2.2	プロビジョニング・モジュールのプロバイダおよびデータセット	19-5
19.2.3	「OIM」データセット	19-6
19.3	汎用テクノロジー・コネクタの機能	19-6
19.3.1	リコンシリエーション・モジュールに固有の機能	19-6
19.3.1.1	信頼できるソース・リコンシリエーション	19-6
19.3.1.2	アカウント・ステータスのリコンシリエーション	19-7
19.3.1.3	完全リコンシリエーションおよび増分リコンシリエーション	19-7
19.3.1.4	バッチ・リコンシリエーション	19-8
19.3.1.5	複数値属性データ（子データ）の削除のリコンシリエーション	19-8
19.3.1.6	リコンシリエーション停止の失敗しきい値	19-8
19.3.2	その他の機能	19-9

19.3.2.1	カスタム・データ・フィールドおよびフィールド・マッピング	19-9
19.3.2.2	カスタム・プロバイダ	19-9
19.3.2.3	多言語サポート	19-9
19.3.2.4	カスタム日付書式	19-9
19.3.2.5	OIM ユーザー属性に対する変更のターゲット・システムへの伝播	19-9
19.4	このマニュアルでの汎用テクノロジ・コネクタに関する情報のロードマップ	19-10

20 Oracle Identity Manager に含まれている汎用テクノロジ・コネクタの事前定義済プロバイダ

20.1	共有ドライブ・リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダ	20-2
20.2	CSV リコンシリエーション・フォーマット・プロバイダ	20-8
20.3	SPML プロビジョニング・フォーマット・プロバイダ	20-8
20.3.1	ランタイム・パラメータ	20-9
20.3.2	設計パラメータ	20-10
20.3.3	必須でないパラメータ	20-12
20.3.4	値が事前定義済のパラメータ	20-12
20.4	Web サービス・プロビジョニング・トランスポート・プロバイダ	20-13
20.4.1	Oracle Identity Manager とターゲット・システム Web サービスの間の SSL 通信の構成	20-13
20.5	変換プロバイダ	20-17
20.5.1	連結変換プロバイダ	20-17
20.5.2	翻訳変換プロバイダ	20-18
20.5.2.1	アカウント・ステータスのリコンシリエーションの構成	20-19
20.6	検証プロバイダ	20-23

21 汎用テクノロジ・コネクタ用カスタム・プロバイダの作成

21.1	プロバイダの役割	21-2
21.1.1	汎用テクノロジ・コネクタ作成中のプロバイダの役割	21-2
21.1.2	リコンシリエーション中のプロバイダの役割	21-5
21.1.3	プロビジョニング中のプロバイダの役割	21-7
21.2	カスタム・プロバイダの作成	21-9
21.2.1	プロバイダ要件の確認	21-9
21.2.1.1	リコンシリエーション・プロバイダ要件の確認	21-9
21.2.1.2	プロビジョニング・プロバイダ要件の確認	21-10
21.2.2	プロバイダ・パラメータの識別	21-10
21.2.3	値オブジェクトの Java コード実装の開発	21-11
21.2.4	プロバイダ SPI メソッドの Java コード実装の開発	21-11
21.2.5	ロギングおよび例外処理の Java コードの開発	21-12
21.2.6	プロバイダ XML ファイルの作成	21-12
21.2.7	プロバイダのリソース・バンドル・エントリの作成	21-15
21.2.8	プロバイダのデプロイ	21-16
21.3	プロバイダの再利用	21-17
21.3.1	リコンシリエーション・プロバイダの再利用	21-18
21.3.2	プロビジョニング・プロバイダの再利用	21-19

22 汎用テクノロジー・コネクタの作成

22.1	プロバイダ要件の確認	22-2
22.2	汎用テクノロジー・コネクタに組み込むプロバイダの選択	22-2
22.3	汎用テクノロジー・コネクタの作成における前提条件への対応	22-2
22.4	管理およびユーザー・コンソールを使用した汎用テクノロジー・コネクタの作成	22-3
22.4.1	「ステップ 1: 基本情報の指定」 ページ	22-3
22.4.2	「ステップ 2: パラメータ値の指定」 ページ	22-6
22.4.3	「ステップ 3: コネクタ構成の変更」 ページ	22-16
22.4.3.1	データセットのフィールドの追加または編集	22-23
22.4.3.2	データセットのフィールドの削除	22-30
22.4.3.3	フィールド間のマッピングの削除	22-30
22.4.3.4	子データセットの削除	22-30
22.4.4	「ステップ 4: コネクタ・フォーム名の検証」 ページ	22-31
22.4.5	「ステップ 5: コネクタ情報の検証」 ページ	22-33
22.5	リコンシリエーションの構成	22-35
22.6	プロビジョニングの構成	22-36
22.7	汎用テクノロジー・コネクタのロギングの有効化	22-37

23 汎用テクノロジー・コネクタの管理

23.1	汎用テクノロジー・コネクタの変更	23-2
23.2	汎用テクノロジー・コネクタのエクスポート	23-3
23.3	汎用テクノロジー・コネクタのインポート	23-4
23.4	汎用テクノロジー・コネクタの Oracle Identity Manager リリース 9.1.0.1 への アップグレード	23-5

24 汎用テクノロジー・コネクタの作成および使用に関するベスト・プラクティス

24.1	「ステップ 1: 基本情報の指定」 ページ	24-2
24.2	「ステップ 2: パラメータ値の指定」 ページ	24-3
24.3	「ステップ 3: コネクタ構成の変更」 ページ	24-4
24.3.1	フィールドの名前	24-4
24.3.2	パスワード・フィールド	24-4
24.3.3	パスワード型フィールド	24-5
24.3.4	マッピング	24-5
24.3.5	「OIM」 データセット	24-6
24.4	共有ドライブ・リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダ	24-7
24.5	カスタム・プロバイダ	24-7
24.6	コネクタ・オブジェクト	24-7
24.7	汎用テクノロジー・コネクタの変更	24-8

25 汎用テクノロジー・コネクタ・エラーのトラブルシューティング

25.1	コネクタ作成プロセスの最後に発生するエラー	25-2
25.2	リコンシリエーション中に発生する一般的なエラー	25-2
25.3	プロビジョニング中に発生する一般的なエラー	25-4

26 汎用テクノロジー・コネクタに関する既知の問題

26.1	汎用テクノロジー・コネクタおよびコネクタ・オブジェクトの名前	26-2
26.2	「ステップ 3: コネクタ構成の変更」ページ	26-2
26.3	多言語サポート	26-5
26.4	コネクタ・オブジェクト	26-8
26.5	一般的な既知の問題	26-9

27 Oracle Identity Manager をターゲット・システムとして使用した プロビジョニング操作

28 汎用テクノロジー・コネクタ・フレームワークで作成されるコネクタ・ オブジェクト

28.1	「リコンシリエーション」と「プロビジョニング」の両方の選択	28-2
28.2	「リコンシリエーション」のみの選択	28-3
28.3	「プロビジョニング」のみの選択	28-4

第 III 部 付録

A 管理者のためのシステム設定上の考慮事項

索引

図一覧

12-1	「凡例」 ページ	12-9
12-2	ワークフロー・ビジュアライザに表示されたサンプル・ワークフロー	12-11
12-3	ワークフロー・ビジュアライザでのドラッグ・アンド・ドロップの使用	12-12
12-4	タスク・ノードの使用 (ショートカット・メニュー)	12-13
12-5	ワークフロー・ビジュアライザの閉じたレスポンス・サブツリー	12-14
12-6	「ワークフローの作成」 ダイアログ・ボックス	12-18
12-7	ワークフロー・デザイナのメイン・ページ	12-19
12-8	「ワークフロー構成」 ダイアログ・ボックス	12-20
12-9	「タスク・ライブラリ」 ページ	12-22
12-10	「表示オプションの設定」 ダイアログ・ボックス	12-23
12-11	「凡例」 ダイアログ・ボックス	12-24
12-12	ユーザー・イベント参照の追加ダイアログ・ボックス	12-26
12-13	「参照イベントの作成」 ダイアログ・ボックス	12-26
12-14	「参照イベントの編集」 ダイアログ・ボックス	12-27
12-15	「参照イベントの削除」 ダイアログ・ボックス	12-27
12-16	組織イベント参照の追加ダイアログ・ボックス	12-28
12-17	「参照イベントの作成」 ダイアログ・ボックス	12-28
12-18	「参照イベントの編集」 ダイアログ・ボックス	12-28
12-19	「参照イベントの削除」 ダイアログ・ボックス	12-29
12-20	リソース・イベント参照の追加ダイアログ・ボックス	12-29
12-21	フォーム・イベント参照の追加ダイアログ・ボックス	12-30
12-22	「タスクの詳細」 ダイアログ・ボックス	12-33
12-23	「一般」 タブ	12-34
12-24	「自動化」 タブ	12-35
12-25	「通知」 タブ	12-36
12-26	「タスクの割当て」 タブ	12-37
12-27	「タスク割当てルール」 ダイアログ・ボックス	12-38
12-28	「タスクの詳細」 ダイアログ・ボックス	12-39
12-29	「リソース・ステータス管理」 タブ	12-40
12-30	「レスポンスの詳細」 ダイアログ・ボックス	12-41
12-31	「フォーム・データ・フローの構成」 ページ	12-42
12-32	「リコンシリエーション・データ・フローの構成」 ページ	12-44
15-1	アテステーション・タスクの作成: ワークフロー	15-6
15-2	レビューが権限に対するレスポンスを送信する場合のイベントのフロー	15-7
15-3	アテステーション・タスクのレスポンス送信後のイベント・フロー	15-8
15-4	フォローアップ・アクション・サブフロー	15-9
19-1	汎用テクノロジ・コネクタの機能アーキテクチャ	19-3
20-1	SPML プロビジョニング・フォーマット・プロバイダとターゲット・システムの間の 通信	20-8
21-1	メタデータの検出プロセス	21-3
21-2	リコンシリエーション中のプロバイダの役割	21-5
21-3	プロビジョニング中のプロバイダの役割	21-7
22-1	「ステップ 1: 基本情報の指定」 ページ	22-6
22-2	「ステップ 2: パラメータ値の指定」 ページの最初のセクション	22-14
22-3	「ステップ 2: パラメータ値の指定」 ページの 2 番目のセクション	22-15
22-4	「ステップ 2: パラメータ値の指定」 ページの 3 番目のセクション	22-16
22-5	「ステップ 3: コネクタ構成の変更」 ページ	22-18
22-6	フィールド追加後の「ステップ 3: コネクタ構成の変更」 ページ	22-31
22-7	「ステップ 4: コネクタ・フォーム名の検証」 ページ	22-32
22-8	「ステップ 5: コネクタ情報の検証」 ページの最初のセクション	22-34
22-9	「ステップ 5: コネクタ情報の検証」 ページの 2 番目のセクション	22-35
27-1	Oracle Identity Manager をプロビジョニング・ターゲットとして使用するための設定	27-1

表一覧

1-1	ユーザー・ロール	1-2
8-1	「ユーザーの作成」 ページの GUI 要素	8-2
10-1	明示的な挿入 / 更新 / 削除権限が必要なデータ・オブジェクト	10-8
10-2	管理者グループのデータ・オブジェクト権限	10-10
10-3	明示的な権限が不要なデータ・オブジェクト	10-13
12-1	ワークフロー・ビジュアライザの情報フィールド	12-7
12-2	ワークフロー・ビジュアライザのツールバーのメニュー項目	12-7
12-3	「一般」 タブのフィールド	12-15
12-4	「自動化」 タブのフィールド	12-16
12-5	「リソース・ステータス管理」 タブのフィールド	12-16
12-6	「ワークフローの作成」 ダイアログ・ボックスのフィールド	12-18
12-7	「ワークフロー構成」 ダイアログ・ボックスのフィールド	12-21
14-1	操作レポートの一覧	14-2
14-2	履歴レポートの一覧	14-3
16-1	診断ダッシュボードのテスト	16-6
18-1	構成 XML ファイルの要素	18-2
18-2	コネクタ・パック・ディレクトリの構造	18-11
20-1	検証プロバイダ	20-23
21-1	プロバイダ操作中に使用される値オブジェクト	21-11
21-2	サポートされる各プロバイダ・タイプに固有のロギング・モジュール	21-12
21-3	プロバイダ XML ファイルの要素	21-13
22-1	「ステップ 1: 基本情報の指定」 ページのサンプル・エントリ	22-5
22-2	「ステップ 2: パラメータ値の指定」 ページのサンプル・エントリ	22-12
22-3	様々な入力条件によるデータセットおよびフィールドの表示	22-21
22-4	参照プロパティ	22-27
25-1	リコンシリエーション中に発生する一般的なエラー	25-3
25-2	プロビジョニング中に発生する一般的なエラー	25-4

はじめに

このマニュアルでは、Oracle Identity Manager 管理およびユーザー・コンソールを使用して実行できる処理について説明します。

対象読者

このマニュアルは、データベース管理者、システム管理者、開発者および Oracle Identity Manager のエンドユーザーを対象としています。

ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクル社は、障害のあるお客様にもオラクル社の製品、サービスおよびサポート・ドキュメントを簡単にご利用いただけることを目標としています。オラクル社のドキュメントには、ユーザーが障害支援技術を使用して情報を利用できる機能が組み込まれています。HTML 形式のドキュメントで用意されており、障害のあるお客様が簡単にアクセスできるようにマークアップされています。標準規格は改善されつつあります。オラクル社はドキュメントをすべてのお客様がご利用できるように、市場をリードする他の技術ベンダーと積極的に連携して技術的な問題に対応しています。オラクル社のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト <http://www.oracle.com/accessibility/> を参照してください。

ドキュメント内のサンプル・コードのアクセシビリティについて

スクリーン・リーダーは、ドキュメント内のサンプル・コードを正確に読めない場合があります。コード表記規則では閉じ括弧だけを行に記述する必要があります。しかし JAWS は括弧だけの行を読まない場合があります。

外部 Web サイトのドキュメントのアクセシビリティについて

このドキュメントにはオラクル社およびその関連会社が所有または管理しない Web サイトへのリンクが含まれている場合があります。オラクル社およびその関連会社は、それらの Web サイトのアクセシビリティに関しての評価や言及は行っておりません。

Oracle サポート・サービスへの TTY アクセス

アメリカ国内では、Oracle サポート・サービスへ 24 時間年中無休でテキスト電話 (TTY) アクセスが提供されています。TTY サポートについては、(800)446-2398 にお電話ください。

関連ドキュメント

詳細は、このリリースの Oracle Identity Manager ドキュメント・セットの他のドキュメントを参照してください。

ドキュメントの更新

オラクル社は、最新かつ最適な情報の提供に努めています。Oracle Identity Manager のドキュメント・セットの更新情報は、次に示す Oracle Technology Network のサイトを参照してください。

<http://www.oracle.com/technology/documentation/index.html>

表記規則

このマニュアルでは次の表記規則を使用します。

規則	意味
太字	太字は、操作に関連する Graphical User Interface 要素、または本文中で定義されている用語および用語集に記載されている用語を示します。
イタリック体	イタリックは、ユーザーが特定の値を指定するプレースホルダ変数を示します。
固定幅フォント	固定幅フォントは、段落内のコマンド、URL、サンプル内のコード、画面に表示されるテキスト（または入力するテキスト）、およびファイル、ディレクトリ、属性、パラメータの名前を示します。

サポートおよびサービス

次の各項に、各サービスに接続するための URL を記載します。

Oracle サポート・サービス

オラクル製品サポートの購入方法、および Oracle サポート・サービスへの連絡方法の詳細は、次の URL を参照してください。

<http://www.oracle.com/lang/jp/support/index.html>

製品マニュアル

製品のマニュアルは、次の URL にあります。

<http://www.oracle.com/technology/global/jp/documentation/index.html>

研修およびトレーニング

研修に関する情報とスケジュールは、次の URL で入手できます。

http://education.oracle.com/pls/web_prod-plq-dad/db_pages.getpage?page_id=3

その他の情報

オラクル製品やサービスに関するその他の情報については、次の URL から参照してください。

<http://www.oracle.com/lang/jp/index.html>

<http://www.oracle.com/technology/global/jp/index.html>

注意： ドキュメント内に記載されている URL や参照ドキュメントには、Oracle Corporation が提供する英語の情報も含まれています。日本語版の情報については、前述の URL を参照してください。

第I部

一般機能

第I部は次の各章で構成されています。

- 第1章「管理およびユーザー・コンソールの概要」
- 第2章「管理およびユーザー・コンソールを使用した自己登録」
- 第3章「管理およびユーザー・コンソールの使用」
- 第4章「アカウントの管理」
- 第5章「リソースの管理」
- 第6章「リクエストの管理」
- 第7章「To-Do リストの管理」
- 第8章「ユーザーの作成と管理」
- 第9章「組織の作成と管理」
- 第10章「ユーザー・グループの作成と管理」
- 第11章「アクセス・ポリシーの作成および管理」
- 第12章「リソースの使用」
- 第13章「デプロイメント・マネージャの使用」
- 第14章「レポートの使用」
- 第15章「アテステーション機能の使用」
- 第16章「診断ダッシュボード」

管理およびユーザー・コンソールの概要

Oracle Identity Manager は、企業アプリケーションや管理対象システムへのアクセスを自動的に許可および取り消すための、高度で柔軟なプロビジョニング・システムです。Oracle Identity Manager を使用すると、スタッフやパートナーに対する企業リソースへのアクセス権の付与、あるいは各リソースに関連するアクセス・ポリシーの強制を行うことができます。

Oracle Identity Manager で可能な作業は次のとおりです。

- グループ・メンバーシップや電子メール・アドレスなどの Oracle Identity Manager ユーザー・アカウント情報の表示
- プロファイルの変更
- アクセス権限のあるリソースの確認
- 自分が行ったリクエストおよび他ユーザーに作成されたリクエストの表示
- 自分のための追加リソースのリクエスト
- パスワードの変更
- ログイン用のチャレンジ質問と回答の表示と変更
- ユーザー・プロキシの設定
- 保留中のリクエストの表示と管理（認可された承認者のみ）

さらに、Oracle Identity Manager の権限によっては、次の作業も可能です。

- 割り当てられている（プロビジョニングされている）リソースに持っているアカウントのパスワードおよびユーザー ID の更新
- 管理対象ユーザーのためのリソース・リクエストの作成
- 管理対象ユーザーのための、リソースの下書きリクエストの完了
- 他のユーザーのためのリソースのプロビジョニングの承認
- 追加情報のリクエストへの応答

Oracle Identity Manager は、リソースのリクエストを作成し、管理対象ユーザーのリソースのプロビジョニングを承認するための管理およびユーザー・コンソールを提供しています。ユーザーは、管理およびユーザー・コンソールを使用し、Oracle Identity Manager データベースの情報を検索、編集、および削除できます。

このマニュアルでは、管理およびユーザー・コンソールを使用して Oracle Identity Manager で実行できるアクションについて説明します。この章の内容は、次のとおりです。

- [ユーザー・ロールと機能](#)
- [リソース・モデルの概要](#)

注意：ユーザーによっては使用できない操作もあります。Oracle Identity Manager で表示および使用できる機能は、割り当てられている権限によって異なります。

Oracle Identity Manager システムのシステム管理者は、本番環境で製品を実行する前に、このドキュメントの付録 A「管理者のためのシステム設定上の考慮事項」を一読するようにしてください。

関連項目：

- Oracle Identity Manager 管理およびユーザー・コンソールのカスタマイズの詳細は、『Oracle Identity Manager 管理およびユーザー・コンソール・カスタマイズ・ガイド』を参照してください。
- Oracle Identity Manager 管理およびユーザー・コンソールのグローバル化の詳細は、『Oracle Identity Manager グローバリゼーション・ガイド』を参照してください。

1.1 ユーザー・ロールと機能

表 1-1 に、Oracle Identity Manager 関連の重要なユーザー・ロールのリストを示します。

表 1-1 ユーザー・ロール

ロール	説明
管理者	ユーザー、組織、ユーザー・グループ、リソースおよびポリシーの管理を行う担当者
承認者	リソースに対するアクセスの承認および拒否を行う担当者
エンドユーザー	Oracle Identity Manager のセルフサービス機能の利用者で、管理者ではないユーザー

1.2 リソース・モデルの概要

Oracle Identity Manager では、リソースを、リクエストの対象およびエンタープライズ・ユーザーへの割当て（プロビジョニング）の対象にできます。リソースは、アプリケーション、データベースへのアクセス、そこへのアクセスが重要な意味を持つネットワークまたは他のエンティティにあるディレクトリ構造に対する権限のいずれかです。リソースへのアクセスが許可される方法およびそのリソースに対して与えられる権限は、管理者が定義するプロビジョニング・プロセスにより決まります。あるリソースへのアクセスを、すべてのユーザーに対して統一的にプロビジョニングすることもできます。または、次のような要素に基づいて、同一の方法でアクセスをプロビジョニングすることも可能です。

- ロール（管理者、経理担当など）
- 勤務地
- 雇用形態（フルタイム、コンサルタントなど）
- グループや部門の割当て
- リソースごとの管理者および Oracle Identity Manager 管理者によって適切とみなされるその他の基準

リソースが正常にプロビジョニングされると、それ以降は Oracle Identity Manager を操作せずにそのリソースにアクセスできます。たとえば、Microsoft Exchange アプリケーションへのアクセスをリクエストしたユーザーに対して、そのリソースが正常にプロビジョニングされた場合は、Oracle Identity Manager が提供するユーザー ID とパスワードを使用してそのアプリケーションにログインできます。

Oracle Identity Manager は、プロセスとそれを含むタスクを使用してリソースのプロビジョニングを制御します。承認は承認プロセスと呼ばれる特定の種類のプロセスを使用して管理されます。承認はリソースのプロビジョニングが発生する前に取得する必要があります。Oracle Identity Manager には、承認プロセスとプロビジョニング・プロセスという 2 種類のリソース関連プロセスがあります。

1.2.1 承認プロセス

承認プロセスは、リソースをリクエストしたユーザーまたは組織に対してそのリソースのプロビジョニングを承認するかどうかを決定します。承認プロセスは、リソースのプロビジョニングの承認を担当するユーザーからの応答を必要とする一連のタスクで構成されています。応答は手動で提供されるため、これらのタスクは承認者または承認者のグループに割り当てられます。

承認者は、割り当てられる承認プロセス内のすべてのタスクを対象とすることができます。リクエスト内のタスクに割り当てられている承認者は、リクエスト内のすべてのタスクを表示することができます。リクエストの承認者が管理およびユーザー・コンソールの「**To-Do リスト**」メニューの「**保留中の承認**」をクリックすると、リクエスト ID が表示されます。

注意：承認プロセスはオプションです。Oracle Identity Manager 管理者は、承認を必要としないプロビジョニング対象のリソースをいくつか構成できます。この場合、リクエストが送信されるとすぐにリソースへのアクセスが与えられます。

1.2.2 プロビジョニング・プロセス

プロビジョニング・プロセスは、リクエストした 1 人または複数のユーザー、または組織に対してリソースを割り当てる（プロビジョニングする）ために使用されるプロセスです。プロビジョニング・プロセスは、指定されたリソースへのアクセスを許可するために必要な手順を実行する、一連の自動化されたタスクから構成されます。リソースに対して承認プロセスが定義されていない場合を除いて、承認プロセスが完了するまでプロビジョニング・プロセスを開始することはできません。また、プロビジョニング・プロセスでは、専用のフォームを使用して、リソースへのアクセスを許可するために必要なデータを取得したり、ユーザー入力を求めることができます。

Oracle Identity Manager の例外機能を使用して、プロビジョニング・プロセス中に発生する可能性のある問題に対処できます。たとえば、リソースを使用できない場合にトランザクションが停止あるいは失敗しないようにするビジネス・ロジックを、プロビジョニング・プロセスに追加できます。また、プロビジョニング・トランザクションが失敗したときに、システムが最後の既知の一貫性のある状態にロールバックできるようにする状態エンジンも備わっています。状態エンジンはまた、プロビジョニング・リクエストが拒否された場合に、システムを元の状態にロールバックします。

管理およびユーザー・コンソールを使用した自己登録

Oracle Identity Manager では、ユーザー・アカウントは次の 2 通りの方法で作成されます。管理者として、管理およびユーザー・コンソールでユーザー用にアカウントを作成できます。ユーザーも、管理およびユーザー・コンソールで自己登録してアカウントを作成できます。

この章では、Oracle Identity Manager でのアカウントの作成方法、およびそのアカウントを使用して Oracle Identity Manager でログイン、ログアウトを行う方法について説明します。

この章の内容は、次のとおりです。

- [Oracle Identity Manager アカウントの作成](#)
- [パスワードの変更](#)
- [自己登録リクエストのトラッキング](#)
- [管理およびユーザー・コンソールへのログイン](#)
- [管理およびユーザー・コンソールのログアウト](#)

2.1 Oracle Identity Manager アカウントの作成

Oracle Identity Manager では、ユーザー ID には、次の文字は使用できません。

;#/%=|+,¥"<>

ユーザーは、システムの構成によっては、マネージャにアカウントの作成を依頼する必要があります。

また、システムの構成によっては、自己登録のリクエストに承認が必要な場合があります。承認が必須でない場合は、Oracle Identity Manager が自己登録のリクエストを処理するとすぐにアカウントが作成され、使用できます。システム管理者が、自己登録リクエストに承認が必要となるように Oracle Identity Manager を設定した場合は、リクエストのステータスをトラッキングできます。アカウントは、要求された承認を取得したときから使用できます。

注意： リクエストに承認が必要な場合は、リクエストの送信後にリクエスト ID をメモしておきます。リクエスト・ステータスのトラッキングに、リクエスト ID が必要です。

自己登録によってアカウントを作成するには、次の手順を実行します。

1. 管理およびユーザー・コンソールへの自社ポータル・リンクにアクセスします。Oracle Identity Manager の「ようこそ」ページが表示されます。
2. 左ナビゲーション・ペインの「自己登録」メニュー項目で、「リクエストの作成」をクリックします。「ユーザー自己登録」ページが表示されます。
3. ユーザー・アカウントの作成に必要な情報を入力します。

必須情報はアスタリスク (*) で示されます。求められた場合は、必ずパスワードのチャレンジ質問に対する回答を選択および指定します。Oracle Identity Manager の構成によっては、パスワードを再設定するためのチャレンジ質問に回答を求められることがあります。

注意： 自己登録中は、デフォルト・ルールにアタッチされたパスワード・ポリシーが適用されます。デフォルト・ルールにパスワード・ポリシーがアタッチされていない場合は、自己登録中に指定されたパスワードが任意のパスワード・ポリシーに対して評価されます。詳細は、『Oracle Identity Manager デザイン・コンソール・ガイド』の「リソース・オブジェクトへのパスワード・ポリシー・ルールの追加」を参照してください。

4. 「リクエストの送信」をクリックします。

リクエストが送信されたことが Oracle Identity Manager により通知され、トラッキング用にリクエストの数値 ID が表示されます。リクエストの送信後、リクエスト ID をメモしておきます。リクエスト・ステータスのトラッキングに、リクエスト ID が必要です。

リクエストへのリンクが表示されます。

5. リクエストに承認が必要な場合は、左ナビゲーション・ペインで、「自己登録」メニューの下の「リクエストのトラッキング」をクリックします。「自己登録リクエストのトラッキング」ページが表示されます。このページでリクエスト ID を入力して、リクエストのステータスを確認できます。

2.2 パスワードの変更

Oracle Identity Manager のパスワードを忘れた場合、アカウントを解除するようにシステム管理者に依頼するか、チャレンジ質問への回答を求められているページでパスワードを再設定できます。これらの質問への正しい回答を入力すると、Oracle Identity Manager でパスワードを変更できます。

ログインの試行回数の最大値を上回った後で Oracle Identity Manager アカウントがロックされた場合も、パスワードをリセットできます。ただし、チャレンジ質問に正解するまでに最大試行回数を上回ると、アカウントはロックされ、Oracle Identity Manager システム管理者以外はロックを解除できません。

注意： Oracle Identity Manager ユーザー ID を忘れた場合は、Oracle Identity Manager システム管理者に問い合せてください。

Xellerate User リソース・オブジェクトにパスワード・ポリシーをアタッチした場合は、「ユーザーの作成」および「ユーザー自己登録」ページを除き、パスワード・フィールドのある管理およびユーザー・コンソールのすべてのページに、「パスワード・ポリシーの表示」リンクが表示されます。このリンクをクリックすると、パスワードの指定に適用されるパスワード・ポリシーが表示されます。

パスワードをリセットするには、次の手順を実行します。

1. 管理およびユーザー・コンソールにログインします。
2. 左ナビゲーション・ペインで「パスワードを忘れた場合」をクリックします。
3. 「ユーザー ID の検証」ページで、「ユーザー ID」フィールドにユーザー ID を入力し、「OK」をクリックします。
4. 「パスワードの変更」ページで、チャレンジ質問に回答します。

質問と回答は、アカウント・オプションの一部として設定します。これらの質問と回答は、Oracle Identity Manager の管理およびユーザー・コンソールに最初にログインしたときに選択します。

- a. パスワードのチャレンジ質問に対する正しい回答を入力します。
 - b. 新しいパスワードを両方のパスワード・フィールドに入力します。
5. 「送信」をクリックします。

2.3 自己登録リクエストのトラッキング

Oracle Identity Manager の構成によっては、自己登録のリクエストに承認が必要な場合があります。承認が必要な場合は、承認と自己登録プロセスのステータスをトラッキングすることができます。

自己登録リクエストのステータスをトラッキングするには、次の手順を実行します。

1. 管理およびユーザー・コンソールへの自社ポータル・リンクにアクセスします。「ようこそ」ページが表示されます。
2. 左ナビゲーション・ペインで、「自己登録」の下の「リクエストのトラッキング」をクリックします。「自己登録リクエストのトラッキング」ページが表示されます。
3. 「リクエスト ID」フィールドに、自己登録に関連付けられているリクエストの ID を入力します。
4. 「リクエストのトラッキング」をクリックします。自己登録のリクエスト・ステータスに関する詳細が表示されます。

2.4 管理およびユーザー・コンソールへのログイン

管理およびユーザー・コンソールにログインする前に、そのアプリケーションのアカウントを持っていることを確認します。現在アカウントを持っていない場合は、2-2 ページの「[Oracle Identity Manager アカウントの作成](#)」で説明されているとおりにアカウントを作成します。または、アカウントを作成するようマネージャに依頼します。

管理およびユーザー・コンソールにログインするには、次の手順を実行します。

1. 管理およびユーザー・コンソールへの自社ポータル URL にアクセスします。
2. ユーザー ID およびパスワードを入力します。
3. 「ログイン」をクリックします。

2.5 管理およびユーザー・コンソールのログアウト

コンソールがアクティブでない状態が一定時間続くと、管理およびユーザー・コンソールから自動的にログアウトされることがあります。シングル・サインオン環境で作業していない場合もログアウトできます。

シングル・サインオン環境ではない場合に管理およびユーザー・コンソールからログアウトするには、次の手順を実行します。

1. 「ログアウト」をクリックします。確認メッセージが表示されます。
2. 「ログアウト」または「取消」をクリックします。

管理およびユーザー・コンソールの使用

この章では、管理およびユーザー・コンソールの主な機能の使用方法について説明します。次の項目について説明します。

- [管理およびユーザー・コンソールの検索](#)
- [管理およびユーザー・コンソールにおけるデータ表示のカスタマイズ](#)

3.1 管理およびユーザー・コンソールの検索

管理およびユーザー・コンソールの各ページでは、多くのフィールドに検索機能があります。検索機能は、レコードの位置を確認する必要がある場合、たとえば特定のユーザー・アカウントの検出、レコードへの特定のエンティティの割当て、あるいはリクエストへのユーザーの追加を実行する場合に使用します。一部のフィールドには、事前定義済みの選択メニューがあります。その他のフィールドには、問合せ機能とも呼ばれる完全な検索機能があります。

ここでは、次のトピックについて説明します。

- [検索（問合せ）の作成](#)
- [ワイルドカードの使用](#)
- [検索の動作](#)

3.1.1 検索（問合せ）の作成

特定のレコードを検索するには、1つ以上のフィールドに情報を入力し、「**検索**」をクリックします。検索するレコードに関して、可能なかぎり多くの情報を入力します。たとえば、ユーザーの名しか覚えていない場合はそれを入力し、他のフィールドは空のままにしておきます。入力されたものと同じ名を持つすべてのユーザー・レコードが表示されます。

「**検索**」ページですべてのフィールドを空のままにして「**検索**」をクリックすると、すべてのレコードが表示されます。再検索を行うには、「**クリア**」をクリックします。一部のページには「**取消**」ボタンがあり、クリックすると検索を中止できます。

注意： 管理およびユーザー・コンソールでの検索では、大 / 小文字は区別されません。たとえば、John という名前のユーザーを検索する場合、入力は JOHN でも john でもかまいません。

3.1.2 ワイルドカードの使用

検索で取得するレコードを制限するには、フィールドに値を入力する以外に、特定の検索フィールドにワイルドカード文字を入力できます。ワイルドカード文字を使用すると、検索をさらに絞り込むことができます。

ワイルドカード文字のアスタリスク (*) は、検索で、フィールド値の特定されていない部分を表します。アスタリスクは、フィールドに入力する値の先頭、途中、末尾のいずれにも使用できます。たとえば、「**ユーザー ID**」フィールドに j* と入力して検索を実行すると、ユーザー ID が文字 j で始まるすべてのユーザー、たとえば John や Jane などが表示されます。j*n のようにアスタリスクが検索する値の途中にある場合、j で始まり n で終わるすべてのレコード、たとえば john や joan などが表示されます。*d のように、検索する値の先頭にアスタリスクを置いた場合、d で終わるすべてのレコード、たとえば Richard などが表示されます。

注意： 数値型のユーザー定義フィールド (UDF) を検索基準として指定する場合は、ワイルドカード文字は使用できません。このコンテキストでは、数値型には INTEGER、LONG、DOUBLE などが含まれます。

3.1.3 検索の動作

検索の作成および実行方法は、実行する検索のタイプによって異なります。取得される結果は、検索を実行するコンテキストに基づきます。

リクエストを作成またはトラッキングする際にユーザー・レコードを検索する場合、検索者がそのユーザーに対してマネージャまたは管理者であるユーザー・レコードのみが表示されます。入力した検索パラメータを組み合わせて結果が取得されます。たとえば、「名」フィールドに John、「組織」フィールドに NYoffice と入力すると、検索者が上司で、NY オフィスに勤務する、名前が John のすべてのユーザーが表示されます。

リクエストをトラッキングする際に、たとえばリクエスト・レコードの検索を実行する場合、リクエストのどのデータ要素で検索するかを選択する必要があります。たとえば、リクエスト ID または検索対象ユーザーの ID のいずれかを入力してリクエストを検索することはできますが、両方を入力して検索することはできません。

3.2 管理およびユーザー・コンソールにおけるデータ表示のカスタマイズ

この項では、データ表示要件に適合するように管理およびユーザー・コンソールを設定する方法について説明します。ここでは、次のトピックについて説明します。

- [テキスト・エントリの切捨て](#)
- [プロセス・フォームでの子表の表示](#)

3.2.1 テキスト・エントリの切捨て

デフォルトでは、管理およびユーザー・コンソールには、長さにかかわらずテキスト・エントリ全体が表示されます。長いテキスト・エントリを 3 連ドットの省略記号 (...) を使用して省略するよう、管理およびユーザー・コンソールを構成できます。

フィールドをカスタマイズしてエントリ名全体を表示するには、次の手順を実行します。

- JBoss Application Server を使用している場合：
 1. 次に示すディレクトリから一時ディレクトリに XellerateFull.ear ファイルをコピーし、一時ディレクトリにコンテンツを抽出します。
 - 非クラスタ環境の JBoss Application Server の場合：


```
JBOSS_HOME/server/default/deploy/
```
 - クラスタ環境の JBoss Application Server の場合（各ノードの次のディレクトリ）：


```
JBOSS_HOME/server/all/deploy/
```
 2. XellerateFull.ear ファイルの抽出したコンテンツで、xlWebApp.war ファイルを探し、同じディレクトリにそのコンテンツを抽出します。
 3. 次のディレクトリで、抽出されたファイル・コンテンツの中から xlWebAdmin.properties ファイルを見つけます。


```
WEB-INF/classes/
```
 4. xlWebAdmin.properties ファイルで、クラスタ内の全ノードの global.property.tableColumnSize プロパティの値を変更します。

デフォルト値は -1 で、テキスト・エントリ全体が表示されます。テキスト・エントリを省略記号で表示するには、global.property.tableColumnSize プロパティの値を、表示する文字数を示す正の整数に変更します。たとえば、global.property.tableColumnSize プロパティに 10 の値を指定すると、各テキスト・エントリの最初の 10 文字が表示され、それ以降の文字はすべて省略記号で示されます。

5. 一時ディレクトリで、新しく変更された `xlWebAdmin.properties` ファイルを含む `xlWebApp.war` ファイルを再作成します。
 6. 一時ディレクトリで、新しく作成された `xlWebApp.war` ファイルを含む `XellerateFull.ear` ファイルを再作成します。
 7. 次のディレクトリから古い `XellerateFull.ear` ファイルを削除し、新しく作成された `XellerateFull.ear` ファイルをそのディレクトリにコピーします。
 - 非クラスタ環境の JBoss Application Server の場合 :


```
JBOSS_HOME/server/default/deploy/
```
 - クラスタ環境の JBoss Application Server の場合 (各ノードの次のディレクトリ) :


```
JBOSS_HOME/server/all/deploy/
```
 8. 変更内容が反映されるようにアプリケーション・サーバーを再起動します。
- Oracle WebLogic Server、IBM WebSphere Application Server または Oracle Application Server を使用している場合 :
 1. 次のディレクトリで `xlWebAdmin.properties` ファイルを見つけ、テキスト・エディタで開きます。
 - 非クラスタ環境の Oracle WebLogic Server の場合 :


```
BEA_HOME/user_projects/domains/DOMAIN_NAME/XLApplications/  
WLXellerateFull.ear/xlWebApp.war/WEB-INF/classes/
```

クラスタ環境の Oracle WebLogic Server の場合 (各ノードの次のディレクトリ) :

```
BEA_HOME/user_projects/domains/DOMAIN_NAME/XLApplications/  
WLXellerateFull.ear/xlWebApp.war/WEB-INF/classes/
```

```
BEA_HOME/weblogic81/common/nodemanager/MANAGED_SERVER_NAME/stage/Xellerate/  
xlWebApp.war/WEB-INF/classes/
```
 - 非クラスタ環境の IBM WebSphere Application Server の場合 :


```
WEBSPHERE_HOME/profiles/PROFILE_NAME/installedApps/node_name/Xellerate.ear/  
xlWebApp.war/WEB-INF/classes/
```

クラスタ環境の IBM WebSphere Application Server の場合 (各ノードの次のディレクトリ) :

```
WEBSPHERE_HOME/profiles/PROFILE_NAME/installedApps/XL_NODE_PROFILE/  
Xellerate.ear/xlWebApp.war/WEB-INF/classes/
```
 - 非クラスタ環境およびクラスタ環境の両方の Oracle Application Server の場合 (クラスタの各ノードの次のディレクトリ) :


```
OAS_HOME/j2ee/OC4J_Instance_Name/applications/Xellerate/xlWebApp/WEB-INF/  
classes/
```
 2. `xlWebAdmin.properties` ファイルで、クラスタ内の全ノードの `global.property.tableColumnSize` プロパティの値を変更します。
 デフォルト値は `-1` で、テキスト・エン트리全体が表示されます。テキスト・エントリを省略記号で表示するには、`global.property.tableColumnSize` プロパティの値を、表示する文字数を示す正の整数に変更します。たとえば、`global.property.tableColumnSize` プロパティに `10` の値を指定すると、各テキスト・エントリの最初の `10` 文字が表示され、それ以降の文字はすべて省略記号で示されます。
 3. クラスタ環境の場合は、クラスタの各ノードで手順 2 を繰り返します。
 4. 変更内容が反映されるようにアプリケーション・サーバーを再起動します。

3.2.2 プロセス・フォームでの子表の表示

リソース・プロビジョニング・プロセス中、管理およびユーザー・コンソールでは、関連するすべてのプロセス・フォームで、10個までの列を表示した子表がデフォルトで表示されます。

10個の列を持つ子表を一度に表示している管理およびユーザー・コンソールの各ページの例を次に示します。

- 「リソース・プロファイル」で「ユーザーの詳細」ページに移動して、「リソース・フォーム」および「プロセス・フォーム」の「編集」リンクまたは「表示」リンクをクリックした場合
- ユーザー・ダイレクト・プロビジョニング・ウィザードの手順3～手順6を使用した場合
- 「リソース・プロファイル」で「組織の詳細」ページに移動して、「リソース・フォーム」および「プロセス・フォーム」の「編集」リンクまたは「表示」リンクをクリックした場合
- 組織のダイレクト・プロビジョニング・ウィザードの手順3～手順6を使用した場合
- 「このリソースに関連付けられた組織」で「リソースの詳細」ページに移動して、「リソース・フォーム」および「プロセス・フォーム」の「編集」リンクまたは「表示」リンクをクリックした場合

10個を超える列を持つ子表を表示するには、次の手順を実行します。

1. 次のディレクトリで `xlDefaultAdmin.properties` ファイルを開きます。
`OIM_HOME/xellerate/webapp/precompiled/jsp-temp/WEB-INF/classes`
2. `global.property.NumberOfChildTableColumns` の値を変更します。
デフォルトは10列です。この値は任意の数に変更できます。

アカウントの管理

この章では、Oracle Identity Manager ユーザー・アカウントへのアクセスおよび管理について説明します。この章の内容は、次のとおりです。

- アカウント・プロファイルの表示と変更
- パスワードの変更
- パスワードの変更および取得のための質問と回答の指定
- 代行者への担当業務の委任

4.1 アカウント・プロフィールの表示と変更

Oracle Identity Manager ユーザー・アカウントに関連する基本情報を変更できます。

注意：ユーザー・プロフィールで編集できるフィールドは、システム管理者が行った Oracle Identity Manager の構成によって異なります。

アカウントを表示および編集するには、次の手順を実行します。

1. 管理およびユーザー・コンソールにログインします。「Oracle Identity Manager 管理およびユーザー・コンソールへようこそ」ページが表示されます。
2. 左ナビゲーション・ペインで「**マイ・アカウント**」をクリックし、続いて「**アカウント・プロフィール**」をクリックします。「アカウント・プロフィール」ページにユーザー・アカウントの情報が表示されます。
3. 「**アカウント・プロフィールの変更**」をクリックします。
4. 必要に応じて変更し、「**プロフィールの保存**」をクリックします。

その変更承認が必要な場合は、リクエスト ID が表示されます。この ID をメモしておいて、リクエストのトラッキングに使用します。承認が必要な場合は、リクエストを処理すると、すぐに変更が有効になります。システムの負荷によっては、数分かかることがあります。

Oracle Identity Manager では、監査の目的でリクエストを格納します。

4.2 パスワードの変更

ローカル・システムの設定によっては、システムのセキュリティを保全するために定期的にパスワードを変更するように要求されることがあります。

パスワードを変更するには、次の手順を実行します。

1. 左ナビゲーション・ペインで「**マイ・アカウント**」をクリックし、続いて「**パスワードの変更**」をクリックします。「パスワードの変更」ページが表示されます。
2. 「旧パスワード」フィールドに現在のパスワードを入力してから、「新規パスワード」フィールドおよび「パスワードの確認」フィールドに新しいパスワードを入力します。
3. 「**保存**」をクリックします。

Xellerate User リソース・オブジェクトにパスワード・ポリシーをアタッチした場合は、パスワード・フィールドのある管理者およびユーザー・コンソールのすべてのページに、「**パスワード・ポリシーの表示**」リンクが表示されます。このリンクをクリックすると、パスワードの指定に適用されるパスワード・ポリシーが表示されます。

関連項目：パスワード・ポリシーの詳細は、『Oracle Identity Manager デザイン・コンソール・ガイド』を参照してください。

4.3 パスワードの変更および取得のための質問と回答の指定

検証用の質問を選択して、それらの回答を指定できます。チャレンジ質問と回答は、管理およびユーザー・コンソールに最初にログインしたときに設定します。これらの質問は、パスワードを忘れて再設定が必要な場合、あるいはパスワードの変更が必要な場合に、身元を確認するために使用されます。

回答が必要な質問の数と、選択候補の質問の一覧は、システム管理者によって定義されます。使用可能なチャレンジ質問と回答のリストから、自分のための質問を選択できます。

チャレンジ質問と回答を変更するには、次の手順を実行します。

1. 左ナビゲーション・ペインで「**マイ・アカウント**」をクリックします。
2. 「**チャレンジ Q&A**」をクリックします。パスワードを入力するよう求められます。
3. パスワードを入力し、「**続行**」をクリックします。「**チャレンジ質問の選択**」ページが表示されます。
4. チャレンジ質問を選択します。必ず、最小質問数以上の質問を選択して、「**選択**」をクリックします。「**チャレンジ回答の指定**」ページが表示されます。
5. 一覧に表示された各質問への回答を入力します。簡単に思い出せる回答を入力してください。
6. 「**保存**」をクリックします。
7. 「**OK**」をクリックして回答を確認します。

パスワードを忘れた場合や再設定が必要な場合、前の手順で選択した質問の回答を入力するよう求められます。

4.4 代行者への担当業務の委任

病気、休暇などのために勤務できない場合、別のユーザーにタスク承認業務を委任することができます。承認者として、別のユーザーを自分の代行者として選択することができます。ユーザーを選択すると、割り当てられるタスクはすべて、委任したプロキシ・ユーザーにルーティングされます。

注意： プロキシ割当ては開始日の午前0時1分から始まり、終了日の午前0時ちょうどに終了します。

プロキシ・ユーザーが管理およびユーザー・コンソールにログインすると、「ようこそ」ページには、ログインしたユーザーがプロキシであるユーザーが表示されます。そのユーザーに割り当てられるタスクは、プロキシ・ユーザーの「**保留中のリクエスト**」リストに表示されます。

関連項目： 保留中のリクエストの詳細は、7-2 ページの「**保留中の承認の確認**」を参照してください。

プロキシ・ユーザーを指定するには、次の手順を実行します。

1. 左ナビゲーション・ペインで「**マイ・アカウント**」をクリックし、続いて「**マイ・プロキシ**」をクリックします。「**プロキシ詳細**」ページが表示されます。
2. ここでプロキシを定義しない場合、ユーザーに委任するには「**割当て**」をクリックします。「**プロキシの割当て**」ページが表示されます。
3. 「**プロキシ名**」フィールドで、「**マネージャ**」または「**他のユーザー**」を選択します。

マネージャが定義されていれば、デフォルトで「**マネージャ**」オプションが選択されます。他のユーザーを検索するには、このフィールドの隣にある拡大鏡アイコンをクリックします。「**参照フォーム**」ページに、プロキシ・ユーザーの定義に選択できるすべてのユーザーの名前が表示されます。

4. 「ユーザー ID」を選択することでプロキシ・ユーザーを定義し、続いて「**選択**」をクリックします。選択したユーザー ID が「プロキシの割当て」ページに表示されます。
5. 「**開始日**」フィールドで、プロキシ・ユーザーを有効にする日付を指定します。
6. 「**終了日**」フィールドで、プロキシ・ユーザーを無効にする日付を選択します。
7. 「**割当て**」をクリックします。「**確認**」ページに、そのプロキシ・ユーザーに対して定義された、選択済のユーザー ID が表示されます。
8. 「**確認**」ページが正しければ、「**割当て**」をクリックします。「**プロキシ詳細**」ページには、定義したプロキシ・ユーザー情報が表示されます。
9. このプロキシ・ユーザーに対する情報を変更するには、「**変更**」をクリックします。
このユーザーを定義されたプロキシ・ユーザーから削除するには、「**プロキシの削除**」をクリックします。

5

リソースの管理

自分に対してプロビジョニングされたリソースを表示したり、自分や他のユーザーのためにリソースへのアクセスをリクエストすることができます。

この章の内容は、次のとおりです。

- [リソースの表示](#)
- [リソース・リクエストの表示](#)
- [新しいリソースのリクエスト](#)

5.1 リソースの表示

自分に対してプロビジョニングされているリソースを表示するには、次の手順を実行します。

1. 左ナビゲーション・ペインで「**マイ・リソース**」をクリックし、続いて「**マイ・リソース**」をクリックします。「マイ・リソース」ページが表示されます。このページには、ユーザーに関連付けられているプロビジョニング済のリソースに関する情報で構成されている表が表示されます。情報には、リソース名、リソースがプロビジョニングされた日付、およびリソースのステータスが含まれます。
2. 自分のために新しいリソースをリクエストするには、「**新しいリソースのリクエスト**」をクリックします。リソースをプロビジョニングするリクエストの作成ウィザードの「**ステップ 1: リソースの指定**」ページが表示されます。
3. リクエストするリソースを選択するには、リソースを選択し、「**追加**」をクリックして、リソースを「**選択済**」リストに追加します。

そのリソースを「**選択済**」リストから削除する場合は、「**削除**」をクリックします。

完了したら、「**続行**」をクリックします。

リクエストするリソースに関連付けられているリソース・フォームがある場合は、「**ステップ 2: リソース・データの指定**」ページが表示されます。関連付けられているリソース・フォームがない場合、「**ステップ 3: 情報の検証**」ページが表示されます。

4. 「**ステップ 2: リソース・データの指定**」ページが表示されたら、リクエストしたリソースに必要なデータを入力し、「**続行**」をクリックします。「**ステップ 3: 情報の検証**」ページが表示されます。
5. 次の表で示したフィールドの説明に従ってデータを入力します。

フィールド	説明
ユーザー ID	ログイン ID (ユーザー名)
名	ユーザーの名
姓	ユーザーの姓

「**選択済リソース**」表は、次のフィールドで構成されています。

フィールド	説明
リソース名	リクエストまたはプロビジョニングするリソースの名前
詳細	リソースに関する追加の詳細情報

6. コメントを追加するには、「**コメントを追加しますか**」をクリックします。「**リクエスト・コメントの追加**」ページが表示されます。
7. 「**コメント**」フィールドにコメントを追加したら、「**コメントを追加するにはここをクリックしてください。**」をクリックすると、リソース・リクエストにコメントが挿入されます。「**クリア**」をクリックして「**コメント**」フィールドのテキストを削除します。データを保存せずにページを閉じるには「**閉じる**」をクリックします。コメントを追加すると、追加されたコメントがこのページに表示されます。
8. リソース・リクエストを変更する場合、リソースを変更するには「**変更**」をクリックし、さらにコメントを追加するには「**追加**」をクリックします。

9. 表示されているページの情報を確認したら、「**すぐに送信**」をクリックすると、リクエストが有効になります。「リクエストが送信されました」ページが表示されます。

「リクエストが送信されました」ページでは、次の表で示したフィールドに情報が表示されます。

フィールド	説明
ステータス	リクエストのステータス
リクエスタ	リクエストを行った人の名前
アクション	このリクエストのために実行されたアクション
日付	リクエストの実行日

10. このリクエストを後でアクティブにするには、「**後にスケジュール**」をクリックします。「後にスケジュール」ページが表示されます。

「**後にスケジュール**」をクリックすると、リクエストが作成され、承認プロセスが開始され、承認者は承認タスクを承認して承認プロセスを完了することができます。ただし、プロビジョニング・プロセスは開始されません。リソースのプロビジョニングは、スケジュールされた日付まで行われません。

11. カレンダーのアイコンを使用してリクエストをアクティブにする日を定義し、「**送信**」をクリックします。

注意： クライアントに英語以外の言語のオペレーティング・システムを使用している場合は、カレンダー・ウィンドウのコンポーネントがすべて正しく表示されるように適切な言語パックをインストールします。たとえば、英語のオペレーティング・システムを使用していてボタンのラベルを日本語で表示する場合、「東アジア言語」の言語パックをインストールする必要があります。

5.2 リソース・リクエストの表示

自分のために送信したリソース・リクエストと、自分のために他のユーザーが作成したリソース・リクエストを、すべて表示できます。

すべてのリソース・リクエストを表示するには、次の手順を実行します。

1. 左ナビゲーション・ペインで「**マイ・リソース**」をクリックし、続いて「**マイ・リクエスト**」をクリックします。「マイ・リクエスト」ページが表示されます。このページでは、「要求したリクエスト」オプションがデフォルトで選択されています。特定のターゲットに対しては、検索構文を使用してリクエストを検索することができます。メニューを使用して、次のいずれかの検索基準を選択します。

- リクエスト ID (デフォルト)
- リクエスト・タイプ

選択した検索基準に一致する値を入力します。

結果表では、次の表で示したフィールドに情報が表示されます。

フィールド	説明
リクエスト ID	リクエストの ID
リクエスト・タイプ	リクエストのタイプ
リクエスト・プレビュー	このリクエストに関する、ユーザーと関連リソースのサマリー

2. ユーザーのために別のユーザー（プロキシ・ユーザー）が行ったリクエストの一覧を表示するには、「**要求されたリクエスト**」オプションを選択します。「マイ・リクエスト」ページが表示されます。

このページの表は「**要求したリクエスト**」オプションを選択したときに表示される表に類似していますが、ユーザーにかわってリクエストされたリソースが、リクエストしたユーザーの名前を含めて表示されます。

「**要求されたリクエスト**」オプションを選択すると、リクエストの受益者になります。管理者としてプロビジョニング・リクエストを行う場合の目的は、ユーザーまたは組織にリソースを割り当てることです。このリソースをプロビジョニングされる資格があるユーザーに対しては、ログイン時にリクエストが表示されます。

「**要求したリクエスト**」オプションを選択すると、リクエスタになります。このオプションには、「リクエスタ」列は表示されません。自分のリクエストはすべて、このオプションで表示することになります。

5.3 新しいリソースのリクエスト

次の手順は、新しいリソースをプロビジョニングする方法について説明しています。

1. 左ナビゲーション・ペインで「**マイ・リソース**」をクリックし、続いて「**新しいリソースのリクエスト**」をクリックします。リソースをプロビジョニングするリクエストの作成ウィザードの「**ステップ 1: リソースの指定**」ページが表示されます。

2. リクエストするリソースを選択するには、「**リソース名**」を選択し、「**追加**」をクリックして、リソースを「**選択済**」リストに追加します。

また、そのリソースを「**選択済**」リストから削除する場合は、「**削除**」をクリックします。

3. 「**続行**」をクリックします。リソースをプロビジョニングするリクエストの作成ウィザードの「**ステップ 2: リソース・データの指定**」ページが表示されます。このページには、ユーザーのためのリソース・オブジェクトが表示されます。

4. リクエストしているリソースに情報入力フォームがない場合は、この手順を省略することができます。

リソース・オブジェクトに関するその他の情報を入力するには、「**続行**」をクリックします。入力しない場合は、「**戻る**」または「**終了**」をクリックします。

リソースをプロビジョニングするリクエストの作成ウィザードの「**ステップ 2: リソース・データの指定**」ページが表示されます。このページには、このリソース・オブジェクトに関するその他の情報が表示されます。

5. フィールドに必要な追加情報を入力し、「**続行**」をクリックします。入力しない場合は、「**戻る**」または「**終了**」をクリックします。リソースをプロビジョニングするリクエストの作成ウィザードの「**ステップ 3: 情報の検証**」ページが表示されます。

このページで、「**選択済ユーザー**」表には次の表で示したフィールドに情報が表示されません。

フィールド	説明
ユーザー ID	ログイン ID (ユーザー名)
名	ユーザーの名
姓	ユーザーの姓

「**選択済リソース**」表には、次の表で示したフィールドに情報が表示されます。

フィールド	説明
リソース名	リクエストまたはプロビジョニングするリソースの名前
詳細	リソースに関する追加の詳細情報

6. 必要な場合にコメントを追加するには、「**コメントを追加しますか**」をクリックします。「リクエスト・コメントの追加」ページが表示されます。
7. 「コメント」フィールドにコメントを追加したら、「**コメントを追加するにはここをクリックしてください。**」をクリックすると、リソース・リクエストにコメントが挿入されます。また、「**クリア**」をクリックすると「コメント」フィールドのテキストが削除され、「**閉じる**」をクリックするとデータを保存せずにページが閉じられます。
8. このリソース・リクエストに関する情報を変更する場合、リソースを変更するには「**変更**」、さらにコメントを追加するには「**追加**」をクリックします。
9. 情報を確認したら、「**すぐに送信**」をクリックすると、リクエストが有効になります。「リクエストが送信されました」ページが表示されます。このページでは、次の表で示したフィールドに情報が表示されます。

フィールド	説明
ステータス	リクエストのステータス
リクエスタ	リクエストを行った人の名前
アクション	このリクエストのために実行されたアクション
日付	リクエストの実行日

10. このリクエストを後でアクティブにするには、「**後にスケジュール**」をクリックします。「後にスケジュール」ページが表示されます。
 カレンダのアイコンを使用してリクエストをアクティブにする日を定義し、「**送信**」をクリックします。

リクエストの管理

ユーザーおよび組織のためにリクエストしたリソースのリクエストを作成およびトラッキングできます。管理者の場合は、管理するユーザーのためにリソース・プロビジョニング・リクエストを作成できます。承認者の場合は、割り当てられたタスクを表示および実行することができます。たとえば、タスクを承認または却下することができます。承認者でも管理者でもある場合は、両方のロールに関連付けられた機能を実行できます。

この章の内容は、次のとおりです。

- [リクエストの作成と管理](#)
- [リクエストのトラッキング](#)

ロールおよび関連する Oracle Identity Manager の機能のリストは、1-2 ページの「[ユーザー・ロールと機能](#)」を参照してください。

6.1 リクエストの作成と管理

管理およびユーザー・コンソールを使用すると、リクエストを作成、管理して、自分、他のユーザーおよび組織に対してプロビジョニングできます。

管理者の場合は、他のユーザーにリソースをプロビジョニングするリクエストを作成できます。次に示すように、一部のリソースは、ユーザーが自分のためにリソースをリクエストできるように設定されています。

- セルフサービス・リクエストが許可されているリソースの場合、管理者でなくても自分のためにリソースをリクエストできます。
- すべてのユーザーに対して許可するようにリソースが設定されている場合、別のユーザーのためにリソースをリクエストするには、管理者である必要があります。

すべてのユーザーに対して許可するようにリソースが設定されていない場合、リソースが許可されている部門や組織に関連付けられているユーザーのみが、自分のためのリソースのリクエストを依頼できます。自分のためにリクエストできるリソースかどうかの判断は、システム管理者か、そのリソースの管理者に問い合せてください。

リソース・インスタンスを有効化、無効化、および失効するには、リソースがそれらのタスク用に設定されている必要があります。

リソースは、次の基準に基づいて検索できます。

- ユーザー ID
- リクエスト ID
- リクエストが作成された日付
- リソース名
- リクエストのステータス

左ナビゲーション・ペインの「リクエスト」メニュー項目で「リソース」をクリックすると、次のオプションを使用できるようになります。

- リソースの権限付与: リソースをターゲットに対してプロビジョニングできるようにします。
- リソースの無効化: リソースを一時的に無効にします。
- リソースの再有効化: システム管理者によりリソースが無効化された後、リソースを再有効化できます。
- リソースの失効: リソースを永久的に削除します。リソースを失効させた後で、再有効化することはできません。

ここでは、次のトピックについて説明します。

- [リソースの許可](#)
- [リソースの無効化](#)
- [リソースの再有効化](#)
- [リソースの失効](#)

6.1.1 リソースの許可

この項では、リソースの権限付与（プロビジョニング）を実行するためのリクエストを作成する方法を説明しています。リソースがこの使用方法向けに設定されている場合は、同じリソースを複数回プロビジョニングできます。

注意： 組織のためのリソース・リクエストはユーザーのためのリソース・リクエストに類似しています。そのため、次の手順には、ユーザーのためのリソース・リクエスト手順のみを示します。

リソースの権限付与を実行するためのリクエストを作成するには、次の手順を実行します。

1. 左ナビゲーション・ペインで「**リクエスト**」をクリックし、続いて「**リソース**」をクリックします。
「リクエストの作成」ページが表示されます。このページでは、「**リソースの権限付与**」オプションがデフォルトで選択されています。このオプションを使用して、特定のユーザーまたは組織に対してリソースを許可できます。
2. 「**続行**」をクリックします。リソースをプロビジョニングするリクエストの作成ウィザードの「**ステップ 1: タイプの選択**」ページが表示されます。
3. 1人または複数のユーザーにリソースを割り当てるには、「**ユーザー**」オプションをクリックします。

また、1つまたは複数の組織にリソースをプロビジョニングするには、「**組織**」オプションを選択します。

「**続行**」をクリックします。

「**ユーザー**」オプションを選択すると、「**ステップ 2: ユーザーの選択**」ページが表示されます。このページでは、結果表に次の情報が表示されます。

フィールド	説明
ユーザー ID	ログイン ID (ユーザー名)
名	ユーザーの名
姓	ユーザーの姓

4. 結果表でユーザー用のオプションを選択し、「**追加**」をクリックすると、ユーザー名が「**選択済**」リストに移動します。

ユーザーを「**選択済**」リストから削除するには、「**削除**」をクリックします。

ユーザーのリストをフィルタリングするには、「**フィルタ方法**」メニューでキーを選択し、このメニューの隣にあるボックスに選択基準を入力して、「**実行**」をクリックします。

リクエスト・システム・フォームにユーザー定義フィールドがある場合、これらのフィールドは「**ステップ 2: 追加情報の指定**」ページに表示されます。これらのフィールドは Design Console で、「**User Defined Field Definition**」フォームの「**REQUESTS**」を使用して作成できます。

関連項目： 「**User Defined Field Definition**」フォームの詳細は、『**Oracle Identity Manager デザイン・コンソール・ガイド**』を参照してください。

完了したら、「**続行**」をクリックします。「**ステップ 3: リソースの指定**」ページが表示されます。

- リソース用のオプションを選択して「追加」を選択すると、リソース名が「選択済」リストに移動します。

項目を「選択済」リストから削除するには、「削除」をクリックします。

リストをフィルタリングするには、「フィルタ方法」メニューでキーを選択し、このメニューの隣にあるボックスに選択基準を入力して、「実行」をクリックします。

完了したら、「続行」をクリックします。「ステップ 4: リソース・データの指定」ページが表示されます。このページには、リソースのバージョン情報や、このリクエストのユーザーに関する情報が表示されます。

- 「ステップ 4: リソース・データの指定」ページの情報が正しければ、「続行」をクリックします。正しくなければ「戻る」をクリックして修正します。

関連フォームはすべて次のページに表示されます。

- 「フォーム」フィールドにリクエストされた情報を入力して「続行」をクリックするか、「戻る」をクリックして修正します。

「続行」をクリックすると、「ステップ 5: 情報の検証」ページが表示されます。

- コメントを追加するには、「コメントを追加するにはここをクリックしてください。」をクリックします。

「リクエスト・コメントの追加」ページが表示されます。

- リソース・リクエストにコメントを挿入するには、「コメント」フィールドにコメントを入力し、「コメントの追加」をクリックします。

または、「クリア」をクリックして「コメント」フィールドのテキストを削除します。ページを閉じるには「閉じる」をクリックします。

コメントを追加すると、追加されたコメントがこのページに表示されます。

- 情報を確認したら、「すぐに送信」をクリックすると、リクエストが有効になります。

「リクエストが送信されました」ページが表示されます。

このページには、次の情報が表示されます。

フィールド	説明
ステータス	リクエストのステータス
リクエスト	リクエストを行った人の名前
アクション	このリクエストのために実行されたアクション
日付	リクエストの実行日

- このリクエストを後でアクティブにするには、「後にスケジュール」をクリックして、リクエストがアクティブになる日付を定義します。

現在の日付より後の日付を指定します。「後にスケジュール」ページが表示されます。

「後にスケジュール」オプションは、多くの場合、勤務開始日が後の日付である新しい従業員に対して使用されます。日付を定義し、リクエストが作成され、承認プロセスが開始されたら、承認者はタスクを承認できます。承認プロセスはこれで完了です。ただし、プロビジョニング・プロセスはスケジュールされた日付まで開始されません。

- カレンダーのアイコンを使用してリクエストをアクティブにする日を定義し、「送信」をクリックします。

注意： 複数のユーザーに対してリソースの権限付与を実行する際に単一のリクエストを使用する場合、適用するパスワード・ポリシーを決定するために実行されるルールの評価は、選択したユーザー・グループの最後に変更されたユーザーに基づきます。

6.1.2 リソースの無効化

この項では、リソースを無効化するためのリクエストを作成する方法を説明しています。

注意：組織のためのリソースの無効化はユーザーのためのリソースの無効化に類似しています。そのため、次の手順には、ユーザーのためのリソース無効化の手順のみを示します。

リソースを無効化するためのリクエストを作成するには、次の手順を実行します。

1. 左ナビゲーション・ペインで「**リクエスト**」をクリックし、続いて「**リソース**」をクリックします。
「リクエストの作成」ページが表示されます。
2. 「**リソースの無効化**」オプションを選択し、「**続行**」をクリックします。
リソースを無効化するリクエストの作成ウィザードの「ステップ 1: タイプの選択」ページが表示されます。
このページでは、次のいずれかのオプションを選択できます。
 - **ユーザー**: 1人または複数のユーザーに対してリソースを無効にできます。
 - **組織**: 1つまたは複数の組織に対してリソースを無効にできます。この例では、「ユーザー」オプションが選択されています。
3. 「**続行**」をクリックします。
「ステップ 2: ユーザーの選択」ページが表示されます。
4. ユーザー用のオプションを選択し、「**追加**」をクリックすると、ユーザー名が「選択済」リストに移動します。
ユーザーを「選択済」リストから削除するには、「**削除**」をクリックします。
リストをフィルタリングするには、「**フィルタ方法**」メニューでキーを選択し、このメニューの隣にあるボックスに選択基準を入力して、「**実行**」をクリックします。
完了したら、「**続行**」をクリックします。
「ステップ 3: リソースの指定」ページが表示されます。
5. ユーザーに対して無効化する任意のリソースのオプションを選択し、「**追加**」をクリックすると、リソースが「選択済」リストに移動します。
リソースを「選択済」リストから削除するには、「**削除**」をクリックします。
6. 「**続行**」をクリックします。
ユーザーに対してリソースの複数のインスタンスがプロビジョニングされている場合は、「ステップ 4: 解決」ページが表示されます。または、「ステップ 5: 情報の検証」ページが表示されます。

7. 「ステップ 4: 解決」ページが表示されたら、無効化するリソース・インスタンスを選択し、「**続行**」をクリックします。

「ステップ 5: 情報の検証」ページに、次の情報が表示されます。

フィールド	説明
ユーザー ID	ログイン ID (ユーザー名)
名	ユーザーの名
姓	ユーザーの姓
リソース名	無効化するリソースの名前
詳細	リソースに関する追加の詳細情報

8. コメントを追加するには、「**コメントを追加するにはここをクリックしてください。**」をクリックします。

「リクエスト・コメントの追加」ページが表示されます。

9. リソース・リクエストにコメントを挿入するには、「コメント」フィールドにコメントを入力し、「**コメントを追加しますか**」をクリックします。

「コメント」フィールドのテキストを削除するには、「**クリア**」をクリックします。このページを閉じるには、「**閉じる**」をクリックします。

追加したコメントが「情報の検証」ページに表示されます。

このリソース・リクエストの情報を変更するには、「**変更**」をクリックします。さらにコメントを追加するには、「**追加**」リンクをクリックします。

10. 情報を確認したら、「**すぐに送信**」をクリックすると、リクエストが有効になります。

「リクエストが送信されました」ページが表示されます。

このページには、次の情報が表示されます。

フィールド	説明
ステータス	リクエストのステータス
リクエスト	リクエストを行った人の名前
アクション	このリクエストのために実行されたアクション
日付	リクエストの実行日

11. このリクエストを後でアクティブにするには、「**後にスケジュール**」をクリックします。

「後にスケジュール」ページが表示されます。カレンダーのアイコンを使用してリクエストをアクティブにする日を定義し、「**送信**」をクリックします。

6.1.3 リソースの再有効化

無効にしたリソースは再有効化できます。失効させたリソースは再有効化できません。この項では、リソースを再有効化するためのリクエストを作成する方法を説明しています。

注意： 組織のためのリソースの再有効化はユーザーのためのリソースの再有効化に類似しています。そのため、次の手順には、ユーザーのためのリソース再有効化の手順のみを示します。

リソースを再有効化するためのリクエストを作成するには、次の手順を実行します。

1. 左ナビゲーション・ペインで「リクエスト」をクリックし、続いて「リソース」をクリックします。

「リクエストの作成」ページが表示されます。

デフォルトで「リソースの権限付与」オプションが選択されます。

2. 「リソースの再有効化」オプションを選択して、このユーザーに対するシステム管理者であるリソースへのアクセスを提供し、「続行」をクリックします。

リソースを再有効化するリクエストの作成ウィザードの「ステップ 1: タイプの選択」ページが表示されます。

3. 1人または複数のユーザーに対するシステム管理者であるリソースを再有効化するには、「ユーザー」をクリックします。

1つまたは複数の組織に対するシステム管理者であるリソースを再有効化するには、「組織」を選択します。この例では、「ユーザー」オプションが選択されています。

4. 「続行」をクリックします。

「ステップ 2: ユーザーの選択」ページが表示されます。

結果表には、次の情報が表示されます。

フィールド	説明
ユーザー ID	ログイン ID (ユーザー名)
名	ユーザーの名
姓	ユーザーの姓

5. 「ユーザー」オプションを選択して「追加」をクリックすると、ユーザー名が「選択済」リストに移動します。「選択済」リストからユーザーを削除するには、「削除」をクリックします。

完了したら、「続行」をクリックします。

「ステップ 3: リソースの指定」ページが表示されます。

6. 「リソース名」オプションを選択して「追加」をクリックすると、リソース名が「選択済」リストに移動します。「選択済」リストからユーザーを削除するには、「削除」をクリックします。次に、「続行」をクリックします。

ユーザーに対してリソース・インスタンスの複数のインスタンスがプロビジョニングされている場合は、「ステップ 4: 解決」ページが表示されます。または、「ステップ 5: 情報の検証」ページが表示されます。

7. 「ステップ 4: 解決」ページが表示されます。再有効化するリソース・インスタンスを選択し、「続行」をクリックします。

「ステップ 5: 情報の検証」ページが表示されます。

8. コメントを追加するには、「**コメントを追加するにはここをクリックしてください。**」をクリックします。
「リクエスト・コメントの追加」ページが表示されます。
9. リソース・リクエストにコメントを挿入するには、「**コメント**」フィールドにコメントを入力し、「**コメントの追加**」をクリックします。
追加したコメントがページに表示されます。
「**クリア**」をクリックして「コメント」フィールドのテキストを削除します。ページを閉じるには「**閉じる**」をクリックします。
10. 「ステップ 5: 情報の検証」ページの情報を確認して「**すぐに送信**」をクリックすると、リクエストが有効になります。
「リクエストが送信されました」ページが表示されます。このページには、次の情報が表示されます。

フィールド	説明
ステータス	リクエストのステータス
リクエスタ	リクエストを行った人の名前
アクション	このリクエストのために実行されたアクション
日付	リクエストの実行日

このリクエストの詳細を表示するには、「**リクエスト ID**」をクリックします。「リクエストの詳細」ページが表示されます。このページの詳細は、6-10 ページの「[リクエストのトラッキング](#)」を参照してください。

11. このリクエストを後でアクティブにするには、「**後にスケジュール**」をクリックします。
「後にスケジュール」ページが表示されます。
12. カレンダのアイコンを使用してリクエストをアクティブにする日を定義し、「**送信**」をクリックします。

6.1.4 リソースの失効

リクエストの失効は永続的な操作です。

リソースを失効するためのリクエストを作成するには、次の手順を実行します。

1. 左ナビゲーション・ペインで「**リクエスト**」をクリックし、続いて「**リソース**」をクリックします。
「リクエストの作成」ページが表示されます。
2. 「**リソースの失効**」オプションを選択し、「**続行**」をクリックします。
リソースを失効するリクエストの作成ウィザードの「ステップ 1: タイプの選択」ページが表示されます。
このページでは、次のいずれかのオプションを選択できます。
 - **ユーザー**: 1 人または複数のユーザーに対してリソースを失効できます。
 - **組織**: 1 つまたは複数の組織に対してリソースを失効できます。
この例では、「**ユーザー**」オプションが選択されています。
3. 「**続行**」をクリックします。
「ステップ 2: ユーザーの選択」ページが表示されます。

4. ユーザー用のオプションを選択し、「追加」をクリックして、ユーザー名を「選択済」リストに移動します。

ユーザー名を「選択済」リストから削除するには、「削除」をクリックします。その後、「続行」をクリックします。

「ステップ 3: リソースの指定」ページが表示されます。

5. ユーザーのアクセスを取り消す各リソースのオプションを選択して、「追加」をクリックすると、そのリソースが「選択済」リストに移動します。

リソースを「選択済」リストから削除するには、「削除」をクリックします。その後、「続行」をクリックします。

ユーザーに対してリソースの複数のインスタンスがプロビジョニングされている場合は、「ステップ 4: 解決」ページが表示されます。または、「ステップ 5: 情報の検証」ページが表示されます。

6. 「ステップ 4: 解決」ページが表示されたら、失効するリソース・インスタンスを選択し、「続行」をクリックします。

「ステップ 5: 情報の検証」ページが表示されます。

7. 「ステップ 5: 情報の検証」ページに表示される情報について、次の表で説明します。

「選択済ユーザー」表には、次の情報が表示されます。

フィールド	説明
ユーザー ID	ログイン ID (ユーザー名)
名	ユーザーの名
姓	ユーザーの姓

「選択済リソース」表には、次の情報が表示されます。

フィールド	説明
リソース名	リクエストまたはプロビジョニングするリソースの名前
詳細	リソースに関する追加の詳細情報

8. コメントを追加するには、「コメントを追加するにはここをクリックしてください。」をクリックします。

「リクエスト・コメントの追加」ページが表示されます。

9. リソース・リクエストにコメントを挿入するには、「コメント」フィールドにコメントを入力し、「コメントを追加しますか」をクリックします。

追加したコメントが「情報の検証」ページに表示されます。

または、「クリア」をクリックして「コメント」フィールドのテキストを削除します。ページを閉じるには「閉じる」をクリックします。

このリソース・リクエストに関する情報を変更する場合、リソースを変更するには「変更」、さらにコメントを追加するには「追加」をクリックします。

10. 情報を確認して「**すぐに送信**」をクリックすると、リソースが有効になります。

「リクエストが送信されました」ページが表示されます。このページには、次の情報が表示されます。

フィールド	説明
ステータス	リクエストのステータス
リクエスト	リクエストを行った人の名前
アクション	このリクエストのために実行されたアクション
日付	リクエストの実行日

11. このリクエストを後でアクティブにするには、「**後にスケジュール**」をクリックして、リクエストがアクティブになる日付を定義します。

「後にスケジュール」ページが表示されます。カレンダーのアイコンを使用してリクエストをアクティブにする日を定義し、「**送信**」をクリックします。

6.2 リクエストのトラッキング

Oracle Identity Manager で割り当てられている権限によっては、リソースのリクエストを表示できます。さらに、リクエスト内で詳細の編集やタスクの承認を実行できます。これを、リクエストのトラッキングと言います。トラッキングできるリクエストは、次のいずれかに分類されます。

- 他のユーザーによって作成されたリソースのプロビジョニングを求めるリクエスト
- 他のユーザーにリソースをプロビジョニングするよう作成したリクエスト
- 自分にリソースをプロビジョニングするよう作成したリクエスト
- 自己登録で作成したリクエスト
- 自分のプロフィールを変更して作成したリクエスト

作成、表示および編集できるリクエストのタイプは、Oracle Identity Manager におけるアカウントの特性によって異なります。リクエストの中でタスクを承認する作業を割り当てられている場合、そのリクエストをトラッキングして、割り当てられたタスクを承認することができます。各種のロールおよび関連する機能のリストは、1-2 ページの「[ユーザー・ロールと機能](#)」を参照してください。

次の各項では、リクエストのトラッキングに関連するタスクを実行する方法について説明します。

- [リクエストの検索](#)
- [承認の詳細の表示](#)
- [プロビジョニングの詳細の表示](#)
- [リクエストのコメントの表示](#)
- [リクエスト・ステータス履歴の表示](#)

6.2.1 リクエストの検索

次の手順では、リクエストの検索について説明します。

1. 左ナビゲーション・ペインで「リクエスト」をクリックし、続いて「トラッキング」をクリックします。

「リクエストのトラッキング」ページが表示されます。トラッキングするリクエストを見つけるために、このページのオプションを使用して既存のリクエストを検索できます。選択できるのは、「ユーザー ID」または「リクエスト ID」などこれらのオプションのいずれか1つのみで、両方は選択できません。「リクエスト ID」または「リソース名」を選択して、そのオプションに関連するフィールドを空のままにしておく、すべてのリクエストが表示されます。

いずれかの検索オプションを使用してもリクエストが見つからない場合は、別のオプションを選択するか、検索基準をゆるめて検索結果を増やします。次の表に、使用可能な検索基準を示します。

フィールド	説明
ユーザー ID	自分自身または別のユーザーのために作成されたリクエストのトラッキングを可能にします。「セルフ」または「その他」を選択します。「その他」を選択する場合は、「ユーザー ID の検索」をクリックして、トラッキングするリクエストに関連するユーザーを指定する必要があります。アスタリスク (*) ワイルドカード文字を使用すると、先頭か末尾に特定の文字または数字があるユーザー ID に関連付けられているリクエストを検索することができます。ユーザーの所属組織で検索することもできます。
リクエスト ID	リクエストの ID でリクエストをトラッキングできます。通常は数値です。このオプションを選択し、リクエストの ID を入力します。アスタリスク (*) ワイルドカード文字を使用すると、先頭か末尾に特定の文字または数字があるリクエストを検索することができます。
作成日	リクエストが作成された日付でリクエストをトラッキングできます。このオプションを選択したら、問い合わせの対象範囲の開始日と終了日を入力します。それらの日付の間に作成されたすべてのリクエストが表示されます。
リソース名	プロビジョニングされるリソース（リクエストで指定されたリソース）によってリクエストをトラッキングできます。このオプションを選択し、リソース名を入力します。アスタリスク (*) ワイルドカード文字を使用して、含まれるリソース名の先頭か末尾に特定の文字があるリクエストを検索できます。
ステータス	「リクエストが初期化されました」、「リクエストを受信しました」、「承認」、「未承認」、「リクエストが取り消されました」、「リクエストがクローズされました」、「オブジェクトの承認完了」、「リクエスト完了」、または「情報の指定」などのリクエスト・ステータスに応じてリクエストをトラッキングできるようにします。このオプションを選択し、メニューからトラッキングするステータスを選択します。

2. 「検索」をクリックします。

入力した基準に一致するすべてのリクエストが表示されます。条件式により数ページのリクエストが検出された場合は、「最初」、「前へ」および「次へ」の各リンクを使用して結果セットを移動します。

3. リクエストの詳細を表示するには、結果表の「リクエスト ID」リンクをクリックします。

「リクエストの詳細」ページが表示されます。

リクエスト全体を取り消すには、リクエストの横にあるオプションを選択し、「リクエストの取消し」をクリックします。

6.2.2 承認の詳細の表示

「承認の詳細」には、プロセスや保留中のタスクなど、このリクエストに関するすべての承認が表示されます。

承認の詳細を表示するには、次の手順を実行します。

1. 6-11 ページの「[リクエストの検索](#)」で説明されている手順に従って、リソース・リクエストを検索します。
2. 「追加詳細」ボックスから「[承認の詳細](#)」オプションを選択します。

承認済のタスク・ページが表示されます。「承認の詳細」フィールドに、承認プロセスに関連するすべてのタスクが表示されます。「リクエスト ID」番号が、このリクエストの「リクエストの詳細」ページへのアクティブ・リンクになっています。「リクエスト承認タスク」表に、次のフィールドが表示されます。

フィールド	説明
タスク	承認タスクの名前。
ステータス	リクエストの現行のステータス。
割当て先	ユーザーまたはプロキシ・ユーザーへのリクエストの割当て。リクエストはユーザー・グループまたはプロキシ・グループにも割り当てられます。
アクション	「アクション」列に、各リクエストに対応するオプションがあります。最後の行にある「承認」、「拒否」および「再割当て」ボタンを選択して、リクエストに対するアクションを決定します。リクエストを選択して「承認」または「拒否」をクリックします。確認ページに、タスクと「確認」ボタンおよび「取消」ボタンが表示されます。 「再割当て」をクリックすると、自分またはプロキシ・ユーザーがタスクの再割当て先を表示する許可を持っているすべてのユーザーのリストがコンソールに表示されます。このページにあるオプションを選択すると、タスク再割当て可能なすべてのグループがリストされます。

6.2.3 プロビジョニングの詳細の表示

リクエストがユーザー、組織、またはリソースのいずれによって作成されたかに応じて、ユーザー、組織またはリソースによってプロビジョニング・タスクを表示できます。

プロビジョニング・タスクを表示するには、次の手順を実行します。

1. 6-11 ページの「[リクエストの検索](#)」の説明に従って、リソース・リクエストを検索します。
2. 「追加詳細」ボックスから「[プロビジョニングの詳細](#)」オプションを選択します。

「プロビジョニング・タスク」が表示されます。「プロビジョニングの詳細」フィールドに、プロビジョニング・プロセスに関連するすべてのタスクが表示されます。

3. 適切なオプションを選択して、目的の情報を表示します。

6.2.3.1 ユーザーまたは組織ごとのプロビジョニングの詳細の表示

「ユーザー/組織」を選択すると、プロビジョニングされるユーザーまたは組織のすべてのタスクがページに表示されます。リクエストに多数のユーザーまたは組織がある場合は、各ユーザーまたは組織に対応する表がページに表示されます。

表に示される情報は次のとおりです。

フィールド	説明
リソース名	プロビジョニングされるリソース・オブジェクトの名前
リソース・ステータス	リソース・リクエストの現行のステータス
プロセス・インスタンス名	承認プロセスまたはプロビジョニング・プロセス
説明	プロセスをマップ記述フィールドにマッピングするプロセスまたは識別子を一意に識別する番号
プロセス・ステータスの詳細	プロセスの現行のステータス

6.2.3.2 リソースごとのプロビジョニングの詳細の表示

「リソース」オプションを選択すると、このリソースに関連するすべてのリソースと情報が表示されます。リクエストに複数のリソースがある場合、ページには各ユーザーまたは組織に対応する表が表示されます。

表に示される情報は次のとおりです。

フィールド	説明
ユーザー / 組織	このリソース・オブジェクトにプロビジョニングされたユーザーまたは組織の名前
リソース・ステータス	リソース・リクエストの現行のステータス
プロセス・インスタンス名	プロビジョニング・プロセスの名前
データ	プロセスを一意に識別する番号
プロセス・ステータスの詳細	プロセスの現行のステータス

6.2.4 リクエストのコメントの表示

リクエストは、表示の権限を持つすべてのユーザーが表示できます。コメントがあると、他のユーザーでもリクエストを理解できます。リクエストの処理方法を他のユーザーが表示できるように、システム管理者と同様に、ユーザーもリクエストにコメントを追加することができます。

リクエスト・コメントを表示するには、次の手順を実行します。

1. 6-11 ページの「リクエストの検索」の説明に従って、リソース・リクエストを検索します。
2. 「追加詳細」ボックスから「リクエストのコメント」オプションを選択します。
3. リクエストの ID 番号をクリックして「リクエストの詳細」ページに戻ります。

このページにコメントを追加するには、「コメントを追加するにはここをクリックしてください。」をクリックします。このリクエストに追加されたコメントがある場合は、「リクエストのコメント」ページにコメントが表示されます。

このページの表には、次の情報が表示されます。

フィールド	説明
コメント	追加された実際のコメント
日付	コメントが追加される日付
追加者	コンソールにログインしているユーザーの名前

6.2.5 リクエスト・ステータス履歴の表示

リクエスト・ステータス履歴は、現在のワークフローの状態を理解するために役立つ補足的な表示です。ユーザーはリクエストを作成でき、ワークフローが作成されます。リクエストの完了または拒否までの間には、ユーザーの手動アクションやシステム・アクションなど、多数のステップやアクションが実行される必要があります。

アクションが実行されると、ワークフローのステータスが変更され、次の状態に移行します。

ステータス履歴を表示するには、次の手順を実行します。

1. 6-11 ページの「[リクエストの検索](#)」の説明に従って、リソース・リクエストを検索します。
2. 「追加詳細」ボックスから「[リクエスト・ステータス履歴](#)」オプションを選択します。

「リクエスト履歴」ページが表示されます。このページの表に、リクエストのワークフローに関する情報が表示されます。このページに表示される情報を、次の表に示します。

フィールド	説明
ステータス	リソース・リクエストの現行のステータス
日付	リクエストが作成される日付
作成者	このリクエストを作成した人の名前

To-Do リストの管理

To-Do リストはプロセス内のタスクのリストです。タスクは、リクエストおよびその関連リソースを承認し、このリリースを使用可能にするプロセスを構成する要素です。

リクエストに含まれているリソースは、プロビジョニング・プロセスのタスクに対して承認者として割り当てられている他のユーザーが承認を提供するまで、ターゲット・ユーザーに対してプロビジョニング可能になりません。自己登録に承認が必要な場合、登録プロセスを完了するには、ユーザー自己登録リクエストに関連する承認タスクも、割り当てられた承認者によりアクションが行われることが必要です。

プロビジョニング・タスクのタスク承認者であるユーザーまたはターゲット・ユーザーが所属する組織の管理者のみが、リクエストに含まれるタスクを表示できます。リクエスト内のあらゆるタスクの承認者である場合は、リクエスト内のすべてのタスクを表示できますが、承認できるのは割り当てられているタスクのみです。管理対象ユーザーのために、保留中のリクエストを表示することもできます。

Design Console の「Process Definition」フォームを使用してプロセスを定義します。プロセスを定義する際は、プロセスのタイプが「Provisioning」または「Approval」のいずれであるかを指定します。「Provisioning」タイプを選択すると、プロセスはプロビジョニング・プロセスになります。各リソースは、1つの必須プロビジョニング・プロセスに関連付けられています。これにより、タスクをユーザーに割り当てできるようになります。

この章の内容は、次のとおりです。

- [保留中の承認の確認](#)
- [オープン・タスクの管理](#)
- [アテストーション・リクエストの管理](#)

7.1 保留中の承認の確認

割り当てられたタスクを表示および完了するには、「保留中の承認」ページを使用できます。また、自分の管理対象ユーザーに割り当てられているリクエストは表示できます。

保留中の承認を確認するには、次の手順を実行します。

1. 左ナビゲーション・ペインで「**To-Do リスト**」をクリックし、続いて「**保留中の承認**」をクリックします。

「保留中の承認」ページに、自分が承認者である 1 つ以上のタスクを含むすべてのリクエストのリストが表示されます。ページには、デフォルトでは、割り当てられている保留中のリクエストが表示されます。

2. 管理下のユーザーに割り当てられている保留中のリクエストを表示するには、「**自身が管理するユーザーへの割当て**」オプションを選択します。

該当する保留中のリクエストが表示されます。

次の検索基準がある「検索」リストを使用して、特定のリクエストを検索することもできます。

- リクエスト ID
- リクエスト
- 割当て先

結果表に検索基準の説明があります。各フィールドに適切な値を入力します。たとえば、「リクエスト・タイプ」基準を使用する場合は、「リクエスト・タイプ」リストで対応する値を選択します。結果表には、次のフィールドが表示されます。

フィールド	説明
リクエスト ID	システムによって生成されたリクエストの一意の ID 番号。
リクエスト・タイプ	リクエスト・タイプは次のいずれかです。 ユーザーまたは組織に対するリソースの追加、失効、有効化または無効化 注意: 次のリクエスト・タイプは、Oracle Identity Manager リリース 9.1.0.1 以上では使用されません。 エンティティの有効化、無効化、削除または変更
リクエスト	リクエストを作成したユーザー。
リクエスト・プレビュー	リクエストのサマリー。表示される情報には、ユーザー ID または組織とリソースが含まれます。
割当て先	このリクエストを承認するために割り当てられているユーザー。
ステータス	リクエストのステータス。
承認 / 拒否	承認または拒否の対象のリクエスト。
再割当て	別のユーザーまたはユーザー・グループに再割当てするリクエスト。

3. 保留中のリクエストを承認するには、「**承認 / 拒否**」列で該当するオプションを選択し、「**承認**」をクリックします。

リクエスト ID が結果表から削除されます。

保留中のリクエストを拒否するには、「**承認 / 拒否**」列で該当するオプションを選択し、「**拒否**」をクリックします。

リクエスト ID が結果表から削除されます。

4. 保留中のリクエストを再割当てするには、「再割当て」列で該当するオプションを選択し、「再割当て」をクリックします。
「保留中の承認を再割当て」ページが表示されます。
5. リクエストを再割当てするユーザーまたはグループのオプションを選択し、「再割当て」をクリックします。
「確認」ページが表示されます。

7.1.1 保留中の承認の表示の管理

「オープン・タスクの削除」スケジュール済タスクを使用して、保留中の承認の表示を管理できます。これは、7-6 ページの「オープン・タスクの表示の管理」で説明しています。

7.2 オープン・タスクの管理

「オープン・タスク」ページには、プロビジョニング・プロセスに対して定義されているオープン（保留中または却下）タスクがリストされます。「オープン・タスク」ページに、管理下のユーザーまたは自分に割り当てられているすべてのオープン・プロビジョニング・タスクが表示されます。「オープン・タスク」ページを使用して、タスクを再実行し（ステータスが「却下」の場合）、別のユーザーにプロビジョニング・タスクを再割当てするか、プロビジョニング・タスクのレスポンスを指定します。この項では、次のタスクについて説明します。

- [オープン・タスクの表示](#)
- [却下されたタスクの再実行](#)
- [オープン・タスクの再割当て](#)
- [オープン・タスクへのレスポンスの設定](#)
- [却下されたタスクの手動による完了](#)
- [オープン・タスクの表示の管理](#)

7.2.1 オープン・タスクの表示

管理下のユーザーおよびユーザー・グループ、または自分に割り当てられているすべてのオープン・プロビジョニング・タスクを表示できます。

オープン・タスクを表示するには、次の手順を実行します。

1. 左ナビゲーション・ペインで「**To-Do リスト**」をクリックし、続いて「**オープン・タスク**」をクリックします。
「オープン・タスク」ページが表示されます。
2. 「**フィルタ方法**」検索基準を使用すると、次の分類でタスクをソートできます。
 - タスク名
 - リソース名
 - 組織名
 - ユーザー ID
 - 割当て前（日付を yyyy-MM-dd 形式で入力）
 - 割当て後（日付を yyyy-MM-dd 形式で入力）

各フィールドに適切な値を入力します。「**オープン・タスク・タイプ**」および「**オブジェクト・タイプ**」基準を使用するには、対応する値を選択して「**実行**」をクリックします。結果表に、プロビジョニング・タスクに関する次の情報が表示されます。

フィールド	説明
タスク名	このリソース名の「Process Definition」フォームで定義したタスクの名前。
タスク・ステータス	リソース・タスクの現行のステータス。
リソース名	このプロビジョニング・タスクに関連付けられているリソースの名前。
説明	タスクの説明。
プロセス・フォーム	タスクに関連するプロセス・フォームへのリンク。
リクエスト ID	タスクが関連付けられているリクエストを識別する数値。
組織名	タスクが関連付けられている組織。
ターゲット・ユーザー	プロビジョニング・プロセスを開始する対象となったユーザー。
割当て日	プロビジョニング・タスクが割り当てられた日付。
ユーザーに割当て済	プロビジョニング・タスクが割り当てられているユーザーのユーザー名。
再試行	このチェック・ボックスが選択されている場合、プロビジョニング・タスクのステータスが「却下」であることを示しています。プロビジョニング・タスクが「却下」状態の場合は、このチェック・ボックスを使用して再試行します。
再割当て	このチェック・ボックスを使用して、このプロビジョニング・タスクを別のユーザーまたはユーザー・グループに割り当てます。
レスポンスの設定	このチェック・ボックスを使用して、このプロビジョニング・タスクに対するレスポンスを設定します。
手動による完了	プロビジョニング・タスクが「却下」状態の場合は、このチェック・ボックスを使用して手動で完了します。

7.2.2 却下されたタスクの再試行

「却下」状態のタスクを再試行できます。この手順を実行するには、次のようにします。

1. オープン・タスクのリストを表示するには、7-3 ページの「**オープン・タスクの表示**」で説明されている手順を実行してください。
2. 再試行するタスクの「**再試行**」チェック・ボックスを選択し、「**再試行**」をクリックします。

タスクが正常に完了した場合、タスクは「完了」状態に移行します。

注意： 却下されたタスクを再試行できる回数は、Design Console で定義されます。詳細は、『Oracle Identity Manager デザイン・コンソール・ガイド』を参照してください。

7.2.3 オープン・タスクの再割当て

オープン・タスクは別のユーザーに割り当てることができます。オープン・タスクを再割当てするには、次の手順を実行します。

1. 必要なタスクを選択して、「再割当て」をクリックします。
「オープン・タスクの再割当て」ページが表示されます。
2. ユーザー ID またはグループ ID を選択し、「再割当て」をクリックします。
選択できるユーザー ID またはグループ ID は 1 つのみです。
「確認」ページが表示されます。このページには、最初のセンテンスにユーザー ID (氏名) が表示され、プロビジョニング・タスクは箇条書きリストの項目として表示されます。
3. 「再割当てタスクの確認」をクリックするか、「取消」をクリックします。
「オープン・タスク」ページが表示されます。再割当てしたプロビジョニング・タスクは結果表に表示されなくなります。

7.2.4 オープン・タスクへのレスポンスの設定

オープン・タスクへのレスポンスを設定するには、次の手順を実行します。

1. プロビジョニング・タスクを 1 つ以上選択して、「レスポンスの設定」をクリックします。
「タスクのレスポンスの指定」ページが表示されます。
2. プロビジョニング・タスクに対するレスポンスを選択し、「レスポンスの設定」をクリックします。
これを行わない場合は、「取消」をクリックします。
「確認」ページに、このプロビジョニング・タスクへのレスポンスが表示されます。
3. 「タスクのレスポンスの確認」をクリックするか、「取消」をクリックします。
「オープン・タスク」ページが表示されます。レスポンスを設定したプロビジョニング・タスクは結果表に表示されなくなります。

7.2.5 却下されたタスクの手動による完了

「却下」状態にあるタスクを手動で完了するには、次の手順を実行します。

注意： この手順を実行できるのは、「却下」状態にあるオープン・タスクに対してのみです。

1. 要件に従ってオープン・タスクのリストを表示するには、7-3 ページの「オープン・タスクの表示」で説明されている手順を実行してください。
2. 手動で完了するタスクの「手動による完了」を選択し、「手動による完了」をクリックします。
タスクは「完了」状態に移行します。

7.2.6 オープン・タスクの表示の管理

オープン・タスクおよび保留中の承認に関する情報は、様々な段階でのタスクに関する情報とともに、Oracle Identity Manager データベースに格納されます。この情報は、2つの表に分散されます。これら2つの表以外に、単一表でオープン・タスクおよび保留中の承認に関する情報のコピーを格納します。オープン・タスクまたは保留中の承認の検索を実行すると、必要な情報がこの表に問い合わせられます。この機能によって、オープン・タスクまたは保留中の承認のフェッチおよび表示に要する時間が短縮されます。

しばらくするとオープン・タスクおよび保留中の承認の数が増え、それに応じて情報のフェッチおよび表示に要する時間も増えることがあります。データのフェッチ操作のパフォーマンスを改善するため、オープン・タスクおよび保留中の承認に関する情報のコピーを格納する単一表から、指定した日数を超えて「オープン」または「保留」段階に留まっているレコードを削除できます。「オープン・タスクの削除」スケジュール済タスクを使用して、この処理を実現できます。

注意: 「オープン・タスクの削除」スケジュール済タスクで削除されるのは、オープン・タスクおよび保留中の承認に関する情報のコピーのみです。この情報は、すべてのタスクに関する情報を格納する2つの表でも入手できます。

ただし、情報のコピーが削除されたオープン・タスクおよび保留中の承認は管理およびユーザー・コンソールに表示されません。削除された情報を表示する場合には、この情報が保持されていた元の表に問い合わせるレポートを作成する必要があります。詳細は、『Oracle Identity Manager Audit Report 開発者ガイド』を参照してください。

「リクエスト」および「プロビジョニング」操作の API を使用して、この2つの表からのオープン・タスクおよび保留中の承認に関する情報に基づいて、レポートを作成できます。この操作の API に関する詳細は、Javadoc を参照してください。

「オープン・タスクの削除」スケジュール済タスクを使用するには、次の手順を実行します。

関連項目: 次の手順の各ステップの詳細は、『Oracle Identity Manager デザイン・コンソール・ガイド』を参照してください。

1. スケジュール済タスクを有効にします。
2. スケジュール済タスクの実行頻度を指定します。
3. スケジュール済タスクの日数限度属性の値を指定します。この属性の値は、オープン・タスクおよび保留中の承認に関する情報を、削除するまで表に保持する必要がある日数を示します。この属性のデフォルト値は 60 日です。

スケジュール済タスクが実行されると、指定の日数より長く表にあるすべてのオープン・タスクおよび保留中の承認レコードを削除します。

7.3 アテストーション・リクエストの管理

アテストーションとは、一部のユーザーが持つプロビジョニング・リソースの概要を示すレポートについて、確認が必要であることをレビューアに定期的に通知するメカニズムです。レビューアは、適切なレスポンスによって権限の正確さをアテストすることができます。割り当てられているすべてのオープン・アテストーション・タスクを表示、認証、却下または委任するアテストーション・タスクを表示できます。

ここでは次のトピックについて説明します。

- [アテストーション・リクエストの表示](#)
- [アテストーション・アクションの保存](#)
- [コメントと委任の更新](#)
- [アテストーションの送信](#)

7.3.1 アテストーション・リクエストの表示

レビューアとしてアテストーション・リクエストを使用すると、ユーザー権限が有効であるかどうかを決定できます。アテストーションのリクエストは、認証、却下、拒否または委任することができます。

注意： 拒否されたリクエストは、プロセス所有者グループのメンバーに再割当てされます。

アテストーション・リクエストを表示するには、次の手順を実行します。

1. 左ナビゲーション・ペインで「**To-Do リスト**」をクリックし、続いて「**アテストーション**」をクリックします。

「アテストーション・リクエスト受信ボックス」ページが表示されます。このページには、保留中のアテストーション・プロセス・リクエストに関する次の情報を提供する結果表が表示されます。

フィールド	説明
プロセス名	プロセスの名前を指定します。
プロセス・コード	プロセスのコードを指定します。
データ型	アテストされるデータのタイプを指定します。
スコープ	アテストーション・スコープがマネージャ別、グループ別、組織別またはリソース別のいずれであるかを示します。
委任者	タスクの委任元であるユーザーを識別します。タスクがアテストーション・プロセスによって割り当てられている場合、このフィールドは空です。
現在のリクエスト	アテストーション・タスクが作成される日付と時刻を指定します。

- 「アテステーション・リクエスト受信ボックス」 ページの結果表で、管理するプロセス名のリンクをクリックします。

リクエスト・ページに、ユーザーがタスクの一部としてアテストする必要がある権限が表示されます。レビューアは、アテストする権限の詳細（プロセス・フォーム・データ）も表示することができます。結果表には次の列があります。

フィールド	説明
ユーザー	権限がアテスト対象となっているユーザー。
リソース	権限がアテストされるリソース。データは、アテステーション日現在の、権限のプロセス・フォーム・データが表示されるポップアップ・ページへのリンクです。
記述データ	プロビジョニング・リソース・インスタンスの説明。
最終アテスト日	この権限が最後にアテストされた日付と時刻。
コメント	権限について入力したコメント。
アクション	権限に対するアクションを指定するために選択する、「認証」、「却下」、「拒否」および「委任」オプション。

- アクションがまだ指定されていないレコードのみを表示するには、「**すでにアクションが指定されている場合はレコードを非表示にします**」を選択します。
- 結果表でその他の行を表示するには、「**次へ**」をクリックします。

7.3.2 アテステーション・アクションの保存

次の手順では、アテステーション・アクションの保存方法を説明します。

注意：アテステーションの保存と送信は同じではありません。アテステーションを送信するには、7-9 ページの「[アテステーションの送信](#)」に記載されている手順に従います。

アテステーション・アクションを保存するには、次の手順を実行します。

- 7-7 ページの「[アテステーション・リクエストの表示](#)」に記載されている手順に従って、保存するアテステーション・プロセスを選択します。
- 「アテステーション・リクエスト」 ページで、リストされている権限に対して設定するアクションを選択し、「**保存**」をクリックします。
「アクションの保存」 ページが表示されます。このページには、選択したアクションに対する現行のアテステーション・リクエストのリソース権限がリストされた表が表示されます。「委任」アクションを選択するすべての権限で、「委任されたレビューア」フィールドにあるレビューアを検索することもできます。
- 「アクションの保存」 ページで、リストされている権限に任意のコメントを入力するか、「**レビューア・アクション**」列の値が「**委任**」である権限に対するレビューアを選択します。
- レビューアは、「デフォルトのコメント」列と「デフォルトの委任レビューア」列に値を入力することができます。
特定の値が表にない場合、これらの値がすべての権限に対して使用されます。
- 「**保存**」をクリックします。

7.3.3 コメントと委任の更新

アステーション・リクエストを更新するには、次の手順を実行します。

1. 7-7 ページの「アステーション・リクエストの表示」の手順に従って、更新するアステーション・プロセスを選択します。
2. 7-8 ページの「アステーション・アクションの保存」の手順に従って、いずれかの権限について、コメントを入力するか委任されるレビューアを選択します。
3. 「既存のコメントおよび委任情報を更新」をクリックします。
「コメントおよび委任を更新」ページが表示されます。このページの表には、選択したアクションに対する現行のアステーション・リクエストの権限が表示されます。
4. 「コメントおよび委任を更新」ページで、更新する権限を選択して、(必要に応じて) コメントを入力し、アステーション・リクエストを委任するレビューアを選択します。
5. 「保存」をクリックします。

7.3.4 アステーションの送信

次の手順で、アステーションを送信する方法について説明します。

注意： 現行のアステーション・プロセス・リクエストで各権限にアクションを指定してある場合にかぎり、アステーションを送信できます。アクションを指定していない場合は、「アステーションの送信」ボタンは無効です。

アステーションを送信するには、次の手順を実行します。

1. 7-7 ページの「アステーション・リクエストの表示」の手順に従って、送信するアステーション・プロセスを選択します。
2. 7-8 ページの「アステーション・アクションの保存」の手順に従って、いずれかの権限について、コメントを入力するか委任されるレビューアを選択します。
3. 「アステーション・リクエスト」ページで「アステーションの送信」をクリックします。
「アステーション・リクエストの確認」ページが表示されます。
4. 「アステーション・リクエストの確認」ページで「送信」をクリックします。
5. 送信したタスクは、アステーション受信ボックスから削除されます。

ユーザーの作成と管理

Oracle Identity Manager 内に存在し、Oracle Identity Manager 内で管理されるアイデンティティを、**OIM ユーザー**と言います。OIM ユーザーは、次の方法で作成できます。

- 1つ以上の、HRMS や LDAP などの信頼できるアイデンティティ・ソースからのリコンシリエーションを介して作成
- 手動で管理およびユーザー・コンソールを介して作成
- Java API または SPML Web サービス（あるいはその両方）を介して作成

OIM アカウントは OIM ユーザーに付与され、OIM ユーザーは Oracle Identity Manager にログインして Oracle Identity Manager の機能にアクセスできるようになります。これらの機能には、少なくともセルフサービスおよびリクエストが含まれます。OIM アカウントには、ユーザー、組織およびロールといった様々なエンティティの委任管理やワークフローの定義機能などのその他の権限を付与できます。ユーザーによる自己登録を許可している場合でも、管理者として、他のユーザーのためにアカウントを作成する機能を他の管理者に保持させておくことがあります。すべてのユーザーが他のユーザーのためにアカウントを作成できるわけではありません。

この章の内容は、次のとおりです。

- [ユーザーの作成](#)
- [ユーザーの管理](#)

8.1 ユーザーの作成

OIM ユーザーを作成するには、次の手順を実行します。

1. 管理およびユーザー・コンソールの左ナビゲーション・ペインで「ユーザー」をクリックし、続いて「作成」をクリックします。
2. 「ユーザーの作成」ページで、ユーザー登録に必要なデータを入力します。

表 8-1 では、「ユーザーの作成」ページの GUI 要素を説明します。

表 8-1 「ユーザーの作成」ページの GUI 要素

「ユーザーの作成」ページのラベル アクションまたは説明	
「ユーザー ID」フィールド	<p>ユーザー・アカウントのユーザー ID を入力します。</p> <p>Design Console で「User ID Reuse」プロパティを「true」に設定した後に既存のユーザー ID を再利用しようとする、例外が発生します。この問題を解決するには、USR 表の USR_LOGIN 列の一意索引を削除し、一意ではない索引を作成します。「User ID Reuse」プロパティの詳細は、『Oracle Identity Manager デザイン・コンソール・ガイド』を参照してください。</p>
「名」フィールド	ユーザーの名を入力します。
「ミドル・ネーム」フィールド	ユーザーのミドル・ネームを入力します。
「姓」フィールド	ユーザーの姓を入力します。
「ステータス」フィールド	<p>ユーザー・アカウントの作成中は、この表示のみのチェック・ボックスはグレー表示（無効化）されます。</p> <p>「ユーザーの作成」をクリックすると表示される「ユーザーの詳細」ページでは、このチェック・ボックスはユーザー・アカウントの現行のステータスを示します。ステータス値は次のいずれかです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ アクティブ ■ 無効 ■ 開始日まで無効 ■ 削除
「組織」参照フィールド	ユーザー・アカウントを作成する組織を選択します。
「ユーザー・タイプ」リスト	<p>次のユーザー・タイプのいずれかを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ エンドユーザー ■ エンドユーザー管理者
「従業員タイプ」リスト	<p>次の従業員タイプのいずれかを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ フルタイムの従業員 ■ パートタイムの従業員 ■ 派遣社員 ■ インターン ■ コンサルタント
「マネージャ ID」フィールド	ユーザーのマネージャのユーザー ID を入力します。
「電子メール」フィールド	ユーザーの電子メール・アドレスを入力します。
「ユーザーの無効化」チェック・ボックス	<p>ユーザー・アカウントの作成中は、この表示のみのチェック・ボックスはグレー表示（無効化）されます。</p> <p>アカウントの作成中またはアカウント作成後に、ユーザーの状態が「無効」または「開始日まで無効」である場合、「ユーザーの作成」をクリックすると表示される「ユーザーの詳細」ページでこのチェック・ボックスが選択されています。ユーザー・アカウントの作成中に「開始日」フィールドに未来の日付を入力した場合、ユーザー・アカウントの状態は「開始日まで無効」になります。</p>
「パスワード」フィールド	ユーザーのパスワードを入力します。

表 8-1 「ユーザーの作成」ページの GUI 要素（続き）

「ユーザーの作成」ページのラベル アクションまたは説明

「パスワードの確認」フィールド	パスワードを再入力します。
「ユーザーのロック」チェック・ボックス	<p>ユーザー・アカウントの作成中は、この表示のみのチェック・ボックスはグレー表示（無効化）されます。アカウント作成後にユーザーの状態が「ロック」である場合、ユーザーの管理操作中に表示される「ユーザーの詳細」ページでこのチェック・ボックスが選択されています。</p> <p>ユーザー・アカウントは、指定した回数だけログイン試行が失敗するとロックされます。これが発生した場合、ユーザーはチャレンジ質問に答えてアカウントのロックを解除できます。ユーザーがチャレンジ質問に正しく回答できない場合は、管理者のみがユーザー・アカウントをロック解除できます。</p>
「開始日」日付エディタ	<p>ユーザー・アカウントの開始日を入力します。</p> <p>未来の日付を入力すると、ユーザー・アカウントは開始日まで無効になります。開始日を入力しない場合、ユーザーはアカウントの作成後ただちに有効になり、開始日の値は現在の日付に設定されます。</p>
「終了日」日付エディタ	<p>指定した日付にユーザー・アカウントを削除（「削除」状態に移行）し、プロビジョニングされたすべてのリソースを失効させる場合は、終了日を入力します。</p>
「プロビジョニング日」日付エディタ	<p>リソースをユーザーにプロビジョニングできるようになる日付を入力します。</p> <p>ユーザーに対するプロビジョニング・リクエストは、指定したプロビジョニング日より前に開始できます。ただし、これらのリソースが実際にユーザーにプロビジョニングされるのは、指定したプロビジョニング日以降です。</p> <p>プロビジョニング日を指定しない場合、アカウントの作成後ただちにユーザーにリソースをプロビジョニングできます。</p>
「プロビジョニングされた日」フィールド	<p>この表示のみのフィールドには、ユーザーに対するプロビジョニングが有効になった日付が表示されます。</p>
「デプロビジョニング日」日付エディタ	<p>ユーザーにプロビジョニングされたすべてのリソースをデプロビジョニング（失効）する日付を入力します。</p> <p>この日付以降は、リソースをユーザーにプロビジョニングできません。</p>
「デプロビジョニングされた日」フィールド	<p>この表示のみのフィールドには、ユーザーに対するプロビジョニングが無効になった日付が表示されます。</p>

表 8-1 「ユーザーの作成」 ページの GUI 要素 (続き)

「ユーザーの作成」 ページのラベル アクションまたは説明

「次のログオン時にパスワードを変更」 チェック・ボックス	<p>ユーザーに初回ログオン時のユーザー・パスワードを変更させる場合は、このチェック・ボックスを選択します。</p> <p>「次のログオン時にパスワードを変更」 チェック・ボックスを選択した場合、オプションの設定後にユーザーがログインしたときに「パスワードの変更」 ページが表示されます。</p> <p>Oracle Identity Manager でユーザーが作成されると、そのユーザーは初めてログインしたときにパスワードの変更を強制されます。これは、「最初のログイン時に強制パスワード変更」 プロパティの値を設定して実行します。このプロパティには <code>XL.ForcePasswordChangeAtFirstLogin</code> キーワードがあり、Design Console の「System Configuration」 フォームを使用して「true」に設定します。ユーザーが最初のログイン時にパスワード変更を強制されるのは、「true」に設定済の <code>XL.ForcePasswordChangeAtFirstLogin</code> キーワードを指定してユーザーが作成されたときのみです。</p> <p>関連項目: パスワード・ポリシー作成の詳細は、『Oracle Identity Manager デザイン・コンソール・ガイド』の「Password Policies」 フォームを参照してください。</p> <p>「最初のログイン時に強制パスワード変更」 プロパティの値を変更した場合は常に、変更が有効になるようにサーバーを再起動するかキャッシュをバージする必要があります。この場合、キャッシュ・カテゴリは <code>ServerCachedProperties</code> です。</p> <p>注意:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 「最初のログイン時に強制パスワード変更」 プロパティのデフォルト値は、「True」です。このプロパティを無効にするには、値を「False」に設定します。 ■ <code>PurgeCache</code> ユーティリティの実行の詳細は、『Oracle Identity Manager ベスト・プラクティス・ガイド』を参照してください。
------------------------------	---

3. 「ユーザーの作成」 をクリックします。

Oracle Identity Manager によりユーザー・アカウントが作成され、「ユーザーの詳細」 ページにユーザー・アカウント情報が表示されます。

ユーザーを作成した直後のため、「追加詳細」 リージョンのいずれかのオプションを選択すると、限定された情報が表示されます。

「ユーザーの詳細」 ページでは、次の項目を選択できます。

- **編集:** ユーザー・プロフィールを変更します。
- **無効化:** ユーザーに対してプロビジョニングを無効にします。
- **ロック解除:** ログイン再試行制限を超えた後にユーザー・アカウントがロックアウトされた場合、そのアカウントのロックを解除します。
- **削除:** ユーザー・アカウントを削除します。
- **パスワードの変更:** 現行のパスワードを変更します。

8.1.1 ユーザー・プロフィールの編集

ユーザー・プロフィールを編集するには、次の手順を実行します。

1. 左ナビゲーション・ペインで「ユーザー」をクリックし、続いて「管理」をクリックします。
2. 「ユーザーの管理」ページでメニューから1つ以上の属性を選択し、メニューの隣のフィールドに検索基準（ワイルドカードが必要な場合はアスタリスク（*）を含む）を入力します。
「従業員タイプ」および「ステータス」検索基準を使用するには、対応するフィールドで値を選択します。
3. 「ユーザーの検索」をクリックします。
4. 表示されるユーザーのリストで、情報を編集するユーザーのフィールドをクリックします。
「ユーザーの詳細」ページが表示されます。このページに表示される GUI 要素の詳細は、表 8-1 を参照してください。
5. 「編集」をクリックします。
6. ユーザーのデータを編集してから、「保存」をクリックします。

8.1.2 ユーザーの無効化

ユーザーを無効化すると、そのユーザーを確実にプロビジョニングの対象外にできます。「ユーザーの編集」ページにある「無効化」ボタンは、ロールまたはステータスに応じて「無効化」と「有効化」の間で切り替わります。

ユーザー・プロフィールを無効化するには、次の手順を実行します。

1. 左ナビゲーション・ペインで「ユーザー」をクリックし、続いて「管理」をクリックします。
2. 「ユーザーの管理」ページでメニューから1つ以上の属性を選択し、メニューの隣のフィールドに検索基準（ワイルドカードが必要な場合はアスタリスク（*）を含む）を入力します。
「従業員タイプ」および「ステータス」検索基準を使用するには、対応するフィールドで値を選択します。
3. 「ユーザーの検索」をクリックします。
4. 表示されるユーザーのリストで、情報を無効化するユーザーのチェック・ボックスを選択して、「無効化」をクリックします。

8.1.3 ユーザー・パスワードの変更

ユーザーのパスワードを変更するには、次の手順を実行します。

1. 「パスワードの変更」をクリックします。
「パスワードの変更」ページが表示されます。
2. 新しいパスワードを入力し、確認します。
3. 「パスワードの保存」をクリックします。

8.2 ユーザーの管理

ユーザー・アカウントは変更、無効化、削除およびロック解除できます。また、ユーザー・アカウントのパスワードの変更もできます。

注意：ロックを解除できるのは、ロックされているアカウントのみです。ユーザーが再試行回数を超えてログインを試みると、アカウントはロックされます。

次の手順では、ユーザー・アカウントの管理方法について説明します。

1. 左ナビゲーション・ペインで「**ユーザー**」をクリックし、続いて「**管理**」をクリックします。

「ユーザーの管理」ページが表示されます。

2. ユーザーに関連する情報をフィールドに入力します。

1つ以上のメニューを使用して、検索属性の選択を解除します。選択後、一致させるテキストを隣のフィールドに入力したり、ワイルドカードのアスタリスク (*) を使用します。入力する情報が多いほど、取得されるユーザー・レコードのリストの精度が上がります。「従業員タイプ」および「ステータス」検索基準を使用するには、対応するボックスで値を選択します。

注意：検索基準を指定する場合に、値フィールドを空のままにして「**ユーザーの検索**」をクリックすると、表示される結果にはユーザー表からの NULL 値が含まれます。これは、検索基準フィールドが問合せ条件にまったく組み込まれていないためです。

ただし、検索基準を指定する場合に、値フィールドにアスタリスク (*) を入力して「**ユーザーの検索**」をクリックすると、表示される結果には、検索基準として指定されたフィールドの NULL 以外の値のみが含まれます。

3. 「**ユーザーの検索**」をクリックします。

Oracle Identity Manager により、入力した基準に一致するユーザーのリストが表示されます。

4. アカウントを有効化、無効化、ロック解除または削除するには、該当するチェック・ボックスやボタンを選択します。

たとえばユーザー・アカウントを無効にするには、該当する行の「**無効化**」チェック・ボックスを選択し、「**無効化**」をクリックします。

5. ユーザーのアカウントを編集するには、そのアカウントのユーザー ID をクリックします。

Oracle Identity Manager によりユーザーのプロファイルが表示されます。

6. アカウントのパスワードを編集、無効化、有効化、ロック解除、削除または変更して、該当するボタンをクリックします。

ユーザーに関する詳細情報を表示するには、メニューを使用します。

- ユーザーにプロビジョニングされたリソースを表示するには、「**リソース・プロファイル**」をクリックします。

このページでは、「**新しいリソースのプロビジョニング**」をクリックしてリソースをプロビジョニングすることもできます。

- 「**グループ・メンバーシップ**」ページを表示するには、「**グループ・メンバーシップ**」をクリックします。このページには、そのユーザーが関連付けられているグループ・メンバーシップがリストされます。

グループ・メンバーシップ・ページを使用すると、ユーザーをグループに割り当てることもできます。

- 「プロキシ詳細」ページを表示するには、「**プロキシ詳細**」をクリックします。このページには、そのユーザーが関連付けられているプロキシ・ユーザーがリストされます。

「プロキシ詳細」ページを使用してプロキシを割り当てることもできます。

組織の作成と管理

この章では、Oracle Identity Manager を使用して組織を作成および管理する方法について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- [組織の作成](#)
- [組織の管理](#)
- [組織詳細の管理](#)

9.1 組織の作成

組織を作成するには、次の手順を実行します。

1. 左ナビゲーション・ペインで「**組織**」をクリックし、続いて「**作成**」をクリックします。
「組織の作成」ページが表示されます。
2. アスタリスク (*) で示された必須フィールドに、組織に関するデータを入力します。
「**タイプ**」リストで組織のタイプを選択します。メニューに示されているタイプは次のとおりです。
 - 会社 (デフォルト)
 - 部門
 - 支店「**親の名前**」フィールドで拡大鏡アイコンをクリックすると、「**組織の参照**」参照ウィンドウが表示されます。
 - 任意の組織名を選択し、「**選択**」をクリックします。
組織名が「組織の作成」ページに入力されます。
 - 「**組織の作成**」をクリックします。
「組織の詳細」ページが表示されます。「組織の詳細」ページの説明は、9-4 ページの「[組織詳細の管理](#)」を参照してください。

9.2 組織の管理

次の各項で説明するように、組織は有効化、無効化および削除することができます。

- [組織の検索と表示](#)
- [組織の有効化](#)
- [組織の無効化](#)
- [組織の削除](#)

9.2.1 組織の検索と表示

Oracle Identity Manager で既存の組織を検索および表示するには、次の手順を実行します。

1. 左ナビゲーション・ペインで「**組織**」をクリックし、続いて「**管理**」をクリックします。
「組織の管理」ページが表示されます。
2. ページ上部にあるボックスを使用して、次の検索基準を選択します。
 - **組織名**: 組織の名前です。
 - **親組織名**: この組織がメンバーである組織。組織が結果表に表示される場合は「組織名」フィールドに表示されます。これは親組織の下位組織です。
3. 「組織タイプ」および「組織ステータス」の各ボックスを使用して、次の検索基準を選択します。
 - **組織タイプ**: 組織の分類タイプです (「会社」、「部門」、「支店」など)。
 - **組織ステータス**: 組織の現行のステータスです (「アクティブ」、「システム管理者」、「削除」)。
4. 検索基準に対応する適切な値を入力するか、すべての組織を検索する場合は条件式にワイルドカードのアスタリスク (*) を使用します。

注意： 検索基準を指定する場合に、値フィールドを空のままにして「**組織の検索**」をクリックすると、表示される結果には、組織表からの NULL 値が含まれます。これは、検索基準フィールドが問合せ条件にまったく組み込まれていないためです。

ただし、検索基準を指定する場合に、値フィールドにアスタリスク (*) を入力して「**組織の検索**」をクリックすると、表示される結果には、検索基準として指定されたフィールドの NULL 以外の値のみが含まれます。

結果ページが表示されます。このページでは、組織の無効化や削除を行うことができます。

9.2.2 組織の有効化

組織を有効化するには、次の手順を実行します。

1. 「**有効化**」チェック・ボックスを選択して「**有効化**」をクリックします。
「有効化の確認」ページが表示されます。
2. 「**有効化の確認**」をクリックしてこの組織の有効化を完了するか、「**取消**」をクリックします。

9.2.3 組織の無効化

組織を無効化できるのは、「System Configuration」フォームの「Organization Delete/Disable Action」パラメータが「True」に設定されている場合のみです。「System Configuration」フォームは、Oracle Identity Manager Design Console のメニュー・オプションの 1 つです。

組織を無効化するには、次の手順を実行します。

1. 「**無効化**」チェック・ボックスを選択して「**無効化**」をクリックします。
「無効化の確認」ページが表示されます。
2. 「**無効化の確認**」をクリックしてこの組織の無効化を完了するか、「**取消**」をクリックします。

9.2.4 組織の削除

組織を削除できるのは、「System Configuration」フォームの「Organization Delete/Disable Action」パラメータが「True」に設定されている場合のみです。「System Configuration」フォームは、Oracle Identity Manager Design Console のメニュー・オプションの 1 つです。

組織を削除するには、次の手順を実行します。

1. 「**削除**」チェック・ボックスを選択して「**削除**」をクリックします。
「削除の確認」ページが表示されます。
2. 「**削除の確認**」をクリックしてこの組織の削除を完了するか、「**取消**」をクリックします。

9.3 組織詳細の管理

組織および下位組織に対しては、リソースの有効化、無効化、失効、およびプロビジョニングが可能です。管理者および管理グループの割当て、および管理権限の変更もできます。

組織を管理するには、次の手順を実行します。

1. 9-2 ページの「**組織の作成**」の説明に従って組織を作成します。既存の組織の場合は次の手順に従います。
 - a. 9-2 ページの「**組織の管理**」の説明に従って組織を検索します。
 - b. 結果表で組織名をクリックします。「組織の詳細」ページが表示されます。
2. 「組織に関する追加詳細の表示」メニューを使用して、この組織に関する情報を表示できます。表示する内容は次の項目に基づいて選択できます。

- リソース・プロファイル
- ユーザー
- 下位組織
- 管理グループ
- 権限のあるリソース

「組織の詳細」ページでは、次の操作が可能です。

- **編集**: 組織プロフィールを変更します。
 - **無効化**: 組織をプロビジョニング対象から無効にします。
 - **削除**: 組織を削除します。
3. この組織のリソース・プロファイルに基づいて情報を参照すると、「リソース・プロファイル」ページが表示されます。「リソース・プロファイル」ページでは、次の操作が可能です。
 - **有効化**: 組織に関連するリソースを有効化します。
 - **無効化**: 組織に関連するリソースを無効化します。
 - **失効**: 組織に関連するリソースを失効させます。
 - **新しいリソースのプロビジョニング**: 組織に関連付けられた新しいリソースをプロビジョニングします。
 4. この組織のユーザーに基づいて情報を表示すると、「ユーザー」ページが表示されます。「ユーザー」ページでは、次の操作が可能です。
 - **有効化**: 組織に関連するユーザーを有効化します。
 - **無効化**: 組織に関連するユーザーを無効化します。
 - **ロック解除**: 組織に関連するユーザーのロックを解除します。
 - **削除**: 組織に関連するユーザーを削除します。
 - **移動**: ユーザーを別の組織に移動します。
 5. この組織の下位組織に基づいて情報を参照すると、「下位組織」ページが表示されます。「下位組織」ページでは、下位組織を別の組織に移動できます。

6. この組織の管理者に基づいて情報を参照すると、「管理グループ」ページが表示されます。
「管理グループ」ページでは、次のいずれかのアクションを実行できます。
 - 新しい管理者の割当て
 - 新規グループの作成
 - 権限の更新
 - グループの削除
7. この組織の許可されたリソースに基づいて情報を参照すると、「許可されたリソース」ページが表示されます。
「許可されたリソース」ページで、組織に関連する、権限のあるリソースの割当ておよび更新を行うことができます。

ユーザー・グループの作成と管理

管理者としてユーザー・グループを使用して、アクセス権、ロール、権限などの一般的な機能にアクセスできるユーザーの集合のレコードを作成および管理します。

ユーザー・グループは、組織に依存しないグループ、複数の組織にわたるグループ、または1つの組織のユーザーしか含まないグループが可能です。

ユーザー・グループを使用すると、次の操作が可能です。

- ユーザーが管理およびユーザー・コンソールを使用してアクセスできるメニュー項目を指定します。
- ユーザー・グループにユーザーまたはサブグループを割り当てます。
- プロセス・タスクに対して定義済レスポンスを指定できるようにするためのステータスをユーザーに指定します。
- データ・オブジェクトの変更および権限のリクエストを行います。
- グループ管理者を指定して、他のユーザー・グループのメンバーが現行ユーザー・グループにメンバーを割り当てられるようにするなど、グループにアクションを実行します。
- ユーザー・グループのプロビジョニング・ポリシーを指定します。これらのポリシーは、ユーザー・グループのメンバーに対して、あるリソース・オブジェクトをプロビジョニングするか、リクエストによりプロビジョニングするかを決定します。
- ユーザー・グループに対して、メンバーシップ・ルールを追加または削除します。これらのルールは、どのユーザーをユーザー・グループに割り当てできるかを決定します。

Oracle Identity Manager には、3つのデフォルトのユーザー・グループがあります。

- システム管理者
- オペレータ
- すべてのユーザー

デフォルトのユーザー・グループに関連付けられた権限は変更できます。他のユーザー・グループを作成することもできます。

「システム管理者」ユーザー・グループのメンバーは、Oracle Identity Manager でレコード（システム・レコード以外）を作成、編集および削除できる完全な権限を持っています。このグループのユーザーは、他のユーザーの権限を制御したり、割り当てられないタスクについてもプロセス・タスクのステータスを変更して、最も高いレベルからシステムを管理できます。

「オペレータ」ユーザー・グループのメンバーは、「組織」、「ユーザー」および「タスク・リスト」の各フォームにアクセスできます。このグループのユーザーは、これらのフォームの一部の機能を実行できます。

「すべてのユーザー」ユーザー・グループのメンバーは権限が最小ですが、自身のユーザー・レコードにアクセスできるなどの機能があります。デフォルトでは、各ユーザーは「すべてのユーザー」ユーザー・グループに所属します。

この章の内容は、次のとおりです。

- [グループの作成](#)
- [グループの管理](#)

注意：

- 「すべてのユーザー」グループからユーザーを削除することはできません。
- ユーザー・グループ SELF OPERATORS は、デフォルトで Oracle Identity Manager に追加されます。このユーザー・グループには XELSELFREG という 1 人のユーザーが含まれ、管理およびユーザー・コンソールで自己登録を実行するためのユーザー権限の変更を担当します。

SELF OPERATORS グループに関連付けられている権限を変更しないこと、またこのグループにユーザーを割り当てないことをお勧めします。

10.1 グループの作成

新規のユーザー・グループを初めて作成する場合、「グループの詳細」ページにはグループ名が表示されます。10-2 ページの「[グループの管理](#)」の説明に従い、「追加詳細」メニューを使用してユーザー・グループに情報を追加できます。

ユーザー・グループを作成するには、次の手順を実行します。

1. 左ナビゲーション・ペインで「**ユーザー・グループ**」をクリックし、続いて「**作成**」をクリックします。「ユーザー・グループの作成」ページが表示されます。
2. ユーザー・グループの名前を「**名前**」フィールドに入力します。
3. 「**作成**」をクリックします。「グループの詳細」ページが表示されます。
4. グループ名を変更する場合は「**編集**」をクリックします。また、ユーザー・グループを削除する場合は「**削除**」をクリックします。

10.2 グループの管理

ユーザー・グループの検索、それらのグループへの情報の追加、ユーザー・グループのためのその他の管理機能を実行できます。

ここでは、次のトピックについて説明します。

- [ユーザー・グループの検索](#)
- [ユーザー・グループの削除](#)
- [ユーザー・グループの表示と管理](#)

10.2.1 ユーザー・グループの検索

ユーザー・グループを検索するには、次の手順を実行します。

1. 左ナビゲーション・ペインで「**ユーザー・グループ**」をクリックし、続いて「**管理**」をクリックします。
「グループの管理」ページが表示されます。
2. メニューから「**グループ名**」を選択し、メニューの隣のフィールドに値を入力します。
ワイルドカード文字としてアスタリスク (*) を使用すると、すべてのユーザー・グループを問合せできます。
3. 「**検索**」をクリックします。
結果ページが表示されます。このページを使用して、ユーザー・グループを表示および削除できます。

10.2.2 ユーザー・グループの削除

ユーザー・グループを削除するには、次の手順を実行します。

1. 10-2 ページの「[ユーザー・グループの検索](#)」の説明に従ってグループを検索します。
2. 削除するグループの横にある「**削除**」チェック・ボックスを選択し、「**削除**」をクリックします。
「**確認**」ページが表示されます。
3. 「**削除の確認**」をクリックしてこのユーザー・グループの削除を完了するか、「**取消**」をクリックします。

10.2.3 ユーザー・グループの表示と管理

表示するユーザー・グループを選択した後、選択したユーザー・グループに関する次の詳細を表示できます。

- [メンバーとサブグループ](#)
- [メニュー項目](#)
- [管理グループ](#)
- [アクセス・ポリシー](#)
- [メンバーシップ・ルール](#)
- [データ・オブジェクト権限](#)
- [許可されたレポート](#)

10.2.3.1 メンバーとサブグループ

グループには、ユーザーまたはサブグループを割り当てることができます。「ユーザーの割当て」および「サブグループの割当て」の各オプションも機能は類似しています。次の手順では、「ユーザーの割当て」サブグループを例として示しています。

ユーザーをグループに割り当てするには、次の手順を実行します。

1. 10-2 ページの「[ユーザー・グループの検索](#)」の説明に従ってグループを検索し、結果表でグループの名前をクリックします。
2. 追加詳細ボックスで、「**メンバーとサブグループ**」を選択します。
「メンバーとサブグループ」ページが表示されます。
3. 「**ユーザーの割当て**」をクリックします。
4. 「**ユーザーの検索**」をクリックするとユーザー名の一覧が表示されます。または、「**クリア**」をクリックします。
結果表が表示されます。
5. メンバーの優先度を上下させるには、結果表の「優先度を上げる / 下げる」列で、そのメンバーに関連付けられたオプションをクリックし、「**上げる**」または「**下げる**」をクリックします。
6. グループのメンバーを削除するには、結果表の「**削除**」列で、そのメンバーに対応するオプションをクリックし、「**メンバーの削除**」をクリックします。
7. ユーザー ID に対する適切なオプションを選択し、「**割当て**」をクリックします。
「**確認**」ページに、選択したユーザー ID 名が表示されます。
8. ユーザーの割当てに進む場合は「**割当ての確認**」をクリックします。
これを行わない場合は、「**取消**」をクリックします。

10.2.3.2 メニュー項目

「メニュー項目」検索基準には、このユーザー・グループに許可されているすべてのメニュー項目が表示されます。「メニュー項目」オプションを使用すると、ユーザー・グループに対して新しいメニュー項目を割り当てることができます。

メニュー項目をユーザー・グループに割り当てするには、次の手順を実行します。

1. 10-2 ページの「[ユーザー・グループの検索](#)」の説明に従ってグループを検索し、結果表でグループの名前をクリックします。
「グループの詳細」ページが表示されます。
2. 追加詳細ボックスで、「**メニュー項目**」を選択します。
「メニュー項目」ページが表示されます。
3. 「**メニュー項目の割当て**」をクリックします。
「メニュー項目の割当て」ページが表示されます。
4. メニュー項目に対する適切なオプションを選択し、「**割当て**」をクリックします。
「確認」ページが表示されます。
5. メニューの割当てに進む場合は「**割当ての確認**」をクリックします。
これを行わない場合は、「**取消**」をクリックします。

結果表に、このユーザー・グループに許可されているメニュー項目が表示されます。このページでは、許可しないメニュー項目を削除することもできます。

6. メニュー項目を削除するには、そのメニュー項目に対応するオプションを選択し、「**削除**」をクリックします。
これでこのメニュー項目はこのユーザー・グループとの関連付けを解除されました。

10.2.3.3 管理グループ

ユーザー・グループに関連付けられているすべての管理グループを表示することができます。また、次の操作も可能です。

- 管理グループの割当て
- 新しい管理グループの作成
- 管理グループの権限の更新

管理グループの割当て

管理グループを割り当てするには、次の手順を実行します。

1. 10-2 ページの「[ユーザー・グループの検索](#)」の説明に従ってグループを検索し、結果表でグループの名前をクリックします。
「グループの詳細」ページが表示されます。
2. 「追加詳細」ボックスで、「**管理グループ**」を選択します。
「管理グループ」ページが表示されます。
3. 「**管理グループの割当て**」をクリックします。
「管理グループの割当て」ページが表示されます。このページには、ユーザー・グループに関連付けることができる管理グループがすべて表示されます。
4. 管理グループに対応する適切なオプションと、アクセスの書込みおよび削除に関するそれぞれの権限設定を選択し、「**割当て**」をクリックします。
「確認」ページが表示されます。
5. 「**割当ての確認**」または「**取消**」をクリックします。
結果表に、このユーザー・グループを管理できる管理グループが表示されます。

管理グループの作成

新しい管理グループを作成するには、次の手順を実行します。

1. 10-2 ページの「[ユーザー・グループの検索](#)」の説明に従ってグループを検索し、結果表でグループの名前をクリックします。
「グループの詳細」ページが表示されます。
2. 「追加詳細」ボックスで、「**管理グループ**」を選択します。
「管理グループ」ページが表示されます。
3. このユーザー・グループに対して新しい管理グループを作成するには、「**新規グループの作成**」をクリックします。
管理者の割当てウィザードの「ステップ 1: 管理者の割当て」ページが表示されます。
4. この新しい管理グループに含めるユーザーのオプションを選択し、「**追加**」をクリックします。
ユーザーのログイン名が「選択済」リストに表示されます。
5. 「**続行**」をクリックするか、「**戻る**」または「**終了**」をクリックしてウィザードを終了します。
「ステップ 2: 別名の指定」ページが表示されます。
6. 新しい管理グループの別名を入力し、「**続行**」をクリックします。
または、「**戻る**」をクリックして前のページに戻るか、「**終了**」をクリックしてウィザードを終了します。
「ステップ 3: 権限の指定」ページが表示されます。デフォルトでは、「読取り」権限のオプションが選択されています。
7. 「書込み」または「削除」権限のオプションを選択し、「**続行**」をクリックします。
「ステップ 4: 委任情報の検証」ページが表示されます。
このページには、管理グループのエイリアス、この管理グループに所属するユーザーおよびそのグループの権限が表示されます。
8. この管理グループを変更するには、「**変更**」をクリックします。
「変更」をクリックすると、該当するウィザード・ページに戻って変更することができます。変更しない場合は、「**続行**」をクリックします。
「管理グループ」ページが表示されます。

グループ権限の更新

グループ権限を更新するには、次の手順を実行します。

1. 10-2 ページの「[ユーザー・グループの検索](#)」の説明に従ってグループを検索し、結果表でグループの名前をクリックします。
「グループの詳細」ページが表示されます。
2. 「追加詳細」ボックスで、「**管理グループ**」を選択します。
「管理グループ」ページが表示されます。
3. ユーザー・グループに関連する管理グループの権限を更新するには、「**権限の更新**」をクリックします。
「権限の更新」ページが表示されます。
このページには、管理グループ名と書込みおよび削除の権限が表示されます。

4. 管理グループの権限設定を変更するには、「**書込み権限**」および「**削除権限**」に対応するオプションをクリックします。続いて「**更新**」をクリックすると変更されます。

これを行わない場合は、「**取消**」をクリックします。

「確認」ページが表示されます。このページには、更新した管理グループが表示されます。

5. このページに表示されている名前が正しければ、「**更新の確認**」をクリックします。

これを行わない場合は、「**取消**」をクリックします。

「管理グループ」ページが表示されます。

更新された管理グループに、変更された書込みまたは削除アクセス権が表示されます。

6. 管理グループを削除するには、グループ名に対応するオプションを選択し、「**削除**」をクリックします。

10.2.3.4 アクセス・ポリシー

このユーザー・グループで使用できるすべてのアクセス・ポリシーを表示したり、ユーザー・グループに対してアクセス・ポリシーの割当ておよび削除を行えます。

アクセス・ポリシーをユーザー・グループに割り当てるには、次の手順を実行します。

1. 10-2 ページの「**ユーザー・グループの検索**」の説明に従ってグループを検索し、結果表でグループの名前をクリックします。

「グループの詳細」ページが表示されます。

2. 「追加詳細」ボックスで「**アクセス・ポリシー**」を選択します。

「アクセス・ポリシー」ページが表示されます。

3. 新しいアクセス・ポリシーを割り当てるには、「**割当て**」をクリックします。

「アクセス・ポリシーの割当て」ページが表示されます。

このページには、ポリシー名とポリシーの簡単な説明が表示されます。

4. このユーザー・グループのアクセス・ポリシーに対応するオプションを選択し、「**割当ての確認**」をクリックします。

これを行わない場合は、「**取消**」をクリックします。

「確認」ページが表示されます。

5. アクセス・ポリシーを割り当てるには、「**割当ての確認**」をクリックします。

これを行わない場合は、「**取消**」をクリックします。

「アクセス・ポリシー」ページが表示されます。

6. このアクセス・ポリシーを削除するには、ポリシーに対応するオプションを選択し、「**削除**」をクリックします。

10.2.3.5 メンバーシップ・ルール

このユーザー・グループで使用できるすべてのメンバーシップ・ルールの表示、ユーザー・グループに対する新しいメンバーシップ・ルールの割当て、およびメンバーシップ・ルールの削除を行うことができます。

メンバーシップ・ルールに関連する操作を行うには、次の手順を実行します。

1. 10-2 ページの「**ユーザー・グループの検索**」の説明に従ってグループを検索し、結果表でグループの名前をクリックします。

「グループの詳細」ページが表示されます。

2. 追加詳細ボックスで「**メンバーシップ・ルール**」を選択します。

「メンバーシップ・ルール」ページが表示されます。

3. 新しいメンバーシップ・ルールを割り当てるには、「**ルールの割当て**」をクリックします。
「メンバーシップ・ルールの割当て」ページが表示されます。このページには、メンバーシップ・ルールの名前が表示されます。
4. このユーザー・グループのメンバーシップ・ルールに対応するオプションを選択し、「**割当ての確認**」をクリックします。
これを行わない場合は、「**取消**」をクリックします。
「確認」ページが表示されます。
5. メンバーシップ・ルールを割り当てるには、「**割当ての確認**」をクリックします。
これを行わない場合は、「**取消**」をクリックします。
「メンバーシップ・ルール」ページが表示されます。
6. このメンバーシップ・ルールを削除するには、メンバーシップ・ルールに対応するオプションを選択し、「**削除**」をクリックします。

10.2.3.6 データ・オブジェクト権限

Oracle Identity Manager における権限は、そのほとんどがデータ・オブジェクトに関するものです。データ・オブジェクトは、Oracle Identity Manager データ・モデルにおける表の内部オブジェクト表現として定義できます。このモデルではビジネス・ロジックが実行され、データ・ストアにおけるデータの挿入、更新、および削除が行われます。これらのアクションに対する権限は、グループ・レベルで定義されます。表またはデータ・オブジェクトに応じて、これらの権限は次のように分類できます。

- 明示的な挿入 / 更新 / 削除権限が必要なデータ・オブジェクト
- 管理グループ
- 明示的な権限が不要なデータ・オブジェクト
- メニュー項目とグループ権限

明示的な挿入 / 更新 / 削除権限が必要なデータ・オブジェクト

明示的な挿入、更新または削除権限が必要とされるデータ・オブジェクトとは、そのエントリーを作成、変更および削除するために Oracle Identity Manager 管理およびユーザー・コンソールの「グループの詳細」リストの「権限」を使用して挿入、更新または削除権限を指定する必要のあるデータ・オブジェクトです。

次の例を考えてみます。あるユーザーが複数のグループに属し、データ・オブジェクトがいずれのグループにも割り当てられています。このデータ・オブジェクト・タイプのエンティティを削除するとします。削除するには、いずれのグループにも、データ・オブジェクトに対する更新権限が付与されていることを確認する必要があります。

表 10-1 は、このカテゴリで示すデータ・オブジェクトとそのエンティティをまとめたリストです。

表 10-1 明示的な挿入 / 更新 / 削除権限が必要なデータ・オブジェクト

データ・オブジェクト・タイプ	エンティティ
com.thortech.xl.dataobj.tcACS	組織 .Lnk_Act_Svr
com.thortech.xl.dataobj.tcADL	アダプタ・ファクトリ .ロジック / 変数設定タスク
com.thortech.xl.dataobj.tcADM	アダプタ・ファクトリ .入力 / 出力パラメータ
com.thortech.xl.dataobj.tcADP	アダプタ定義
com.thortech.xl.dataobj.tcADS	アダプタ・ファクトリ・ストアド・プロセス・タスク
com.thortech.xl.dataobj.tcADT	アダプタ・タスク
com.thortech.xl.dataobj.tcADU	アダプタ・ファクトリ Web サービス・タスク
com.thortech.xl.dataobj.tcADV	アダプタ・ファクトリ .変数
com.thortech.xl.dataobj.tcAPA	アテストーション・プロセス管理者
com.thortech.xl.dataobj.tcARS	アダプタ・ステータス
com.thortech.xl.dataobj.tcATP	アダプタ・ファクトリ .パラメータ・タスク表
com.thortech.xl.dataobj.tcDAV	データ・オブジェクト .アダプタ変数
com.thortech.xl.dataobj.tcDVT	データ・オブジェクトに関連付けられたイベント・ハンドラ
com.thortech.xl.dataobj.tcEMD	電子メール定義
com.thortech.xl.dataobj.tcERR	エラー・メッセージ定義
com.thortech.xl.dataobj.tcEVT	イベント・ハンドラ
com.thortech.xl.dataobj.tcGPY	ユーザー・グループ .プロパティ
com.thortech.xl.dataobj.tcLKU	参照定義
com.thortech.xl.dataobj.tcLKV	参照用の参照値
com.thortech.xl.dataobj.tcOBA	リソース・オブジェクト認可者
com.thortech.xl.dataobj.tcODF	オブジェクトからプロセスへのデータ・フロー
com.thortech.xl.dataobj.tcODV	リソース・オブジェクト・イベント
com.thortech.xl.dataobj.tcOOD	リソース・オブジェクト .組織オブジェクトの依存性
com.thortech.xl.dataobj.tcOUD	リソース・オブジェクト .ユーザー・オブジェクトの依存性
com.thortech.xl.dataobj.tcPDF	プロセス統合 .データ・フロー・マッピング
com.thortech.xl.dataobj.tcPKH	パッケージ階層
com.thortech.xl.dataobj.tcPOC	アクセス・ポリシー子表データ
com.thortech.xl.dataobj.tcPOF	ポリシー親データ
com.thortech.xl.dataobj.tcPOG	アクセス・ポリシーで定義されているユーザー・グループ
com.thortech.xl.dataobj.tcPOL	アクセス・ポリシー定義
com.thortech.xl.dataobj.tcPOP	アクセス・ポリシーの割当て済オブジェクト
com.thortech.xl.dataobj.tcPRF	プロセス・リコンシリエーション・フィールド・マッピング
com.thortech.xl.dataobj.tcPTY	システム構成
com.thortech.xl.dataobj.tcPWP	ポリシー・プロセス・ターゲット

表 10-1 明示的な挿入 / 更新 / 削除権限が必要なデータ・オブジェクト (続き)

データ・オブジェクト・タイプ	エンティティ
com.thortech.xl.dataobj.tcPWR	パスワード・ポリシー
com.thortech.xl.dataobj.tcPWT	ポリシー・ユーザー・ターゲット
com.thortech.xl.dataobj.tcRAV	事前移入アダプタ・マッピング
com.thortech.xl.dataobj.tcRCA	リコンシリエーションが一致した組織
com.thortech.xl.dataobj.tcRCH	リコンシリエーション・イベントのアクション履歴
com.thortech.xl.dataobj.tcRCP	一致したリコンシリエーション・イベント・プロセス
com.thortech.xl.dataobj.tcRCU	一致したリコンシリエーション・イベント・ユーザー
com.thortech.xl.dataobj.tcRCX	リコンシリエーションの例外
com.thortech.xl.dataobj.tcRES	アダプタ・ファクトリ・リソース
com.thortech.xl.dataobj.tcRGP	グループ・メンバーシップ・ルール
com.thortech.xl.dataobj.tcRML	タスクの割当てルール
com.thortech.xl.dataobj.tcRPG	ユーザー・グループに関するレポート
com.thortech.xl.dataobj.tcRUL	ルール
com.thortech.xl.dataobj.tcRUE	ルール要素
com.thortech.xl.dataobj.tcSDC	システム・ユーザー定義フォームのユーザー定義列
com.thortech.xl.dataobj.tcSDH	ユーザー定義フォームの親子階層
com.thortech.xl.dataobj.tcSDL	フォーム定義バージョン・ラベル
com.thortech.xl.dataobj.tcSDP	フォーム定義プロパティ
com.thortech.xl.dataobj.tcSPD	IT リソース・タイプ・パラメータ定義
com.thortech.xl.dataobj.tcSRE	ユーザー定義列と事前移入アダプタの関連付け
com.thortech.xl.dataobj.tcSRS	IT リソース・リンク
com.thortech.xl.dataobj.tcSUG	IT リソース・管理者
com.thortech.xl.dataobj.tcSVD	IT リソース・タイプ定義
com.thortech.xl.dataobj.tcTDV	プロセス・イベント・ハンドラ
com.thortech.xl.dataobj.tcTLG	システム・ログ
com.thortech.xl.dataobj.tcTSA	スケジュール・タスク属性
com.thortech.xl.dataobj.tcTSK	スケジュール済タスク
com.thortech.xl.dataobj.tcUHD	ユーザー・オブジェクト・履歴の詳細
com.thortech.xl.dataobj.tcUPL	ユーザー定義フィールド参照
com.thortech.xl.dataobj.tcUPT	ユーザー定義フィールド値
com.thortech.xl.dataobj.tcUPY	システム構成・ユーザー
com.thortech.xl.dataobj.tcWIN	フォーム情報

管理グループ

これらのデータ・オブジェクトでは、Oracle Identity Manager 管理およびユーザー・コンソールの「グループの詳細」リストにある「権限」で定義される権限は使用されません。これらは、管理者として定義された特定のグループの管理者の概念に従います。表 10-2 は、これらのデータ・オブジェクトとその権限をまとめたリストです。

表 10-2 管理者グループのデータ・オブジェクト権限

データ・オブジェクト・タイプ	エンティティ	権限
com.thortech.xl.dataobj.tcUSR	ユーザー	ユーザーに対する権限は、組織レベルで定義されます。あるグループを、読取り、書込みおよび削除の権限を持つ組織の管理者として定義した場合、そのグループに属するユーザーは、ユーザーの詳細の表示や変更、およびユーザーの削除を実行できます。
com.thortech.xl.dataobj.tcACT	組織	あるグループを組織の管理者として定義した場合、そのグループに属するユーザーは、割り当てられた権限に基づいて次のアクションを実行できます。 読取り権限を使用するアクション： <ul style="list-style-type: none"> ■ 組織に属するユーザーの詳細の表示 ■ 組織タイプや組織の親組織などの、組織の詳細の表示 書込み権限を使用するアクション： <ul style="list-style-type: none"> ■ 組織に属するユーザーの属性の更新 ■ 組織の属性の更新 ■ 組織からのユーザーの削除は不可 削除権限を使用するアクション： <ul style="list-style-type: none"> ■ 組織に属するユーザーの削除 ■ 組織の削除 ■ ユーザーの属性の更新は不可
com.thortech.xl.dataobj.tcUGP	ユーザー・グループ	あるグループを別のグループの管理者として定義した場合、そのグループに属するユーザーは、割り当てられた権限に基づいて次のアクションを実行できます。 読取り権限を使用するアクション： <ul style="list-style-type: none"> ■ グループ属性の表示 ■ グループ・メンバーの表示 ■ グループ・メンバーの追加または削除は不可 書込み権限を使用するアクション： <ul style="list-style-type: none"> ■ グループ・メンバーの追加または削除 ■ グループ・メンバー間での優先度の変更 ■ グループ属性の更新 削除権限を使用するアクション： <ul style="list-style-type: none"> ■ グループの削除

表 10-2 管理者グループのデータ・オブジェクト権限 (続き)

データ・オブジェクト・タイプ	エンティティ	権限
com.thortech.xl.dataobj.tcOBJ	リソース・オブジェクト	<p>あるグループをリソースの管理者として定義した場合、そのグループに属するユーザーは、割り当てられた権限に基づいて次のアクションを実行できます。</p> <p>読取り権限を使用するアクション：</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ リソース属性の表示 ■ リソースがプロビジョニングされるユーザーまたは組織のリストの表示 ■ 管理者および認可者のリストの表示 ■ リソース監査目的の表示 <p>書込み権限を使用するアクション：</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ リソース属性の更新 ■ リソース管理者の割当てまたは削除、およびその権限の更新 ■ リソース認可者の割当てまたは削除、およびその優先度の更新は不可 ■ リソース監査目的の追加は不可 <p>削除権限を使用するアクション：</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ リソースの削除は不可
com.thortech.xl.dataobj.tcAPD	アテストーション・プロセス定義	<p>あるグループをアテストーション・プロセスの管理者として定義した場合、そのグループに属するユーザーは、割り当てられた権限に基づいて次のアクションを実行できます。</p> <p>読取り権限を使用するアクション：</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ アテストーション・プロセス定義の表示 ■ 管理者および実行履歴の表示 <p>書込み権限を使用するアクション：</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ アテストーション・プロセス定義の更新 ■ 管理者の割当てまたは削除、およびその権限の更新は不可 ■ アテストーション・プロセス定義の無効化 / 有効化は可能 <p>削除権限を使用するアクション：</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ アテストーション・プロセスの削除
com.thortech.xl.dataobj.tcQUE	管理キュー	<p>あるグループを管理キューの管理者として定義した場合、そのグループに属するユーザーは、割り当てられた権限に基づいて次のアクションを実行できます。</p> <p>読取り権限を使用するアクション：</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 管理キュー定義の表示または読取り <p>書込み権限を使用するアクション：</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ キュー定義の更新 ■ キュー・メンバーの追加または削除 ■ 管理者およびその権限の追加または更新 <p>削除権限を使用するアクション：</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ キューの削除は不可

表 10-2 管理者グループのデータ・オブジェクト権限 (続き)

データ・オブジェクト・タイプ	エンティティ	権限
com.thortech.xl.dataobj.tcTOS	プロセス定義	<p>あるグループをプロセス定義の管理者として定義した場合、そのグループに属するユーザーは、割り当てられた権限に基づいて次のアクションを実行できます。</p> <p>読取り権限を使用するアクション：</p> <ul style="list-style-type: none"> ワークフロー・プロセスの表示 <p>書き込み権限を使用するアクション：</p> <ul style="list-style-type: none"> ワークフロー定義の更新 ワークフロー定義におけるタスクの追加、変更または削除 管理者の更新または削除 <p>ワークフロー定義の削除はサポートされていません。</p>
com.thortech.xl.dataobj.tcSDK	フォーム・デザイナー	<p>あるグループをフォームの管理者として定義した場合、そのグループに属するユーザーは、割り当てられた権限に基づいて次のアクションを実行できます。</p> <p>読取り権限を使用するアクション：</p> <ul style="list-style-type: none"> ある定義に基づいて定義されたユーザーの読取りまたは表示 <p>書き込み権限を使用するアクション：</p> <ul style="list-style-type: none"> フォーム定義属性の更新 新規バージョンの追加 管理者およびその権限の更新または削除 新規フィールドのフォームへの追加は不可 既存のフィールド・プロパティの追加または更新は不可 事前移入アダプタのフィールドへの追加は不可 <p>ユーザー定義フォームの削除はサポートされていません。</p>
com.thortech.xl.dataobj.tcSVR	IT リソース	<p>あるグループを IT リソースの管理者として定義した場合、そのグループに属するユーザーは、割り当てられた権限に基づいて次のアクションを実行できます。</p> <p>読取り権限を使用するアクション：</p> <ul style="list-style-type: none"> パラメータを含む IT リソース詳細の読取りまたは表示 <p>書き込み権限を使用するアクション：</p> <ul style="list-style-type: none"> IT リソース定義およびパラメータの更新 管理者およびその権限の追加または更新は不可 <p>削除権限を使用するアクション：</p> <ul style="list-style-type: none"> IT リソース・インスタンスの削除

あるグループを、読取り、書き込み、および削除の権限を持つ表 10-2 のエンティティのいずれかの管理者として定義した場合、そのグループに属するユーザーは、エンティティ詳細の表示、エンティティ詳細の変更、またはエンティティの削除が行えます。

あるユーザーによって表 10-2 にリストされているデータ・オブジェクト・タイプのエンティティが作成された場合は常に、そのユーザーが属するグループが、読取り、書き込みおよび削除の権限を持つ、新規に作成されたエンティティの管理者として自動的に定義されます。

たとえば、グループ 1 およびグループ 2 に属するユーザー 1 が、com.thortech.xl.dataobj.tcACT タイプのエンティティ (組織) を作成したとします。グループ 1 およびグループ 2 は、読取り、書き込みおよび削除の権限を持つ、新規に作成された組織の管理者として自動的に定義されます。

明示的な権限が不要なデータ・オブジェクト

明示的な権限が必要ないデータ・オブジェクトとは、強制される権限がないか、または単に親データ・オブジェクトの権限に従うことから、権限を定義する必要のないデータ・オブジェクトです。親データ・オブジェクト権限が使用されるデータ・オブジェクトに対しては、親データ・オブジェクトに対する更新の権限を持つグループは、その子データ・オブジェクトに対しても挿入、更新および削除の権限を持つという単純な原則に従います。表 10-3 に、これらのデータ・オブジェクトとそのエンティティの一覧を示します。

表 10-3 明示的な権限が不要なデータ・オブジェクト

データ・オブジェクト	説明	権限のタイプ
Com.thortech.xl.dataobj.tcMEV	タスク・ステータスを基に定義されている電子メール定義	親 (TOS) 権限に従う。
Com.thortech.xl.dataobj.tcMIL	プロセス・タスク定義	親 (TOS) 権限に従う。
Com.thortech.xl.dataobj.tcRSC	プロセス・タスクのレスポンス・コード	親 (TOS) 権限に従う。
Com.thortech.xl.dataobj.tcUNM	取消しマイルストーン	親 (TOS) 権限に従う。
Com.thortech.xl.dataobj.tcRPC	リコンシリエーションが一致したプロセスの子表	権限チェックなし。常に true が戻される。
Com.thortech.xl.dataobj.tcAAD	組織・管理者	親データ・オブジェクト (ACT) 権限に従う。
Com.thortech.xl.dataobj.tcRCE	リコンシリエーション・イベント	権限チェックなし。常に true が戻される。
Com.thortech.xl.dataobj.tcPCQ	ユーザーの質問	権限チェックなし。常に true が戻される。
Com.thortech.xl.dataobj.tcUSG	グループに属するユーザー	親データ・オブジェクト (UGP) 権限に従う。
com.thortech.xl.dataobj.tcGPP	グループ管理者	親データ・オブジェクト (UGP) 権限に従う。
com.thortech.xl.dataobj.tcUWP	ユーザー・グループ・ナビゲーション・ツリーのレイアウト	親データ・オブジェクト (UGP) 権限に従う。
com.thortech.xl.dataobj.tcFUG	ユーザー定義フィールドの定義・管理者	親データ・オブジェクト (SDK) 権限に従う。
com.thortech.xl.dataobj.tcMAV	プロセス・データ・マイルストーン・アダプタ変数	親 (TOS) 権限に従う。
com.thortech.xl.dataobj.tcAtomic Process	プロセス定義	親 (TOS) 権限に従う。
com.thortech.xl.dataobj.tcATR	アテステーション・リクエスト	権限チェックなし。常に true が戻される。
com.thortech.xl.dataobj.tcEIF	ファイルのエクスポート / インポート履歴	権限チェックなし。常に true が戻される。
com.thortech.xl.dataobj.tcCIH	コネクタのインストール履歴	権限チェックなし。常に true が戻される。
com.thortech.xl.dataobj.tcORR	リコンシリエーション・アクション・ルール	親 (OBJ) 権限に従う。
com.thortech.xl.dataobj.tcRRE	リコンシリエーション・ユーザー一致要素	権限チェックなし。常に true が戻される。
com.thortech.xl.dataobj.tcRPW	リソースに対するパスワード・ポリシー・ルール	親 (OBJ) 権限に従う。
com.thortech.xl.dataobj.tcOBD	リソース・オブジェクトの依存性	親 (OBJ) 権限に従う。

表 10-3 明示的な権限が不要なデータ・オブジェクト (続き)

データ・オブジェクト	説明	権限のタイプ
com.thortech.xl.dataobj.tcACP	許可済オブジェクト	親データ・オブジェクト (ACT) 権限に従う。
com.thortech.xl.dataobj.tcRCM	リコンシリエーション・データの複数値	権限チェックなし。常に true が戻される。
com.thortech.xl.dataobj.tcATD	アテステーション・タスク・データ	権限チェックなし。常に true が戻される。
com.thortech.xl.dataobj.tcOST	リソースに対して定義されたステータス	親 (OBJ) 権限に従う。
com.thortech.xl.dataobj.tcEIS	エクスポート / インポート履歴置換	権限チェックなし。常に true が戻される。
com.thortech.xl.dataobj.tcAPT	アテステーション・タスク	権限チェックなし。常に true が戻される。
com.thortech.xl.dataobj.tcGCD	汎用コネクタ定義	権限チェックなし。常に true が戻される。
com.thortech.xl.dataobj.tcDEP	プロセス・タスクの依存性	親 (TOS) 権限に従う。
com.thortech.xl.dataobj.tcROP	プロセス決定ルール	親 (OBJ) 権限に従う。
com.thortech.xl.dataobj.tcGPG	サブグループ	親データ・オブジェクト (UGP) 権限に従う。
com.thortech.xl.dataobj.tcSEL	ユーザー・グループ・設定権限	親データ・オブジェクト (UGP) 権限に従う。
com.thortech.xl.dataobj.tcQUM	キュー・メンバー	親データ・オブジェクト (QUE) 権限に従う。
com.thortech.xl.dataobj.tcQUG	キュー管理者	親データ・オブジェクト (QUE) 権限に従う。
com.thortech.xl.dataobj.tcMSG	マイルストーン・ステータス・ユーザー・グループ	このデータ・オブジェクトは非推奨。
com.thortech.xl.dataobj.tcPUG	プロセス統合・管理者	親 (TOS) 権限に従う。
com.thortech.xl.dataobj.tcOUD	リソース・オブジェクト・ユーザー・オブジェクトの依存性	親 (OBJ) 権限に従う。
com.thortech.xl.dataobj.tcRQE	リクエスト・キュー	権限チェックなし。常に true が戻される。
com.thortech.xl.dataobj.tcRVM	リカバリ・マイルストーン	親 (TOS) 権限に従う。
com.thortech.xl.dataobj.tcOUG	リソース・オブジェクト・管理者	親 (OBJ) 権限に従う。
com.thortech.xl.dataobj.tcMST	プロセス定義・タスク・オブジェクト・ステータス	親 (TOS) 権限に従う。
com.thortech.xl.dataobj.tcRRT	リコンシリエーション・ユーザー一致ルール要素のプロパティ	権限チェックなし。常に true が戻される。
com.thortech.xl.dataobj.tcSVP	IT リソース・プロパティ表	親 (SVR) 権限に従う。
com.thortech.xl.dataobj.tcORF	リソース・オブジェクト・オブジェクト・リコンシリエーション・フィールド	親 (OBJ) 権限に従う。
com.thortech.xl.dataobj.tcRCD	リコンシリエーション・イベント・データ	権限チェックなし。常に true が戻される。
com.thortech.xl.dataobj.tcEIO	オブジェクトのエクスポートとインポート	権限チェックなし。常に true が戻される。

表 10-3 明示的な権限が不要なデータ・オブジェクト (続き)

データ・オブジェクト	説明	権限のタイプ
com.thortech.xl.dataobj.tcRRL	リコンシリエーション・ルール	権限チェックなし。常に true が戻される。
com.thortech.xl.dataobj.tcRQC	リクエスト、リクエストのコメント	権限チェックなし。常に true が戻される。
com.thortech.xl.dataobj.tcRCB	リコンシリエーション・イベント、未処理データ	権限チェックなし。常に true が戻される。
com.thortech.xl.dataobj.tcPXD	プロキシ定義	権限チェックなし。常に true が戻される。
com.thortech.xl.dataobj.tcEIH	履歴のエクスポートとインポート	権限チェックなし。常に true が戻される。
com.thortech.xl.dataobj.tcMAP	マップ情報	マップは現在使用されていない。
com.thortech.xl.dataobj.tcORC	プロセスの詳細	すべてのユーザー・グループに権限が付与される。
com.thortech.xl.dataobj.tcSTA	プロセス・タスク・ステータス定義	タスクに対するカスタム・ステータスの定義は不可。
com.thortech.xl.dataobj.tcScheduleItem	プロセス・タスク・インスタンス	すべてのユーザー・グループに権限が付与される。
com.thortech.xl.dataobj.tcSCH	タスク・インスタンス情報	すべてのユーザー・グループに権限が付与される。
com.thortech.xl.dataobj.tcOIO	リクエスト、組織のオブジェクト・インスタンス	ユーザーはこれらのエンティティを直接作成できない。
com.thortech.xl.dataobj.tcOIU	リクエスト、ユーザーのオブジェクト・インスタンス	ユーザーはこれらのエンティティを直接作成できない。
com.thortech.xl.dataobj.tcOBI	リクエスト、オブジェクト・インスタンス	ユーザーはこれらのエンティティを直接作成できない。
Com.thortech.xl.dataobj.tcREQ	リクエスト	挿入に関する権限チェックなし。更新および削除の権限についてはユーザーとリクエストとの関係に基づいて判断される。
com.thortech.xl.dataobj.tcRequestObject	リクエスト・オブジェクト	権限チェックなし。常に true が戻される。
com.thortech.xl.dataobj.tcDOB	データ・オブジェクト	OIM ユーザーによるデータ・オブジェクトの作成なし。
Thor.CarrierBase.tcACN	連絡先、組織情報	現在は使用されていない。
Thor.CarrierBase.tcAFM	アダプタ・ファクトリ、フォーム	現在は使用されていない。
Thor.CarrierBase.tcAHY	組織、親 - 子	現在は使用されていない。
Thor.CarrierBase.tcCCG	連絡先、組織グループ	現在は使用されていない。
Thor.CarrierBase.tcESD	構造ユーティリティ、暗号化された列	データ定義用に公開されている UI または API なし。
Thor.CarrierBase.tcGSC	連絡先、スケジュール項目	現在は使用されていない。
Thor.CarrierBase.tcGSI	スケジュール項目、ユーザー・グループ	現在は使用されていない。
Thor.CarrierBase.tcPGP	プロセス統合、リクエスト権限	現在は使用されていない。
Thor.CarrierBase.tcUDF	ユーザー定義フィールドの定義	現在は使用されていない。
com.thortech.xl.orb.dataobj.tcAOA	アダプタ・ファクトリ、オープン・アダプタ	現在は使用されていない。

表 10-3 明示的な権限が不要なデータ・オブジェクト (続き)

データ・オブジェクト	説明	権限のタイプ
com.thortech.xl.orb.dataobj.tc OrganizationContact	組織、連絡先情報	現在は使用されていない。
com.thortech.xl.orb.dataobj.tcRPT	レポート定義	現在は使用されていない。
com.thortech.xl.dataobj.tcRPP	レポート・パラメータ	現在は使用されていない。
com.thortech.xl.orb.dataobj.tcUSC	タスク・インスタンス、連絡先情報	現在は使用されていない。
com.thortech.xl.orb.dataobj.tcUser ScheduleItem	ユーザー・タスク	現在は使用されていない。
com.thortech.xl.orb.dataobj.tcUSI	ユーザー、ユーザー定義タスク	現在は使用されていない。
com.thortech.xl.orb.dataobj.tcUSK	電子メール通知、USI、連絡先	現在は使用されていない。
com.thortech.xl.dataobj.tcAAG	ユーザー・グループ、組織のメンバー	現在は使用されていない。
com.thortech.xl.dataobj.tcORD	順序	現在は使用されていない。
com.thortech.xl.dataobj.tcRLO	外部 JAR ファイル・ディレクトリ	現在は使用されていない。
com.thortech.xl.dataobj.tcAGS	組織、連絡先グループ	現在は使用されていない。
com.thortech.xl.dataobj.tcATS	組織、組織ごとのサービス	現在は使用されていない。
com.thortech.xl.dataobj.tcSGK	システム・ジェネレータのキー値	現在は使用されていない。
com.thortech.xl.dataobj.tcSRP	サービス率の計画	現在は使用されていない。
com.thortech.xl.dataobj.tcSRS	サービス率の計画	現在は使用されていない。
com.thortech.xl.dataobj.tcUDP	ユーザー定義フィールド	現在は使用されていない。
com.thortech.xl.dataobj.tcUPD	ユーザー、オブジェクト、ポリシーの詳細	ユーザーはこれらのエンティティを直接作成できない。
com.thortech.xl.dataobj.tcUPP	ユーザー、オブジェクト、ポリシー・プロファイル	ユーザーはこれらのエンティティを直接作成できない。
com.thortech.xl.dataobj.tcUPH	ユーザー、オブジェクト、ポリシーの履歴	ユーザーはこれらのエンティティを直接作成できない。
com.thortech.xl.dataobj.tcRQU	リクエスト・オブジェクト・ターゲット・ユーザー情報	関連するリクエスト権限に従う。
com.thortech.xl.dataobj.tcRQA	リクエスト・ターゲット組織情報	関連するリクエスト権限に従う。
com.thortech.xl.dataobj.tcRQO	リクエスト・オブジェクト情報	関連するリクエスト権限に従う。
com.thortech.xl.dataobj.tcRIO	リクエスト組織解決済オブジェクト・インスタンス	関連するリクエスト権限に従う。
com.thortech.xl.dataobj.tcRIU	リクエスト・ユーザー解決済オブジェクト・インスタンス	関連するリクエスト権限に従う。
com.thortech.xl.dataobj.tcRQY	解決が必要なリクエスト組織	関連するリクエスト権限に従う。
com.thortech.xl.dataobj.tcRQZ	解決が必要なリクエスト・ユーザー	関連するリクエスト権限に従う。
com.thortech.xl.dataobj. tcUserProvisionObject	ユーザー・プロビジョニング・オブジェクト	親 (OBJ) 権限に従う。
com.thortech.xl.dataobj. tcOrgProvisionObject	組織プロビジョニング・オブジェクト	親 (OBJ) 権限に従う。
Com.thortech.xl.dataobj.tcMEV	タスク・ステータスを基に定義されている電子メール定義	親 (TOS) 権限に従う。

Oracle Identity Manager では、データ・オブジェクトまたはファイングレイン権限をグループに割り当てる際、次のような権限モデルが使用されます。

- 挿入 / 更新 / 削除オプションが指定されていないユーザーにデータ・オブジェクトを割り当てるとエラーが発生します。
- ログイン中のユーザーが、たとえば挿入および更新の権限を持つグループにデータ・オブジェクトを割り当てるには、そのデータ・オブジェクトに対して挿入および更新の権限を持っている必要があります。
- ログイン中のユーザーがグループに対するなんらかのデータ権限（挿入 / 更新 / 削除）を変更するには、そのデータ・オブジェクトに対してそれと同じ権限を持っている必要があります。
- ログイン中のユーザーがグループからデータ・オブジェクト権限を削除するには、そのデータ・オブジェクトに対して挿入および更新の権限を持っている必要があります。
- ログイン中のユーザーがデータ・オブジェクト権限を更新したことにより、データ・オブジェクトに対する権限がなくなった場合、そのエントリーはグループから自動的に削除されます。

メニュー項目とグループ権限

Oracle Identity Manager を使用すると、フォームおよびメニュー項目のレベルで権限を割り当てることもできます。フォーム・レベルの権限は、Design Console で割り当てられ、メニュー項目レベルの権限は、管理およびユーザー・コンソールで割り当てられます。ただし、フォームまたはメニュー項目の権限を割り当てても、ユーザーにはフォームまたはメニュー項目に関連付けられているエンティティへのアクセス権が自動的に付与されません（「ユーザーの管理メニュー項目」に権限を付与する場合など）。

そのユーザーがログインすると、そのメニュー項目が表示されます。また、ユーザーを検索する場合、ある特定のグループに属するユーザーを表示するための権限が割り当てられていないと、検索結果を取得できない場合があります。この権限は、管理およびユーザー・コンソールで定義できます。ユーザーがメニュー項目またはグループ権限の割当てや削除を行うには、それに対応するメニュー項目またはグループ権限が、そのユーザーが属しているいずれかのグループに割り当てられていることが必要です。

10.2.3.7 許可されたレポート

グループ・メンバーが実行を許可されているレポートを一覧表示し、このグループに対してレポートを選択することができます。

グループのレポート権限に関連する操作を行うには、次の手順を実行します。

1. 10-2 ページの「**ユーザー・グループの検索**」の説明に従ってグループを検索し、結果表でグループの名前をクリックします。
「グループの詳細」ページが表示されます。
2. 追加詳細ボックスで「**許可されたレポート**」を選択します。
「レポート」ページが表示されます。
3. ユーザーに新しいレポートへのアクセス権を付与するには、「**レポートの割当て**」をクリックします。
「レポートの割当て」ページが表示されます。このページには、使用できるレポートの名前とタイプが表示されます。
4. レポートに対応するオプションを選択し、「**割当て**」をクリックするか、「**取消**」をクリックします。
「確認」ページが表示されます。
5. レポートを割り当てるには、「**割当ての確認**」をクリックします。
「レポート」ページが表示されます。

6. レポートを削除するには、そのレポートに対応するオプションを選択し、「**削除**」をクリックします。

アクセス・ポリシーの作成および管理

アクセス・ポリシーとは、ユーザー・グループ、および各ユーザー・グループに属するユーザーのプロビジョニングまたはプロビジョニング解除に使用するリソースのリストです。アクセス・ポリシーは、Oracle Identity Manager 管理およびユーザー・コンソールの「アクセス・ポリシー」メニュー項目を使用して定義されます。

この章では、Oracle Identity Manager でユーザー、組織およびリソースに対してアクセス・ポリシーを作成、使用方法について説明します。

この章の内容は、次のとおりです。

- [アクセス・ポリシーの機能](#)
- [アクセス・ポリシーの作成](#)
- [アクセス・ポリシーの管理](#)

11.1 アクセス・ポリシーの機能

この項では、ポリシー・エンジンにより提供される様々な機能を説明します。

プロビジョニング・オプション

ポリシーを定義する際、特定のポリシーに含まれるリソースのプロビジョニングを行う場合に承認ありとするか承認なしとするかを指定できます。タイプが承認ありのアクセス・ポリシーがユーザーに適用され、そのアクセス・ポリシーにリソースのプロビジョニングが指定されている場合は、**Oracle Identity Manager**によりリクエストが生成されます。ユーザーがリソースを取得する前に、このリクエストが承認を受ける必要があります。承認オプションが選択されていない場合、アクセス・ポリシーが適用される際に、リクエストを生成しないでリソースをユーザーに直接プロビジョニングされます。

ポリシーの失効

Oracle Identity Managerのアクセス・ポリシーは、サブグループには適用されません。ポリシーは、そのアクセス・ポリシーに定義されているグループの直下のメンバーシップ・ユーザー（サブグループのメンバーではないユーザー）にのみ適用されます。ポリシーが適用されなくなった場合に、そのポリシー内のリソースを失効させるかどうかを指定できます。失効させる場合、ユーザーにポリシーが適用されなくなると、これらのリソースは、**Oracle Identity Manager**によりそのユーザーに対して自動的に失効されます。

リソースの拒否

アクセス・ポリシーの作成中には、グループにプロビジョニングするリソースに加え、拒否するリソースを選択できます。プロビジョニングするリソースとして一旦選択したリソースを、後で拒否するリソースとして選択すると、そのリソースは**Oracle Identity Manager**によりプロビジョニングするリソースのリストから削除されます。1つのグループに2つのポリシーが定義されており、一方のポリシーではプロビジョニングするように指定されているリソースが、もう一方のポリシーでは拒否するように指定されている場合、2つのポリシーの優先度に関係なく、**Oracle Identity Manager**ではそのリソースはプロビジョニングされません。グループに属するユーザーに対してリソースを拒否するようにポリシーが定義されている場合、これらのリソースは、ユーザーへのリクエスト・ベース・プロビジョニングまたはダイレクト・プロビジョニングの実行時に選択できません。

ポリシーの評価

Oracle Identity Managerでは、次のようなシナリオでアクセス・ポリシーを評価できます。

- ユーザーがグループに追加、またはグループから削除された場合
そのユーザーに対するポリシーは、追加または削除の操作の一部として評価されます。
- ポリシーに更新フラグが設定されている場合
これらの評価は、アクションの直後には行われません。かわりに、「ユーザーのプロビジョニングされた日の設定」スケジュール・タスクの次の実行時に行われます。評価は次のようなシナリオで行われます。
 - 更新フラグがONに設定されるように、ポリシーの定義が更新された場合。ポリシーの評価は、該当するすべてのユーザーに対して行われます。
 - グループがポリシーの定義に追加、またはポリシーの定義から削除された場合。ポリシーの評価は、追加または削除されたグループのユーザーに対してのみ行われます。
 - リソースが追加または削除された場合、あるいは「適用しない場合は失効」フラグの値がそのリソースに変更された場合。ポリシーの評価は、該当するすべてのユーザーに対して行われます。
 - ポリシー・データが更新または削除された場合。これには、親と子の両方のフォーム・データが含まれます。ポリシーの評価は、該当するすべてのユーザーに対して行われます。

アクセス・ポリシーの優先度

ポリシーの優先度は、作成したアクセス・ポリシーごとに一意の数値を含む、数値フィールドです。数値が小さいほど、アクセス・ポリシーの優先度は高くなります。たとえば、「優先度」に1を指定したポリシーは優先度が最も高くなります。管理およびユーザー・コンソールを使用してアクセス・ポリシーを定義した場合は常に、現在最も低い優先度を表す値に1が加えられ、その値が自動的に「優先度」フィールドに移入されます。この値を他の数値に変更すると、その他のすべてのアクセス・ポリシーの優先度が再調整されます。これにより優先度の整合性が維持されます。優先度値には、次のアクションが関連付けられています。

- 入力された優先度値が1より小さい場合、その値は Oracle Identity Manager により1 (最も高い優先度) に変更されます。
- 入力された優先度値が M より大きい場合 (M は現在最も低い優先度)、その値は Oracle Identity Manager により M+1 以下として指定されます。
- 2つのアクセス・ポリシーに同じ優先度値は指定できません。そのため、あるアクセス・ポリシーに既存の優先度値を割り当てた場合、それより優先度が低いポリシーはすべて、優先度が1つずつ下がることとなります。

複数のアクセス・ポリシーが同じユーザーに適用されていると、競合が発生する場合があります。アクセス・ポリシーを介してユーザーにプロビジョニングされるリソースのインスタンスは1つであるため、Oracle Identity Manager では最も優先度が高いポリシー・データが親フォームに使用されます。子フォームには、該当するポリシーすべての累積レコードが使用されます。

アクセス・ポリシー・データ

プロビジョニング時のリソースにプロセス・フォーム・データが提供される場合、複数の方法があります。Oracle Identity Manager に組み込まれた優先度の順序は次のとおりです。

1. フォームの定義によるデフォルト値
2. 組織のデフォルト
3. オブジェクト・フォームからプロセス・フォームへのデータ・フローで取得された値
4. 事前移入アダプタ
5. アクセス・ポリシー・データ (ポリシーに基づいてリソースがプロビジョニングされる場合)
6. プロセス・タスクまたはエンティティ・アダプタにより更新されたデータ

指定したオプションが使用可能な場合、それ以外の使用頻度の低いオプションは無視されます。たとえば、オプション4が使用可能な場合は、オプション3、2および1は無視されます。

11.2 アクセス・ポリシーの作成

アクセス・ポリシー・ウィザードを使用して、ユーザー・グループやユーザーにリソースをプロビジョニングするためのアクセス・ポリシーを定義できます。

アクセス・ポリシーを作成するには、次の手順を実行します。

1. 「アクセス・ポリシーの作成」ページを開くには、管理およびユーザー・コンソールの左ペインで「アクセス・ポリシー」をクリックします。

2. 「作成」をクリックします。

「アクセス・ポリシーの作成」ページが表示されます。

3. 必須フィールドの情報は、アスタリスク (*) で示されます。

指定された承認者またはプロキシ・ユーザーが承認しなければリソースがユーザーまたはグループにプロビジョニングされないようにするには、「承認あり」を選択します。

承認が必要ない場合は、「承認なし」を選択します。

4. アクセス・ポリシーの作成時に更新するようにするには、「アクセス・ポリシーの更新」を選択します。

注意: 「アクセス・ポリシーの更新」を選択した場合、アクセス・ポリシーは、この手順のステップ 12 で選択したグループのすべての既存ユーザーに適用されます。

このオプションを選択しない場合、既存のグループ・メンバーシップは考慮されません。

5. 「**続行**」をクリックします。
「アクセス・ポリシーの作成 - ステップ 2: リソースの選択 (プロビジョニング)」ページが表示されます。
6. このアクセス・ポリシーに対してプロビジョニングするリソースを指定します。
フィルタ検索のメニューを使用してリソースを検索します。
 - 結果表からリソース名を選択して、「**追加**」をクリックします。
 - プロビジョニングする目的のリソースの名前が「**選択済**」リストに表示されます。リソースを拒否するだけのアクセス・ポリシーを作成する場合は、リソースを選択しないで「**続行**」をクリックします。
 - 選択されているリソースの割当てを解除するには、「**選択済**」リストでリソースを選択し、「**削除**」をクリックします。
7. 「**続行**」をクリックします。
このリソースに関連付けられているフォームがある場合は、後続のページに必須フィールドが表示されます。それ以外の場合は、「アクセス・ポリシーの作成 - ステップ 2: 失効するリソースの選択」ページが表示されます。ポリシーのデフォルトを、パスワードおよび暗号化属性には指定しないことをお勧めします。
8. 適用されなくなったアクセス・ポリシーを失効させるかどうかを指定します。
結果表で、自動的に失効させるリソースのチェック・ボックスを選択します。
9. 「**続行**」をクリックします。
「アクセス・ポリシーの作成 - ステップ 3: リソースの選択 (拒否)」ページが表示されます。
10. このページを使用して、このアクセス・ポリシーにより拒否されるリソースを選択します。
拒否されるリソースを選択するには、次の手順を実行します。
 - a. 結果表からリソースを選択します。
 - b. 「**選択済**」リストにリソースを移動するには、「**追加**」をクリックします。
プロビジョニングするリソースを選択しなかった場合は、拒否するリソースを少なくとも 1 つを選択する必要があります。プロビジョニングするものと同じリソースを拒否対象に選択すると、プロビジョニングするリソースとしての割当ては解除されます。
同様に、ステップ a で、すでに拒否するように選択したものと同一リソースをプロビジョニング対象に割り当てると、拒否対象に選択されたリソースから自動的に削除されます。拒否対象として選択済のリソースを削除できます。これは、「**選択済**」リストから削除するリソースを選択し、「**削除**」をクリックして実行します。
 - c. 「**続行**」をクリックします。
「アクセス・ポリシーの作成 - ステップ 4: グループの選択」ページが表示されます。
11. 「アクセス・ポリシーの作成 - ステップ 4: グループの選択」ページを使用して、グループをアクセス・ポリシーに関連付けます。

12. このアクセス・ポリシーにグループを関連付けるには、次の手順を実行します。
 - 結果表からグループを選択して、「追加」をクリックします。
 - 選択したグループの名前が「選択済」フィールドに表示されます。グループ名を削除するには、「削除」ボタンを使用します。
 - このアクセス・ポリシーに対してユーザー・グループを指定できます。フィルタ検索メニューを使用して必要なユーザー・グループを検索できます。
 - 結果表からユーザー・グループを選択して、「追加」をクリックします。少なくとも1つのユーザー・グループを選択する必要があります。選択したユーザー・グループの名前が「選択済」リストに表示されます。
 - 選択されているユーザー・グループの割当てを解除するには、「選択済」リストでリソースを選択し、「削除」をクリックします。
13. 「続行」をクリックします。

「アクセス・ポリシーの作成 - ステップ 5: アクセス・ポリシー情報の検証」ページが表示されます。
14. この手順のこれより前のステップで選択した内容を変更する場合は、「変更」をクリックして、ウィザードの対応するページに移動します。必要な変更が終了したら、「続行」をクリックして、「ステップ 5: アクセス・ポリシー情報の検証」ページに戻ります。
15. 「続行」をクリックすると、アクセス・ポリシーが作成されます。

注意: プロセス・フォームに「パスワード」フィールドが含まれているリソースにアクセス・ポリシーを作成した場合、パスワード・ポリシーは評価されません。パスワード・ポリシーの詳細は、『Oracle Identity Manager デザイン・コンソール・ガイド』を参照してください。

11.3 アクセス・ポリシーの管理

管理およびユーザー・コンソールを使用すると、既存のアクセス・ポリシーの情報を変更できます。

アクセス・ポリシーを管理するには、次の手順を実行します。

1. 「アクセス・ポリシー」メニューの下の「管理」をクリックします。

「アクセス・ポリシーの管理」ページが表示されます。

検索基準フィールドのメニューを使用して、アクセス・ポリシー属性を選択します。アスタリスク (*) ワイルドカード文字を使用すると、選択した属性に任意の値を持つすべてのアクセス・ポリシー・インスタンスを検索できます。「アクセス・ポリシーの検索」をクリックします。

「アクセス・ポリシーの管理」ページに検索結果が表示されます。
2. 目的のアクセス・ポリシーの詳細を表示するには、「アクセス・ポリシー名」をクリックします。

「アクセス・ポリシー詳細」ページが表示されます。

このアクセス・ポリシーを変更するには、各選択カテゴリの末尾にある「変更」リンクを使用します。
3. 必要な変更が終了したら、「アクセス・ポリシーの更新」をクリックします。

このアクセス・ポリシーが更新され、更新された情報が「アクセス・ポリシー詳細」ページに表示されます。

リソースの使用

管理およびユーザー・コンソールのリソース管理機能を使用すると、組織または個人ユーザーのリソースを管理できます。リソース管理には、次のアクティビティがあります。

- リソースの詳細の検索および表示
- ユーザーまたは組織に対するリソースの無効化、有効化および失効
- リソース管理者およびリソース認可者グループの管理
- ワークフローの表示、作成および変更
- IT リソースの作成および管理
- スケジュール済タスクの作成および管理

この章では、リソースの管理に関する次の内容を説明します。

- [リソースの詳細の表示](#)
- [リソースに関連付けられている組織に関する作業](#)
- [「リソース管理者」オプションの使用](#)
- [「リソース認可者」オプションの使用](#)
- [「リソース・ワークフロー」オプションを使用したワークフローの表示](#)
- [「リソース・ワークフロー」オプションを使用したワークフローの作成および変更](#)
- [IT リソースの作成](#)
- [IT リソースの管理](#)
- [スケジュール済タスクの作成](#)
- [スケジュール済タスクの管理](#)

12.1 リソースの詳細の表示

リソースの詳細を表示するには、次の手順を実行します。

注意： 前の手順で説明したとおり、検索の実行時にリストから値を選択して、それに対応する検索値を入力しなかった場合、エラーが発生します。また、リストから同じ値を2度選択すると、エラーが発生します。

1. 管理およびユーザー・コンソールで「リソース管理」をクリックし、続いて「管理」をクリックします。

「リソース検索」ページが表示されます。

2. ページ上部のフィールドを使用して検索基準を選択し、対応する検査値を隣のフィールドに入力するか、アスタリスク (*) のワイルドカード文字を使用します。「リソース・タイプ」および「ターゲット」基準を使用するには、対応するボックスで値を選択します。
3. 「リソース監査目的」リストから必要なオプションを選択します。

「リソース監査目的」リストによって、データ型ごとにリソースをグループ化できます。同じリソースに対して複数の値を選択できます。フィールドの値リストにある四半期、半期および年次評価の監査スケジュール値を追加し、監査要件として SOX と四半期などの組合せを選択することもできます。

「リソース監査目的」リストの事前定義された値は、次のとおりです。

- SOX (財務的に重要な情報が対象)
 - HIPAA (個人の医療情報が対象)
 - GLB (公共のものではない情報が対象)
 - 毎四半期のレビューが必要
 - 毎年のレビューが必要
4. 「検索」をクリックします。
結果表が表示されます。
 5. リソース名をクリックします。たとえば、Oracle Identity Manager User という名前のリソースを選択します。
「リソースの詳細」ページが表示されます。
 6. リソースに関する詳細情報を表示するには、メニューを使用します。

表示できる詳細情報には次のものがあります。

- このリソースに関連付けられた組織
- リソース管理者
- リソース認可者

12.2 リソースに関連付けられている組織に関する作業

組織に関連付けられているリソースの、有効化、削除および失効を行うことができます。組織に対して複数回プロビジョニングされたリソースについては、マッピング・カテゴリを決定することもできます。

リソースに関連付けられている組織に関する操作を行うには、次の手順を実行します。

1. 12-2 ページの「[リソースの詳細の表示](#)」に記載されている手順の1～3を実行してください。
2. 「このリソースに関連付けられた組織」オプションを選択します。
「このリソースに関連付けられた組織」ページが表示されます。
3. オプションを使用して、関連付けられている組織のリストをフィルタします。
「すべて」オプションを選択すると、すべての組織が一覧表示されます。「ステータス別」オプションを使用すると、「リソース・ステータス」列の値に基づいて組織がフィルタされます。リソースに関連付けられている組織は「組織名」列に一覧表示されます。この場合、「リソース・ステータス」には、一覧表示された各組織に対してリソースがプロビジョニングされていることが示されます。組織に対応するリソースを変更するには、次のいずれかを選択します。
 - 有効化
 - 無効化
 - 失効

「識別子」列の値は、「記述フィールドのマップ」を使用して Design Console の「Process Definition」フォームからマップできるフィールド・タイプに対応しています。同一のリソースが同一の組織に複数回プロビジョニングされている場合に、この値から、定義されているマッピング・カテゴリ（「プロセス・タイプ」、「組織名」、「リクエスト・キー」など）を区別できます。

12.3 「リソース管理者」オプションの使用

「リソースの詳細」ページで「[リソース管理者](#)」を選択します。「リソース管理者」ページに、このリソースに管理者として割り当てられているグループの名前が表示されます。このページには、「書き込み権限」と「削除権限」の各権限も表示されます。これらは管理者グループが、リソース・パラメータではなく、リソースに対して持つ権限です。書き込みアクセスのあるグループは、リソースを変更できます。削除アクセスのあるグループは、リソースを削除できます。

次の操作を実行できます。

- [リソースの管理者としてのユーザー・グループの割当て](#)
- [管理者グループの作成](#)
- [管理グループの権限の更新](#)

12.3.1 リソースの管理者としてのユーザー・グループの割当て

ユーザー・グループをリソースの管理者として割り当てるには、次の手順を実行します。

1. 「割当て」をクリックします。

「管理者の割当て」ページが表示されます。

このページには、このリソースに割り当てられているすべてのグループ名が表示されます。オプションを選択して書込み権限と削除権限を有効にし、このリソースにグループを割り当てます。

2. 「割当て」をクリックします。

「割当ての確認」ページが表示されます。このページに、このリソースに割り当てられた新しいユーザー・グループが表示されます。

3. 「割当ての確認」または「取消」をクリックします。

「リソース管理者」ページに、このリソースに関連付けられているすべてのグループ名の一覧が表示されます。この情報は変更できます。

12.3.2 管理者グループの作成

リソースを管理するため、委任管理者ウィザードを使用してグループを作成できます。

注意： グループを作成するユーザーが書込みおよび削除権限を持つ他のグループに所属している場合、このグループが新しいグループの管理グループになります。このルールは組織を作成する場合にも適用されます。

新しいグループを作成するには、次の手順を実行します。

1. 「リソースの詳細」を展開して「リソース管理者」をクリックし、続いて「新規グループの作成」をクリックします。

「管理者の割当て - ステップ 1: 管理者の割当て」ページが表示されます。

結果表で、管理グループに含めるユーザー・ログイン名をクリックして、「追加」をクリックします。

名前が「選択済」表示パネルに表示されます。

「続行」をクリックするか、「終了」をクリックしてウィザードを終了します。

「管理者の割当て - ステップ 2: 別名の指定」ページが表示されます。

2. 管理者グループの別名を入力し、「続行」をクリックします。

それ以外の場合は、「戻る」をクリックして前のページに戻るか、「終了」をクリックしてウィザードを終了します。

「管理者の割当て - ステップ 3: 権限の指定」ページが表示されます。

3. 「書込み」オプションと「削除」オプションをクリックしてそれぞれの権限を管理者グループに割り当て、「続行」をクリックします。

それ以外の場合は、「戻る」をクリックして前のページに戻るか、「終了」をクリックしてウィザードを終了します。

「管理者の割当て - ステップ 4: 委任情報の検証」ページが表示されます。

4. 前の手順で入力した情報を変更するには、「変更」をクリックします。

変更を確認して「続行」をクリックします。「戻る」をクリックして前のページに戻るか、「終了」をクリックしてウィザードを終了します。

「リソース管理者」ページが表示されます。新しいグループが結果表に追加されます。

12.3.3 管理グループの権限の更新

管理グループの権限を更新できます。

権限を更新するには、次の手順を実行します。

1. 「**権限の更新**」をクリックします。
「管理者の更新」ページが表示されます。
2. 管理グループの権限設定を変更するには、書込みおよび削除権限に対応するオプションをクリックします。
3. 「**更新**」をクリックして変更を実行します。または「**取消**」をクリックします。
「確認」ページが表示されます。更新した管理グループ名が表示されます。
4. 正しい名前が表示されている場合は「**更新の確認**」をクリックします。それ以外の場合は「**取消**」をクリックします。

12.4 「リソース認可者」オプションの使用

どのユーザー・グループにリソースのプロビジョニングを認可するかを決定できます。

リソース認可者を決定するには、次の手順を実行します。

1. 「リソースの詳細」ページで、メニューから「**リソース認可者**」を選択します。
「リソース認可者」ページが表示されます。
2. このリソースに認可の優先度レベルを設定するには、「**優先度を上げる / 下げる**」を選択します。
3. このリソースの認可者を削除するには、該当する「**グループ名**」オプションを選択して、「**削除**」をクリックします。
4. リソースを認可するユーザー・グループをさらに追加するには、「**割当て**」をクリックします。
「認可者の割当て」ページが表示されます。
5. 適切なグループ名のオプションを選択して「**割当て**」をクリックするか、「**取消**」をクリックします。
「確認」ページが表示されます。
6. 情報が正しければ「**割当ての確認**」を、正しくなければ「**取消**」をクリックします。
「リソース認可者」ページが表示されます。このリソースに割り当てたグループ名が結果表に追加されることに注意してください。

12.5 「リソース・ワークフロー」オプションを使用したワークフローの表示

管理およびユーザー・コンソールの「リソース・ワークフロー」オプションは、ワークフロー・ビジュアライザとワークフロー・デザイナーで構成されます。ワークフロー・ビジュアライザを使用すると、ワークフローを表示できます。また、ワークフロー・デザイナーを使用すると、ワークフローを作成して編集できます。ここでは、ワークフロー・ビジュアライザについて説明します。

関連項目： 12-17 ページの「[「リソース・ワークフロー」オプションを使用したワークフローの作成および変更](#)」

ワークフロー・ビジュアライザ・ツールは、タスク・シーケンスのビジュアル表示、依存性やその他のワークフロー定義コンポーネントを提供します。ビジュアル表示されるのは、ワークフローの概要とリレーションシップ、およびフローを構成するタスク・コンポーネントです。ワークフロー・ビューの印刷もできます。

ワークフロー・ビジュアライザ・ツールには、「承認」および「プロビジョニング」というタイプのプロセスが表示されます。Oracle Identity Manager リソースのユーザーや組織へのプロビジョニングの承認には、「承認」タイプのプロセスを使用します。プロビジョニング・プロセスと異なり、承認プロセスを構成しているタスクは、通常、手動で完了する必要があります。「プロビジョニング」タイプのプロセスは、Oracle Identity Manager リソースをユーザーや組織にプロビジョニングするために使用します。

注意： ワークフロー・ビジュアライザにアクセスするには、Nexaweb アプリレットで、Java 仮想マシン 1.4.2.x.x を使用するように Web ブラウザを設定する必要があります。

この項では、次の内容について説明します。

- [ワークフロー・ビジュアライザを開く](#)
- [ワークフロー・ビジュアライザの要素](#)
- [ワークフロー・ビジュアライザの操作](#)

12.5.1 ワークフロー・ビジュアライザを開く

ワークフロー・ビジュアライザを開くには、次の手順を実行します。

1. 「リソースの詳細」ページで、リストから「リソース・ワークフロー」を選択します。

「リソース・ワークフロー」ページが表示されます。このページには、リソース名と、このリソースに対するワークフロー定義の名前の一覧を含む表が表示されます。

2. ワークフロー定義をグラフィック・フローチャートにレンダリングするには、必要なワークフローを選択します。

ワークフロー定義のグラフィカル表示が新しいウィンドウに表示されます。

12.5.2 ワークフロー・ビジュアライザの要素

プロビジョニング・ワークフローの場合、「ワークフロー・デザイナー」ページに複数のタブが表示されます。承認ワークフローの場合、「ワークフロー・デザイナー」ページにはタブのない単一ワークフローが表示されます。

関連項目： プロビジョニングと承認のプロセスの詳細は、1-2 ページの「[リソース・モデルの概要](#)」を参照してください。

承認ワークフロー定義は、承認プロセス全体を表す1つのワークフローとして表示されます。プロビジョニング・ワークフローにはそれ自体にフォームを関連付けることができ、ワークフロー詳細ヘッダーにそのフォーム名が表示されます。承認ワークフローではそれ自体にはフォームは関連付けられず、ワークフロー詳細ヘッダーにフォームに関する情報は表示されません。

表 12-1 に、ワークフロー・ビジュアライザの情報フィールドを示します。

表 12-1 ワークフロー・ビジュアライザの情報フィールド

フィールド	説明
ワークフロー名	プロセス定義の名前。
リソース	「オブジェクト」の名前（承認またはプロビジョニングされたリソース・オブジェクト）。
ワークフロー・タイプ	「プロセス定義」のタイプ（「承認」または「プロビジョニング」）。タイプは、ワークフローがリソースのデフォルトかどうかとも示しています。
フォーム名	プロビジョニング・ワークフローに関連付けられているフォームの名前。 承認ワークフローの場合、この情報は表示されません。

表 12-2 では、ワークフロー・ビジュアライザのツールバーのメニュー項目について説明します。

表 12-2 ワークフロー・ビジュアライザのツールバーのメニュー項目

フィールド	説明
表示オプション	このオプションによって、ページに要素を表示できます。ページ上で要素の表示 / 非表示を切り替えられるため、ページを整理しておくことができます。 不明レスポンス・コードの表示： 不明レスポンス・コードは、ワークフローのすべてのタスクに対して定義されています。ワークフローのロジックとして使用されることはありません。ただし、不明レスポンス・コードの表示にはこのオプションを使用できます。 画面上のアダプタ名の表示： 自動化されたアダプタの名前を表示できます。 取消しタスクの表示： タスクの取消しタスクを表示できます。 リカバリ・タスクの表示： タスクのリカバリ・タスクを表示できます。
イメージの生成	このオプションを使用すると、ワークフロー・ビューをイメージとして保存し、印刷することができます。このメニュー項目をクリックすると、新しいブラウザ・ウィンドウが開き、JPEG にフォーマットされたイメージが表示されます。フローチャートの、表示領域のスクロール制限のために非表示になっている部分も含めて、ワークフローの全体が表示されます。その後、Web ブラウザの標準機能を使用してコンピュータ上にイメージを保存できます。
ワークフローのリロード	このオプションでは、ワークフロー・ビューをリフレッシュし、事前定義済みのグラフ・アルゴリズムに基づいてページの様々な項目を並べ替えます。

表 12-2 ワークフロー・ビジュアライザのツールバーのメニュー項目（続き）

フィールド	説明
凡例	<p>このオプションを選択すると、ワークフロー定義のフローチャートを作成するために使用されるすべてのビジュアル・コンポーネントの説明が表示されます。図 12-1 は「凡例」ページを示しています。</p> <p>マーカー</p> <p>マーカー・ノードは、特別な条件を示す位置マーカーを表します。次のような条件があります。</p> <p>開始ポイント: このマーカーはワークフロー内の論理的な始点を示します。ワークフロー定義内の実際のタスクではありません。</p> <p>ページ参照: このマーカーは、ワークフロー・チャートの別の場所にすでに描画されているタスク・ノードを表します。別のタスクへの接続を表示しても、ワークフロー・ビューにリンクが錯綜して表示されることがありません。</p> <p>レスポンス・サブツリー: レスポンス・サブツリー（展開ノード）は、レスポンス・ノードの大部分のサブツリーを非表示にすることで、ワークフローを整理します。展開ノード・マーカーをダブルクリックすると、レスポンスが表示された状態でフローチャートを再描画できます。</p> <p>タスク</p> <p>タスク・ノードはワークフロー内のタスクを表します。次のタスクがあります。</p> <p>手動タスク: このタスクでは、完了するためにユーザー・アクションを必要とします。承認プロセスは通常、手動タスクを含みます。</p> <p>自動化タスク: このタスクでは、完了するためにユーザーの介入を必要としません。自動化タスクには、常にプロセス・タスク・アダプタが必要です。プロビジョニング・プロセスは通常、自動化タスクで構成されます。</p> <p>レスポンス</p> <p>レスポンス・ノードは、タスク上で定義されているレスポンス・コードを表します。レスポンス・ノードは、内部の実際のレスポンス・コードを表示します。レスポンス・コードは、レスポンスがタスク上に設定しているステータスに基づいています。</p> <p>タスクを完了: プロセス・タスクは完了しており、緑で示されます。</p> <p>タスクを却下: プロセス・タスクは却下されており、赤で示されます。</p> <p>タスクを取消し: プロセス・タスクは取り消されており、青で示されます。</p> <p>リンク</p> <p>タスク・ノードやレスポンス・ノードは矢印線で結ばれ、ワークフローの流れを示します。リンクの色は、結ばれている2つのノードのリレーションシップのタイプを示します。リンクのタイプには次のものがあります。</p> <p>初期タスク: ワークフロー定義内の最初のプロセス・タスクです。</p> <p>レスポンス生成済タスク: 現行のタスクが「完了」ステータスであるときにトリガーされるプロセス・タスクとして定義されます。一般に、新しいプロセス・タスクがトリガーされるのは、条件付きタスクがプロセス・タスクの実行と組み合わせて特定のレスポンス・コードを受け取る場合です。</p> <p>リカバリ・タスク: 現行のタスクが「却下」ステータスであるときにトリガーされるプロセス・タスクとして定義されます。</p> <p>取消しタスク: 現行のタスクが「取消」ステータスであるときにトリガーされるプロセス・タスクとして定義されます。</p> <p>依存タスク: 別のプロセスに依存するプロセス・タスクとして定義されます。Oracle Identity Manager では、依存対象のプロセス・タスクが完了したときのみ、このタスク・タイプを起動できます。</p>

図 12-1 に、「凡例」ページを示します。

図 12-1 「凡例」ページ



ワークフロー・ビジュアライザの情報フィールドおよびツールバーのメニュー項目以外にも、ワークフローの UI 要素としてタスクとレスポンスがあります。タスクとレスポンスの詳細は、12-7 ページの表 12-1 および 12-31 ページの「[タスクおよびレスポンスの作成と管理](#)」を参照してください。

12.5.2.1 ワークフロー定義の「プロビジョニング」イベント・タブの使用

ワークフロー定義の「プロビジョニング」は、レスポンスに基づくタスクの実行方法の論理フローの関連するイベント・タブとともに表示されます。イベント・タブは、ワークフロー定義の特定のイベントの、各種のタスク・シーケンスを表します。イベント・タブをクリックすると、プロセスのワークフロー・イベントに対応するタスクがタブに表示されます。フローチャートは要件に応じて配置できます。そのワークフロー・イベントに定義されたタスクがない場合は、タブの表示は空白です。そのワークフロー・イベント・タイプに複数のタスク・シーケンスがある場合、タブにはメニューが表示され、表示するプロセス・フローチャートを選択できます。

12.5.2.1.1 「プロビジョニング」タブ 「プロビジョニング」タブには、リソースをプロビジョニングするタスクが表示されます。ワークフロー・タイプが「プロビジョニング」の場合、ワークフローには、リソースをプロビジョニングする必要のあるすべてのタスクが表示されます。

12.5.2.1.2 「リコンシリエーション」タブ 「リコンシリエーション」タブには、「リコンシリエーションの挿入を受信しました」、「リコンシリエーションの更新を受信しました」、「リコンシリエーションの削除を受信しました」のいずれかのマーカー・タスクが挿入されたプロビジョニング・プロセスのリコンシリエーション・イベントが表示されます。これらのタスクは、アダプタをアタッチされることにより、プロビジョニング・アクションを開始することができます。タスクにアダプタがアタッチされていない場合は、そのタスクには「イベントが処理されました」のレスポンス・コードが割り当てられます。このレスポンス・コードに基づいて、その他のプロビジョニング・プロセス・タスクを生成して、リコンシリエーション・イベントによるプロビジョニング・フローを開始することができます。

12.5.2.1.3 「サービス・アカウント」タブ「サービス・アカウント」タブには、ユーザー用のサービス・アカウント（管理者）のすべてのプロビジョニング・プロセスが表示されます。ユーザーに対してサービス・アカウントがプロビジョニングされると、Oracle Identity Manager ではそのユーザーのアイデンティティからサービス・アカウントへのマッピングが管理されます。リソースが失効されるかユーザーが削除されても、サービス・アカウントのプロビジョニング・プロセスは取り消されません。そのかわりに、プロビジョニング・プロセスに、ユーザーからサービス・アカウントへのマッピングを削除するタスクが挿入されます。サービス・アカウントのプロビジョニング・プロセスは、「サービス・アカウントが変更されました」、「サービス・アカウント・アラート」および「サービス・アカウントが移動されました」です。

12.5.2.1.4 「ユーザー・イベント」タブ「ユーザー・イベント」タブには、パスワードまたはユーザー ID を更新するなどの、ユーザー・レコードに対する変更に対応するワークフローが表示されます。

12.5.2.1.5 「組織イベント」タブ「組織イベント」タブには、リソースのプロビジョニング先の組織のレコードへの変更（名前または親名の変更など）、またはリソースのプロビジョニング先のユーザーの組織への変更に対応するワークフローが表示されます。

12.5.2.1.6 「リソース・イベント」タブ「リソース・イベント」タブには、有効化または無効化など、プロビジョニングされたリソース・インスタンスの状態変更に対応するワークフローが表示されます。

12.5.2.1.7 「フォーム・イベント」タブ「フォーム・イベント」タブには、プロビジョニングされたリソース・インスタンスのプロセス・フォームにおけるデータ変更に対応するワークフローが表示されます。

12.5.2.1.8 「アテステーション」タブ「アテステーション」イベント・タブには、アテステーション・プロセスにおけるデータ変更に対応するワークフローが表示されます。

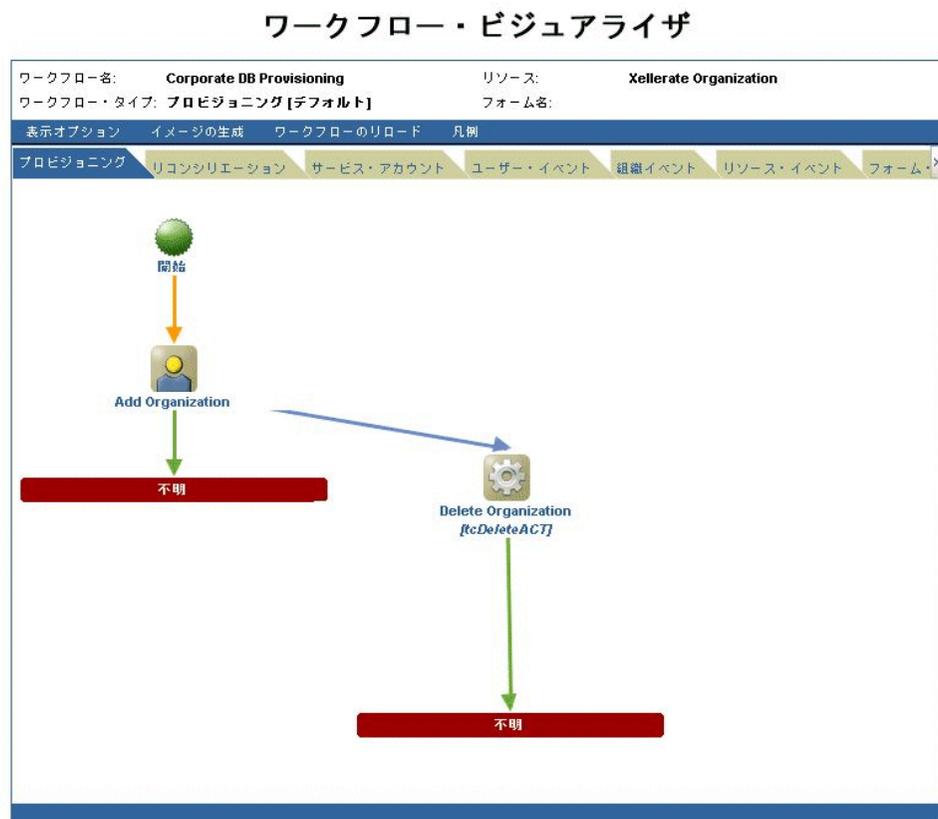
12.5.3 ワークフロー・ビジュアライザの操作

この項では、ワークフロー・ビジュアライザを使用して実行できる様々な操作について説明します。

- 要素の並べ替え
- 展開ノードの使用
- タスク詳細へのアクセス

Corporate DB Provisioning ワークフロー定義が表示されているとします。イベント・タブを選択すると、そのイベントに対応するタスクのシーケンスが表示されます。イベント・タブの詳細は、12-9 ページの「ワークフロー定義の「プロビジョニング」イベント・タブの使用」で説明しています。図 12-2 は、ワークフロー・ビジュアライザのサンプル・ワークフローを示しています。

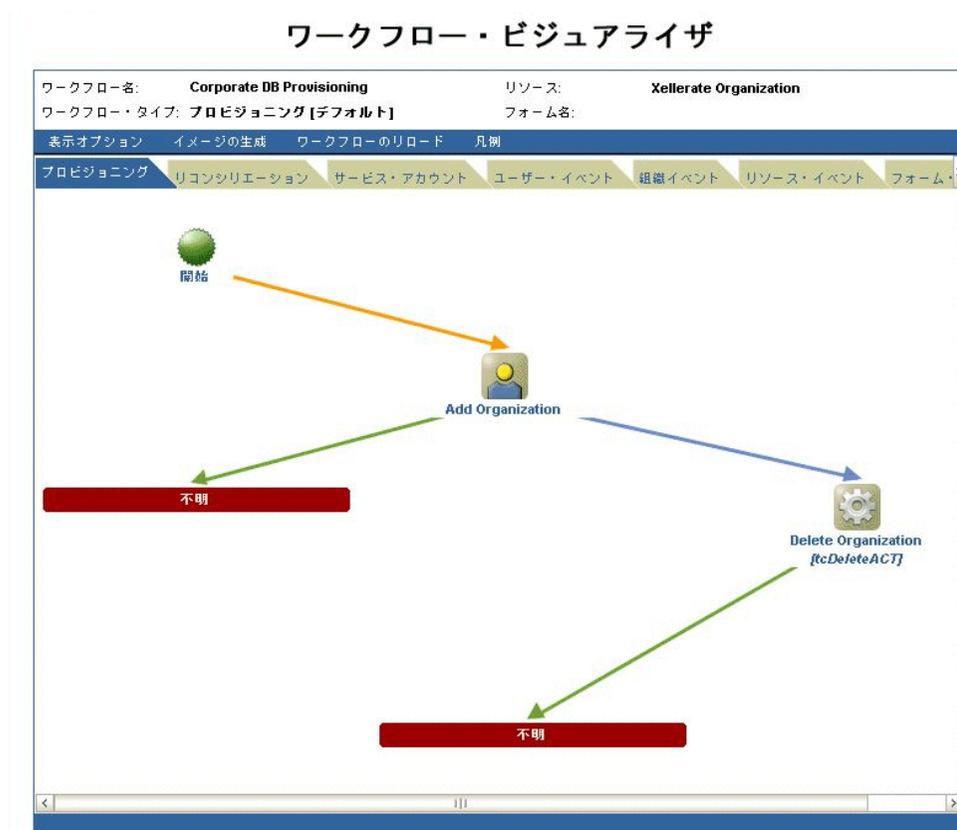
図 12-2 ワークフロー・ビジュアライザに表示されたサンプル・ワークフロー



12.5.3.1 要素の並べ替え

グラフィック・ワークフローは、ワークフロー定義を構成しているアイコンを移動することによって、ワークフロー・ビュー内の任意の位置に配置を変更できます。アイコン・コンポーネントを移動しても、矢印で結ばれているリンクは途切れません。図 12-3 に、ワークフロー内のコンポーネントのドラッグ・アンド・ドロップ機能を示します。

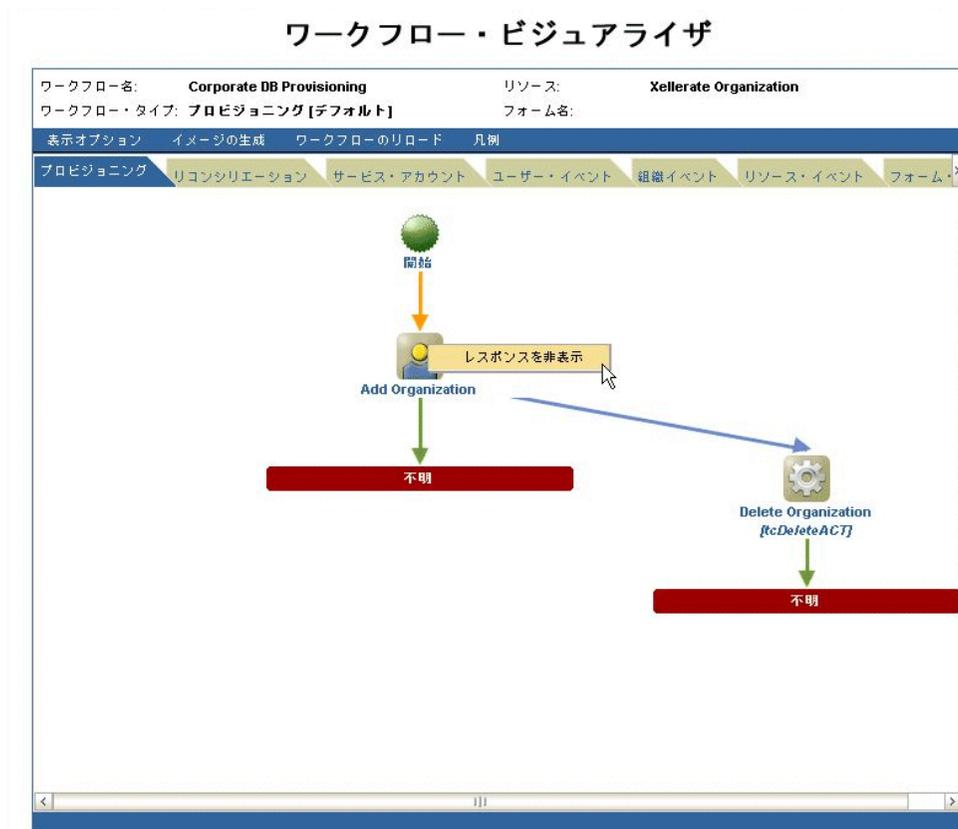
図 12-3 ワークフロー・ビジュアライザでのドラッグ・アンド・ドロップの使用



「表示オプション」 ツールバー・メニュー項目を使用して、不明レスポンス・コード、アダプタ名、取消しタスクおよびリカバリ・タスクの表示と非表示を切り替えることができます。ワークフローは自動的に更新され、実行した変更に基づいてそのワークフローが再描画されます。

タスク・ノードを右クリックすると、「レスポンスを非表示」オプションが表示されます。このオプションをクリックするとレスポンス・サブツリーが閉じ、展開ノードに変わります。タスク・ノード・ラベルが黄色く強調表示され、閉じていることを示します。ノードが閉じている間は、「レスポンスを非表示」オプションは表示されません。図 12-4 に、タスク・ノードを示します。

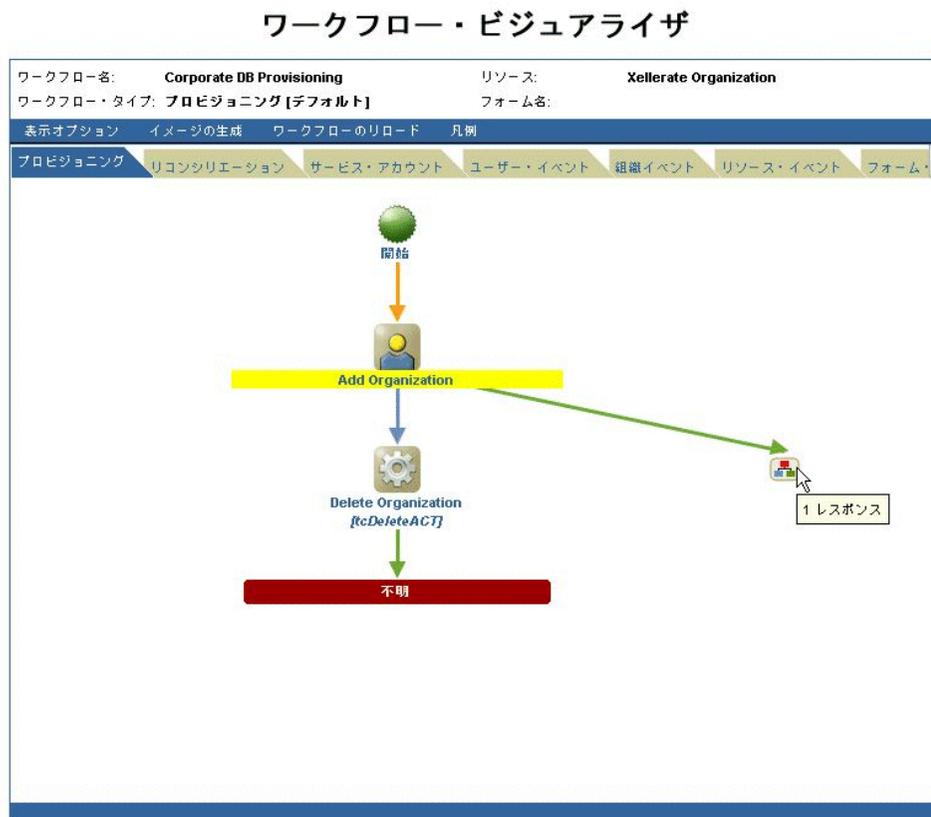
図 12-4 タスク・ノードの使用 (ショートカット・メニュー)



12.5.3.2 展開ノードの使用

5つを超えるレスポンス・コードを含み、不明レスポンス・コードを含まないタスク・ノードは、フローチャートにレスポンスとともに描画されることはありません。レスポンス・サブツリー全体ではなく展開ノードが表示されます。展開ノードをダブルクリックすると、フローチャートが再描画され、親タスク（ノード）のレスポンス・サブツリーが表示されます。タスク・ノードのラベルが黄色く強調表示されます。図 12-5 に、閉じたレスポンス・サブツリーを示します。

図 12-5 ワークフロー・ビジュアライザの閉じたレスポンス・サブツリー



注意：カーソルを展開ノードに重ねると、関連付けられているレスポンス・コードの数がツール・ヒントに表示されます。不明レスポンス・コードは、デフォルトでは非表示です。

12.5.3.3 タスク詳細へのアクセス

特定のタスクの詳細情報を表示するには、タスクのアイコンをダブルクリックします。「タスクの詳細」ページでは、タスク定義に関する情報が、次のタブに表示されます。

- **一般**: このタブには、名前や説明などのタスク情報が表示されます。
- **自動化**: このタブには、タスク、タスクのステータス、および各種のマッピングの自動化アダプタに関する情報が記載されています。
- **タスクの割当て**: このタブには、タスクの割当て方法とすべての関連情報に関する情報が表示されます。
- **依存先**: このタブには、選択したタスクの依存先であるすべてのタスクが一覧表示されます。
- **リソース・ステータス管理**: このタブには、タスク・ステータスとリソース・ステータスの間のマッピングが表示されます。

12.5.3.3.1 「一般」タブ 「一般」タブのフィールドを表 12-3 に示します。

表 12-3 「一般」タブのフィールド

フィールド	説明
タスク名	このフィールドにはプロセス・タスクの名前が表示されます。
タスクの説明	このフィールドにはプロセス・タスクに関する説明が表示されます。
タスクの結果	このフィールドは、このタスクのプロセス・アクションを示しています。「ENABLED」、「DISABLED」または「NONE」のいずれかです。リソースへのユーザーのアクセスについて、プロセスは有効化あるいは無効化されます。無効なアクションでは、関連タスクもすべて無効化されます。「NONE」アクションは、このタスクが特定のプロセス・アクションに関連付けられていないことを意味します。
再試行間隔	このフィールドは、このプロセス・タスク・インスタンスが追加されるまでに待機する時間を分単位で示します。
再試行の制限	このフィールドは、却下されたタスクを Oracle Identity Manager が再試行する回数を示します。
条件付きタスク	このフィールドは、プロセス・タスクに対して満たす必要がある条件を指定しています。
リカバリの完了	このフィールドは、生成されたすべてのリカバリ・タスクの完了時に、現行のプロセス・タスクのステータスが Oracle Identity Manager によって「却下」から「完了に失敗」に変更されることを示します。このフラグは、依存している他のプロセス・タスクをトリガーします。
保留中の取消しを許可	このフィールドは、ステータスが「保留」のときにプロセス・タスクを取り消せるかどうかを示します。
複数を許可	このフィールドは、単一のプロセス・インスタンス内で、タスクを複数回挿入することが許可されているかどうかを示します。
ワークフロー完了に必須	このフィールドは、プロセス・タスクが「完了」ステータスではない場合、プロセスを完了できないことを示します。
手動挿入	このフィールドは、現行のプロセス・タスクをユーザーがプロセスに手動で追加できるかどうかを示します。

12.5.3.3.2 「自動化」タブ プロビジョニング・プロセスに所属するタスクは、通常、自動化されています。「自動化」タブのフィールドを表 12-4 に示します。

注意： タスクが自動化されていない場合、このタブは表示されません。

表 12-4 「自動化」タブのフィールド

フィールド	説明
アダプタ名	このフィールドにはアダプタの名前が表示されます。
アダプタ・ステータス	このフィールドは、アダプタが完全にマップされているかどうかを示します。
アダプタ変数	このフィールドには、アダプタ・タスクが使用する実行時アプリケーション・データを含むアダプタ内のユーザー定義のプレースホルダが含まれます。
マップされていますか。	このフィールドは、アダプタ変数がマップされているかどうかを示します。

12.5.3.3.3 「タスクの割当て」タブ このタブは、プロセス・タスクの割当てルールを指定します。ルールは、プロセス・タスクの割当て方法を定めます。

タスク割当てルールは承認プロセスのタスクに関連付けられます。これらのタスクは通常、手動で完了されるためです。プロビジョニング・プロセスに所属するタスクは、通常、自動化されています。結果的に、タスク割当てルールは必要とされません。

12.5.3.3.4 「依存先」タブ このタブには、現行のタスクの依存先タスク名が表示されます。

12.5.3.3.5 「リソース・ステータス管理」タブ リソースには、事前定義されたプロビジョニング・ステータスがあり、リソース・オブジェクトがターゲットのユーザーや組織にプロビジョニングされるのに応じて、そのライフサイクルを通じて様々なステータスを表します。このタブには、プロセス・タスクのステータス（「タスク・ステータス」と、その割当て先リソースのプロビジョニング・ステータス（「リソース・ステータス」）の間のリンクが表示されます。「リソース・ステータス管理」タブのフィールドを表 12-5 に示します。

表 12-5 「リソース・ステータス管理」タブのフィールド

フィールド	説明
タスク・ステータス	ステータスは、事前定義されたプロビジョニング・ステータス・タイプのいずれかです。
リソース・ステータス	ステータスは、「待機中」、「プロビジョニング」、「なし」、「準備完了」、「有効」、「無効」、「失効」、「プロビジョニング済」および「情報の指定」のいずれかです。

12.6 「リソース・ワークフロー」オプションを使用したワークフローの作成および変更

ワークフロー・デザイナーを使用すると、ワークフローを作成および編集できます。ワークフロー・ビジュアライザではワークフローをグラフィック表示するのに対し、ワークフロー・デザイナーではワークフローの作成および編集が可能です。

関連項目：「Process Definition」フォームの詳細は、『Oracle Identity Manager デザイン・コンソール・ガイド』を参照してください。

ここでは、次のトピックについて説明します。

- [ワークフロー・デザイナーを開く](#)
- [ワークフローの作成](#)
- [ワークフロー・デザイナーのメイン・ページ](#)
- [タスクおよびレスポンスの作成と管理](#)
- [データ・フローの構成](#)

12.6.1 ワークフロー・デザイナーを開く

ワークフロー・デザイナーを開くには、次の手順を実行します。

1. 左ナビゲーション・ペインで「**リソース管理**」をクリックし、続いて「**管理**」をクリックします。「リソース検索」ページが表示されます。
2. リソースを検索します。
3. リソース名をクリックしてリソースを選択します。「リソースの詳細」ページが表示されます。
4. 「追加詳細」リストから「**リソース・ワークフロー**」を選択します。「リソース・ワークフロー」ページが表示されます。
5. 「**新規ワークフローの作成**」をクリックしてワークフロー・デザイナーを開き、新規ワークフローを作成します。あるいは、結果表の「ワークフローの編集」列にある「**編集**」をクリックしてワークフロー・デザイナーを開いて、既存のワークフローを編集します。

12.6.2 ワークフローの作成

「リソース・ワークフロー」ページで「新規ワークフローの作成」をクリックすると、ワークフロー・デザイナーが開き、[図 12-6](#)のような「ワークフローの作成」ダイアログ・ボックスが表示されます。

図 12-6 「ワークフローの作成」ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、新規ワークフローを作成するために必要な値を指定する必要があります。「ワークフローの作成」ダイアログ・ボックスのフィールドを[表 12-6](#)に示します。

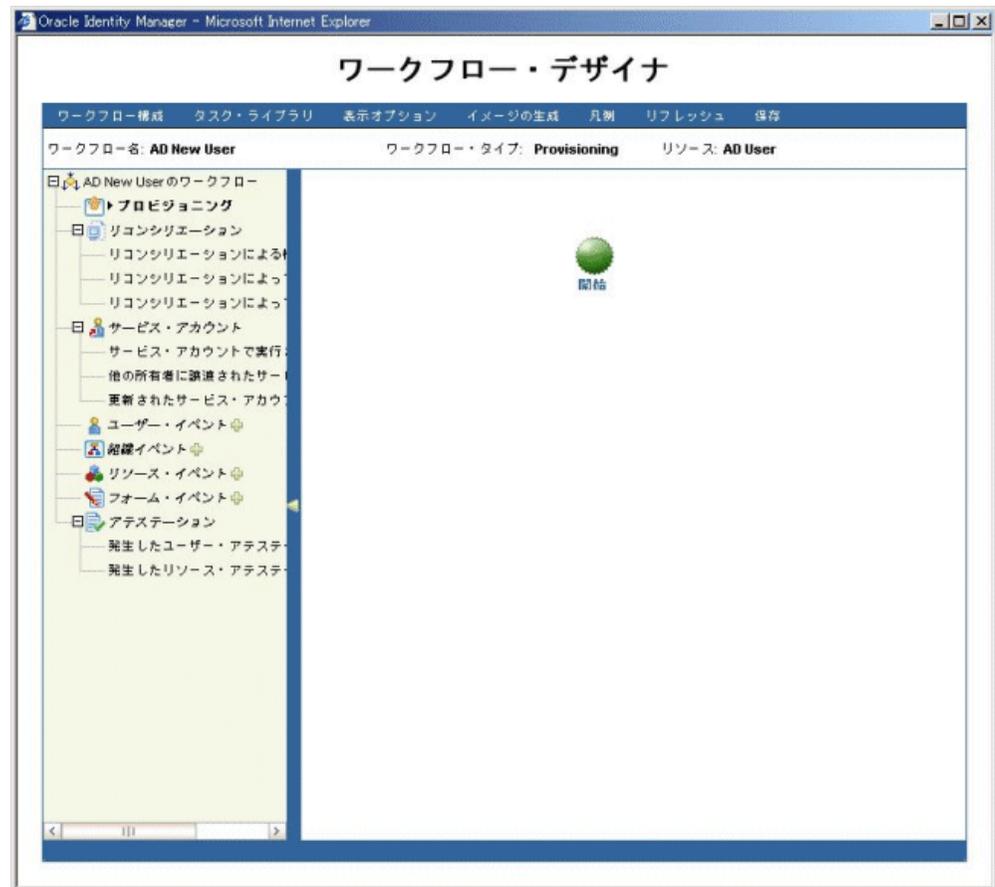
表 12-6 「ワークフローの作成」ダイアログ・ボックスのフィールド

フィールド	説明
ワークフロー名	新規ワークフローの名前。
ワークフロー・タイプ	ビジネス・ワークフロー定義タイプ（「承認」または「プロビジョニング」）。 デフォルトで「承認」が選択されています。
ワークフロー・フォーム	ワークフローが定義されているリソースに関連付けられているフォーム。 フォームは次のいずれかです。 <ul style="list-style-type: none"> まだどのプロセスにも割り当てられていないすべてのプロセス・フォーム このワークフローの定義の対象となっている、現行プロセス用に定義されたその他のプロセスに割当て済のすべてのプロセス・フォーム このフィールドは、ワークフロー・タイプが「プロビジョニング」の場合に有効です。ワークフロー・タイプが「承認」の場合は無効です。
デフォルト・ワークフロー	このチェック・ボックスは、関連付けられているリソース・オブジェクトについて、現行ビジネス・ワークフローをデフォルトの承認またはプロビジョニング・ビジネス・ワークフローとして指定するかどうかを指定します。 このチェック・ボックスを選択した場合、このビジネス・ワークフローは、割り当てられるリソース・オブジェクトのデフォルトの承認またはプロビジョニング・ビジネス・ワークフローとして設定されます。 選択しない場合、このプロセスは、プロセス選択ルールによって選択された場合のみ起動します。
ワークフローの作成	ワークフロー作成用ボタン。

12.6.3 ワークフロー・デザイナのメイン・ページ

「プロビジョニング」オプションを選択して、「ワークフローの作成」ダイアログ・ボックスで「ワークフローの作成」をクリックすると、[図 12-7](#)に示すように、ワークフロー・デザイナのメイン・ページが表示されます。

図 12-7 ワークフロー・デザイナのメイン・ページ



このページには様々なセクションがあり、各セクションには新規ワークフローを展開するための詳細情報やオプションが用意されています。

ワークフロー・デザイナのメイン・ページは、次のセクションから構成されています。

- 情報
- ツールバー
- デザイナ・ページ
- メニュー・セクション

承認ワークフローの場合、ワークフロー・デザイナのメイン・ページには左側のメニュー・セクションがなく、外見が異なります。

12.6.3.1 情報

現行ワークフローに関するグローバルな情報を提供する次のラベルが表示されます。

- **ワークフロー名**: 現行ワークフローの名前
- **ワークフロー・タイプ**: 現行ワークフローのタイプ（「プロビジョニング」または「承認」）
- **リソース**: 現行ワークフローのアタッチ対象となるリソース

12.6.3.2 ツールバー

ツールバーには、ワークフロー・デザイナー・ページを管理および表示する機能があります。これには、名前、フォーム名、自動保存、自動事前移入、グラフィック・ワークフロー・ビューのイメージの生成、ワークフローのリロード、ポップアップの凡例、ワークフローの保存、表示オプションの提供など、グローバルなワークフロー情報を構成するオプションが含まれています。

ここでは次のツールバー・ボタンの機能について説明します。

- [ワークフロー構成](#)
- [タスク・ライブラリ](#)
- [表示オプション](#)
- [イメージの生成](#)
- [凡例](#)
- [リフレッシュ](#)
- [保存](#)

12.6.3.2.1 ワークフロー構成「ワークフロー構成」をクリックすると、[図 12-8](#)のように「ワークフロー構成」ダイアログ・ボックスが開きます。このダイアログ・ボックスには、現行ワークフローを構成するためのオプションがあります。

図 12-8 「ワークフロー構成」ダイアログ・ボックス

ワークフロー構成

ワークフロー構成

ワークフロー名: デフォルト・ワークフロー:

記述フィールド: [クリア](#) フォーム名: [クリア](#)

自動保存フォーム: 自動事前移入フォーム:

OK 取消

「ワークフロー構成」ダイアログ・ボックスのフィールドを表 12-7 に示します。

表 12-7 「ワークフロー構成」ダイアログ・ボックスのフィールド

フィールド	説明
ワークフロー名	現行ワークフローの名前。
デフォルト・ワークフロー	このチェック・ボックスは、関連付けられているリソース・オブジェクトについて、現行プロセスをデフォルトの承認またはプロビジョニング・プロセスとして指定するかどうかを指定します。 注意: このチェック・ボックスの詳細は、12-18 ページの「ワークフローの作成」を参照してください。
記述フィールド	プロビジョニングされたリソースの特定のインスタンスに次のいずれかをマップする場合に使用します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ リクエスト・キー ■ ユーザー・ログイン ■ 組織名 ■ プロセス・タイプ ■ ワークフロー・フォームからのデータ この情報は「プロビジョニング」ワークフローの場合のみ使用でき、「承認」ワークフローでは使用できません。
フォーム名	現行ワークフローに割り当てられたフォーム。この情報は「プロビジョニング」ワークフローの場合のみ使用でき、「承認」ワークフローでは使用できません。
自動保存フォーム	このチェック・ボックスは、プロビジョニングの際、ユーザーにフォーム・データの入力を求めずにフォームの自動保存を設定する場合に使用します。事前定義済デフォルト値セットまたはデータ・フローを使用した、フォーム・フィールドのデフォルト値の設定に役立ちます。この情報は「プロビジョニング」ワークフローの場合のみ使用でき、「承認」ワークフローでは使用できません。
自動事前移入フォーム	このチェック・ボックスは、プロビジョニングの際、デフォルト値またはデータ・フローからのデータを使用して、フィールドを事前移入する場合に使用します。このオプションを設定すると、プロビジョニングの際、変更可能なフィールドのデータとともにフォームが表示されます。この情報は「プロビジョニング」ワークフローの場合のみ使用でき、「承認」ワークフローでは使用できません。

12.6.3.2.2 タスク・ライブラリ 「タスク・ライブラリ」をクリックして、「タスク・ライブラリ」ページを開きます。「タスク・ライブラリ」ページには、すべてのサブワークフロー間のワークフロー内のすべてのタスクが一覧表示されます。このページには、(プロビジョニング・ワークフロー用の) サブワークフローが存在する場所、複数インスタンスの可否、保留中の取消しの可否、再試行間隔、再試行回数など、各タスクに関連するいくつかのパラメータも表示されます。また、このページでタスクを編集および削除できます。図 12-9 に「タスク・ライブラリ」ページを示します。

図 12-9 「タスク・ライブラリ」ページ

タスク名	ワークフローで使用	複数のインスタンス
受信したリコンシリエーションの削除	リストの表示...	×
システムの検証	なし	×
変更されたサービス・アカウント	リストの表示...	✓
受信したリコンシリエーションの更新	リストの表示...	✓
サービス・アカウント・アラート	リストの表示...	✓
発生したリソース・アステーション・イベント	リストの表示...	✓
発生したユーザー・アステーション・イベント	リストの表示...	✓
移動したサービス・アカウント	リストの表示...	✓
受信したリコンシリエーションの挿入	リストの表示...	×

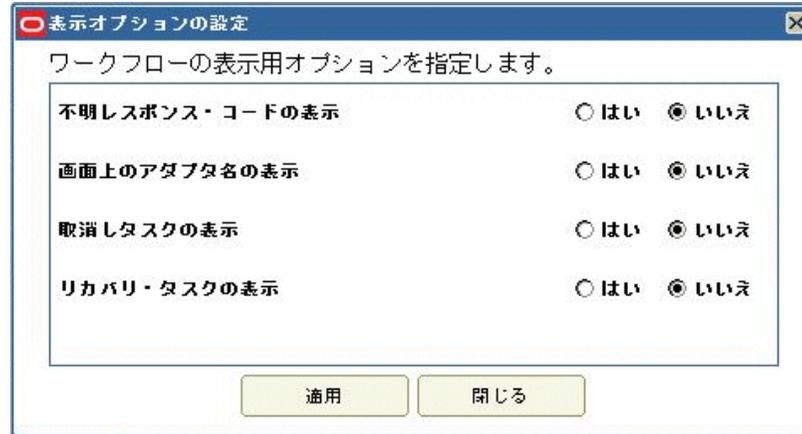
次の条件をともに満たした場合のみ、タスクを削除できます。

- タスクがすべてのワークフローから削除されていること。これは、任意のサブワークフロー上のタスクを右クリックし、「**タスクおよびサブフローの削除**」をクリックして、タスクが削除されていることを意味します。
- タスクのインスタンスがシステムにないこと。たとえば、タスクでワークフローが作成され、そのワークフローのリソースがユーザーにプロビジョニングされ、ワークフローが起動されるためにタスクが実行される場合、そのタスクのインスタンスはシステム内に作成されます。その場合、タスクは削除できません。

「タスク・ライブラリ」ページの上部には、タスクの検索に使用できる検索基準があります。メイン・セクションには、各種パラメータを持つタスクが一覧表示されます。行をクリックすると選択できます。タスクが削除可能な場合は、「選択されたタスクの編集」ボタンとともに「選択されたタスクの削除」ボタンが有効になります。

12.6.3.2.3 表示オプション 「表示オプション」をクリックすると、「表示オプションの設定」ダイアログ・ボックスが開き、ワークフローを設計する際にワークフローの表示方式を指定するためのオプションが表示されます。図 12-10 に、「表示オプションの設定」ダイアログ・ボックスを示します。

図 12-10 「表示オプションの設定」ダイアログ・ボックス



このダイアログ・ボックスを使用して、次のオプションを有効または無効にできます。

- **不明レスポンス・コードの表示**: 不明レスポンス・コードを表示または非表示にします。
- **画面上のアダプタ名の表示**: タスクにアタッチされたアダプタの名前を表示または非表示にします。
- **取消しタスクの表示**: 取消しタスクを表示または非表示にします。
- **リカバリ・タスクの表示**: リカバリ・タスクを表示または非表示にします。

12.6.3.2.4 イメージの生成 「イメージの生成」をクリックすると、ワークフローの現行ビューが JPEG イメージとして保存されます。イメージは新しいブラウザ・ウィンドウで開かれます。

12.6.3.2.5 凡例「凡例」をクリックすると、図 12-11 のように「凡例」ダイアログ・ボックスが開きます。このダイアログ・ボックスには、次のタイプの要素が表示されます。

図 12-11 「凡例」ダイアログ・ボックス



- **マーカー:** この要素はワークフロー内の特定のマーキングまたは場所を表します。たとえば、開始点、ページ参照または下位要素を持つ展開ワークフローを表す場所は、マーカーで表すことができます。

「タスク」要素を右クリックして、レスポンスを非表示にするオプションを選択できます。レスポンスを非表示にすると、レスポンス・サブツリーのアイコンが表示され、非表示のレスポンスがあることが示されます。ページ参照マーカーは、リレーションシップがリンクで示されないそのページの他の要素を参照します。これは、たとえばタスク用に定義されたレスポンス・コードであり、そのレスポンスに対してレスポンス生成のタスクが定義されます。このレスポンス生成タスクに、元のタスクを循環方式で参照するレスポンスがある場合、ページ参照マーカーによってリレーションシップの表示が容易になります。
- **タスク:** このアイコンは、手動および自動タスクを示すために使用されます。自動完了のため、イベント・ハンドラまたはそれにアタッチされたアダプタがタスクにある場合は、自動化タスクになります。そうでない場合は、手動タスクのままです。
- **レスポンス:** 「完了」、「却下」、「取消」など各種レスポンス・コードに使用される、様々な色のコードです。ユーザー定義のレスポンス・コードは、異なる色コードで示されます。
- **リンク:** リレーションシップまたは要素間の関連を表示するリンクに使用される様々な色コードです。リンクの色コードは、リンクが参照するタスクのタイプに応じて異なります。たとえば、色コードはタスクが取消またはリカバリのいずれかであるかどうかを示します。各種リンクとは、「初期タスク」、「レスポンス生成済タスク」、「リカバリ・タスク」および「取消しタスク」です。

12.6.3.2.6 **リフレッシュ「リフレッシュ」** をクリックすると、ワークフローがリロードされ、デフォルトのインデントとラベルおよびアイコンの位置とともに表示されます。これにより、JGraph アルゴリズムを使用して、ワークフローに要素を配置するためのトポロジが再生成されます。

12.6.3.2.7 保存「保存」 をクリックすると、Oracle Identity Manager データベースに対するすべての追加や変更など、ワークフローに対して行われたすべての変更内容がコミットされます。

注意: 「保存」 をクリックして変更をコミットする必要があります。ワークフローを保存しないでワークフロー・デザイナのメイン・ページを閉じると、変更はすべて失われます。

12.6.3.3 デザイナ・ページ

デザイナ・ページには、リンクを含め、すべての要素とプロセス・フローでの要素の位置を備えたワークフローが表示されます。これは、製図板に類似しており、適切なオプションを使用してタスクやレスポンスなどのコンポーネントを作成することができます。デザイナ・ページのこのようなコンポーネントは、さらに構成が可能です。このページでは、各種ワークフロー・エンティティを相互のリレーションシップとともに図示できます。新たに作成したワークフローの場合、このページにはワークフロー・プロセスの開始点を示す開始マーカーが表示されます。このページに追加されるオブジェクトはすべてこのマーカーに関連し、マーカーは参照点として機能します。

12.6.3.4 メニュー・セクション

メニュー・セクションは、ワークフローの特定のサブセクションを表すメニュー項目で構成されます。このセクションは、「プロビジョニング」ワークフローの場合のみ有効です。使用可能なメニュー項目は次のとおりです。

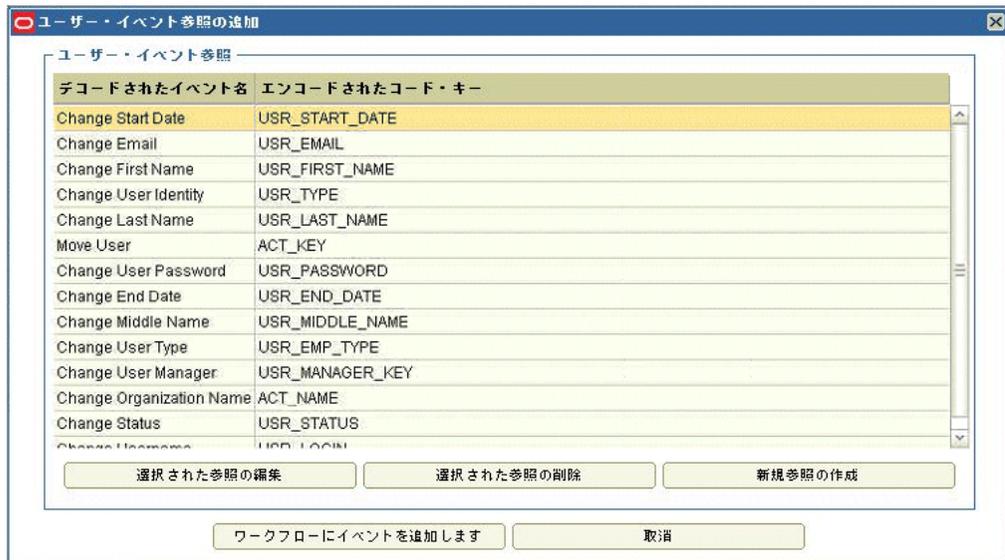
- **プロビジョニング:** ワークフロー・デザイナ・アプリケーションの起動時に表示されるデフォルトのページです。
- **リコンシリエーション:** 「リコンシリエーションの挿入を受信しました」、「リコンシリエーションの更新を受信しました」、「リコンシリエーションの削除を受信しました」など、リコンシリエーション・イベントで実行するタスクのリストを提供します。これらのタスクは、「リコンシリエーション」メニュー項目の下のサブメニュー項目です。
- **サービス・アカウント:** サービス・アカウントは admin1、admin2、admin3 などの一般管理者アカウントであり、メンテナンス用途に使用されます。通常、このようなアカウントは、ユーザーではなく、あるシステムと別のシステムとの対話を可能にするために使用されます。サービス・アカウントの管理およびプロビジョニングのモデルは、標準のプロビジョニングとは異なります。サービス・アカウントは通常のアカウントと同様に、要求、プロビジョニングおよび管理を行います。また、通常アカウントと同じリソース・オブジェクト、プロビジョニング・プロセス、およびプロセスまたはオブジェクト・フォームを使用します。サービス・アカウントは、通常のアカウントとは内部フラグで区別されず、ユーザーに対してサービス・アカウントがプロビジョニングされると、Oracle Identity Manager ではそのユーザーのアイデンティティからサービス・アカウントへのマッピングが管理されます。このユーザーはサービス・アカウントの所有者とみなされます。「サービス・アカウント」メニュー項目で使用できるタスクは、「サービス・アカウントが変更されました」、「サービス・アカウント・アラート」および「サービス・アカウントが移動されました」です。
- **ユーザー・イベント:** ユーザーのイベントに基づいて実行するタスクのリストが提供されます。そのタスクには次のデフォルト名があります。
 - Change User Location
 - Move User
 - Change User Type
 - Change User Password
 - Change User Manager
 - Change Username
 - Change First Name
 - Change Last Name

- Change User Identity

注意：これらの名前は、Design Console の「Lookup Definition」フォームの Lookup_USR_PROCESS_TRIGGERS のデコード値から導出されます。値が変更されると、これらの名前もそれに応じて変わります。

ユーザー・イベントは、「ユーザー・イベント」メニュー項目の隣のプラス記号 (+) のアイコンをクリックするとワークフローに挿入できます。+アイコンをクリックすると、現在使用できるイベント・タスクのリストを含むユーザー・イベント参照の追加ダイアログ・ボックスが図 12-12 に示すフィールドとともに開きます。タスクを選択して「ワークフローにイベントを追加します」をクリックすると、「ユーザー・イベント」メニューの下に新規メニュー項目が作成され、そのワークフロー用のページが開かれます。

図 12-12 ユーザー・イベント参照の追加ダイアログ・ボックス



ユーザー・イベント参照の追加ダイアログ・ボックスには、新しい参照イベントの作成や既存の参照イベントの削除のための次のようなオプションもあります。

- 新規参照の作成：このボタンをクリックすると、図 12-13 に示すように「参照イベントの作成」ダイアログ・ボックスが表示されます。

図 12-13 「参照イベントの作成」ダイアログ・ボックス



- 選択された参照の編集: このボタンをクリックすると、[図 12-14](#)に示すように「参照イベントの編集」ダイアログ・ボックスが表示されます。

図 12-14 「参照イベントの編集」ダイアログ・ボックス



- 選択された参照の削除: このボタンをクリックすると、[図 12-15](#)に示すように「参照イベントの削除」ダイアログ・ボックスが表示されます。

図 12-15 「参照イベントの削除」ダイアログ・ボックス



- **組織イベント**: 組織のイベントに基づいて実行するタスクのリストが提供されます。そのタスクには次のデフォルト名があります。
 - Change Organization Type
 - Change Organization Name
 - Move Organization

組織イベントは、「組織イベント」メニュー項目の隣の + アイコンをクリックするとワークフローに挿入できます。+ アイコンをクリックすると、現在使用できるイベント・タスクのリストを含む組織イベント参照の追加ダイアログ・ボックスが開きます ([図 12-16](#)を参照)。タスクを選択して「ワークフローにイベントを追加します」をクリックすると、「組織イベント」メニューの下に新規メニュー項目が作成され、そのワークフロー用のページが開かれます。

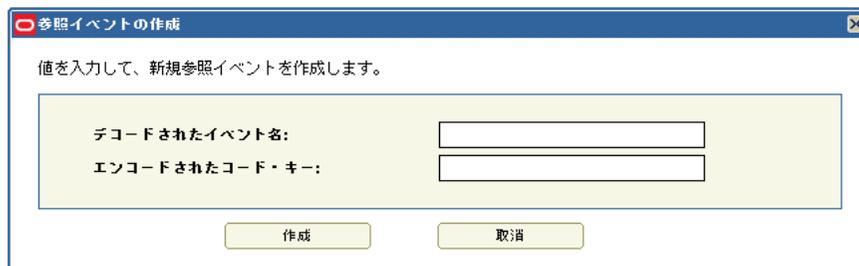
図 12-16 組織イベント参照の追加ダイアログ・ボックス



組織イベント参照の追加ダイアログ・ボックスには、新しい参照イベントの作成や既存の参照イベントの削除のための次のようなオプションもあります。

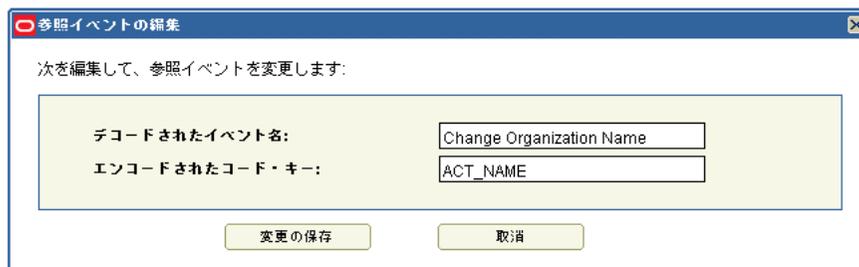
- 新規参照の作成: このボタンをクリックすると、図 12-17 に示すように「参照イベントの作成」ダイアログ・ボックスが表示されます。

図 12-17 「参照イベントの作成」ダイアログ・ボックス



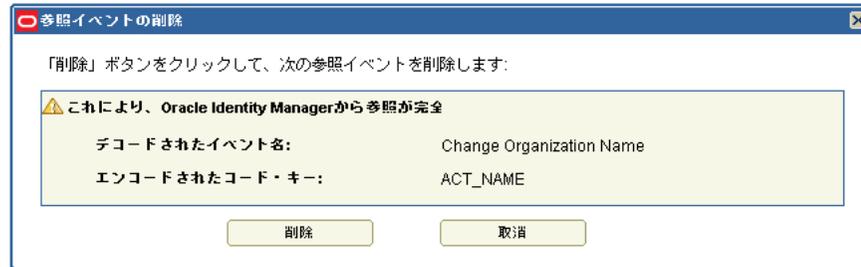
- 選択された参照の編集: このボタンをクリックすると、図 12-18 に示すように「参照イベントの編集」ダイアログ・ボックスが表示されます。

図 12-18 「参照イベントの編集」ダイアログ・ボックス



- 選択された参照の削除: このボタンをクリックすると、[図 12-19](#) に示すように「参照イベントの削除」ダイアログ・ボックスが表示されます。

図 12-19 「参照イベントの削除」ダイアログ・ボックス



- **リソース・イベント:** ワークフローに挿入され、そのリソースでのイベントの発生時に実行されるタスクのリストが提供されます。このようなイベントは、リソースで無効化または有効化イベントとして定義されます。「リソース・イベント」メニュー項目の下には、「リソースの有効化」および「リソースの無効化」のサブメニュー項目があります。リソース・イベントは、「リソース・イベント」メニュー項目の隣の+アイコンをクリックするとワークフローに挿入できます。+アイコンをクリックすると、2つのオプション「リソースの有効化」および「リソースの無効化」を含むリソース・イベント参照の追加ダイアログ・ボックスが開きます ([図 12-20](#) を参照)。オプションを選択して「ワークフローにイベントを追加します」をクリックすると、「リソース・イベント」メニューの下に新規メニュー項目が作成され、そのワークフロー用のページが開かれます。

図 12-20 リソース・イベント参照の追加ダイアログ・ボックス



- **フォーム・イベント:** 挿入され、フォーム・フィールドまたは子表のイベントに基づいて実行するタスクのリストが提供されます。親プロセス・フォーム・フィールドのイベントの場合、タスクの名前には次の表記規則があります。

Field *field_name* Updated

子表のイベントの名前は、子表名およびイベント・タイプ（挿入、更新、削除など）に基づいて付けられます。フォーム・イベントは、メニュー項目の隣の+アイコンをクリックするとワークフローに挿入できます。+アイコンをクリックすると、フォーム・イベント参照の追加ダイアログ・ボックスが開きます（図 12-21 を参照）。

図 12-21 フォーム・イベント参照の追加ダイアログ・ボックス

フォーム・イベント参照の追加ダイアログ・ボックスでは、「フォーム・タイプ」フィールドから親フォームまたは子フォームを選択できます。「親フォーム」を選択すると、「子フォーム」セクションのフィールドが無効になります。同様に、「子フォーム」を選択すると、「親フォーム」セクションのフィールドが無効になります。「親フォーム」セクションでは、「更新」操作のみが使用可能です。「子フォーム」セクションでは、「挿入」、「更新」および「削除」の操作が使用可能です。このような操作により、イベントがトリガーされます。各セクションには、親フォームのフォーム・フィールド（子フォームの場合はフォーム名）に対応するフィールドがあります。子表イベント・タスクのみに対応するタスク名は、作成後に変更できます。

注意：親フォームのフィールド・イベント名は固定されており、タスク名フィールドは編集できません。名前は本来固定形式ですが、`xlRichClient.properties` ファイルの `global.workflow.startMarker.UpdatedField` プロパティを更新してカスタマイズおよびローカライズできます。詳細は、『Oracle Identity Manager 管理およびユーザー・コンソール・カスタマイズ・ガイド』を参照してください。

- **アテステーション：**このメニュー項目はアテステーション・イベント用です。アテステーション・イベントには、ユーザー・アテステーションとリソース・アテステーションの2つのタイプがあります。アテステーションには新規のイベントは追加できません。ただし、既存のワークフローを他のサブワークフローと同様に変更できます。

12.6.4 タスクおよびレスポンスの作成と管理

ワークフローは複数のタスクで構成できます。ここでは、タスクに関連する次のトピックについて説明します。

- [一般メニュー・オプション](#)
- [タスク・オプション](#)
- [レスポンス・オプション](#)
- [リンク・オプション](#)
- [タスクの構成](#)
- [レスポンスの構成](#)

12.6.4.1 一般メニュー・オプション

デザイナ・ページを右クリックすると、タスクおよびレスポンスを作成する一般オプションのあるメニューが表示されます。一般メニュー・オプションには次のものがあります。

- **新規タスクの作成:** デフォルト名で新規タスクを作成します。これはさらに変更および構成できます。タスクはアイコンとして表されます。
- **既存タスクの挿入:** 現行サブワークフローに存在するタスク、およびプロビジョニング・ワークフローのメイン・ユーザー、組織、リソース、フォーム・イベントのタスクを除き、サブワークフロー間のすべて既存タスクのリストのある「既存タスク」ダイアログ・ボックスが表示されます。タスクを選択して現行ワークフローに挿入できます。
- **レスポンスの作成:** デフォルトのレスポンス・コードで新規レスポンスを作成します。これはさらに変更および構成できます。レスポンスはアイコンとして表されます。

タスク・アイコン、レスポンス・アイコン、およびタスクとレスポンス間のリンクを右クリックすると、様々なオプションを使用できます。

12.6.4.2 タスク・オプション

タスク・アイコンを右クリックすると、タスク関連の次のオプションのあるメニューが表示されます。

- **レスポンスへのリンク:** このオプションは、レスポンスへのタスクのリンクに使用します。このオプションを使用するには、最初にレスポンスを作成します。このメニュー項目を選択すると、タスク・アイコンを起点とするリンクが表示されます。このリンクはマウス・ポインタで拡張します。レスポンスをクリックすると、リンクの矢印部分がレスポンス上に配置され、タスクのレスポンスが作成されます。
- **取消しタスクへのリンク:** このオプションは、取消しリレーションシップと2つのタスクのリンクに使用します。これは、現在選択しているタスクの取消しタスクとしてタスクを追加する場合に使用します。これを実行する手順は次のとおりです。
 1. 取消しタスクを追加するタスクを選択します。
 2. タスク・アイコンを右クリックし、「**取消しタスクへのリンク**」メニュー項目を選択します。
 3. 対象のタスク・アイコンを選択して、取消しタスクとして追加します。

注意: 「いいえ」の値を指定して「表示オプション」ツールバーの「**取消しタスクの表示**」オプションを選択すると、取消しリレーションシップの作成後、取消しタスクは非表示になります。取消しタスクを表示するには、「**取消しタスクの表示**」オプションに「はい」を選択します。

- **リカバリ・タスクへのリンク**:リカバリ・リレーションシップと2つのタスクのリンクに使用します。これは、現在選択しているタスクのリカバリ・タスクとしてタスクを追加する場合に使用します。これを実行する手順は次のとおりです。
 1. リカバリ・タスクを追加するタスクを選択します。
 2. タスク・アイコンを右クリックし、「リカバリ・タスクへのリンク」メニュー項目を選択します。
 3. 対象のタスクを選択して、リカバリ・タスクとして追加します。

注意:「いいえ」の値を指定して「表示オプション」ツールバー・ボタンの「リカバリ・タスクの表示」オプションを選択すると、取消しリレーションシップの作成後、リカバリ・タスクは非表示になります。リカバリ・タスクを表示するには、「リカバリ・タスクの表示」オプションに「はい」を選択します。

- **タスクおよびサブフローの削除**:タスクおよびタスクの下のすべての要素を削除する場合に使用します。これには、タスクを起点とするすべてのリンクとそのすべての子要素、その子要素などが含まれます。同一タスクが複数のサブワークフローに存在する場合に、あるサブワークフローから削除されると、このタスクが同一の親タスクを持つすべてのサブワークフローから削除されます。この親タスクとは、そのレスポンス生成済タスクに現行削除済タスクが含まれるタスクのことです。

タスクまたは子を削除しても、システムからタスクは削除されず、ワークフローからのみ削除されます。システムからの永続的なタスクの削除は、「タスク・ライブラリ」から実行できます。デザイナー・ページからタスクを削除した場合でも、タスク定義は保持され、ワークフローからのみ削除されます。

12.6.4.3 レスポンス・オプション

レスポンス・アイコンを右クリックすると、レスポンス関連の次のオプションのあるメニューが表示されます。

- **レスポンス生成済タスクの追加**:選択したレスポンスにレスポンス生成済タスクとしてタスクを追加する場合に使用します。これを実行する手順は次のとおりです。
 1. レスポンス生成済タスクを作成します。
 2. レスポンスを右クリックし、「レスポンス生成済タスクの追加」を選択します。リンクが作成されます。
 3. タスクを選択します。タスク上のリンク場所とリレーションシップが作成されます。
- **削除**:レスポンスの削除に使用します。このオプションを選択すると、確認ページが表示されます。削除を確認すると、レスポンスとその子がすべて削除されます。生成済タスクを含むレスポンスを削除する場合、これらのタスクは削除されますが、永続的には削除されません。タスクを削除しても、ワークフローからは削除されますが、永続的には削除されません。「タスク・ライブラリ」を使用すると、永続的にタスクを削除できます。

12.6.4.4 リンク・オプション

一部の要素間のリレーションシップは、リンクを右クリックして「削除」オプションをクリックすると削除できます。このオプションを使用できないリンクもあります。たとえば、リコンシリエーション・ワークフローでは、開始マーカーに接続されたデフォルト・タスクは削除できません。したがって、開始マーカーとデフォルト・タスク間のリレーションシップは削除できません。リレーションシップを削除できるリンクは、リレーションシップにマウスを移動すると折れた矢で強調表示されます。矢が強調表示されているときに、その矢を右クリックすると、「削除」オプションが表示されます。これによって、レスポンスとタスク間のリンクの削除、タスクへの別のレスポンスの割当て、またはレスポンスへの別のタスクの割当てを実行する際、リンクを削除し、新たなリンクを作成する必要がなくなります。

12.6.4.5 タスクの構成

ワークフロー・デザイナーで「タスクの詳細」ダイアログ・ボックスを使用してタスクを構成できます。図 12-22 にこのダイアログ・ボックスを示します。「タスクの詳細」ダイアログ・ボックスを開くには、デザイナー・ページのアイコンをダブルクリックします。

図 12-22 「タスクの詳細」ダイアログ・ボックス

ここでは、「タスクの詳細」ダイアログ・ボックスの次のタブについて説明します。

- 「一般」タブ
- 「自動化」タブ
- 「通知」タブ
- 「タスクの割当て」タブ
- 「依存先」タブ
- 「リソース・ステータス管理」タブ

「一般」タブ

図 12-23 に、「タスクの詳細」ダイアログ・ボックスの「一般」タブを示します。

図 12-23 「一般」タブ

このタブでは、タスクの一般情報を指定します。

- **タスク名**：プロセス・タスクの名前です。このフィールドは、タスク名を変更できない場合を除いて編集可能です。たとえば、「フォーム・イベント」ページの親フィールド更新のイベント・タスクなどです。
- **タスクの説明**：プロセス・タスクの説明です。
- **構成の再試行**：このセクションはプロビジョニング・ワークフローの場合にのみ表示され、次のオプションで構成されます。
 - **再試行間隔**：プロセス・タスクが「却下」ステータスである場合、これは Oracle Identity Manager が「保留」ステータスでそのタスクの新規インスタンスを挿入するまでの分単位の時間間隔です。
 - **再試行の制限**：Oracle Identity Manager が却下されたタスクを再試行する回数です。
- **プロパティ**：次のオプションがあります。
 - **複数のインスタンスを許可**：現行プロセスに複数のプロセス・タスクを挿入できるかどうかを決定します。このチェック・ボックスを選択すると、プロセス・タスクの複数のインスタンスをプロセスに追加できます。この選択を解除した場合は、現行プロセスにプロセス・タスクを 1 つのみ追加できます。
 - **ワークフロー完了に必須**：プロセスを完了するため、現行プロセス・タスクを完了する必要があるかどうかを決定します。このチェック・ボックスを選択すると、プロセス・タスクが「完了」ステータスではない場合、プロセスを完了できません。選択を解除した場合、プロセス・タスクのステータスはプロセスの完了ステータスに関与しません。
 - **リカバリの完了**：リカバリ・タスクの完了時にタスクのステータスが「完了」に設定されている必要があるかどうかを決定します。
 - **保留中の取消しを許可**：プロセス・タスクのステータスが「保留」のときにプロセス・タスクを取り消せるかどうかを決定します。このチェック・ボックスを選択すると、プロセス・タスクが「保留」ステータスの場合にプロセス・タスクを取り消せます。選択を解除すると、プロセス・タスクが「保留」ステータスの場合はプロセス・タスクを取り消せません。

- **手動挿入不可**: ユーザーが手動で現行タスクをワークフローに追加できるかどうかを決定します。このチェック・ボックスが選択されている場合、タスクを手動でワークフローに追加できません。選択を解除すると、ユーザーはタスクをプロセスに追加できます。

「自動化」タブ

図 12-24 に、「タスクの詳細」ダイアログ・ボックスの「自動化」タブを示します。

図 12-24 「自動化」タブ



「自動化」タブによって、イベント・ハンドラまたはプロセス・タスクの自動化に役立つタスクのあるアダプタをアタッチします。

このタブのオプションは2つに分けられます。「タスク自動化」セクションでは、現在アタッチされているアダプタがそのステータスとともに表示されます。「アダプタ・マッピング」セクションでは、アダプタ変数マッピングが表示されます。タブにはボタンがあり、アダプタまたはイベント・ハンドラの追加、アダプタの削除、およびアダプタがアタッチされる際の変数マッピングの編集を実行できます。

「アダプタの追加」をクリックすると、ダイアログ・ボックスが表示されます。このダイアログ・ボックスは、ハンドラ・タイプのセクションで構成され、各システム・イベント・ハンドラおよびアダプタ用のオプションがあります。各オプションを選択すると、「ハンドラ・タイプ」セクションの下に対応する説明が表示されます。リストの項目を選択して、「追加」をクリックします。

「アダプタ・マッピング」セクションでは、アダプタに関連付けられた変数とそのマッピングとともに表示されます。変数名とマッピングの有無が表示されます。変数を選択すると、「変数マッピングの編集」ボタンが有効になります。このボタンをクリックすると、様々なオプションのある「アダプタ・マッピング」ダイアログ・ボックスを開き、この変数をマップできます。このダイアログ・ボックスには、次のオプションがあります。

- **変数名**: このテキスト・ラベルには、UUID などのマッピングを設定するアダプタ変数の名前が表示されます。
- **データ型**: このテキスト・ラベルには、アダプタ変数のデータ型が表示されます。たとえば、文字列は UUID 変数のデータ型です。

- **マップ先:** このリストには、「IT リソース」などアダプタ変数に設定できるマッピング・タイプが表示されます。

場所や連絡先にアダプタ変数をマップすると、Oracle Identity Manager では、アダプタ変数のマッピング先の場所や連絡先の特定タイプの値のあるリストが有効になります。また、カスタム・プロセス・フォームにアダプタ変数をマップし、このフォームに子表がある場合、Oracle Identity Manager では隣接するリストが有効化されます。このリストから、アダプタ変数のマッピング先となる子表を選択します。カスタム・プロセス・フォームの場所、連絡先または子表にアダプタ変数をマップしない場合、このリストは無効になります。

- **修飾子:** このリストには、IT Asset などの「マップ先」リストで選択したマッピングの修飾子が含まれます。
- **古い値:** 最初に「修飾子」チェック・ボックスで選択した値にアダプタ変数をマップするかどうかを指定します。プロセス・タスクに関連付けられたプロセス・タスク・アダプタは、プロセス・フォームのフィールドの一部が変更されると、条件付きでトリガーされる場合があります。「古い値」オプションを選択しており、プロセス・タスクが Conditional とマークされている場合、アダプタに渡される値はフィールドの以前の値、あるいはマッピングが選択されている変数です。これはパスワードを受け入れるフィールドに使用できます。たとえば、パスワードの同一の値への設定を不可にする場合、古い値を比較に使用できます。カスタム・プロセス・フォームの子表に属するフィールドにアダプタ変数をマップしない場合、このチェック・ボックスは無効になります。

注意: 「修飾子」と「マップ先」リストでの選択に応じて、「アダプタ・マッピング」ダイアログ・ボックスに表示されるフィールドが異なる場合があります。

「通知」タブ

図 12-25 に、「タスクの詳細」ダイアログ・ボックスの「通知」タブを示します。

図 12-25 「通知」タブ



このタブでは、現行プロセス・タスクが特定のステータスに達したときに生成される電子メール通知を指定します。タスクが達する各ステータスについて、個別に電子メール通知を生成できます。電子メール通知が有効でなくなった場合は、「通知」タブから削除できます。

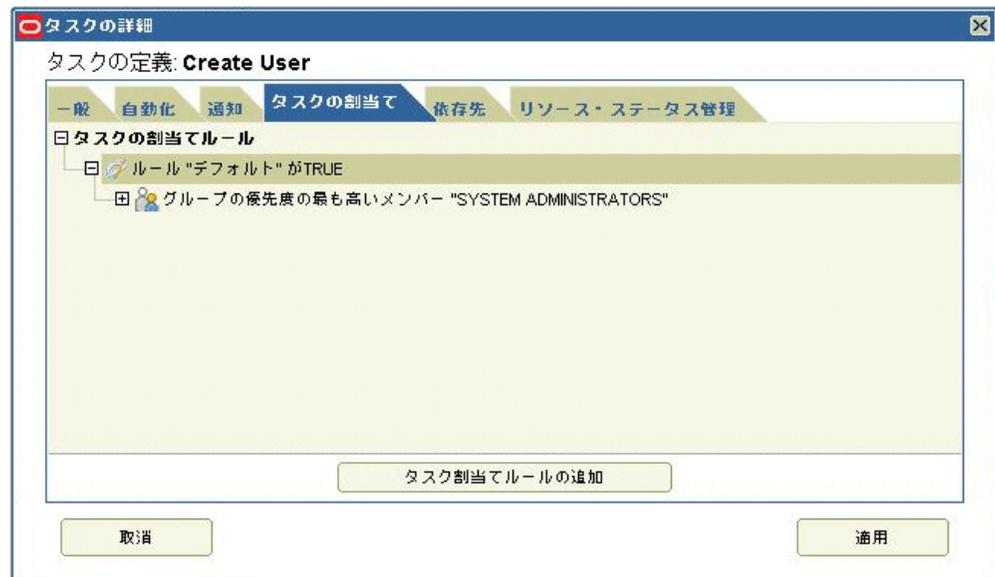
注意： Oracle Identity Manager でユーザーに電子メール通知を送信する場合、最初に「Email Definition」フォームを使用して、電子メール・メッセージのテンプレートを作成する必要があります。

ダイアログ・ボックスには、「通知の追加」、「通知の削除」および「通知の編集」の3つのボタンがあります。これらのボタンを使用して通知の追加、削除および編集を実行し、通知タブを構成できます。

「タスクの割当て」タブ

図 12-26 に、「タスクの詳細」ダイアログ・ボックスの「タスクの割当て」タブを示します。

図 12-26 「タスクの割当て」タブ



このタブでは、現行タスクの割当てルールを追加します。ここでは、ルール、タイプの割当て、タスクを割り当てる必要のある対象、アダプタ、電子メールのテンプレートおよびエスカレーション時間の追加オプションがあります。追加されたルールは、優先度に基づいてツリー形式で表示されます。ルールを右クリックしたときに表示されるショートカット・メニューには、ルールの優先度の変更、およびルールの編集または削除のオプションがあります。

「**タスク割当てルールの追加**」をクリックすると、[図 12-27](#) に示すとおり、割当てに必要な各種入力フィールドのある「**タスク割当てルール**」ダイアログ・ボックスが開きます。

図 12-27 「タスク割当てルール」ダイアログ・ボックス

タスク割当てルール

タスク割当て値の指定

ルール名 * 🔍

割当てタイプ * 🔍

割当て先 🔍 クリア

アダプタ 🔍 クリア

電子メール・テンプレート 🔍 クリア

電子メールの送信

エスカレーション時間(ミリ秒)

* 必須フィールドを示します

追加 閉じる

「タスク割当てルール」ダイアログ・ボックスには、次のオプションがあります。

- **ルール名**：ルールのリストのある参照フィールド。
- **割当てタイプ**：割当てタイプの次のオプションのある参照フィールド。
 - 最小ロードのオブジェクト管理ユーザー
 - 最小ロードのグループ・ユーザー
 - リクエスト・ターゲット・ユーザーのマネージャ
 - 優先度の最も高いオブジェクト認可ユーザー
 - オブジェクト管理者
 - ユーザー
 - 優先度の最も高いグループ・ユーザー
 - 最小ロードのオブジェクト認可ユーザー
 - リクエストのマネージャ
 - グループ
- **割当て先**：参照フィールド。このフィールドの値は、「割当てタイプ」フィールドの選択に応じて異なります。したがって、「割当てタイプ」フィールドで選択した値が最初に検証されます。
- **アダプタ**：使用可能なタスク割当てアダプタのリストを示す参照フィールド。
- **電子メール・テンプレート**：選択元となる電子メール・テンプレートのリストのあるダイアログ・ボックスを開く参照フィールド。
- **電子メールの送信**：チェック・ボックス。選択した場合、現行プロセス・タスクの割当て後に Oracle Identity Manager からユーザーまたはユーザー・グループに電子メール通知が送信されます。

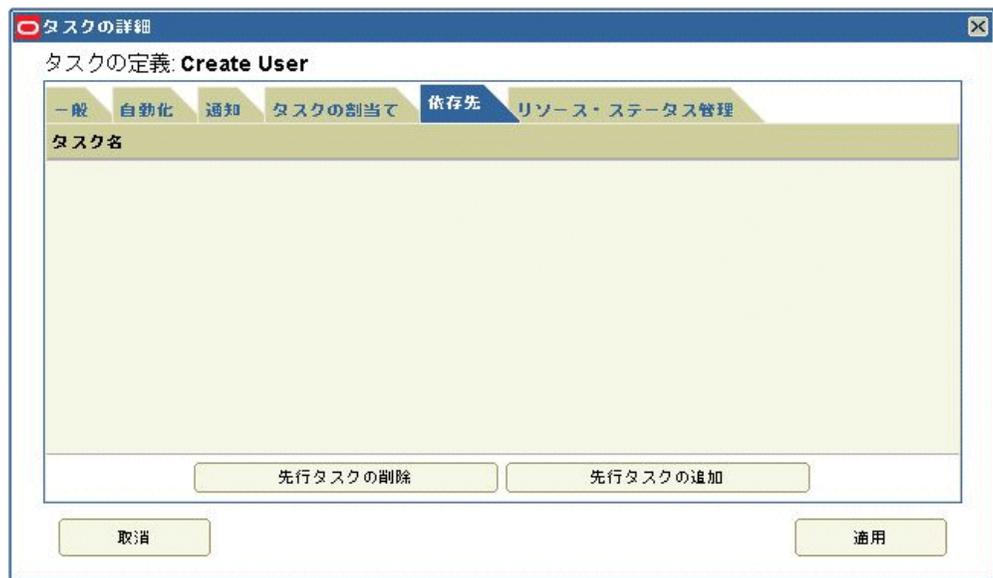
- **エスカレーション時間 (ms)** : ユーザーまたはユーザー・グループがプロセス・タスクを完了するまでの時間 (ミリ秒) を指定するテキスト・フィールド。ユーザーまたはユーザー・グループは、Oracle Identity Manager によってトリガーされるルールに関連付けられます。このプロセス・タスクが割当ての時間内に完了しない場合、Oracle Identity Manager ではこのタスクを別のユーザーまたはユーザー・グループに割り当てます。エスカレーション・ルールは、割当てタイプ・パラメータで定義された順序に従います。

割当てルールが作成されると、「タスクの詳細」ダイアログ・ボックスの「タスクの割当て」タブにツリー構造で表示されます。

「依存先」タブ

図 12-28 に、「タスクの詳細」ダイアログ・ボックスの「依存先」タブを示します。

図 12-28 「タスクの詳細」ダイアログ・ボックス



このタブでは、現行のタスクの依存先タスクを追加します。これはタスク間の依存性の設定に使用できます。このダイアログ・ボックスは、このリストからのタスクを追加および削除するボタンで構成されています。このリストのタスクは、現行タスクより先に実行する必要があります。

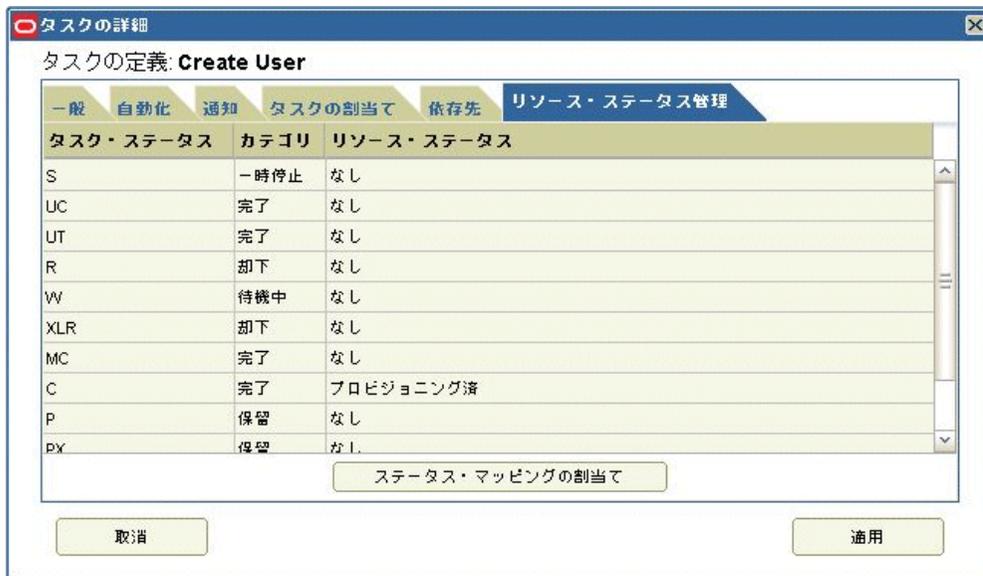
「先行タスクの追加」をクリックすると、「先行タスクの割当て」ダイアログ・ボックスが表示されます。このダイアログ・ボックスでは、タスクとその使用先である対応ワークフローが一覧表示されます。リストからタスクを選択して、「OK」をクリックします。

リストからタスクを選択して「先行タスクの削除」をクリックすると、リストからタスクが削除されます。

「リソース・ステータス管理」タブ

図 12-29 に、「タスクの詳細」ダイアログ・ボックスの「リソース・ステータス管理」タブを示します。

図 12-29 「リソース・ステータス管理」タブ



このタブでは、プロセス・タスクのステータスと、その割当て先リソース・オブジェクトのプロビジョニング・ステータスの間のリンクを確立します。

リソース・オブジェクトには、ユーザーやアプリケーションへのリソースのプロビジョニングに使用するデータが含まれます。このデータには承認プロセスおよびプロビジョニング・プロセスが含まれます。また、リソース・オブジェクトには事前定義されたプロビジョニング・ステータスがあります。プロビジョニング・ステータスは、プロビジョニングの開始後、リソース・オブジェクトのライフサイクル全体で変化します。プロビジョニング・ステータスは、リソース・オブジェクトがターゲットのユーザーや組織にプロビジョニングされる際、そのライフサイクルを通じて様々なステータスを示します。リソース・オブジェクトのプロビジョニング・ステータスは、関連する承認プロセスとプロビジョニング・プロセスで構成されるタスクと同様、これらのステータスによって決定されます。このため、プロセス・タスクのステータスと、その割当て先リソース・オブジェクトのプロビジョニング・ステータスの間のリンクを指定する必要があります。

このタブには、タスク・ステータスとリソース・ステータスを表示する2つの列があります。マッピングが実行されなかった場合は、リソース・ステータス列のリストには、すべてのタスク・ステータスについて、値が「なし」と表示されます。「ステータス・マッピングの割当て」をクリックすると、「オブジェクト・ステータス」ダイアログ・ボックスが表示されます。このダイアログ・ボックスには、選択元であり、タスク・ステータスのマッピング先であるリソース・ステータスのリストがあります。

「タスクの詳細」ダイアログ・ボックスのすべてのタブで変更を行った後、「適用」をクリックしてすべての変更をタスクに適用します。または、「取消」をクリックして操作を取り消します。

12.6.4.6 レスポンスの構成

レスポンス・アイコンを右クリックすると、レスポンス構成オプションのある「レスポンスの詳細」ダイアログ・ボックスが開きます。図 12-30 に、「レスポンスの詳細」ダイアログ・ボックスを示します。

図 12-30 「レスポンスの詳細」ダイアログ・ボックス

「レスポンスの詳細」ダイアログ・ボックスには、次のフィールドがあります。

- **レスポンス・コード**: レスポンス・コードの指定に使用します。このレスポンスのコードは、タスクのレスポンスを一意に識別します。
- **レスポンス・ステータス**: この参照フィールドは、「取消」、「完了」、「却下」などのレスポンス・ステータスの選択に使用します。
- **レスポンスの説明**: レスポンスの説明に使用します。

レスポンス構成情報を指定した後、「レスポンスの更新」をクリックしてレスポンスの入力を適用します。デザイナー・ページでは、レスポンス・コードはレスポンス・アイコンに表示されません。

12.6.5 データ・フローの構成

データ・フローは、ユーザーが情報を入力せずにワークフロー・フォーム・フィールドにデータを転送する際に使用されます。これはプロビジョニングとリコンシリエーションの両方に使用されます。プロビジョニングの場合は、フォーム・データ・フローが使用されます。リコンシリエーションの場合は、リコンシリエーション・データ・フローが使用されます。

ここでは、次のトピックについて説明します。

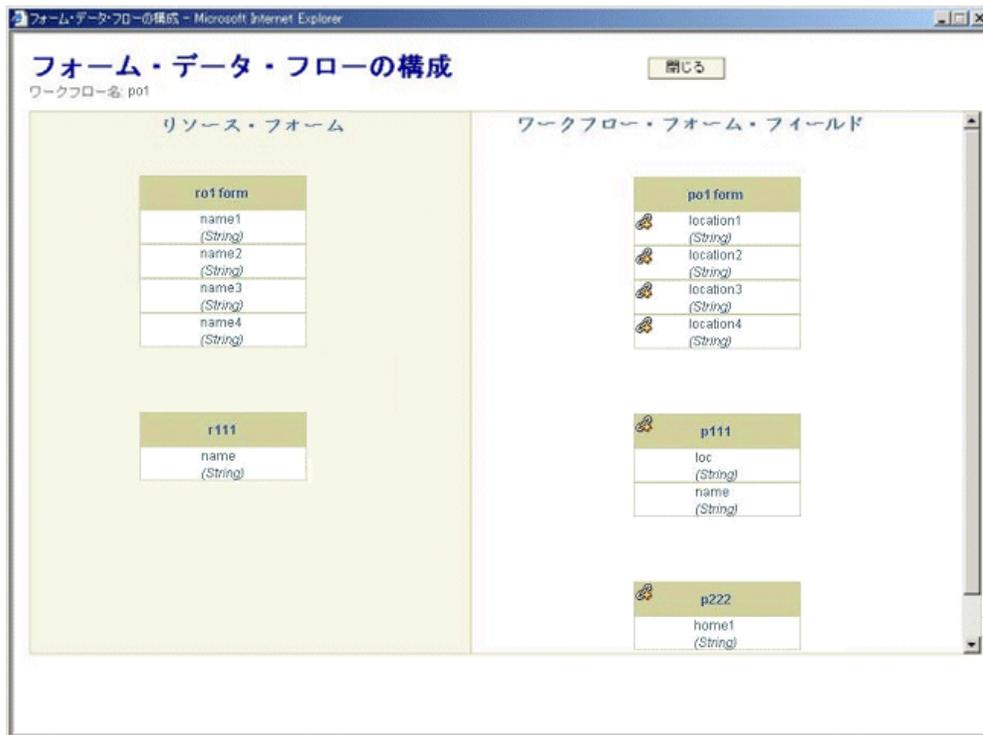
- [フォーム・データ・フロー](#)
- [リコンシリエーション・データ・フロー](#)

12.6.5.1 フォーム・データ・フロー

フォーム・データ・フローは、リソース・フォーム・フィールドとワークフロー・フォーム・フィールド間のデータ・フローの設定に使用されます。データ・フローは、次の手順を実行して開く「フォーム・データ・フローの構成」ページで構成できます。

1. 左ナビゲーション・ペインで「リソース管理」をクリックし、続いて「管理」をクリックします。「リソース検索」ページが表示されます。
2. リソースを検索します。
3. リソース名をクリックしてリソースを選択します。「リソースの詳細」ページが表示されます。
4. 「追加詳細」リストから「リソース・ワークフロー」を選択します。「リソース・ワークフロー」ページが表示されます。
5. 「フォーム・データ・フロー」列では、フォームがアタッチされたワークフローについてのみ、「構成」リンクが表示されます。フォームは、ワークフロー・フォームでも関連リソースのフォームのどちらにもできます。「構成」をクリックすると、[図 12-31](#) に示す「フォーム・データ・フローの構成」ページが開きます。

図 12-31 「フォーム・データ・フローの構成」ページ



フィールド間でデータ・フローを追加すると、ソース・フィールドから宛先フィールドへのフォーム・フィールド値の自動転送が可能になります。ソース・フィールドはリソース・フォームからのものであり、宛先フィールドはプロセス・フォームからのものです。

フォーム・データ・フローのルールは次のとおりです。

- 各宛先フィールドで指定できるソース・フィールドは1つのみです。つまり、プロセス・フォーム・フィールドは、複数のソース・フィールドの宛先フィールドとしては機能できません。
- リソース親フォーム・フィールドは、プロセス親フォーム・フィールドまたはプロセス子フォーム・フィールドのどちらにでもフローできます。

- リソース子フォーム・フィールドは、プロセス子フォーム・フィールドにのみフローできます。
- データ・フローは常にリソース・フォームからプロセス・フォームへのものであり、逆はありません。

「フォーム・データ・フローの構成」ページの左側のセクションにはリソース・フォームが表示され、右側のセクションにはワークフロー・フォームとその個々のフィールドが表示されます。宛先アイコンは、親ワークフロー・フォーム・フィールドに表示されます。リンク・アイコンは、ワークフローの子表に表示されます。リンク・アイコンをクリックすると、リソース・フォームでのリンクに使用できるオプションが表示されます。

リソース・フォーム・フィールドまたは子表のリンクをクリックすると、データ・フローを生成し、そのデータ・フローを表すリンクを表示できます。フォーム・フィールド間のリンクは青です。表レベルでの子表間のリンクは茶色です。

リンクが確立すると、対応するワークフロー・フィールドまたは表のアイコンが、リンク切れアイコンに変化します。リンク切れアイコンをクリックすると、データ・フローを削除できます。

12.6.5.2 リコンシリエーション・データ・フロー

リコンシリエーション・データ・フローはフォーム・データ・フローと類似しています。ただし、フローがリソース・フィールドとフォーム・フィールド間のものではなく、リコンシリエーション・フィールドからワークフロー・フィールドへのものである点が異なります。信頼できるソースの場合、ワークフロー・フォーム・フィールドのかわりにユーザー属性が表示されます。リコンシリエーション・データ・フローのユーザー・インタフェースも、フォーム・データ・フローのものと類似しています。

「リコンシリエーション・データ・フローの構成」ページを使用して、ターゲット・リソースまたは信頼できるソースのデータ要素と Oracle Identity Manager 内のリンク対象フィールド間のリレーションシップを定義します。

関連リソースの「リコンシリエーション・フィールド」セクションで定義したフィールドのみ、マッピングに使用可能です。このマッピングを使用して、ターゲット・システムからのリコンシリエーション・イベントによって提供された情報を Oracle Identity Manager のどのフィールドに移入するかを決定します。また、ターゲット・リソースでは、キー・フィールドはこのタブ上に示されます。キー・フィールドとは、「Reconciliation Manager」フォームの「Processes Matched Tree」タブで生成される一致に対して、プロセス・フォームとリコンシリエーション・イベントの値が同一である必要があるフィールドです。

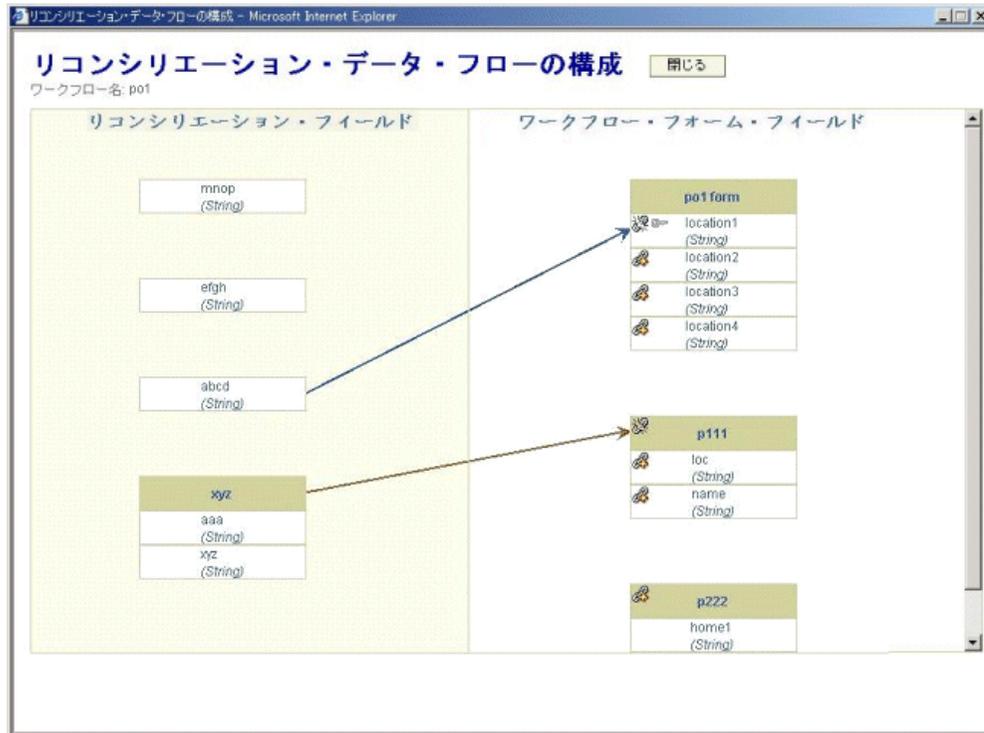
注意： 関連リソースの「リコンシリエーション・フィールド」タブで作成されたリコンシリエーション・フィールドのタイプは、「複数値」、「文字列」、「数値」、「日付」、「IT リソース」のいずれかになります。

リコンシリエーション・データ・フローを「リコンシリエーション・データ・フローの構成」ページで構成します。このページは、「フォーム・データ・フローの構成」ページと類似しています。リコンシリエーション・データ・フローのルールは次のとおりです。

- ワークフロー・フォーム・フィールドまたは子表をリコンシリエーション・フィールドにマップする場合、最初のを削除しないかぎり、別のフィールドにはマップできません。
- 各リコンシリエーション・フィールドのマッピングは1度のみ可能です。

図 12-32 に、「リコンシリエーション・データ・フローの構成」ページを示します。

図 12-32 「リコンシリエーション・データ・フローの構成」ページ



フォーム・データ・フローの場合には表示されませんが、リコンシリエーション・データ・フローのその他のプロパティは、キー・リコンシリエーション・フィールドと呼ばれます。データ・フロー用にマップされた各ワークフロー・フィールドは、リコンシリエーションのキー・フィールドとして設定できます。つまり、このフィールドに対応するリコンシリエーション・ルールを満たす必要があります。これは、確立したデータ・フローの隣に無効のキー・アイコンの形式で表示されます。デフォルト設定では、各フィールドはキー・フィールドではありません。フィールドをキー・フィールドに設定するには、キー・アイコンをクリックします。キー・アイコンを再度クリックすると、キー・フィールドの設定が解除されます。

キー・アイコンをクリックするとフィールドがキー・フィールドに設定され、アイコンが有効なキー・アイコンに変化します。アイコンを再度クリックすると、フィールドのキー・フィールド設定が解除されます。

関連項目：

- ワークフロー・デザイナーでのローカライゼーションについては、『Oracle Identity Manager グローバリゼーション・ガイド』の「ワークフロー・デザイナーのローカライゼーション」を参照してください。
- ワークフロー・デザイナーのカスタマイズの詳細は、『Oracle Identity Manager 管理およびユーザー・コンソール・カスタマイズ・ガイド』の付録 A を参照してください。
- ワークフロー・デザイナーで使用される API メソッドについては、『Oracle Identity Manager API 使用法ガイド』の「新機能」の章を参照してください。

12.7 IT リソースの作成

注意：この機能は、Design Console から管理およびユーザー・コンソールに移行中です。現行の Oracle Identity Manager のリリースでは、この機能は両方のコンソールで使用可能です。

IT リソースを作成するには、次の手順を実行します。

1. 「リソース管理」を開きます。
2. 「IT リソースの作成」をクリックします。
3. 「ステップ 1: IT リソース情報の入力」 ページで、次の情報を入力します。
 - **IT リソース名:** IT リソースの名前を入力します。
 - **IT リソース・タイプ:** IT リソースの IT リソース・タイプを選択します。
Remote Manager タイプの IT リソースを作成する場合は、「IT リソース・タイプ」リストから「Remote Manager」を選択します。
 - **Remote Manager:** 特定の Remote Manager に IT リソースを関連付けるには、このリストから Remote Manager を選択します。Remote Manager に IT リソースを関連付けない場合は、このフィールドを空欄のままにします。
4. 「続行」をクリックします。
5. 「ステップ 2: IT リソース・パラメータ値の指定」 ページで、IT リソースのパラメータ値を指定して、「続行」をクリックします。

「ステップ 3: IT リソースへのアクセス権限の設定」 ページが表示されます。このページで、作成する IT リソースに関する「読取り」、「書込み」および「削除」権限のあるグループのリストに SYSTEM ADMINISTRATORS グループがデフォルトで表示されます。
6. IT リソースにグループを割り当て、そのグループのアクセス権限を設定する場合は、「ステップ 3: IT リソースへのアクセス権限の設定」 ページで次を実行します。
 - a. 「グループの割当て」をクリックします。
 - b. IT リソースに割り当てるグループの場合は、「割当て」および設定するアクセス権限を選択します。たとえば、ALL USERS グループを割り当て、このグループに「読取り」および「書込み」権限を設定するには、このグループについて「割当て」チェック・ボックスを選択するのみでなく、行の各チェック・ボックスを選択する必要があります。
 - c. 「割当て」をクリックします。
7. IT リソースに割り当てられているグループのアクセス権限を変更する場合は、「ステップ 3: IT リソースへのアクセス権限の設定」 ページで次を実行します。

注意：SYSTEM ADMINISTRATORS グループのアクセス権限は変更できません。IT リソースに割り当てた他のグループのみ、アクセス権限の変更が可能です。

- a. 「**権限の更新**」をクリックします。
 - b. このページに表示されているグループに対して特定のアクセス権限を設定または削除するかどうかに応じて、対応するチェック・ボックスを選択または選択を解除します。
 - c. 「**更新**」をクリックします。
8. IT リソースからグループの割当てを解除する場合は、「ステップ 3: IT リソースへのアクセス権限の設定」 ページで次を実行します。

注意: SYSTEM ADMINISTRATORS グループは割当て解除できません。IT リソースに割り当てた他のグループのみ、割当てを解除できます。

- a. 割当て解除するグループについて「**割当て解除**」チェック・ボックスを選択します。
 - b. 「**割当て解除**」をクリックします。
9. 「**続行**」をクリックします。
10. 「ステップ 4: IT リソースの詳細の確認」 ページで、第 1、第 2 および第 3 ページに入力した情報を確認します。いずれかのページに入力したデータを変更する場合は、「**戻る**」をクリックしてそのページに戻ってから必要な変更を行います。
11. IT リソースの作成を続行するには、「**続行**」をクリックします。
12. 「ステップ 5: IT リソースの接続結果」 ページに、IT リソース情報を使用して実行された接続テストの結果が表示されます。テストが正常に終了している場合、「**作成**」をクリックします。テストが失敗した場合は、次のいずれかの手順を実行できます。
- 「**戻る**」をクリックして前のページに戻り、IT リソース作成情報を修正します。
 - 「**取消**」をクリックして手順を停止し、最初のステップからやりなおします。
 - 「**続行**」をクリックして作成プロセスを続行します。後で問題を解決して、「診断ダッシュボード」を使用して接続テストを再実行できます。

注意: エラーが発生しなかった場合は、ボタンのラベルは「**続行**」ではなく、「**作成**」となります。

詳細は 16-13 ページの「**基本接続性のテスト**」を参照してください。

13. 「**終了**」をクリックします。

12.8 IT リソースの管理

注意: この機能は、Design Console から管理およびユーザー・コンソールに移行中です。現行の Oracle Identity Manager のリリースでは、この機能は両方のコンソールで使用可能です。

IT リソースを検索するには、次の手順を実行します。

1. 「リソース管理」を開きます。
2. 「IT リソースの管理」をクリックします。
3. 「IT リソースの管理」ページで、次のいずれかの検索オプションを使用して、表示する IT リソースを検索できます。
 - IT リソース名: IT リソースの名前を入力して、「**検索**」をクリックします。
 - IT リソース・タイプ: IT リソースの IT リソース・タイプを選択して、「**検索**」をクリックします。
 - 「**検索**」をクリックします。

「IT リソースの管理」ページで、検索基準を満たしている IT リソースのリストが表示されます。この時点から、IT リソースに関する次のいずれかの手順を実行できます。

- [IT リソースの表示](#)
- [IT リソースの変更](#)
- [IT リソースの削除](#)

12.8.1 IT リソースの表示

IT リソースを表示するには、次の手順を実行します。

1. 検索結果に表示されている IT リソースのリストから、IT リソース名をクリックします。

注意: IT リソースを編集する場合は、同じ行の編集アイコンをクリックします。

2. IT リソース・パラメータおよびその値を表示する場合は、ページの上にあるリストから「**IT リソース・パラメータ**」を選択します。同様に、IT リソースに割り当てられた管理グループを表示する場合は、リストから「**IT リソース管理グループ**」を選択します。

12.8.2 IT リソースの変更

IT リソースを変更するには、次の手順を実行します。

1. 検索結果に表示されている IT リソースのリストから、変更する IT リソースの編集アイコンをクリックします。
2. IT リソースのパラメータ値を変更する場合は、次の手順を実行します。
 - a. ページ上部にあるリストから「**詳細およびパラメータ**」を選択します。
 - b. パラメータ値で必要な変更を加えます。
 - c. 変更内容を保存するには、「**更新**」をクリックします。
3. IT リソース・パラメータに割り当てられた管理グループを変更する場合は、最初にページ上部のリストから「**管理グループ**」を選択して、必要な変更を加えます。
4. 管理グループの割当てを解除するには、グループ名が表示されている行の「**割当て解除**」チェック・ボックスを選択して、「**割当て解除**」をクリックします。

注意：

- 「**割当て解除**」をクリックすると、選択した管理グループが即時に IT リソースから割当て解除されます。選択した管理グループの割当て解除を行うかどうかの確認は求められません。
 - SYSTEM ADMINISTRATORS グループは割当て解除できません。
-
-

5. IT リソースに新規の管理グループを割り当てる場合は、次の手順を実行します。
 - a. 「**グループの割当て**」をクリックします。
 - b. IT リソースに割り当てる管理グループの場合は、アクセス権限チェック・ボックスと「**割当て**」チェック・ボックスを選択します。
 - c. 「**割当て**」をクリックします。
6. 現在 IT リソースに割り当てられている管理グループのアクセス権限を変更するには、次の手順を実行します。
 - a. 「**権限の更新**」をクリックします。
 - b. 実行する変更内容に応じて、表のチェック・ボックスを選択または選択を解除します。

注意： SYSTEM ADMINISTRATORS グループのアクセス権限は変更できません。

- c. 変更を保存するには、「**更新**」をクリックします。

12.8.3 IT リソースの削除

IT リソースを削除するには、次の手順を実行します。

1. 検索結果に表示されている IT リソースのリストから、削除する IT リソースの「**削除**」アイコンをクリックします。
2. IT リソースの削除を確認するには、「**削除の確認**」をクリックします。

12.9 スケジュール済タスクの作成

注意：

- この機能は、Design Console から管理およびユーザー・コンソールに移行中です。現行の Oracle Identity Manager のリリースでは、この機能は両方のコンソールで使用可能です。
 - スケジュール済タスクを削除する場合は、Design Console を使用してください。
 - 事前定義のスケジュール済タスクについては、『Oracle Identity Manager デザイン・コンソール・ガイド』の「事前定義済のスケジュール済タスク」を参照してください。
-
-

スケジュール済タスクを作成するには、次の手順を実行します。

1. 「リソース管理」を開きます。
2. 「スケジュール済タスクの作成」をクリックします。
3. 「ステップ 1: スケジュール済タスクの詳細およびスケジュールの入力」ページで、次の情報を入力します。
 - **タスク名**：スケジュール済タスクの名前を入力します。
 - **クラス名**：スケジュール済タスクを実行するための Java クラスを指定します。これは、拡大鏡アイコンをクリックして「クラス名」値リストを開き、クラスを選択します。または、クラス名を入力します。
 - **ステータス**：タスクを作成後に有効にするかどうかを指定します。有効な場合、タスクは使用可能な状態です。タスクが無効の場合、使用する前に有効化する必要があります。
 - **最大再試行数**：このフィールドには整数値を入力します。この数値は、タスクに ERROR ステータスを割り当てる前に、Oracle Identity Manager で行われるタスクの試行回数です。デフォルト値は 1 回です。
 - **次回開始**：日付エディタを使用してタスク実行の日付を指定します。日付エディタの日付値を選択した後は、「次回開始」フィールドに自動表示される時刻の値を変更できません。
 - **頻度**：タスクの実行頻度を指定します。
4. 「続行」をクリックします。
5. 「ステップ 2: スケジュール済タスク属性の定義」ページで、次のようにタスクの属性を作成します。
 - a. 「属性」フィールドに属性の名前を入力します。
 - b. 「次の内容で」フィールドに属性の値を入力します。
 - c. 「追加」をクリックします。
 - d. 追加する各属性についてステップ 5a ~ 5c を繰り返します。

注意： 追加した各属性は表に表示されます。追加された属性は、スケジュール済タスク作成の手順が完了するまで Oracle Identity Manager データベースに送信されません。必要であれば、新たに追加された属性の値を変更できます。これは、「属性」リストから選択して値を編集します。属性を削除するには、その属性に表示されている十字のアイコンをクリックします。

6. 「続行」をクリックします。

7. 「ステップ 3: スケジュール済タスクの詳細の確認」ページで、第 1 および第 2 ページに入力した情報を確認します。この情報を変更する場合は、「戻る」を使用して第 1 または第 2 ページに戻ってから必要な変更を行います。
8. スケジュール済タスクの作成を続行するには、「続行」をクリックします。
9. 作成プロセスが正常に終了すると、スケジュール済タスクが作成されたことを示すメッセージが表示されます。

12.10 スケジュール済タスクの管理

注意：この機能は、Design Console から管理およびユーザー・コンソールに移行中です。現行の Oracle Identity Manager のリリースでは、この機能は両方のコンソールで使用可能です。

スケジュール済タスクを検索するには、次の手順を実行します。

1. 「リソース管理」を開きます。
2. 「スケジュール済タスクの管理」をクリックします。
3. 「スケジュール済タスクの管理」ページで、スケジュール済タスクを検索する検索オプションを単独で、または組み合わせて使用できます。検索基準を指定したら、「検索」をクリックします。

検索結果表の各行に、スケジュール済タスクに関する次の情報が表示されます。

- スケジュール済タスク：スケジュール済タスクの名前が表示されます。スケジュール済タスクの詳細を表示するには、列内でその名前をクリックします。
- ステータス：スケジュール済タスクのステータスが表示されます。このステータスは次のいずれかです。
 - INACTIVE: スケジュール済タスクは正常に実行され、「次回開始」フィールドに指定された日時で再度実行するように設定されています。
 - RUNNING: スケジュール済タスクは現在実行中です。
 - COMPLETED: スケジュール済タスクは正常に実行されましたが、再実行されません（頻度が「1回」のオプションに設定されています）。
 - ERROR: エラーが発生したため、タスクを起動できませんでした。
 - FAILED: スケジュール済タスクは実行時に失敗しました。
- 頻度：スケジュール済タスクを実行するように設定した頻度が表示されます。
- 最終開始：スケジュール済タスクが最後の実行を開始した日時が表示されます。
- 最終停止：スケジュール済タスクが最後の実行を終了した日時が表示されます。
- 次回開始：スケジュール済タスクが次の実行を開始する日時が表示されます。
- 編集：各スケジュール済タスクの編集アイコンが表示されます。タスクを変更する場合は、編集アイコンをクリックします。
- 有効化：特定のスケジュール済タスクでは、この列に「有効化」リンクが表示されている場合は、スケジュール済タスクが現在無効になっており、「有効化」リンクをクリックしてタスクを有効化できます。「有効」が表示されている場合は、タスクはすでに有効化されています。
- 無効化：特定のスケジュール済タスクでは、この列に「無効化」リンクが表示されている場合は、スケジュール済タスクが現在有効になっており、「無効化」リンクをクリックしてタスクを無効化できます。「無効」が表示されている場合は、タスクはすでに無効化されています。

- 即時実行: 特定のスケジュール済タスクでは、「ステータス」列に INACTIVE が表示され、「有効化」列に（タスクが有効な状態にあることを示す）グレーのボタンが表示されている場合は、「即時実行」列にあるボタンをクリックしてタスクを実行できます。次のいずれかの条件に該当する場合は、このボタンは使用できません。
 - 「ステータス」列に RUNNING が表示されている（タスクが現在実行中である）場合
 - 「有効化」列に緑のボタンが表示されている（また、「無効化」列にグレーのボタンが表示されている）、つまりタスクの実行前に有効にする必要がある場合

注意: 管理およびユーザー・コンソールでは、実行停止オプションは使用できません。タスクを停止する場合は、Design Console の「Task Scheduler」フォームの「Stop Execution」をクリックしてください。

以降では、「スケジュール済タスクの管理」ページの機能を使用して実行できる手順について説明します。

- [スケジュール済タスクの表示](#)
- [スケジュール済タスクの変更](#)

12.10.1 スケジュール済タスクの表示

スケジュール済タスクの詳細を表示するには、「スケジュール済タスクの管理」ページに表示された検索結果表の「スケジュール済タスク」列にあるタスク名をクリックします。

スケジュール済タスクの詳細を表示した後、スケジュール済タスクを変更する場合は、「編集」をクリックします。また、スケジュール済タスクを実行する場合は、「即時実行」をクリックします。前述したとおり、現在 ENABLED であるスケジュール済タスクのみ実行可能です。

12.10.2 スケジュール済タスクの変更

スケジュール済タスクの詳細を変更するには、次の手順を実行します。

1. スケジュール済タスクのリストを表示する検索結果表で、表の「編集」列の編集アイコンをクリックします。

注意: タスクを実行するには、検索結果表の最初の列にあるタスク名をクリックしてから、「即時実行」をクリックします。「即時実行」をクリックした後は、この手順の残りのステップを実行する必要はありません。

スケジュール済タスクを実行中に停止する場合は、Design Console の「Stop Execution」機能を使用します。この機能の詳細は、『Oracle Identity Manager デザイン・コンソール・ガイド』の「Task Scheduler」フォームを参照してください。

2. 「スケジュール済タスクの詳細」ページでは、タスク名とクラス名を除き、スケジュール済タスクの詳細をすべて変更できます。「スケジュール済タスクの詳細」ページに表示される各 GUI 要素については、12-49 ページの「[スケジュール済タスクの作成](#)」を参照してください。
3. 「続行」をクリックします。
4. 必要に応じて、スケジュール済タスクの属性を変更します。既存の属性値の変更、属性の削除または新規属性の追加が可能です。
5. 「変更の保存」をクリックして、変更内容をすべてデータベースにコミットします。

デプロイメント・マネージャの使用

デプロイメント・マネージャは Oracle Identity Manager の設定のエクスポートとインポートを行うツールです。デプロイメント・マネージャを使用すると、Oracle Identity Manager の設定を構成しているオブジェクトをエクスポートできます。通常、1つのデプロイメントからもう1つに、たとえばテスト・デプロイメントから本番デプロイメントに設定を移行したり、システムのバックアップを作成する際にデプロイメント・マネージャを使用します。

重要: デプロイメント・マネージャを使用するには、管理およびユーザー・コンソールを実行するコンピュータに JRE 1.4.2 がインストールされている必要があります。

設定内のオブジェクトの一部または全部を保存することができます。これにより、テスト環境で設定を開発およびテストし、テスト済のオブジェクトを後で本番環境にインポートすることができます。オブジェクトと、そのすべての依存オブジェクト、およびすべての関連オブジェクトを同時にエクスポートおよびインポートできます。または、各オブジェクトを個別にエクスポートおよびインポートできます。

この章の内容は、次のとおりです。

- [デプロイメントのエクスポート](#)
- [デプロイメントのインポート](#)
- [デプロイメント・マネージャの使用に関するベスト・プラクティス](#)

13.1 デプロイメントのエクスポート

オブジェクトは、Oracle Identity Manager システムからエクスポートして、XML ファイルに保存できます。デプロイメント・マネージャにあるエクスポート・ウィザードを使用して、エクスポート・ファイルを作成することができます。オブジェクトをタイプごとに追加します。一度に 1 タイプずつ、たとえばユーザー・グループ、フォーム、プロセスなどの順で追加します。子オブジェクトや依存性を持つオブジェクトを選択している場合は、追加するかどうかを選択できます。1 つのタイプを追加したら、戻って別のオブジェクトを XML ファイルに追加します。必要なオブジェクトの追加が終了すると、デプロイメント・マネージャにより 1 つの XML ファイルにすべて保存されます。

注意：

- ユーザーが、「エクスポート」メニュー項目が割り当てられているグループに属している場合、そのユーザーは、割り当てられた権限に関係なく、エクスポートに使用可能なすべてのオブジェクトをエクスポートできません。

システム管理者はすべてのオブジェクトをエクスポートできます。

- ユーザー定義のフィールドが特定のリソース・オブジェクトに関連付けられている場合、エクスポート・プロセスの際に、次のいずれかのイベントが発生します。

- ユーザー定義フィールドに値（入力された情報）が含まれている場合、デプロイメント・マネージャはそれを依存性とみなします。

- ユーザー定義フィールドに値が含まれていない場合（フィールドは空）、デプロイメント・マネージャはそれを依存性とみなしません。

デプロイメントをエクスポートするには、次の手順を実行します。

1. 管理およびユーザー・コンソールの左ナビゲーション・ペインで、「**デプロイメント管理**」をクリックし、続いて「**エクスポート**」をクリックします。
デプロイメント・マネージャが開き、エクスポート・ウィザードのオブジェクトの検索ページが表示されます。
2. オブジェクトの検索ページで、メニューからオブジェクト・タイプを選択し、検索基準を入力します。
条件フィールドを空のままにしておくと、自動的にアスタリスク (*) が表示され、選択されたタイプのすべてのオブジェクトが検索されます。
3. 「**検索**」をクリックすると、選択したタイプのオブジェクトが検索されます。
オブジェクトを選択するには、オブジェクトのオプションを選択します。
4. 「**子の選択**」をクリックします。
「子の選択」ページに、選択したオブジェクトとそのすべての子オブジェクトが表示されます。
5. エクスポートする子オブジェクトを選択します。
項目を選択または削除するには、適切なオプションを選択します。
「**戻る**」をクリックすると、オブジェクトの検索ページに戻ります。
6. 「**依存性の選択**」をクリックします。
「依存性の選択」ページに、選択したオブジェクトで必要とされるすべてのオブジェクトが表示されます。
7. エクスポートする依存オブジェクトを選択します。
項目を選択または削除するには、項目のオプションを選択します。
「**戻る**」をクリックすると「子の選択」ページに戻ります。

8. 「**確認**」をクリックします。
「**確認**」ページが表示されます。
9. 必要な項目がすべて選択されていることを確認し、「**エクスポート用に追加**」をクリックします。
「**エクスポート用に追加**」をクリックしても、まだエクスポート・ファイルに項目をさらに追加することができます。
「**戻る**」をクリックすると、オブジェクトの検索ページに戻ります。
「**さらに追加**」ページが表示されます。
10. ウィザードを使用して項目をさらに追加し、完了したらウィザードを終了します。目的のオプションを選択し、「**OK**」をクリックします。
「**さらに追加**」を選択した場合は、手順2～7を繰り返します。選択しない場合は、「エクスポート」ページが表示されます。
「エクスポート」ページに現行のエクスポート項目が表示されます。選択項目の隣にあるアイコンは、選択されているオブジェクトのタイプを示しています。サマリー情報ペインに、エクスポートするオブジェクトが表示されます。「**未選択の依存性**」ペインには、エクスポート用に選択しなかった依存オブジェクトまたは子オブジェクトのリストが表示されます。
11. エクスポート・ファイルに変更を加えるには、次の手順を実行します。
 - フォームをクリアするには「**リセット**」をクリックします。
 - アイコン定義を表示するには「**凡例**」をクリックします。
 - 「**オブジェクトの追加**」をクリックしてウィザードを再起動し、エクスポート・ファイルにさらに項目を追加します。
オブジェクトを「**現在の選択**」リストから削除するには、次の手順を実行します。
 - 削除するオブジェクトを右クリックし、ショートカット・メニューから「**削除**」を選択します。オブジェクトに子オブジェクトがある場合、それらの子オブジェクトを一度にすべて削除するには、ショートカット・メニューから「**子も含めて削除**」を選択します。
 - 「**削除**」をクリックして確認します。オブジェクトが、選択した項目の子または依存性の場合、**「未選択の子」**または**「未選択の依存性」**リストに追加されます。
オブジェクトを「**未選択の子**」または「**未選択の依存性**」リストから「**現在の選択**」リストに戻すには、次のようにします。
 - a. オブジェクトを右クリックして、「**追加**」を選択します。
 - b. 「**確認**」をクリックします。
「**確認**」ページが表示されます。
 - c. 「**エクスポート用に追加**」をクリックします。
12. 「**エクスポート**」をクリックします。
「**説明の追加**」ダイアログ・ボックスが表示されます。
13. ファイルの説明を入力します。
この説明は、ファイルがインポートされるときに表示されます。
14. 「**エクスポート**」をクリックします。
別名保存ダイアログ・ボックスが表示されます。
15. ファイル名を入力します。
ファイルを探すためにブラウズすることができます。

16. 「保存」をクリックします。
エクスポート完了ダイアログ・ボックスが表示されます。
17. 「閉じる」をクリックします。

13.2 デプロイメントのインポート

デプロイメント・マネージャを使用して XML ファイルにエクスポートしたオブジェクトは、デプロイメント・マネージャを使用して Oracle Identity Manager にインポートできます。XML ファイルの全部または一部をインポートすることも、複数の XML ファイルを同時にインポートすることもできます。デプロイメント・マネージャは、インポートするオブジェクトの依存性が、インポート時に、または使用するシステムで確実に利用できるかどうかを確認します。インポート中、システム内のオブジェクトをインポート中のオブジェクトに置換できます。たとえば、システムのグループを XML ファイル内で指定されているグループに置換できます。

注意： ユーザーが、「インポート」メニュー項目が割り当てられているグループに属している場合、そのユーザーは、インポートするオブジェクトに対して必要な権限も持っている必要があります。これらのオブジェクト固有の権限がない場合は、インポート操作が失敗します。

システム管理者はすべてのオブジェクトをインポートできます。

ここでは、次のトピックについて説明します。

- [スケジュール済タスクの再インポート時のデプロイメント・マネージャの動作](#)
- [XML ファイルのインポート](#)

注意： メニュー項目への参照を含むデータをインポートする場合は、前もってターゲット・システムにメニュー項目を作成しておく必要があります。

13.2.1 スケジュール済タスクの再インポート時のデプロイメント・マネージャの動作

スケジュール済タスクは、デプロイメント・マネージャを使用してインポートできるオブジェクトの 1 つです。通常、スケジュール済タスクを Oracle Identity Manager 環境にインポートし、実際の本番環境にあわせて後からスケジュールされた属性の値を変更します。ただし、同じ Oracle Identity Manager サーバーに同一のスケジュール済タスクをインポートするのが 2 回目である場合、デプロイメント・マネージャはデータベースにある属性値を上書きしません。その場合、デプロイメント・マネージャは再インポートした XML ファイルの属性値を、対応するデータベース内の属性値と比較します。

次の表に、スケジュール済タスクの再インポート時にデプロイメント・マネージャによって実行される動作についてまとめます。

スケジュール済タスクに、インポートする XML ファイルにある属性値があるか	データベースに対応する属性値があるか	デプロイメント・マネージャのアクション
はい	いいえ	属性値をデータベースに格納します。
いいえ	はい	データベース内の既存の属性値を削除します。
はい	はい (タイムスタンプで示される、より新しい属性値)	データベースには変更がありません。
はい (タイムスタンプで示される、新しい属性値)	はい	新しい属性値でデータベースを更新します。

13.2.2 XML ファイルのインポート

XML ファイルをインポートするには、次の手順を実行します。

1. 管理およびユーザー・コンソールの左ナビゲーション・ペインで、「**デプロイメント管理**」をクリックし、続いて「**インポート**」をクリックします。
2. ファイルを選択します。
「インポート」ダイアログ・ボックスが表示されます。
3. 「**オープン**」をクリックします。
「ファイル・プレビュー」ページが表示されます。
4. 「**ファイルの追加**」をクリックします。
「置換」ページが表示されます。
5. 名前を置換するには、上書きする項目に隣接した「**新しい名前**」フィールドをクリックし、名前を入力します。
置換できる項目はターゲット・システムに存在する項目のみです。
6. 「**次へ**」をクリックします。IT リソース・インスタンスをエクスポートする場合、「IT リソース・インスタンス・データの提供」ページが表示されます。それ以外の場合は「確認」ページに切り替わります。
7. 現行のリソース・インスタンスの値を変更して「**次へ**」をクリックするか、「**スキップ**」をクリックして現行のリソース・インスタンスをスキップするか、「**新規インスタンス**」をクリックして新しいリソース・インスタンスを作成します。
「確認」ページが表示されます。
8. 「確認」ページに表示される情報が正しいことを確認します。
戻って変更するには「**戻る**」をクリックします。それ以外の場合は「**選択内容の表示**」をクリックします。
「デプロイメント・マネージャ - インポート」ページに現行の選択内容が表示されます。
「インポート」ページでは、現行の選択内容の隣にアイコンが表示されます。アイコンは、選択されているオブジェクトのタイプを示しています。右側のアイコンは選択内容のステータスを示しています。選択されたファイルの名前、インポートするオブジェクトのサマリー情報および置換情報がページの左側に表示されます。右側には、「**インポートから削除したオブジェクト**」リストに、インポートされない XML ファイル内のすべてのオブジェクトが一覧表示されます。
9. 必要に応じて次のように変更します。
 - フォームをクリアするには「**リセット**」をクリックします。
 - アイコン定義を表示するには「**凡例**」をクリックします。
 - 「現在の選択」リストからオブジェクトを削除するには、オブジェクトを右クリックし、ショートカット・メニューから「**削除**」を選択します。続いて「**削除**」をクリックしてオブジェクトの削除を確認します。
オブジェクトに子オブジェクトがある場合、それらの子オブジェクトを一度にすべて削除するには、ショートカット・メニューから「**子も含めて削除**」を選択します。項目が「インポートから削除したオブジェクト」リストに追加されます。
 - 「現在の選択」リストに項目に戻すには、リストを右クリックして、「**追加**」をクリックします。
オブジェクトに子オブジェクトがある場合、一度にすべて追加するには、ショートカット・メニューから「**子も含めて追加**」を選択します。
 - 置換するには「**置換の追加**」をクリックします。
 - 別の XML ファイルからオブジェクトを追加するには、「**ファイルの追加**」をクリックして、手順の 2～7 を繰り返します。

- インポートした情報に関する情報を表示するには「情報の表示」をクリックします。「情報」ページが表示されます。
詳細情報を表示するには、「情報レベル・メッセージの表示」オプションを選択し、続いて「メッセージの表示」をクリックします。「閉じる」をクリックして「情報」ページを閉じます。
- 10. 現行の選択内容をインポートするには、「インポート」をクリックします。「確認」ダイアログ・ボックスが表示されます。
- 11. 「インポート」をクリックします。
インポート完了ダイアログ・ボックスが表示されます。
- 12. 「OK」をクリックします。
オブジェクトが Oracle Identity Manager にインポートされます。

13.3 デプロイメント・マネージャの使用に関するベスト・プラクティス

デプロイメント・マネージャの使用に関する推奨実施案と注意点を次に示します。

- システム・オブジェクトはエクスポートしないでください。
- 定義データと業務系データは別々にグループ化します。
- フォームのバージョンには一貫した名前を使用します。
- エクスポート時にはわかりやすい説明を入力します。
- インポートを実行する前に、すべての警告を確認します。
- エクスポートを実行する前に、ターゲット・システムで必要な依存性を確認します。
- インポートによるスケジュール済タスク属性への影響に留意します。
- アダプタをコンパイルしてスケジュール済タスクを有効にします。

注意： 当リリース以降、デプロイメント・マネージャでは、XML ファイルのインポート中にアダプタが自動的にコンパイルされるようになりました。アダプタの自動コンパイルの詳細は、『Oracle Identity Manager Tools リファレンス』の第 9 章を参照してください。

- エンティティ・アダプタは、重要なマッピングしか伴わずに単独でエクスポートするようにして、必要なマッピングは後から手動で作成します。
- データベースを本番環境にインポートする前に、データベースをバックアップします。
- ユーザー定義フォームのインポート時には、正しいバージョンのフォームがアクティブであることを確認します。
- インポートは、システムのアクティビティが低い時間帯に実行します。

関連項目： デプロイメント・マネージャの使用に関連するベスト・プラクティスの詳細は、『Oracle Identity Manager ベスト・プラクティス・ガイド』を参照してください。

レポートの使用

Oracle Identity Manager を使用して、操作データまたは履歴データのレポートを生成できます。これらのレポートには、Oracle Identity Manager ユーザーが使用できるリソースの情報が記載されています。

この章の内容は、次のとおりです。

注意： Oracle Identity Manager のレポート・エンジンは、エンタープライズ・レポート・ソリューションのかわりになるものではありません。Oracle Identity Manager のレポート・エンジンは、大容量データ向けに最適化されておらず、また、エンタープライズ・レポート・アプリケーションのような豊富な機能を備えていません。

特に Oracle Identity Manager の拡張された監査機能を生かすような大規模のデプロイメントでは、エンタープライズ・クラスの専用のレポート・ソリューションをデプロイすることをお勧めします。Oracle Business Intelligence Enterprise Edition などのツールに基づいたソリューションは、大規模な組織に必要な柔軟性、自動化機能、およびパフォーマンスを備えています。

- [操作レポートの概要](#)
- [履歴レポートの概要](#)
- [レポートの実行](#)
- [レポートのデータの表示](#)
- [レポート・フィルタの使用](#)
- [入力パラメータの変更](#)
- [CSV エクスポート](#)
- [詳細ページへのリンク](#)
- [サード・パーティ製ソフトウェアを使用したレポートの作成](#)

14.1 操作レポートの概要

次の各項では、Oracle Identity Manager のデフォルトの操作レポートについて説明します。これらのレポートは、Oracle Identity Manager の管理者と監査者が、運用やコンプライアンスの用途で使用できます。

表 14-1 は、管理およびユーザー・コンソールで使用可能な操作レポートの一覧を示します。

表 14-1 操作レポートの一覧

名前	説明
権限のサマリー	各リソース内のステータス・タイプごとのユーザー数が一覧表示されます。
ポリシー・リスト	システムに定義されたすべてのポリシーのスナップショットが表示されます。
組織別の委任管理者	組織のすべての委任管理者ユーザー・グループが一覧表示されます。
レビューア別のアテステーション・リクエスト	アテステーション・リクエストがレビューアごとに一覧表示されます。
承認者別の承認ステータス	すべての承認タスクのサマリーです。
ユーザー・リソース・アクセス	選択したユーザーのリソースへのアクセス権限が一覧表示されます。
リソース・アクセス・リスト	選択したリソースへのアクセス権限があるすべてのユーザーが一覧表示されます。
ポリシーの詳細	システムに定義された特定のポリシーの詳細が一覧表示されます。
グループ・メンバーシップ・プロファイル	異なるグループ内のユーザー数が一覧表示されます。
OIM パスワードの期限切れ	Oracle Identity Manager パスワードが期限切れになるユーザーが一覧表示されます。
グループ・メンバーシップ	各グループ内のユーザーのスナップショットです。
リソース・パスワードの期限切れ	リソース・パスワードが期限切れになるユーザーが一覧表示されます (Oracle Identity Manager で決定)。
組織構造	階層的組織構造およびユーザー・メンバーシップが一覧表示されます。
初期化済リクエスト	指定の時間間隔で初期化されたすべてのリクエストが一覧表示されます。
ステータス別のリクエスト詳細	指定したステータスのすべてのリクエストの詳細を戻します。
アテステーション・プロセス・リスト	定義したすべてのアテステーション・プロセスのスナップショットです。
プロセス別のアテステーション・リクエスト	アテステーション・リクエストがプロセスごとに一覧表示されます。
アテステーション・リクエストの詳細	選択したアテステーション・リクエストの詳細が一覧表示されます。
財務的に重要なリソース	財務的に意味を持つリソースの詳細が一覧表示されます。
組織別の委任管理者および権限	組織のすべての管理者ユーザー・グループおよび権限が一覧表示されます。
リソース別の委任管理者および権限	リソースのすべての管理者ユーザー・グループおよび権限が一覧表示されます。
リソース別の委任管理者	リソースのすべての管理者および認可者ユーザー・グループが一覧表示されます。

14.2 履歴レポートの概要

次の各項では、Oracle Identity Manager の履歴データ・レポートについて説明します。これらのレポートは、管理者と監査者が、コンプライアンスや監査の用途で使用できます。

表 14-2 は、管理およびユーザー・コンソールで使用可能な履歴レポートの一覧を示します。

表 14-2 履歴レポートの一覧

名前	説明
ユーザー・リソース・アクセス履歴	ユーザーのリソース・アクセス履歴を戻します。
リソース・アクセス・リスト履歴	選択したリソースへのアクセス権限があるすべてのユーザーの履歴を戻します。
ユーザー・プロフィール履歴	ユーザー・プロフィールの履歴を戻します。
ユーザー・メンバーシップ履歴	ユーザー・グループ内のユーザー・メンバーシップの履歴を戻します。
グループ・メンバーシップ履歴	グループ・メンバーシップの履歴を戻します。
リソース・アクティビティ	リソースのすべてのプロビジョニング・アクティビティと承認アクティビティの履歴を戻します。
タスク割当て履歴	タスクに基づいたすべてのタスク割当ての履歴を戻します。
パスワードの正常なリセットの失敗	Oracle Identity Manager ユーザーのパスワード変更メトリックを戻します。
リソースのアカウント・アクティビティ	各リソースのすべてのアカウント・アクティビティが一覧表示されます。
リソース別の統制外アカウント	各リソースのすべての統制外アカウントが一覧表示されます。 注意: このレポートは、例外レポート機能が有効になっている場合のみ使用可能です。詳細は、『Oracle Identity Manager Audit Report 開発者ガイド』の第 5 章「Oracle Identity Manager のレポート機能」を参照してください。
リソース別のファイングレイン権限例外	リソースに関連付けられたすべてのファイングレイン権限例外が一覧表示されます。 注意: このレポートは、例外レポート機能が有効になっている場合のみ使用可能です。詳細は、『Oracle Identity Manager Audit Report 開発者ガイド』の第 5 章「Oracle Identity Manager のレポート機能」を参照してください。
作成済ユーザー	指定の時間間隔で作成されたすべてのユーザーが一覧表示されます。
削除済ユーザー	指定の時間間隔で削除されたすべてのユーザーが一覧表示されます。
無効化されたユーザー	指定の時間間隔で無効化されたすべてのユーザーが一覧表示されます。
ロック解除済ユーザー	指定の時間間隔でロックが解除されたすべてのユーザー（アカウント）が一覧表示されます。

関連項目: これらのレポートは、『Oracle Identity Manager Audit Report 開発者ガイド』の第 5 章にも一覧で示されます。

14.3 レポートの実行

レポートを実行するには、次の手順を実行します。

1. 左ナビゲーション・ペインで「レポート」をクリックし、続いて「操作レポート」または「履歴レポート」をクリックします。

結果ページに、そのユーザーが使用できるそのタイプのすべてのレポートが一覧表示されます。レポートが一覧表示される表には、次のフィールドがあります。

フィールド	説明
レポート名	操作レポートの一意の名前が表示されます。そのレポートの入力パラメータへのリンクにもなっています。
レポート・コード	レポートの一意の英数字コードです。
レポート・タイプ	管理者がレポートを整理するのに役立つレポート・タイプです。
レポート説明	レポートの簡単な説明です。

2. レポートの名前をクリックして選択します。

レポート入力パラメータ・ページが表示されます。このページに、レポートの実行に必要な入力パラメータが表示されます。場合により、少なくとも1つ以上の入力パラメータ・フィールドが必須フィールドとなります。そうでない場合も、1つ以上のフィールドに入力しないとレポートを実行できません。

注意: 「リソース別の委任管理者および権限」レポートや「組織別の委任管理者および権限」レポートなどのいくつかのレポートでは、実行に入力パラメータは必要ありません。

3. レポートに含まれている情報を識別するために必要な情報を入力します。
4. 「送信」をクリックすると、レポートが実行されます。

「レポート表示」ページが表示されます。

14.4 レポートのデータの表示

「レポート表示」ページには、レポートの内容が表示されます。いくつかの表示形式を使用できます。形式情報は、各レポートに関連付けられているレポート・メタデータに含まれています。表示形式には次のものがあります。

- 表形式
- セクション形式
- セクション形式（ヘッダー付き）

デフォルトで各ページに表示されるのは50レコードのみです。この制限は、プロパティ・ファイルで変更できます。複数のページがある場合、ページの上部和下部にある「最初」、「前へ」、「次へ」および「最後」の各ナビゲーション・リンクがアクティブになります。

14.5 レポート・フィルタの使用

フィルタを使用して、レポートの検索基準を絞り込むことができます。デフォルトで、フィルタがメニューおよびテキスト・フィールドとして表示されます。メニューからデータのタイプを選択して、テキスト・フィールドにフィルタ文字列を入力します。フィルタ・フィールドで、ワイルドカード文字のアスタリスク (*) を使用できます。アスタリスクは任意の数の文字を表します。たとえば、「S*t」は、「Slashdot」や「Sat」に一致します。ユーザー・ステータス、従業員タイプなどの参照フィールドを表すフィルタ基準には、値を選択するためのボックスがあります。

フィルタは既存のレポートを絞り込むのみで、新しいレポートを生成することはありません。たとえば、レポートを [First Name=j*] (名が「j」で始まるすべてのレコードを戻す) という入力パラメータで実行し、[Last Name=Smith] で再度フィルタリングした場合、レポートでは名が j で始まり、姓が Smith であるレコードのみが戻されます。

フィルタ・パラメータとしてユーザー・ステータスが含まれる履歴レポートの場合、検索は履歴データに対して実行されます。たとえば、[User Status=Active] のフィルタ基準を指定すると、現在システム管理者であっても過去のある時点でアクティブであったすべてのユーザーが戻されます。

フィルタを作成して「フィルタ」をクリックすると、結果レポートが同じレポート表示ページに表示されます。フィルタ・メニューとフィールドには、入力されたフィルタ値が表示されます。「クリア」をクリックすると、フィルタ・フィールドが空白になります。

14.6 入力パラメータの変更

「入力パラメータの変更」をクリックすると、「入力パラメータ」ページに戻ります。入力パラメータのフィールドには、すでに入力した情報が含まれています。

14.7 CSV エクスポート

レポート情報はすべて、CSV (カンマ区切り) ファイル形式でエクスポートすることができます。「CSVのエクスポート」をクリックし、プロンプトで、CSV ファイルをコンピュータ上にローカルに保存するよう選択します。デフォルトのファイル名は `report_code.csv` です。

14.8 詳細ページへのリンク

レポートに表示されるリソース名とユーザー ID には、リンクになっているものがあります。これらのリンクをクリックすると、新しい「詳細」ページに、このリソースやユーザー ID に関するさらに詳細な情報が表示されます。

14.9 サード・パーティ製ソフトウェアを使用したレポートの作成

Oracle Identity Manager は、Crystal Reports などのサード・パーティ製ツールを使用したレポートの作成をサポートしています。サード・パーティ製ツールを使用して、14-2 ページの「[操作レポートの概要](#)」に記載されている操作レポートまたは 14-3 ページの「[履歴レポートの概要](#)」に記載されている履歴レポートを作成できます。

注意： サード・パーティ製ソフトウェアを使用してレポートを作成する方法の詳細は、サード・パーティ製ソフトウェアのマニュアルを参照してください。

アテステーション機能の使用

この章の内容は、次のとおりです。

- [アテステーションについて](#)
- [アテステーション・プロセスの設定](#)
- [アテステーション・プロセスの作成](#)
- [アテステーション・プロセスの管理](#)
- [アテステーション・ダッシュボードの使用](#)

15.1 アテステーションについて

アテステーションを使用すると、レビューアとして指定されたユーザーは、レビューする必要があるレポートについて通知を受けることができます。これらのレポートには、他のユーザーのプロビジョニング済リソースについて記述されています。レビューアは、レスポンスを入力することにより、権限の正確さをアテストすることができます。アテステーション・アクションは、レビューアが入力したレスポンス、関連コメント、およびレビューアが参照してアテストするデータの監査ビューとともにトラッキングと監査を受け、アカウントビリティの完全な証跡を残します。Oracle Identity Manager では、このプロセスを**アテステーション・タスク**と呼びます。

Oracle Identity Manager では、アテステーションはスケジュール済アテステーション・プロセスの定義によってサポートされます。アテステーション・プロセスは、Oracle Identity Manager ワークフローと同じではありません。これは Oracle Identity Manager の構成可能なビジネス・プロセスとして実装されており、これによってユーザーのアテステーション・タスクが作成されます。ユーザーはレビューアとして作業し、このプロセスを完了して正しい監査情報を提供する必要があります。

プロビジョニング済リソース・インスタンスのアテステーション・アクティビティのトラッキングは、リソース・オブジェクトのプロビジョニング・プロセス内のタスクにより実行されます。アテステーション・アクションに基づいてワークフロー・アクティビティを開始することができます。開始される追加アクティビティと、プロセス定義フォームやワークフロー・デザイナーでモデリング可能なワークフローは、初期アテステーション・アクションに基づいて開始できます。これは、Oracle Identity Manager で定義されているプロビジョニング・プロセス内のアテステーション・サブフローにより実現されています。

アテステーション・アクティビティは、定期的にまたは必要に応じて開始できます。

レビューアは、アテステーション・タスク内の特定の権限を、レビューのため他のユーザーに委任することができます。このアクションは、別のアテステーション・タスクが作成され、委任されたユーザーに割り当てられることで行われます。

ここでは、次のトピックについて説明します。

- [アテステーション・プロセスの定義](#)
- [アテステーション・タスクのコンポーネント](#)
- [アテステーション・リクエスト](#)
- [委任](#)
- [アテステーション・ライフサイクル・プロセス](#)
- [アテステーション・エンジン](#)
- [アテステーション・スケジュール済タスク](#)
- [アテステーションドリブンのワークフロー機能](#)
- [アテステーションの電子メール](#)

15.1.1 アステーション・プロセスの定義

アステーション・プロセスは、アステーション・タスクを設定するメカニズムです。アステーション・プロセスに必要な入力内容には、アステーション・タスクを構成するコンポーネントの定義方法、およびタスクを実行する必要があるスケジュールとアステーション・タスクを関連付ける方法に関する情報が含まれます。この定義も、アステーション・タスクを必要ときに開始するための基盤です。アステーション・プロセスの定義には次の項目が含まれています。

- **アステーション・スコープ**: アステーション・プロセスのターゲット・ユーザー権限を決定するアルゴリズムを定義します。
- **レビューア設定**: レビューアを指定します。
- **アステーション・スケジュールの定義**: アステーション・プロセスを実行するスケジュールを指定します。
- **プロセス所有者**: プロセスに関連するアクティビティの監視を割り当てられているユーザーのグループです。
 - このユーザーには、プロセス実行時に発生する問題がすべて通知されます。
 - プロセス定義を表示する権限はありますが、デフォルトでは管理権限はありません。
 - 必要に応じていつでもプロセスを実行できます。
- **プロセス管理者**: プロセス定義に対して管理権限を持つユーザーのグループです。基本的に、通常の委任を受けた管理者のモデルにマップされます。

プロセスが一連のレビューアを定義している場合、単一のアステーション・プロセスから複数のアステーション・タスクが発生することもあります。このような場合、プロセスから、各レビューアに対して1つずつアステーション・タスクが発生することになります。

15.1.1.1 アステーション・プロセスの制御

次の各項では、アステーション・プロセスの制御方法について説明します。

15.1.1.1.1 プロセスの無効化 システム管理者は、アステーション・プロセスが事前定義済スケジュールどおりに実行されないように、プロセスを無効化できます。これにより、管理者は環境を制御しやすくなります。システム管理者のアステーション・プロセスは有効化できますが、次回実行時間の値を過ぎると有効化できません。アステーション・プロセスを有効化するユーザーは、次の実行予定時刻を未来に設定する必要があります。

15.1.1.1.2 プロセスの削除 アステーション・プロセスは削除可能です。これはソフト削除と呼ばれます。監査用にレコードを維持する必要があるため、実際にはレコードは削除されません。そのかわりに、アステーション・プロセスに削除済のマークが付けられます。

削除済のプロセスは管理およびユーザー・コンソールに表示されません。プロセス名とコードは一意であるため、1度使用した名前はもう使用できません。また、同じ名前でも新しいアステーション・プロセスを作成することはできません。

15.1.2 アテステーション・タスクのコンポーネント

アテステーション・プロセスの基本目的は、Oracle Identity Manager にアテステーション・タスクを設定することです。アテステーション・タスクはユーザーのアテステーション受信ボックスに表示されます。アテステーション・タスクの基本コンポーネントを次に示します。

- **レビューア**: アテステーションを実行するユーザーを指定します。
- **タスク・ソース**: アテステーション・タスクがプロセスの結果として発生したのか、別のレビューアの委任によって発生したのかを指定します。委任の場合は、タスクを委任したレビューアが誰で、どのタスクが権限のソースであるかをトラッキングする必要があります。
- **アテステーション・データ**: アテステーション・スコープ内のユーザー権限の詳細データです。このデータは、プロビジョニングされたリソース・インスタンスのプロセス・フォームからのデータです。
- **アテステーション日**: アテステーション・タスクを開始する日付を定義します。
- **アテステーション・アクション**: レビューアがアテステーション・スコープで行うアクションです。アクションはアテステーション・タスク全体レベルのものではなく、アテステーション・スコープ内の各権限に対して行われます。アテステーション・アクションには次のものがあります。
 - **認証**: レビューアは、レビュー対象のユーザーが、データや詳細な権限が規定されたフォームのこの権限の保持を許されていることを認証します。
 - **却下**: レビューアは、フォームのこの権限をユーザーが持つ必要がないと考えています。
 - **拒否**: レビューアは権限のアテステーション業務を引き受けられません。このアクションは通常、プロセスが適切に構成されていない場合のためのもので、公開後の早い段階で有用です。

レビューアは、他の誰かにタスクの処理を求める場合にタスクを拒否します。タスクが拒否されると、そのタスクはアテステーション管理者グループの任意のユーザーに割り当てられます。
 - **委任**: レビューアは別の有資格者にこの権限のアテステーションを再割り当てすることを考えています。

注意: アテステーション・タスクは、Oracle Identity Manager 定義におけるワークフロー・タスクではありません。ワークフローの一部としては作成されません。アテステーション・タスクは、ワークフロー・エンジンがサポートするすべてのタスク管理機能、たとえば動的割当て、エスカレーション、プロキシ管理などをサポートしません。

15.1.2.1 アテステーション受信ボックス

アテステーション受信ボックスを使用すると、割り当てられているアテステーション・タスクを管理できます。

この受信ボックスから、割り当てられているアテステーション・タスクを表示し、レスポンスとコメントを入力することができます。

15.1.3 アテステーション・リクエスト

アテステーション・プロセスが実行されると、アテステーション・リクエストが作成され、Oracle Identity Manager データベースに記録されます。このリクエストは、アテステーション・プロセスが実行される際の監査レコードの役目を果たします。アテステーション・リクエスト・レコードは、レポートで使用される、基本的な識別データと監査データ、および統計データから構成されています。データには次の項目が含まれています。

- リクエスト ID: リクエストの結果として作成される各アテステーション・タスクは、レコードの一部としてリクエスト ID を格納します。
- プロセス実行の日付と時刻。
- プロセス完了の日付と時刻: プロセス完了の日付と時刻は、そのリクエストの日付と時刻とみなされます。
- アテステーションで識別されている権限の総数。

権限の数は次のとおりです。

権限の総数 = 認証された数 + 却下された数 + 拒否された数

- 認証された権限の数。
- 却下された権限の数。
- 拒否された権限の数。

15.1.4 委任

アテステーション・タスクに割り当てられているレビューアが、タスク内のすべての権限をアテステートできない場合があります。これには複数の原因が考えられます。次に例を示します。

- アテステーション・タスク内の、ユーザーと権限が多すぎます。
- レビューアが、権限をプロビジョニングされた理由を明確に知りません。

こうした場合、レビューアが他のユーザーをレビューに参加させたいと考えることがあります。レビューアは、タスク内の一部の権限のアテステーションを委任できます。

アテステーションを委任するには、レビューアがタスク内で権限のセットを選択し、それを他のユーザーに委任します。これにより新しいアテステーション・タスクが作成され、選択されたレビューアに割り当てられます。

注意: レビューアは、ユーザーが所属する組織に対して読取り権限を持つグループのメンバーである場合にのみ、委任可能なユーザーのリストを表示できます。ただし、レビューアが読取り権限を持つ管理者である場合、そのレビューアは組織内でタスクを委任できるすべてのユーザーを表示できます。

新しいタスクは、元のレビューアが選択した権限のみを含んでいます。これ以降、元のレビューアは、それらの権限に対するアテステーション・レスポンスの入力を担当しません。委任先に割り当てられた新しいアテステーション・タスクは、委任元、タスクの作成元、およびその他の情報（リクエスト ID など）をトラッキングします。新しいアテステーション・タスクは、他のあらゆるアテステーション・タスクと同じように処理されます。委任することも可能です。

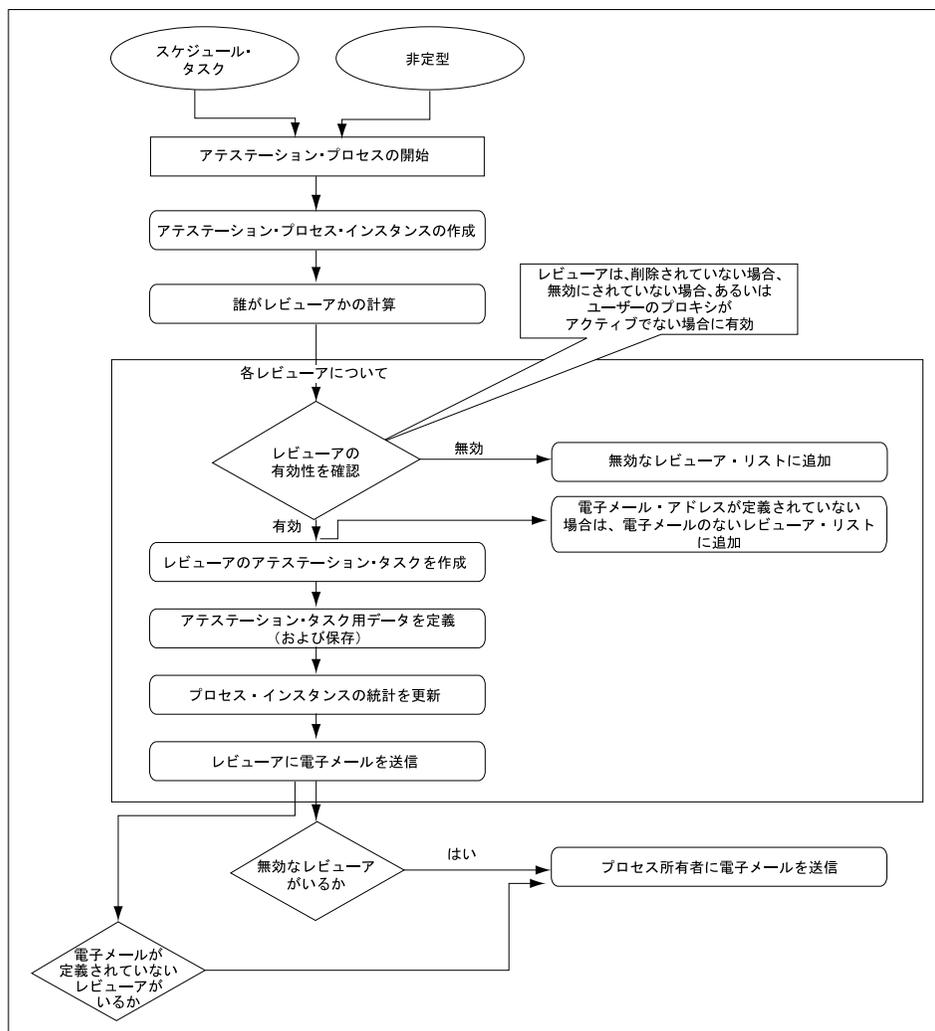
15.1.5 アテステーション・ライフサイクル・プロセス

Oracle Identity Manager におけるアテステーション・ライフサイクルについて、次に説明します。

15.1.5.1 第1段階：アテステーション・タスクの作成

この段階は、アテステーション・プロセスの実行時に開始されます。図 15-1 に、この段階に含まれるワークフローを示します。

図 15-1 アテステーション・タスクの作成：ワークフロー



アテステーション・プロセスが実行されると、対応するアテステーション・プロセス・インスタンスが最初に作成されます。今回のプロセス実行に対するレビューアが識別されます。多くの場合、レビューアは1人のみです。複数のレビューアがいることもあります。

無効なレビューアが検出された場合は、常に新しいレビューアがプロセス所有者グループから取得されます。アテステーション・リクエストでまだ使用されていないユーザーが、グループ内で最も優先度の高いユーザーです。また、すべてのユーザーが使用されている場合には、プロセス所有者グループ内で次に優先度の高いユーザーが取得されます。このプロセスでユーザーを検出できない場合、タスクは XELSYSADM に割り当てられます。

プロセスは、有効な各レビューアに対して、プロセスで定義されたアテステーション・スコープによって決定されたとおりに、レビューアがアテステーションする必要があるすべてのユーザー権限を計算します。プロセスは、タスクのアテステーション・データに、それらのユーザー権限に関する参照およびその他の関連情報を追加します。また、そのタスクが扱う権限の数を、プロセス・インスタンスのアテステーションで識別されている権限の総数に対応する統計フィールドに追加します。続いて、プロセスにより、レビューアに電子メール・メッセージが送信されます。また、電子メール・アドレスが定義されていないレビューアに関する電子メールも、プロセス所有者に送信します。

この段階の終了時、アテステーション・タスクはすべて、レビューアのアテステーション受信ボックスにあります。

15.1.5.2 第2段階：アテステーション・タスクに関する作業

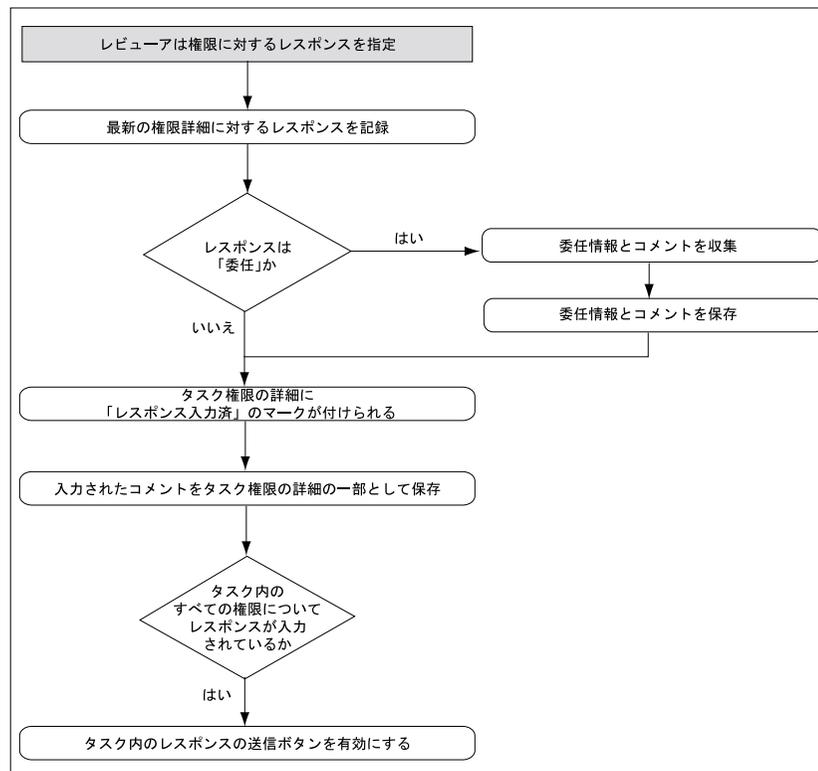
アテステーション・タスクがレビューアに割り当てられると、レビューアは電子メールを受信し、タスクは各レビューアのアテステーション受信ボックスに表示されます。レビューアは自分の受信ボックスでタスクの詳細を参照します。

レビューアは、タスク詳細のページから各権限に対して、レスポンスおよび必要に応じてコメントを入力します。これにより、タスク内のアテステーション権限の詳細に、「レスポンス入力済」のマークが付けられます。

レビューアのレスポンスに、特定の権限のアテステーション・アクティビティの委任が含まれている場合は、レビューアは委任するユーザーを入力する必要があります。レビューアはオプションとして、なぜそのユーザーにアテステーション・アクティビティを委任するか説明するコメントを入力することができます。

レビューアは、すべての権限にレスポンスを入力した後、すべてのレスポンスを送信することによって、アテステーション・タスクのアクションをコミットすることができます。

図 15-2 レビューアが権限に対するレスポンスを送信する場合のイベントのフロー



この時点で、次の段階であるアテステーション・ビジネス・プロセスが開始されます。

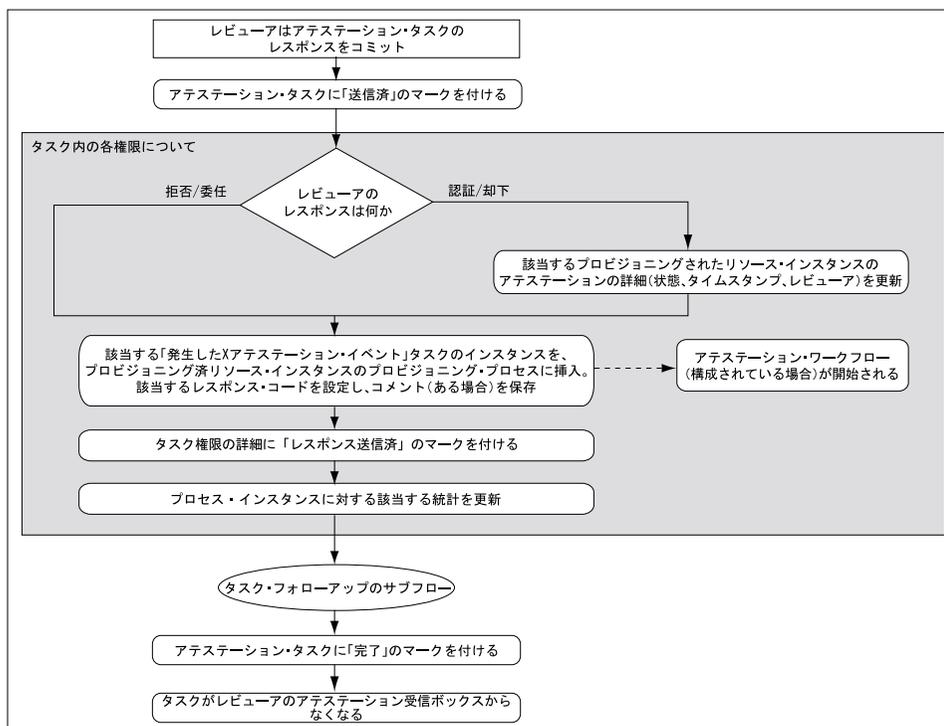
15.1.5.3 第3段階：送信されたアテステーション・タスクの処理

アテステーション・タスクは「送信済」とマークされています。この時点でアテステーション・タスクは凍結され、それ以上作業できません。アテステーション・タスクの各権限について、レスポンスがシステムによって調査されます。レスポンスが認証または却下の場合、その権限に対応するプロビジョニング済リソース・インスタンスが、それに応じて更新されます。プロビジョニング済リソース・インスタンスのレベルで、最後のアテステーション結果、最後のアテステーションの発生時刻、および誰がレビューアであったかが記録されます。レスポンスが拒否または委任だった場合、プロビジョニング済リソース・レベルでのアテステーション詳細は変更されません。

「ユーザー・アテステーション・イベントが発生しました」タスクが、リソース・インスタンスのプロビジョニング・プロセスに挿入されます。これにより、定義されている場合にはアテステーション・ドリブンのワークフローが開始されます。コメントはすべてタスクのメモ・フィールドに保存されます。

タスクのアテステーション権限の詳細には「レスポンス送信済」のマークが付けられます。[図 15-3](#) に、アテステーション・タスクのレスポンス送信後のイベント・フローを示します。

図 15-3 アテステーション・タスクのレスポンス送信後のイベント・フロー



次の統計情報が、プロセス・インスタンスに基づいて更新されます。

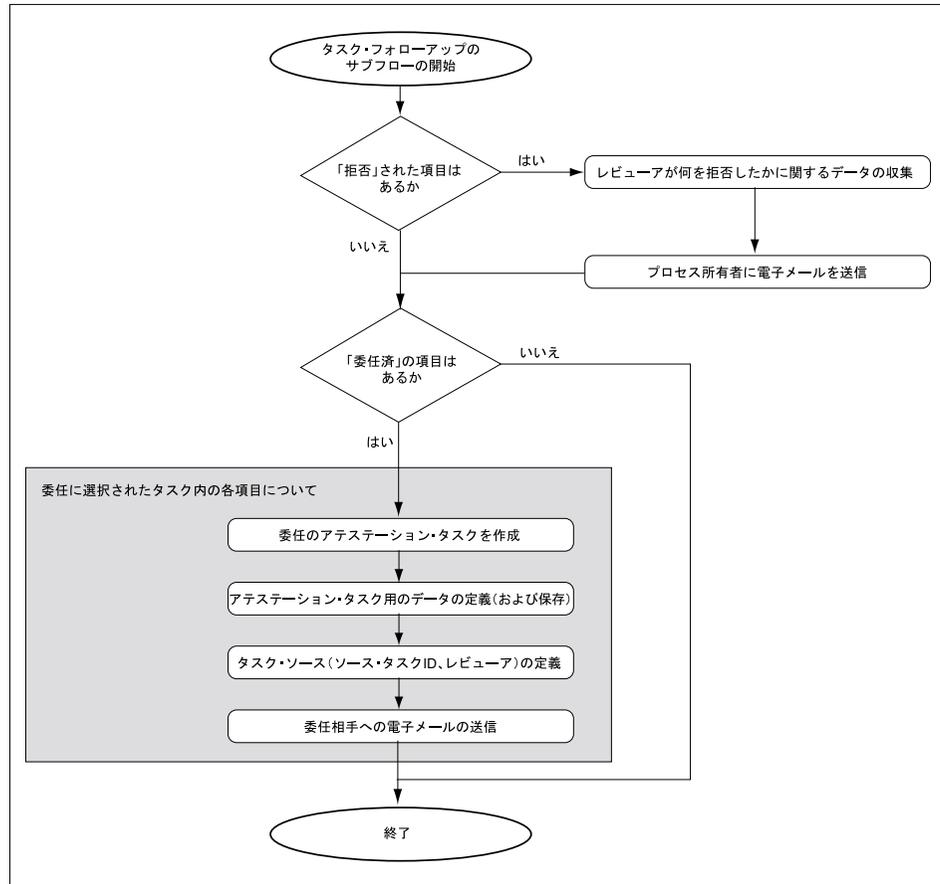
- 認証された権限の数
- 却下された権限の数
- 拒否された権限の数
- 委任された権限の数

すべての権限を処理した後で、フォローアップ・アクションのサブフローが開始されます。このフローでは、プロセスによって、タスクの権限のいずれかに対するレスポンスが拒否されたかどうか調べられます。そのような権限があった場合、プロセスは拒否アクションの詳細を概説した電子メールをプロセス所有者に送信します。

次に、タスクの権限のいずれかに対するレスポンスが委任されたかどうか調べられます。そのような権限があった場合、レビューアが委任先として選択したすべてのユーザーが識別され、それぞれのアテステーション・タスクが作成されます。各アテステーション・タスクは、レビューアがそのユーザーに委任した権限のみに関するものです。委任されたユーザーは、電子メールで委任を通知されます。

委任されたアテステーション・タスクがすべて作成されると、サブフローは終了し、メイン・フローに合流します。図 15-3 に、フォローアップ・アクション・サブフローのイベント・フローを示します。

図 15-4 フォローアップ・アクション・サブフロー



フォローアップ・サブフローが完了すると、アテステーション・タスクには「完了」のマークが付けられます。

15.1.6 アテステーション・エンジン

アテステーション・エンジンは、アテステーション・ライフサイクルを実装します。これは Oracle Identity Manager アーキテクチャ内のサービスで、特定のアテステーション・プロセスを開始する指示を受信するための API を公開しています。この API はアテステーション・スケジュール・タスクや、「アテステーション・プロセスの詳細」ページの「即時実行」ボタンから呼び出されて、オンデマンド実行をサポートします。アテステーション・プロセスを開始する、両方のドライバをサポートしています。

アテステーション・エンジンでは、JMS メッセージ・サービスを使用して、オフラインの待機中プロセスを実行します。この機能により、パフォーマンスが向上します。

注意：アテステーションはユーザー・プロファイル監査データのエントリに依存します。アテステーション・プロセスに含まれるユーザーの監査エントリが生成されていない場合、レビューアは、アテステーションでユーザーおよびプロセス・フォーム情報を表示できません。このような状況を避けるため、アテステーションを実行する前に、「監査メッセージの発行タスク」スケジュール済タスクが実行されていることを確認してください。

15.1.7 アテステーション・スケジュール済タスク

この新しいシステムのスケジュール済タスクは、Oracle Identity Manager で定義されているアテステーション・プロセスの調査と、システムに必要なアテステーション・タスクの作成を担当します。

このスケジュール済タスクの機能は次のとおりです。

- デフォルトでは、このスケジュール済タスクは毎晩実行されるように設定されています。このスケジュールは、必要に応じて変更できます。
- このスケジュール済タスクは、すべてのアクティブな（システム管理者でない）アテステーション・プロセスに対するアテステーション・プロセス定義表を調査します。
- プロセスの次のスケジュール済タスクの実行時間が経過していることが検出された場合、タスクはアテステーション・エンジンへの呼出しを送信して、アテステーション・プロセスを開始します。

15.1.8 アテステーションドリブンのワークフロー機能

アテステーション・アクティビティからのトリガーをリスニングするように、Oracle Identity Manager で事前定義されているプロビジョニング・プロセスを拡張できます。これにより、プロビジョニング・ワークフローの一部として、アテステーションの発生（拒否の場合は発生しない）に対応し、したがってアテステーションの発生時に開始される、カスタムのワークフローを定義できます。これは2つの目的に役立ちます。

- フローのデフォルトのアテステーション・タスク（「ユーザー・アテステーション・イベントが発生しました」）は、特定のユーザー権限のアテステーション履歴の監査証跡を提供します。
 - リソース・インスタンスが適切なタイプのアテステーション・プロセスによってアテスタされるたびに、このタスクのインスタンスが1つ発生します。
 - タスク上に設定されたレスポンス・コードは、レビューアが入力したレスポンスの種類を示しています。
 - タスク作成者のタグを付けられたユーザーは、レビューアが誰であることを示しています。
 - ユーザーが入力したコメントはすべて、タスクのメモ・フィールドに入ります。
- レスポンスが生成したタスクを使用すると、デフォルト・タスクがワークフローを開始して、受け取った特定のアテステーション・レスポンスに対応することができます。このため、特定のリソースについて、却下のレスポンスによってプロビジョニング・プロセスの該当するワークフロー・タスク（たとえばアカウントの無効化など）が開始されるように指定できます。

15.1.9 アテステーションの電子メール

アテステーション・エンジンは、アテステーション・プロセスの一環として、各種の関係者に電子メールを送信します。電子メールの内容を構成できるようにするために、Oracle Identity Manager の電子メール定義ストアの一般タイプの電子メール・テンプレートが使用可能になります。コンテキストに依存するよう、電子メールでは、必要な値に置き換えられる各種の変数が含まれます。

15.1.9.1 アテステーション・レビューアへの通知

このテンプレートは、アテステーション・タスクが割り当てられているレビューアに送信する電子メールを作成するために使用されます。

15.1.9.1.1 変数 「Notify Attestation Reviewer」テンプレートの変数を次に示します。

変数	説明
Attestation Definition.Process Name	アテステーション・プロセスの名前
Attestation Definition.Process Code	アテステーション・プロセスのコード
Attestation Task.Task Assigned Date	アテステーション・タスクが割り当てられた日付

15.1.9.1.2 件名行 「Notify Attestation Reviewer」テンプレートにより定義された電子メール・メッセージの件名行を次に示します。

A new attestation task for attestation process *Attestation Definition.Process Name* has been added to your attestation inbox

15.1.9.1.3 本文 電子メール・メッセージの本文には次の情報が含まれます。

The attestation task details are as follows
 Process Name: *Attestation Definition.Process Name*
 Process Code: *Attestation Definition.Process Code*
 Data Type: Access Rights
 Assigned Date: *Attestation Task.Task Assigned Date*

15.1.9.2 委任されたレビューアへの通知

このテンプレートは、アテステーション・タスクを委任されたレビューアに送信する電子メールを作成するために使用されます。

15.1.9.2.1 変数 「Notify Delegated Reviewers」テンプレートの変数を次に示します。

変数	説明
Attestation Definition.Process Name	アテステーション・プロセスの名前
Attestation Definition.Process Code	アテステーション・プロセスのコード
Attestation Task.Task Assigned Date	アテステーション・タスクが割り当てられた日付
Attestation Task.Delegated By First Name	委任を行ったレビューアの名
Attestation Task.Delegated By Last Name	委任を行ったレビューアの姓
Attestation Task.Delegated By User Id	委任を行ったレビューアのユーザー ID

15.1.9.2.2 件名行 「Notify Delegated Reviewers」 テンプレートにより定義された電子メール・メッセージの件名行を次に示します。

Attestation Task.Delegated By User Id has delegated to you an attestation task from attestation process *Attestation Definition.Process Name*

15.1.9.2.3 本文 メッセージの本文には次の情報が含まれます。

The attestation task details are as follows

Process Name: *Attestation Definition.Process Name*

Process Code: *Attestation Definition.Process Code*

Data Type: Access Rights

Assigned Date: *Attestation Task.Task Assigned Date*

Delegated By: *Attestation Task.Delegated By First Name Attestation Task.Delegated By Last Name* [*Attestation Task.Delegated By User Id*]

15.1.9.3 拒否されたアステーション権限についてのプロセス所有者への通知

「Notify Declined Attestation Entitlements」 テンプレートは、拒否された権限アステーション・タスクについてプロセス所有者に通知するために送信する電子メールを作成するために使用されます。

15.1.9.3.1 変数 「Notify Process Owner about Declined Attestation Entitlements」 テンプレートの変数を次に示します。

変数	説明
<i>Attestation Request.Request Id</i>	アステーション・リクエストの ID
<i>Attestation Definition.Process Name</i>	アステーション・プロセスの名前
<i>Attestation Task.Reviewer First Name</i>	レビューアの名
<i>Attestation Task.Reviewer Last Name</i>	レビューアの姓
<i>Attestation Task.Reviewer User Id</i>	レビューアのユーザー ID
<i>Attestation Data.Provisioned User First Name</i>	アテストされるユーザーの名
<i>Attestation Data.Provisioned User Last Name</i>	アテストされるユーザーの姓
<i>Attestation Data.Provisioned User User Id</i>	証明されるユーザーのユーザー ID
<i>Attestation Data.Resource Name</i>	アテストされるリソースの名前
<i>Attestation Data.Entitlement Descriptive Data</i>	アテストされる権限の説明データ

15.1.9.3.2 件名行 「Notify Process Owner about Declined Attestation Entitlements」 テンプレートにより定義された電子メール・メッセージの件名行を次に示します。

User access rights in attestation request *Attestation Request.Request Id* have been declined by *Attestation Task.Reviewer User Id*

15.1.9.3.3 本文 メッセージの本文は次のとおりです。

Attestation of the following user access rights were declined by the reviewer.

Reviewer: *Attestation Task.Reviewer First Name Attestation Task.Reviewer Last Name* [*Attestation Task.Reviewer User Id*]

Attestation Process: *Attestation Definition.Process Name*

Attestation Request ID: request *Attestation Request.Request Id*

Access Rights Data: *Attestation Data.Provisioned User First Name Attestation Data.Provisioned User Last Name* [*Attestation Data.Provisioned User User Id*] - *Attestation Data.Resource Name* - *Attestation Data.Entitlement Descriptive Data*

15.1.9.3.4 スペシャル・コメント 権限データ項目はそれぞれ新しい行に表示されます。

15.1.9.4 電子メールが定義されていないレビューアについてのプロセス所有者への通知

「Attestation Reviewers With No Email Defined」テンプレートは、電子メール・アドレスが定義されていないレビューアについて、プロセス所有者に通知するために送信する電子メールを作成するために使用されます。

15.1.9.4.1 変数 「Notify Process Owner About Reviewers with No Email Defined」テンプレートの変数は次のとおりです。

変数	説明
Attestation Request.Request Id	アテステーション・リクエストの ID
Attestation Definition.Process Name	アテステーション・プロセスの名前
Attestation Request.Request Creation Date	アテステーション・リクエストが作成された日付
Attestation Task.Reviewer First Name	無効なレビューアの名
Attestation Task.Reviewer Last Name	無効なレビューアの姓
Attestation Task.Reviewer User Id	無効なレビューアのユーザー ID

15.1.9.4.2 件名行 「Notify Process Owner About Reviewers with No Email Defined」テンプレートにより定義される電子メールの件名行を次に示します。

E-mail address is not defined for some of the reviewers in attestation process
Attestation Definition.Process Name, request *Attestation Request.Request Id*

15.1.9.4.3 本文 メッセージの本文は次のとおりです。

The following attestation reviewers do not have e-mail addresses defined. Attestation requests have been generated for these reviewers and can be accessed by logging in to Oracle Identity Manager. However, notification e-mails were not sent.
 Attestation process: *Attestation Definition.Process Name*
 Attestation Request ID: request *Attestation Request.Request Id*
 Request date: *Attestation Request.Request Creation Date*
 Reviewers Without Email: *Attestation Task.Reviewer First Name Attestation Task.Reviewer Last Name [Attestation Task.Reviewer User Id]*

15.1.9.4.4 スペシャル・コメント レビューアの詳細はそれぞれ新しい行に表示されます。

15.2 アテステーション・プロセスの設定

管理およびユーザー・コンソールのメニュー項目から、アテステーション・プロセスの構成ページにアクセスできます。Oracle Identity Manager 管理者は、このページを使用して次を実行できます。

- 新しいアテステーション・プロセスの定義
- 既存のプロセスの管理
- 非定型アテステーション・プロセスの開始

15.2.1 メニュー構造

最上位の「アテステーション」メニューには、次のリンクがあります。

- 作成
- 管理
- ダッシュボード

これらのメニュー項目は、管理およびユーザー・コンソールのすべてのメニュー項目を管理する同一の委任管理権限により管理されています。

これらのメニュー項目は定義済ですが、Oracle Identity Manager のグループには割り当てられていません。監査コンプライアンス・コンポーネントがインストールされている場合、それらは Oracle Identity Manager の「システム管理者」グループに割り当てられます。

15.2.2 システム制御

アテステーションには次の依存性があります。

- ユーザー・プロファイル監査機能を有効にする必要があります。
- 履歴データは、少なくともプロセス・フォーム・レベルまで収集する必要があります。

監査レベルが必要なレベルより下に設定されている場合、アテステーションに関連するメニュー項目のリンクをクリックすると「アテステーション機能は使用できません」ページが生成され、ユーザーによるアテステーション・プロセスの定義ができなくなります。

監査レベルは `XL.UserProfileAuditDataCollection` というシステム・プロパティに制御されており、アテステーション機能では、この値が少なくとも「リソース・フォーム」に設定される必要があります。

15.3 アテストーション・プロセスの作成

注意：この項で説明する手順には、Oracle Identity Manager の権限モデルが適用されています。このモデルではターゲット（たとえばユーザー）のリストを、ログインしているユーザーが読取りアクセス権を持っているターゲットのみに制限します。

アテストーション・プロセスを作成するには、次の手順を実行します。

1. 左ナビゲーション・ペインで「アテストーション」メニューを展開し、「作成」をクリックします。

「ステップ 1: プロセスの定義」ページが表示されます。

2. フィールドに値を入力して「続行」をクリックします。次の表にフィールドの説明を示します。

フィールド	説明
名前	アテストーション・プロセスの一意の名前。名前は、システム管理者であるアテストーション・プロセスおよび削除されたアテストーション・プロセスの中で一意である必要があります。
コード	プロセスの識別コード（32 文字以下）。コードは、システム管理者であるアテストーション・プロセスおよび削除されたアテストーション・プロセスの中で一意である必要があります。 注意： コードを使用すると、アテストーション・プロセスの定義をより詳細に識別できます。ただし、「コード」フィールドに値を指定しない場合、アテストーション・プロセスは一意の名前により識別されます。
説明	アテストーション・プロセスの詳細説明です。

3. 「ステップ 2: ユーザー・スコープの定義」ページ：

- a. 「属性」リストから属性を選択します。「属性」リストには、FormMetaData.xml ファイルで指定されたユーザー属性およびユーザー・フォームのユーザー定義属性が表示されます。選択した属性は、アテストーション・プロセスが適用されるユーザーが合致する必要がある基準を指定するために使用されます。
- b. 「条件」リストから条件を選択します。「条件」リストに表示される値は、選択した属性のタイプに応じて異なります。たとえば、「属性」フィールドで「ユーザー ID」を選択した場合、条件として「含む」、「含まない」、「完全一致」および「完全一致でない」が表示されます。また「開始日」属性を選択した場合、条件として「前」、「後」および「間」が表示されます。
- c. 「値」フィールドに、ユーザー属性の値を入力します。
- d. 「再帰的」オプションを選択します。「再帰的」チェック・ボックスは、ユーザー・スコープを定義する際に子エンティティを含めるエンティティに対して使用します。たとえば、ユーザー・スコープで「組織」を選択し、次に「再帰的」を選択すると、すべての下位組織も操作の対象となります。
- e. 「追加」をクリックしてユーザー・スコープ表に新規行を追加し、「続行」をクリックします。

4. 「ステップ 3: リソース・スコープの定義」 ページで、次のようにアテストーション・プロセスのリソースを選択します。

- a. 「属性」 リストから、次の表で示したリソース属性のいずれかを選択します。

属性	式	説明
名前	フルテキストまたはワイルドカード	リソースの名前。
タイプ	「すべて」または「サブセット」の選択オプションを持つ参照値	リソースのタイプ。
リソース監査目的	「すべて」または「サブセット」の選択オプションを持つ参照値	プロビジョニングされるリソースに割り当てられる監査目的。たとえば、そのリソースが財務的に意味を持つかどうかを示す。 「リソース監査目的」の詳細は、12-2 ページの「リソースの詳細の表示」を参照。
管理者ユーザー・グループ	「すべて」または「サブセット」の選択オプションを持つ参照値	リソースの管理権限を持つユーザー・グループ。
認可ユーザー・グループ	「すべて」または「サブセット」の選択オプションを持つ参照値	リソースの認可者または承認者であるユーザー・グループ。
リソース・ステータス	フルテキストまたはワイルドカード	リソースがユーザーにプロビジョニングされる際に表示されるステータス（「認証」、「却下」、「オープン」、「クローズ」など）。

- b. 「条件」 リストから検索条件を選択します。

- c. 「値」 フィールドに、リソース属性の値を入力します。

- d. 「追加」 をクリックしてリソース・スコープ表に新規行を追加し、「続行」 をクリックします。

5. 「ステップ 4: 管理詳細の定義」 ページで、次の手順を実行して、データをアテストするレビューア、アテストーション・プロセスのスケジュールおよびプロセス所有者を定義します。

- a. 「レビューア」 リストから、アテストーション・プロセスのレビューアのタイプ（ある特定のユーザーや優先度の最も高いリソース管理者など）を選択します。次に、隣にある「参照フィールド」からレビューアを選択します。

- b. アテストーション・プロセスを 1 回実行するか、または特定の日数、月数または年数ごとに繰り返し実行するかといったアテストーション・プロセスのスケジュールを指定します。

- c. 「開始日」 フィールドで、アテストーション・プロセスの開始日を指定します。

- d. 「プロセス所有者グループ」 参照フィールドで、アテストーション・プロセスの所有者であるグループを指定します。

- e. アテストーション・プロセスがレビューアに拒否された場合に、プロセス所有者に電子メールで通知するには、「レビューアがアテストーション・リクエストを拒否した場合、プロセス所有者に電子メール」を選択します。次に、「続行」 をクリックします。

6. 「ステップ 5: 情報検証ページ」 で、アテストーション・プロセスの詳細を確認した後、「プロセスの作成」 をクリックします。

アテストーション・プロセス定義が正常に作成されたことを示すメッセージが表示されるページに切り替わります。プロセス名をクリックすると、「アテストーション・プロセスの詳細」 ページが表示されます。別のアテストーション・プロセスを作成するには、「別のアテストーション・プロセス定義を作成」 をクリックします。

「アテストーション・プロセスの詳細」ページの詳細は、「[アテストーション・プロセスの管理](#)」を参照してください。

15.4 アテストーション・プロセスの管理

アテストーション・プロセスを管理するには次の手順を実行します。

1. 左ナビゲーション・ペインで「アテストーション」メニューを展開し、「管理」をクリックします。「アテストーション・プロセスの管理」ページが表示されます。
2. 「アテストーション・プロセスの管理」ページで、管理するアテストーション・プロセスの検索基準を入力します。アテストーション・プロセス名、プロセス・コード、レビューアのタイプまたはプロセス所有者を基準にして検索できます。検索基準を入力したら、「**検索**」をクリックします。「アテストーション・プロセスの詳細」ページに、検索基準に一致するアテストーション・プロセスが表示されます。ログインしている管理者が、権限や、「プロセス所有者」グループのメンバーであることによって表示を許可されているアテストーション・プロセスのみが表示されます。このページには、削除されたプロセスは表示されません。このページに表示される列を次の表に示します。

列	説明
名前	プロセスの名前を指定します。
コード	アテストーション・プロセスのコードを指定します。
説明	プロセスの説明を指定します。
ステータス	アテストーション・プロセスが有効であるかシステム管理者であるかを示します。
タイプ	リソースのタイプを指定します。
ユーザー・スコープ	アテストーション・プロセスの一部となるユーザーのスコープを指定します。
リソース・スコープ	アテストーション・プロセスのスコープ内にあるリソースを指定します。
レビューア・タイプ	レビューアのタイプを示します。
レビューア名	レビューアの名前を示します。
スケジュール	プロセスが1回のみ、または毎日、毎月または毎年といったスケジュールで実行されるかを示します。
最終開始	アテストーション・プロセスが最後に実行されたタイミングを指定します。
次回開始	スケジュールによりプロセスが次回実行されるタイミングを指定します。
プロセス所有者グループ	プロセス所有者グループを示します。また、アテストーション・リクエストがレビューアに拒否された場合に、プロセス所有者に電子メールで通知するかどうかを示します。
最終完了	このプロセスのインスタンスが最後に完了したタイミングを指定します。

ここでは次のトピックについて説明します。

- [アテステーション・プロセスの編集](#)
- [アテステーション・プロセスの無効化](#)
- [アテステーション・プロセスの有効化](#)
- [アテステーション・プロセスの削除](#)
- [アテステーション・プロセスの実行](#)
- [アテステーション・プロセス管理者の管理](#)
- [アテステーション・プロセス実行履歴の表示](#)

15.4.1 アテステーション・プロセスの編集

アテステーション・プロセスを編集するには次の手順を実行します。

1. 「アテステーション・プロセスの詳細」 ページで、「**編集**」をクリックします。
2. 「アテステーション・プロセスの編集」 ページでアテステーション・プロセスに必要な変更を加え、「**保存**」をクリックします。

「アテステーション・プロセスの編集」 ページ上のフィールドは、「[アテステーション・プロセスの作成](#)」に表示されるものと同一です。

15.4.2 アテステーション・プロセスの無効化

アクティブなアテステーション・プロセスを削除するには、次の手順を実行します。

1. 「アテステーション・プロセスの詳細」 ページで、「**無効化**」をクリックします。
「無効化」 ボタンが表示されるのは、プロセスがアクティブである場合のみです。
2. 「アテステーションの無効化の確認」 ページで「**無効化の確認**」をクリックします。

15.4.3 アテステーション・プロセスの有効化

アテステーション・プロセスを有効化できるのは、次の開始時刻が未来で、プロセスが無効化されている場合のみです。

アテステーション・プロセスを有効化するには次の手順を実行します。

1. 「アテステーション・プロセスの詳細」 ページで、「**有効化**」をクリックします。
「有効化」 ボタンが表示されるのは、プロセスが無効化されている場合のみです。
2. 「アテステーションの有効化の確認」 ページで「**有効化の確認**」をクリックします。

15.4.4 アテステーション・プロセスの削除

アテステーション・プロセスの編集、無効化および削除を実行できるのは、必要な権限を持つプロセス管理者のみです。

アテステーション・プロセスを削除するには次の手順を実行します。

1. 「アテステーション・プロセスの詳細」 ページで、「**削除**」をクリックします。
2. ページで「**削除の確認**」をクリックします。

15.4.5 アテストーション・プロセスの実行

この機能を使用すると、未スケジュールのアテストーション・プロセスを実行できます。アテストーション・プロセスを実行するには、「アテストーション・プロセスの詳細」ページで「**即時実行**」をクリックします。これにより、アテストーション・スケジュールとは独立してアテストーション・プロセスが開始されます。

未スケジュールのアテストーション・プロセスを開始できるのは、プロセス所有者グループのユーザーのみです。

15.4.6 アテストーション・プロセス管理者の管理

アテストーション・プロセスのための管理グループの追加、削除および更新のタスクは、ユーザーおよび組織のために管理グループを更新するタスクに類似しています。

アテストーション・プロセスの管理者を管理するには、「アテストーション・プロセスの詳細」ページの「追加詳細」リストから「**管理者**」を選択します。「管理グループ」ページが表示されます。このページを使用して、アテストーション・プロセスのための管理者の追加や削除、および管理者権限の更新を行うことができます。

アテストーション・プロセス定義の権限モデルは次のとおりです。

- アテストーション・プロセス定義を表示するには、ユーザーは次のいずれかである必要があります。
 - 「管理者グループ」において適切な読取り権限を持つグループのメンバー
 - プロセス所有者であるグループのメンバー
- アテストーション・プロセス定義を編集するには、ユーザーは、「管理者グループ」において必要な書込み権限を持つグループのメンバーである必要があります。
- アテストーション・プロセス定義を削除するには、ユーザーは、「管理者グループ」において必要な削除権限を持つグループのメンバーである必要があります。

15.4.7 アテストーション・プロセス実行履歴の表示

アテストーション・プロセスの実行履歴を表示するには、「アテストーション・プロセスの詳細」ページの「追加詳細」リストから「**実行履歴**」を選択します。「アテストーション・プロセス実行履歴」ページが表示されます。

「アテストーション・プロセス実行履歴」表には次の列があります。

列	説明
リクエスト ID	実行されたアテストーション・プロセス・インスタンスの ID。
レビューア	アテストーション・プロセスのレビューアの名前。
開始日	リクエストが開始された日付と時刻。
完了日	リクエストが完了した日付と時刻。 リクエストが保留中の場合は、「未完了」と表示されます。

「アテストーション・プロセス実行履歴」ページで、「リクエスト ID」リンクをクリックすると「リクエストの詳細」ページが開きます。このページでは、状態が認証済か、却下されたか、オープンか、クローズかに応じてリクエストをフィルタリングできます。

15.5 アテストレーション・ダッシュボードの使用

自分がメンバーであるグループが所有するアテストレーション・プロセスの状態を表示するには、アテストレーション・ダッシュボードを使用します。アテストレーション・ダッシュボードを使用するには、「アテストレーション」メニューを展開し、「アテストレーション・ダッシュボード」をクリックします。「アテストレーション・ダッシュボード」ページの表に、自分がメンバーであるすべてのグループが所有するアテストレーション・プロセスの状態が示されます。「アテストレーション・ダッシュボード」表にある列を次の表に示します。

列	説明
プロセス・コード	アテストレーション・プロセス・コード。
プロセス名	プロセスの名前。アテストレーション・プロセス名のリンクをクリックすると「アテストレーション・プロセスの詳細」ページが表示されます。
最終完了	最後のインスタンスが完了する前にインスタンスが実行された日付と時刻。該当するものがない場合、値は「なし」です。これは、必要なアテストレーション・リクエストに対応する「アテストレーション・リクエストの詳細」ページにユーザーを誘導するリンクです。
現在のリクエスト日	このプロセスの最後のインスタンスが実行された日付と時刻。一度も実行されていない場合、値は「新規」です。これは、必要なアテストレーション・リクエストに対応する「アテストレーション・リクエストの詳細」ページにユーザーを誘導するリンクです。
現在完了	最後に実行されたインスタンスが完了した日付と時刻。完了していない場合、値は「保留」です。
全レコード	アテストレーションに対して識別されている権限および最後のプロセス・インスタンスの一部としてアテストレーションの対象とされている権限の総数。
認証済	最後のアテストレーション・プロセス・インスタンスで認可された権限の数。
却下	最後のアテストレーション・プロセス・インスタンスで却下された権限の数。
オープン	レビューアによりレスポンスが入力されなかったすべてのオープン・レコード。

15.5.1 アテステーション・リクエスト詳細の表示

「アテステーション・ダッシュボード」ページからドリルダウン・ページにアクセスできます。ドリルダウン・ページには、アテステーション・プロセスの特定の実行で処理するすべての権限のアテステーション詳細が表示されます。

アテステーション・リクエスト詳細を表示するには、次の手順を実行します。

1. 「アテステーション・ダッシュボード」ページの表に表示された「最終完了」フィールドまたは「現在のリクエスト・ページ」フィールドのリンクをクリックします。

「アテステーション・リクエストの詳細」ページには、選択したアテステーション・プロセスのリクエスト詳細が、次の列を含む表とともに表示されます。

列	説明
ユーザー	権限がアテステ対象となっているユーザー。データはリンクとして表示されます。このリンクをクリックすると、「ユーザー・プロファイル」ページが表示され、アテステーション日のユーザーの詳細が表示されます。
リソース	アテステされる権限の基盤であるリソース。データはリンクとして表示されます。リンクをクリックすると、ページが表示され、アテステーション日の権限のプロセス・フォーム・データが表示されます。
記述データ	プロビジョニング・リソース・インスタンスの説明。
コメント	リクエストのコメントまたはステータス。この値は次のいずれかです。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 認証 ■ 却下 ■ オープン ■ クローズ
アテステーション結果	アテステーションに対して入力された最後のレスポンス。
レビューア	レスポンスを入力したユーザー。データはリンクとして表示されます。このリンクをクリックすると、「ユーザー・プロファイル」ページが表示され、現在のユーザーの詳細が表示されます。
委任パス	権限のアテステーションが委任を経由して実行された場合、この列の「表示」リンクを使用して、「委任パスの詳細」ページを表示できます。委任が発生しなかった場合、「なし」と表示されます。
コメント	レビューア・コメント。長いコメントは切り捨てられ、ツールチップを使用してコメントの全文が表示されます。

2. 委任が必要なアテステーション・リクエストには、「委任パス」列にリンクが含まれます。

リンクをクリックすると、「委任パス」ページに、アテステーション・リクエストの委任パスに関する情報が表示されます。

「アテステされたデータ」フィールドには、アテステされる権限の詳細が表示されます。値は、ユーザー情報、リソース名および説明データを次の形式で組み合わせることによって作成されます。

`User_First_Name User_Last_Name [User_ID] - Resource_Name - Descriptive_Data`

「委任パス」ページの表にあるフィールドは次のとおりです。

列	説明
レビューア	アテステする権限が割り当てられたレビューア。データはリンクとして表示されます。このリンクをクリックすると、現在のユーザー・プロフィール・データが表示されます。
アテステーション結果	レビューアにより行われるアクション。最初のレコードを除き、値は常に「委任済」です。
アテステーション日	レビューアのアテステーション・レスポンスの日付と時刻。
コメント	レビューア・コメント。長いコメントは切り捨てられ、ツールチップを使用してコメントの全文が表示されます。

15.5.2 電子メール通知

アテステーション・プロセスの一部として、アテステーション・エンジンは様々な段階で電子メールを関係者に送信します。電子メールの内容は、Oracle Identity Manager の「電子メール定義」ストアの「一般」タイプの電子メール・テンプレートを使用して設定できます。

テンプレートでは、フォーム・ユーザーは XELSYSADM と定義されます。これは別のユーザーに変更できます。電子メール・アドレスが、このテンプレートを使用するように選択されたユーザーに対して定義されていることを確認してください。定義されていない場合、通知の送信に失敗することがあります。

次の電子メール通知テンプレートを使用できます。

- **Notify Attestation Reviewer:** アテステーション・タスクがレビューアに割り当てられたときに電子メールを送信するために使用されます。
- **Notify Delegated Reviewers:** アテステーション・タスクがレビューアに委任されたときにレビューアに電子メールを送信するために使用されます。
- **Notify Declined Attestation Entitlements:** レビューアが権限を拒否した場合に、「プロセス所有者グループ」のユーザーに電子メールを送信するために使用されます。
- **Attestation Reviewers With No Email Defined:** どのレビューアにも電子メール・アドレスが定義されていない場合に、「プロセス所有者グループ」のユーザーに電子メールを送信するために使用されます。

15.5.3 アテステーション猶予期間チェッカー・スケジュール済タスク

アテステーション猶予期間チェッカーと呼ばれるシステムのスケジュール済タスクは、Oracle Identity Manager で定義されているアテステーション・プロセスを調査し、必要なアテステーション・タスクを作成するために使用されます。

アテステーション猶予期間チェッカー・スケジュール済タスクの主要な機能は次のとおりです。

- このスケジュール済タスクが、デフォルトで 30 分間隔で実行されるように設定されています。これは、必要に応じて変更できます。
- このスケジュール済タスクでは、すべてのアクティブなアテステーション・プロセスを調査します。
- このスケジュール済タスクでは、有効期限までの日数が 1 日～3 日以内のアテステーション・プロセスがチェックされ、対応するレビューアに警告の電子メールが送信されます。アテステーション・プロセスがすでに期限切れの場合は、レビューアによるアクションは削除され、プロセス所有者グループで次に優先度の高いメンバーにアテステーション・プロセスが割り当てられます。

診断ダッシュボード

この章では、Oracle Identity Manager に付属の診断ダッシュボード・ユーティリティおよび次のトピックについて説明します。

- [診断ダッシュボードの概要](#)
- [診断ダッシュボードのインストール](#)
- [診断ダッシュボードの使用](#)
- [テストの詳細とパラメータ](#)

16.1 診断ダッシュボードの概要

診断ダッシュボードを使用して、Oracle Identity Manager の一部の前提条件を検証し、インストールを確認できます。

このツールを使用するには、アプリケーション・サーバーと Oracle Identity Manager 環境の適切なシステム管理者権限を持っている必要があります。データベース関連のテストの一部には DBA レベルの権限が必要です。

使用および表示できるテストのリストは、Oracle Identity Manager がインストールされているかどうか、またこのツールや Oracle Identity Manager がどのようなアプリケーション・サーバーにインストールされているか、あるいはインストールされるかに依存します。

診断ダッシュボード・ユーティリティと Oracle Identity Manager は、同一のアプリケーション・サーバーにインストールしてください。

16.1.1 インストールのテスト

診断ダッシュボード・ユーティリティを Oracle Identity Manager のインストール前、Oracle Identity Manager のインストール直後に使用して、インストールが正常であることを確認し、インストールのステータスをチェックします。

Oracle Identity Manager のインストール前に、次のテストが実行されます。

- Microsoft SQL Server の JDBC ライブラリ可用性のチェック
- Microsoft SQL Server の前提条件チェック
- Oracle の前提条件チェック
- 埋込み JMS サーバーのステータス

さらに、次のレポートを使用できます。

- Java VM システム・プロパティのレポート
- WebSphere のバージョンのレポート

次のテストは、インストールした Oracle Identity Manager がアプリケーション・サーバー上で使用可能になってからのみ使用できます。

- データベース接続性のチェック
- アカウント・ロックのステータス
- データ暗号化キーの検証
- スケジューラ・サービスのステータス
- Remote Manager のステータス
- JMS メッセージ機能の検証
- ターゲット・システムの SSL トラストの検証
- SSL 診断情報

次のレポートも、インストールした Oracle Identity Manager が使用可能になってからのみ使用できます。

- Oracle Identity Manager のライブラリと拡張機能のバージョンのレポート
- Oracle Identity Manager のライブラリと拡張機能のマニフェストのレポート

次のテストをいつでも実行して、Oracle Identity Manager インストールのステータスを確認できます。

- バージョン番号の表示
- JVM バージョンの確認
- 新規 Oracle Identity Manager インストールの確認
- データベースの検証
- WebSphere の埋込み JMS のインストールの確認
- データベース暗号化キーの生成

16.1.2 インストール後のテスト

インストール後のテストには次のものがあります。

- データベース暗号化キーの検証
- トラストストアの検証
- SSO 診断または検証
- IBM WebSphere Application Server での JMS サーバー可用性
- メッセージ機能の検証
- スケジューラの検証
- Remote Manager の検証
- レポート作成のバージョン番号
- パッケージング

16.2 診断ダッシュボードのインストール

診断ダッシュボード・ユーティリティは、Oracle Identity Manager インストーラとともにインストール CD に収められています。CD-ROM の Diagnostic Dashboard ディレクトリに WAR ファイルとして収められています。

診断ダッシュボード・ユーティリティは、Oracle Identity Manager をインストールする前にアプリケーション・サーバーにデプロイすることをお勧めします。

ここでは、次のトピックについて説明します。

- [Oracle Application Server への診断ダッシュボードのインストール](#)
- [JBoss Application Server への診断ダッシュボードのインストール](#)
- [IBM WebSphere Application Server への診断ダッシュボードのインストール](#)
- [Oracle WebLogic Server への診断ダッシュボードのインストール](#)
- [診断ダッシュボードの起動](#)

16.2.1 Oracle Application Server への診断ダッシュボードのインストール

ここでは、Oracle Application Server に診断ダッシュボードをインストールする方法について説明します。

注意： クラスタ化インストールでは、クラスタの各ノードに診断ダッシュボードをインストールする必要があります。

診断ダッシュボードを Oracle Application Server にインストールするには、次の手順を実行します。

1. 管理およびユーザー・コンソールにログインします。
2. 「Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control へのログイン」をクリックします。
3. 自分の Oracle Application Server 管理者アカウントを使用してログインします。
4. クラスタ化されていないデプロイでは、「すべてのアプリケーション・サーバー」、「アプリケーション・サーバー名」から適切なインスタンス名を選択します。
5. Oracle Application Server ホームページにある「アプリケーション」をクリックします。
6. 「デプロイ」をクリックします。
7. 「アーカイブはローカル・ホストに存在します。アーカイブを Application Server Control が稼働しているサーバーにアップロードします。」オプションを選択します。
8. 「参照」をクリックして、次のディレクトリにある XIMDD.war を選択します。
`installer_home/dashboard/`
「次へ」をクリックします。
9. ウィザードの手順 2 で、アプリケーションの名前（たとえば XIMDD）を指定して、手順 3 で「デプロイ」をクリックします。

診断ダッシュボードには次の場所からアクセスできます。

`http://OIM_server_host_ip:port/XIMDD`

注意： スケジューラのテストを正常に実行するには、クラスタの各ノードから XIMDD にアクセスする必要があります。ただし、Web サーバーから XIMDD にアクセスしようとすると、失敗します。

16.2.2 JBoss Application Server への診断ダッシュボードのインストール

診断ダッシュボードを JBoss Application Server 上にデプロイするには、XIMDD.WAR ファイルを次の場所にコピーします。

`JBOSS_HOME/server/default/deploy`

16.2.3 IBM WebSphere Application Server への診断ダッシュボードのインストール

診断ダッシュボードを IBM WebSphere Application Server 上にデプロイするには、次の手順を実行します。

1. アプリケーション・サーバーの管理コンソールにログインします。
2. WebSphere のメイン・ページで左メニュー・ペインの「**Applications**」をクリックし、続いて「**Install New Application**」をクリックします。
「Preparing for the Application Installation」ページが表示されます。
3. WAR ファイルの場所を、Path 属性の値として指定します。XIMDD をコンテキスト・ルートとします。
4. 「**Next**」をクリックして続行し、「Generate Default Bindings」ページで「**Next**」をクリックします。
「Install New Application」ページが表示されます。
5. アプリケーションの名前を XIMDD に変更します。「**Next**」を 2 回クリックします。
6. クラスタまたはサーバーを選択し、XIMDD.war を選択し、「**Apply**」をクリックします。
7. 選択したクラスタまたはサーバーが「Server」列に表示されるのを確認し、「**Next**」をクリックします。
8. 「**Finish**」をクリックします。
「Installing」ページが表示されます。アプリケーションを正常にインストールすると、次のメッセージが表示されます。
Application XIMDD installed successfully
9. 「**Save to Master Configuration**」をクリックし、続いて「**Save**」をクリックします。
10. 左メニュー・ペインで「**Applications**」→「**Enterprise Applications**」をクリックします。
11. 「XIMDD」を選択し、続いて「**Start**」をクリックします。
ステータス、たとえばインストールされたアプリケーションが正常起動したかどうかが表示されます。

16.2.4 Oracle WebLogic Server への診断ダッシュボードのインストール

Oracle WebLogic Server に診断ダッシュボードをデプロイするには、次の手順を実行します。

1. アプリケーション・サーバーの管理コンソールにログインします。
2. チェンジ・センター・リージョンで「**ロックして編集**」をクリックします。
3. ドメイン構造リージョンで「**デプロイメント**」をクリックします。
4. 右側のペインのデプロイメント・リージョンで「**インストール**」をクリックします。
5. ファイルのアップロード・リンクをクリックします。
6. デプロイメント・アーカイブ・フィールドに XIMDD.war ファイルのフルパスを入力します。このファイルは OIM9101INSTALLER/DiagnosticDashboard ディレクトリにあります。
7. 「次へ」をクリックし、もう一度「次へ」をクリックします。
8. このデプロイメントをアプリケーションとしてインストールするオプションが選択されていることを確認し、「次へ」をクリックします。

9. オプション設定ページで次の内容を確認します。
 - アプリケーション名としての XIMDD の表示。
 - 「DDのみ:デプロイメント記述子で定義されているロールおよびポリシーのみを使用する」オプションが選択されている。
 - 「デプロイメントのターゲットによって定義されたデフォルトを使用する」オプションが選択されている。
 10. 「完了」をクリックします。
 11. チェンジ・センター・リージョンで「変更のアクティブ化」をクリックします。
 12. デプロイメントのサマリー・リージョンで、XIMDD デプロイのチェック・ボックスを選択します。
 13. 開始リスト（表の後）で「すべての要求を処理」を選択します。
 14. 「はい」をクリックして、XIMDD のデプロイを開始することを確認します。
- この段階で、デプロイメント表の状態列に Active と表示されます。
- これで、ブラウザを使用して診断ダッシュボードに接続できます。

16.2.5 診断ダッシュボードの起動

デプロイ後は、次の形式の URL を使用して診断ダッシュボードにアクセスできます。

`http://host:port/XIMDD`

クラスタ化インストールでは、個別のクラスタ・メンバーに対応するホストとポート番号を使用して、そのクラスタ・メンバーに接続する必要があります。左メニュー・ペインの「**診断ダッシュボード**」リンクをクリックすると、診断ダッシュボードのメイン・ページが表示されます。

診断ダッシュボード・ユーティリティは、ツールがどのアプリケーション・サーバーにデプロイされているかを示します。また、アプリケーション・サーバーに Oracle Identity Manager がすでにインストールされているかどうかを示します。次の表に示したテストは、Oracle Identity Manager がインストールされているかどうか、どのアプリケーション・サーバーが使用されているかによって異なります。表 16-1 には、これらのテストの可用性も示します。

表 16-1 診断ダッシュボードのテスト

テスト	Oracle Identity Manager がインストールされていない場合の可用性	アプリケーション・サーバー
Microsoft SQL Server の JDBC ライブラリ可用性のチェック	○	JBoss Application Server
Microsoft SQL Server の前提条件チェック	○	JBoss Application Server
Oracle の前提条件チェック	○	すべて
WebSphere の埋込み JMS サーバーのステータス	○	IBM WebSphere Application Server
データベース接続性のチェック	×	すべて
アカウント・ロックのステータス	×	すべて
データ暗号化キーの検証	×	すべて
スケジューラ・サービスのステータス	×	すべて
Remote Manager のステータス	×	すべて

表 16-1 診断ダッシュボードのテスト (続き)

テスト	Oracle Identity Manager がインストールされていない場合の可用性	アプリケーション・サーバー
JMS メッセージ機能の検証	×	すべて
ターゲット・システムの SSL トラストの検証	×	すべて
Java VM システム・プロパティのレポート	○	すべて
WebSphere のバージョンのレポート	○	IBM WebSphere Application Server
Oracle Identity Manager のライブラリと拡張機能のバージョンのレポート	×	すべて
Oracle Identity Manager のライブラリと拡張機能のマニフェストのレポート	×	すべて
SSO 診断情報	×	すべて
基本接続性のテスト	×	すべて
プロビジョニングのテスト	×	すべて
リコンシリエーションのテスト	×	すべて

16.3 診断ダッシュボードの使用

診断ダッシュボードのメイン・ページにあるセクションを、次の表に示します。

セクション	説明
システム情報 アプリケーション・サーバー	アプリケーション・サーバーの名前が表示されます。
Oracle Identity Manager インストール	製品バージョン、ビルド番号、ホスト、製品の場所といったインストールの詳細が表示されます。
テストの詳細 テスト名	テスト名が表示されます。
説明 テスト・パラメータ	テストの説明が表示されます。 テストの検証に必要な場合、テスト・パラメータが表示されます。

テストを実行するには、次の手順を実行します。

1. 診断ダッシュボードのメイン・ページでオプションを選択して、テストを選択します。
2. 必要なパラメータを入力します。
3. 「検証」をクリックすると結果が表示されます。

「診断ダッシュボード・テスト結果」ページに、次の表に示すステータス情報が表示されます。

テスト結果	説明
結果サマリー	選択されたすべてのテストが、結果を示すアイコン（合格 / 不合格）とともに表示されます。テスト名は Web リンクになっており、結果の詳細に直接ジャンプすることができます。
テスト名	テスト名が表示されます。
説明	テストの説明が表示されます。
入力パラメータ	テストのパラメータが表示されます。
結果	テスト結果が表示されます。
詳細	テスト結果の詳細が表示されます。

4. 左メニュー・ペインの「**診断ダッシュボード**」をクリックすると、前のテスト・ページに戻ります。

16.4 テストの詳細とパラメータ

次のテストは、様々なアプリケーション・サーバーで使用できます。

- [Microsoft SQL Server の JDBC ライブラリ可用性のチェック](#)
- [Microsoft SQL Server の前提条件チェック](#)
- [Oracle Database の前提条件チェック](#)
- [WebSphere の埋込み JMS サーバーのステータス](#)
- [データベース接続性のチェック](#)
- [アカウント・ロックのステータス](#)
- [データ暗号化キーの検証](#)
- [スケジューラ・サービスのステータス](#)
- [Remote Manager のステータス](#)
- [JMS メッセージ機能の検証](#)
- [ターゲット・システムの SSL トラストの検証](#)
- [Java VM システム・プロパティのレポート](#)
- [WebSphere のバージョンのレポート](#)
- [Oracle Identity Manager のライブラリと拡張機能のバージョンのレポート](#)
- [Oracle Identity Manager のライブラリと拡張機能のマニフェストのレポート](#)
- [SSO 診断情報](#)
- [基本接続性のテスト](#)
- [プロビジョニングのテスト](#)
- [リコンシリエーションのテスト](#)

16.4.1 Microsoft SQL Server の JDBC ライブラリ可用性のチェック

前提条件: なし

説明: Oracle Identity Manager を Microsoft SQL Server とともに使用する場合、CLASSPATH に JDBC ドライバが必要です。このテストはドライバが CLASSPATH で使用できるかどうかを検証します。

結果: 正常であれば、Microsoft SQL Server Driver が見つかります。

16.4.2 Microsoft SQL Server の前提条件チェック

アプリケーション・サーバー: JBoss Application Server

前提条件: このテストを実行するための前提条件は次のとおりです。

前提条件	説明
データベース・サーバー	データベース・サーバーの場所を入力します。
ポート	ポート番号を入力します。
データベース名	データベース名を入力します。
Oracle Identity Manager データベース・ユーザー名	Oracle Identity Manager データベースのユーザー名を入力します。
Oracle Identity Manager データベース・ユーザー・パスワード	Oracle Identity Manager データベースのユーザー・パスワードを入力します。

説明: 指定された Microsoft SQL Server のインスタンスが、Oracle Identity Manager のインストールに必要な前提条件を満たしているかどうかを確認します。

結果: 次の情報が表示されます。

- ユーザーに必要な権限
- XA サポートが有効であること
- Microsoft SQL Server のバージョン

16.4.3 Oracle Database の前提条件チェック

アプリケーション・サーバー: JBoss Application Server/IBM WebSphere Application Server/Oracle WebLogic Server/Oracle Application Server

前提条件: このテストを実行するための前提条件は次のとおりです。

前提条件	説明
データベース・サーバー	データベース・サーバーの場所を入力します。
ポート	ポート番号を入力します。
データベース名 (SID)	データベース名 (SID) を入力します。
Oracle Identity Manager データベース・ユーザー名	Oracle Identity Manager データベースのユーザー名を入力します。
システム・ユーザー名	システムのユーザー名を入力します。
システム・ユーザー・パスワード	システムのユーザー・パスワードを入力します。

説明: 指定された Oracle のインスタンスが、Oracle Identity Manager のインストールの前提条件を満たしているかどうかを確認します。このテストには SYSTEM 権限が必要です。

結果: 次の情報が表示されます。

- ユーザーに必要な権限
- XA サポートが有効であること
- JVM が有効であること
- Oracle のバージョン情報

16.4.4 WebSphere の埋込み JMS サーバーのステータス

アプリケーション・サーバー: IBM WebSphere Application Server

前提条件: このテストを実行するための前提条件は次のとおりです。

前提条件	説明
ホスト	ホスト名を入力します。
ポート	ポート番号を入力します。
ユーザー名	ユーザー名を入力します。
パスワード	パスワードを入力します。

説明: JMS サーバーのステータスを確認します。このテストは IBM WebSphere Application Server のみに有効で、Oracle Identity Manager がインストールされている必要があります。

結果: JMS サーバーのステータスが表示されます。

16.4.5 データベース接続性のチェック

アプリケーション・サーバー: すべて

前提条件: なし

説明: このテストは、Oracle Identity Manager がデータベースに接続可能かどうかを検証するために実行します。このテストは、データベース直接接続と、J2EE データ・ソース (XA および非 XA) を検証します。

結果: 次の情報が表示されます。

- データベース直接接続性
- XA および非 XA での実行

16.4.6 アカウント・ロックのステータス

アプリケーション・サーバー: すべて

前提条件: このテストを検証するための前提条件は次のとおりです。

前提条件	説明
ユーザー名	ユーザー名を入力します。

説明: Oracle Identity Manager は、無効なログイン試行が何回も繰り返される場合、アカウントをロックします。このテストは、指定アカウントがロックされているかどうかを確認します。

結果: データベース内のロックされているアカウントとロックされていないアカウントを確認します。

16.4.7 データ暗号化キーの検証

アプリケーション・サーバー:すべて

前提条件:なし

説明: Oracle Identity Manager インストールでのデータ暗号化キーは、Oracle Identity Manager データベースでデータを暗号化するために使用されたキーと同一である必要があります。ただし、Oracle Identity Manager のインストールが、別の Oracle Identity Manager インストールのために作成されたデータベース・スキーマを参照している場合はこのかぎりではありません。これは、1つの Oracle Identity Manager インストールからのデータベース・ダンプが、対応するキーをコピーせずに、異なった Oracle Identity Manager インストールにインポートされる場合にも発生することがあります。

結果: データベース・キーが Oracle Identity Manager 構成ディレクトリに存在するかどうかを確認します。

16.4.8 スケジューラ・サービスのステータス

アプリケーション・サーバー:すべて

前提条件:なし

説明: このサーバーで実行されている Oracle Identity Manager スケジューラ・サービスのステータスを確認します。

結果: スケジューラ・サービスのステータスが表示されます。

16.4.9 Remote Manager のステータス

アプリケーション・サーバー:すべて

前提条件:なし

説明: この Oracle Identity Manager のインストールが機能するようにすべて設定済である Remote Manager のステータスをレポートします。

結果: Remote Manager のステータスが表示されます。

16.4.10 JMS メッセージ機能の検証

アプリケーション・サーバー:すべて

前提条件:なし

説明: このテストの目的は、Oracle Identity Manager が JMS メッセージを送信し処理できることを検証することです。

結果: Oracle Identity Manager が JMS メッセージを送信および処理できるかどうかが表示されます。

16.4.11 ターゲット・システムの SSL トラストの検証

アプリケーション・サーバー:すべて

前提条件: このテストを実行するための前提条件は次のとおりです。

前提条件	説明
ホスト	ホスト名を入力します。
ポート	ポート番号を入力します。
トラストストアの場所	ストレージの場所を入力します。
トラストストアのパスワード	ストレージのパスワードを入力します。

説明: Oracle Identity Manager は、Secure Sockets Layer (SSL) 経由での接続の場合にターゲット・システムの証明書を信頼するように設定する必要があります。ホスト名と、ターゲット・システムが SSL 接続をリスニングしているポートを入力します。

結果: 次の情報が表示されます。

- 有効 / 無効なホストとポート・アドレス
- 信頼できる証明書

16.4.12 Java VM システム・プロパティのレポート

アプリケーション・サーバー:すべて

前提条件: なし

説明: Java VM のシステム・プロパティがすべて表示されます。

結果: Java VM のシステム・プロパティがすべて表示されます。

16.4.13 WebSphere のバージョンのレポート

アプリケーション・サーバー: IBM WebSphere Application Server

前提条件: なし

説明: IBM WebSphere Application Server のバージョン情報と、アプリケーション・サーバーにインストールされているすべての修正パックおよびコンポーネントのリストを取得します。

結果: WebSphere バージョン情報が表示されます。

16.4.14 Oracle Identity Manager のライブラリと拡張機能のバージョンのレポート

アプリケーション・サーバー:すべて

前提条件: なし

説明: Oracle Identity Manager ライブラリと拡張機能のすべてのバージョンをレポートします。

結果: Oracle Identity Manager ライブラリと拡張機能のバージョンが表示されます。

16.4.15 Oracle Identity Manager のライブラリと拡張機能のマニフェストのレポート

アプリケーション・サーバー:すべて

前提条件: なし

説明: Oracle Identity Manager ライブラリと拡張機能のマニフェスト情報をレポートします。

結果: Oracle Identity Manager ライブラリと拡張機能のマニフェスト情報が表示されます。

16.4.16 SSO 診断情報

アプリケーション・サーバー:すべて

前提条件:なし

説明: SSO の設定に関する情報が表示されます。また、SSO ログインに関連する実行時診断情報の取得が可能になるように Oracle Identity Manager を設定するための手順を示します。

結果: Oracle Identity Manager インストールに対して SSO の設定が有効になっているかどうかが表示されます。

16.4.17 基本接続性のテスト

アプリケーション・サーバー:すべて

前提条件: IT リソース・タイプおよび IT リソース名

説明: ターゲット・システム用の IT リソースを使用して、ターゲット・システムへの接続をテストします。

注意: 事前定義済みのコネクタをデプロイした際に、指定した IT リソース・タイプが作成された場合は、Oracle Identity Manager Connector Pack のリリース・ノートおよびドキュメントを参照し、このテストがデプロイしたコネクタのリリースに適用できるかどうかを確認します。

結果: 接続性テストの結果が表示されます。テストが失敗した場合は、エラーの原因も表示されます。

16.4.18 プロビジョニングのテスト

アプリケーション・サーバー:すべて

前提条件: IT リソース・タイプおよび IT リソース名

説明: ターゲット・システム上で基本的なユーザーの作成操作を実行します。

注意: 事前定義済みのコネクタをデプロイした際に、指定した IT リソース・タイプが作成された場合は、Oracle Identity Manager Connector Pack のリリース・ノートおよびドキュメントを参照し、このテストがデプロイしたコネクタのリリースに適用できるかどうかを確認します。

結果: プロビジョニング・テストの結果が表示されます。テスト時にターゲット・システムで作成されたテスト・データは、テストの最後に削除されます。

16.4.19 リコンシリエーションのテスト

アプリケーション・サーバー:すべて

前提条件:IT リソース・タイプおよび IT リソース名

説明:ターゲット・システム上で基本的なリコンシリエーション操作を実行します。

注意: 事前定義済のネクタをデプロイした際に、指定した IT リソース・タイプが作成された場合は、Oracle Identity Manager Connector Pack のリリース・ノートおよびドキュメントを参照し、このテストがデプロイしたネクタのリリースに適用できるかどうかを確認します。

結果: リコンシリエーションのテストの結果が表示されます。テスト時に Oracle Identity Manager でリコンサイルされたテスト・データは、テストの最後に削除されます。

第 II 部

統合ソリューション機能

第 II 部は次の各章で構成されています。

- 第 17 章「事前定義済コネクタのインストール」
- 第 18 章「インストールとテストのためのコネクタの構成」
- 第 19 章「汎用テクノロジー・コネクタの概要」
- 第 20 章「Oracle Identity Manager に含まれている汎用テクノロジー・コネクタの事前定義済プロバイダ」
- 第 21 章「汎用テクノロジー・コネクタ用カスタム・プロバイダの作成」
- 第 22 章「汎用テクノロジー・コネクタの作成」
- 第 23 章「汎用テクノロジー・コネクタの管理」
- 第 24 章「汎用テクノロジー・コネクタの作成および使用に関するベスト・プラクティス」
- 第 25 章「汎用テクノロジー・コネクタ・エラーのトラブルシューティング」
- 第 26 章「汎用テクノロジー・コネクタに関する既知の問題」
- 第 27 章「Oracle Identity Manager をターゲット・システムとして使用したプロビジョニング操作」
- 第 28 章「汎用テクノロジー・コネクタ・フレームワークで作成されるコネクタ・オブジェクト」

事前定義済コネクタのインストール

Oracle Identity Manager を特定のサード・パーティのアプリケーションと統合するには、事前定義済コネクタを使用します。この章では、事前定義済コネクタをインストールする手順について説明します。

注意：事前定義済コネクタは、Oracle Identity Manager のコア・サーバー・リリースとは別に、Oracle Identity Manager Connector Pack に収められています。

管理およびユーザー・コンソールのコネクタ・インストーラ機能を使用して必要なリリースのコネクタをインストールできるかどうかを確認するには、Oracle Identity Manager Connector Pack のドキュメントを参照してください。

この章の内容は、次のとおりです。

- [コネクタのインストール・プロセスの概要](#)
- [コネクタのインストールのためのユーザー・アカウントの作成](#)
- [事前定義済コネクタのインストール](#)

17.1 コネクタのインストール・プロセスの概要

ほとんどの事前定義済コネクタのインストールでは、次のタスクの一部またはすべてを実行する必要があります。

1. インストール要件の確認
2. ターゲット・システムの構成
3. Oracle Identity Manager サーバー上のディレクトリへのコネクタ・ファイルおよび外部コード・ファイルのコピー
4. Oracle Identity Manager サーバーの構成
5. コネクタ XML ファイルのインポート
6. リコンシリエーションの構成
7. プロビジョニングの構成
8. Secure Sockets Layer (SSL) の構成

前述のタスクのうち、管理およびユーザー・コンソールでは次のタスクを実行できます。

- Oracle Identity Manager サーバー上のディレクトリへのコネクタ・ファイルおよび外部コード・ファイルのコピー
- コネクタ XML ファイルのインポート
- アダプタのコンパイル（プロビジョニングの構成の手順の一部）

注意： 残りのタスクは手動で実行する必要があります。これらのタスクの実行手順は、Oracle Identity Manager Connector Pack ドキュメント・ライブラリのコネクタ固有のドキュメントを参照してください。

17.2 コネクタのインストールのためのユーザー・アカウントの作成

Oracle Identity Manager の SYSTEM ADMINISTRATORS グループに属しているすべてのユーザーがコネクタをインストールできます。また、必要なメニュー項目および権限を割り当てられているグループのメンバーもコネクタをインストールできます。

関連項目： グループの作成とグループへのメニュー項目および権限の割当ての詳細は、第 10 章「ユーザー・グループの作成と管理」を参照してください。

必要な権限は次のとおりです。

- フォーム・デザイナー（挿入の許可、書込み権限、削除権限）
- 構造ユーティリティ . 追加の列（挿入の許可、書込み権限、削除権限）
- メタ表の階層（挿入の許可、書込み権限、削除権限）

必要なメニュー項目は「デプロイメント管理のコネクタ・インストール」です。

SYSTEM ADMINISTRATORS グループに属していないユーザー・アカウントを使用する場合、コネクタをインストールするには、そのユーザー・アカウントが属するグループの 1 つに前述の権限とメニュー項目を適用する必要があります。

17.3 事前定義済コネクタのインストール

事前定義済コネクタをインストールするには、次の手順を実行します。

1. 17-2 ページの「コネクタのインストールのためのユーザー・アカウントの作成」に記載されているユーザー・アカウントを使用して管理およびユーザー・コンソールにログインします。
2. 「デプロイメント管理」、続いて「コネクタのインストール」をクリックします。
3. 「コネクタ・リスト」リストから、インストールするコネクタを選択します。このリストには、デフォルトの次のコネクタ・インストール・ディレクトリにインストール・ファイルのコピーしたコネクタの名前とリリース番号が表示されます。

`OIM_HOME/xellerate/ConnectorDefaultDirectory`

インストール・ファイルを別のディレクトリにコピーした場合は、次の手順を実行します。

- a. 「代替ディレクトリ」フィールドで、そのディレクトリのフルパスと名前を入力します。
 - b. 「コネクタ・リスト」リストにコネクタのリストを再移入するには、「リフレッシュ」をクリックします。
 - c. 「コネクタ・リスト」リストから、インストールするコネクタを選択します。
4. 「ロード」をクリックします。

次の情報が表示されます。

- コネクタのインストール履歴

コネクタのインストール履歴は、同じコネクタの以前にインストールされていたリリースに関する情報です。

- コネクタの依存性の詳細

コネクタの中には、使用を開始する前に別のコネクタのインストールが必要なものがあります。たとえば、Novell GroupWise コネクタを使用する前に、Novell eDirectory コネクタをインストールする必要があります。この場合、Novell eDirectory は Novell GroupWise の**依存コネクタ**になります。

コネクタの依存性の詳細には、選択したコネクタをインストールする前にインストールが必要なコネクタのリストが含まれます。これらの詳細には、すでにインストールされている依存コネクタに関する情報や、インストールされている依存コネクタの中でアップグレードが必要なものがあるかどうかに関する情報も含まれます。

コネクタのインストールに進む前に、正しいバージョンの依存コネクタがインストールされているかどうかを確認する必要があります。

5. インストール・プロセスを開始するには、「**続行**」をクリックします。

次のタスクが順番に実行されます。

- a. コネクタ・ライブラリの構成
- b. コネクタ XML ファイルのインポート（デプロイメント・マネージャを使用）
- c. アダプタのコンパイル

タスクが正常に完了すると、そのタスクにチェック・マークが表示されます。タスクが失敗すると、X マークと、失敗の理由を示すメッセージが表示されます。必要な修正を行った後で、失敗の理由に応じて次のいずれかの手順を実行してください。

- 「**再試行**」をクリックしてインストールを再試行します。
- インストールを取り消して、手順 1 から再開します。

インストールが失敗する理由の 1 つとしては、構成 XML ファイル内のファイルおよびディレクトリ・パスに関する情報と、実際のファイルおよびディレクトリ・パスとの不一致があります。この場合は、エラー・メッセージが表示されます。

たとえば、リコンシリエーションの対象の JAR ファイルの実際の名前が `recon.jar` であるとし、この名前が構成 XML ファイルで `recon1.jar` と指定されている場合、エラー・メッセージが表示されます。

このようなエラー・メッセージが表示された場合は、次のいずれかの手順を実行します。

- 構成 XML ファイルで変更を行い、「ステップ 1: インストールするコネクタの選択」ページからインストールを再試行します。
前述の例では、JAR ファイルの名前を構成 XML ファイルで `recon.jar` に変更し、「ステップ 1: インストールするコネクタの選択」ページからインストールを再試行します。
- ファイルまたはディレクトリの実際の名前またはパスを変更し、「再試行」オプションを使用します。

前述の例では、JAR ファイルの名前を `recon1.jar` に変更し、「再試行」ボタンをクリックします。

6. コネクタのインストール・プロセスの 3 つのタスクすべてに成功すると、インストールに成功したことを示すメッセージが表示されます。また、インストール後に実行が必要な手順のリストも表示されます。この手順は次のとおりです。

- a. コネクタを使用するための前提条件が満たされていることの確認

注意：この段階で、前提条件のリストを表示するには、PurgeCache ユーティリティを実行し、サーバー・キャッシュにコネクタ・リソース・バンドルの内容をロードします。PurgeCache ユーティリティの実行の詳細は、『Oracle Identity Manager ベスト・プラクティス・ガイド』を参照してください。

一部の事前定義済コネクタには、前提条件はありません。

- b. コネクタ用の IT リソースの作成

IT リソース・タイプが表示されます。指定したタイプの IT リソースを作成する必要があります。

関連項目：12-45 ページの「IT リソースの作成」

- c. コネクタのインストール時に作成したスケジュール済タスクの構成

XML ファイルのインポート・プロセス中に作成したスケジュール済タスクの名前が表示されます。これらのスケジュール済タスクを構成する必要があります。

関連項目：12-50 ページの「スケジュール済タスクの管理」

注意：IT リソースの作成およびスケジュール済タスクの構成を行う管理およびユーザー・コンソールのページへのリンクには、コンソールの左ナビゲーション・ペインにある「リソース管理」メニューを展開してアクセスすることもできます。

インストールとテストのためのコネクタの構成

この章で説明するガイドラインの目的は、カスタム・コネクタが、コネクタ・インストーラと診断ダッシュボードを使用するための互換性要件を満たしていることを確認することです。このガイドラインが適用されるのは、カスタム・コネクタ開発の特定の領域のみです。

この章の内容は、次のとおりです。

- [構成 XML ファイルの構造](#)
- [コネクタ用のテスト・クラスの開発](#)
- [コネクタ・パック・ディレクトリの構造](#)

18.1 構成 XML ファイルの構造

この項では、コネクタのインストール・プロセスで使用される構成 XML ファイルの構造について説明します。この項の情報を使用し、カスタム・コネクタ用に構成 XML ファイルを作成します。

次に、事前定義済コネクタのインストール・ファイルをコピーするための推奨パスを示します。

`OIM_HOME/xellerate/ConnectorDefaultDirectory`

Oracle Identity Manager をインストールする際に、次のファイルが `ConnectorDefaultDirectory` ディレクトリにコピーされます。

- `ConnectorConfigTemplate.xml`
これは構成 XML ファイルのテンプレートです。このファイルのコピーを使用し、構成 XML ファイルを作成します。
- `ConnectorSchema.xsd`
これは作成した構成 XML ファイルの検証に必要な XML スキーマ文書 (XSD) です。

表 18-1 は、構成 XML ファイルの要素のリストです。各要素に関する項にアクセスするには、この表内のリンクを使用します。

表 18-1 構成 XML ファイルの要素

ルート要素	レベル 1 要素	レベル 2 要素	レベル 3 要素
connector 要素			
	connector-name 要素		
	connector-version 要素		
	filecopy 要素	destination 要素	file 要素
	configuration 要素	source 要素	file 要素
	pre-Install 要素	title 要素	step 要素
	dependency-connector 要素	dependency-connector-name 要素	
		dependency-connector-version 要素	

サンプル構成 XML ファイルの内容は、「[サンプル構成 XML ファイル](#)」を参照してください。

18.1.1 connector 要素

次の表に、connector 要素のプロパティについてまとめます。

プロパティ	値
親要素	該当なし
属性	該当なし テンプレートの XML ファイルで、この要素の属性の値は変更しないでください。
子要素	connector-name 、 connector-version 、 filecopy 、 configuration 、 pre-Install および dependency-connector
出現回数	1 回
要素値	該当なし

connector 要素は、構成 XML ファイルではルート要素です。connector 要素の子要素の詳細は、次の項を参照してください。

- [connector-name](#) 要素
- [connector-version](#) 要素
- [filecopy](#) 要素
- [configuration](#) 要素
- [pre-Install](#) 要素
- [dependency-connector](#) 要素

18.1.2 connector-name 要素

次の表に、connector-name 要素のプロパティについてまとめます。

プロパティ	値
親要素	connector
属性	なし
子要素	なし
出現回数	1 回
要素値	コネクタの名前

connector-name 要素は、コネクタのターゲット・システムの名前を指定する場合に使用します。コネクタ名の値がほとんどのコネクタのインストール・ページ上に表示されます。

使用方法の例：

```
<connector-name>Active Directory</connector-name>
```

18.1.3 connector-version 要素

次の表に、connector-version 要素のプロパティについてまとめます。

プロパティ	値
親要素	connector
属性	なし
子要素	なし
出現回数	1 回
要素値	コネクタのリリース番号

connector-version 要素は、コネクタのリリース番号を指定する場合に使用します。リリース番号は、コネクタ名とともに表示されます。リリースを比較したり、ユーザーにアップグレードのガイドラインを提供する場合にも使用されます。

使用方法の例：

```
<connector-version>9.1.0</connector-version>
```

connector-version 要素の値を指定する際のガイドラインは次のとおりです。

- コネクタのリリース番号の指定には、数字とピリオド (.) のみを使用します。
- コネクタのリリース番号には空白が入らないようにしてください。
- コネクタのリリース番号の末尾のゼロは、その番号が他のコネクタのリリース番号と比較される際には、削除されます。たとえば、値 9.1.1.0 および 9.1.0.0 は、リリース番号を比較するコードでは同じとみなされます。

18.1.4 filecopy 要素

次の表に、filecopy 要素のプロパティについてまとめます。

プロパティ	値
親要素	connector
属性	なし
子要素	destination
出現回数	1 回
要素値	該当なし

filecopy 要素は、コネクタのインストール・メディアのディレクトリに含まれる特定のディレクトリからコピーされるファイルの詳細を保持する、destination 要素のコンテナとして機能します。

「[destination 要素](#)」では、filecopy 要素の子要素について説明します。

18.1.5 destination 要素

次の表に、destination 要素のプロパティについてまとめます。

プロパティ	値
親要素	filecopy
属性	folder
子要素	file
出現回数	コピー対象のファイルのタイプごとに 1 回
要素値	値は、JavaTasks、ScheduleTask、connectorResources または ThirdParty のいずれかです。

特定のタイプのコネクタ・ファイルをコピーする必要がある場合、コピー先として Oracle Identity Manager サーバーのフォルダの名前を指定するには、destination 要素の folder 属性を使用します。表で言及しているとおおり、次の中から任意のフォルダを指定できます。

- connectorResources: コネクタのインストール・メディアにリソース・バンドルが含まれる場合はこのフォルダを指定します。
- JavaTasks: コネクタのインストール・メディアにプロビジョニング用の JAR ファイルが含まれる場合はこのフォルダを指定します。
- ScheduleTask: コネクタのインストール・メディアにリコンシリエーション用の JAR ファイルが含まれる場合はこのフォルダを指定します。
- ThirdParty: コネクタのインストール・メディアに、プロビジョニングまたはリコンシリエーション用にコネクタが必要とする外部コード・ファイルが含まれる場合はこのフォルダを指定します。

「[file 要素](#)」では、filecopy 要素の子要素について説明します。

18.1.6 file 要素

次の表に、file 要素のプロパティについてまとめます。

プロパティ	値
親要素	destination または source 注意: source 要素については、この章で後述します。
属性	なし
子要素	なし
出現回数	少なくとも 1 回
要素値	コピー対象のファイルの名前

file 要素は、親である destination 要素によって指定されるフォルダにコピーする必要があるファイルの名前を指定する場合に使用します。ファイル名に指定した大 / 小文字の区別は、実際の名前のものと同じである必要があります。指定した名前を持つファイルを探すために、インストール・プログラムはコネクタのインストール・メディアのディレクトリ全体を検索し、そのファイルを親である destination 要素が指定するフォルダにコピーします。

使用方法の例:

```
<file>ActiveDirectory.properties</file>
```

同じファイルを複数のディレクトリにコピーする場合は、ファイル名を該当する destination 要素の下の file 要素に指定する必要があります。たとえば、connector.jar ファイルを JavaTasks ディレクトリと ScheduleTask ディレクトリの両方にコピーする場合、次の行を XML ファイルに追加します。

```
<destination folder="JavaTasks">
  <file>connector.jar</file>
</destination>
<destination folder="ScheduleTask">
  <file>connector.jar</file>
</destination>
```

18.1.7 configuration 要素

次の表に、configuration 要素のプロパティについてまとめます。

プロパティ	値
親要素	connector
属性	なし
子要素	destination
出現回数	1 回
要素値	該当なし

configuration 要素は、インストール・プロセスでインポートされる XML ファイルに関する情報を保持する場合に使用されます。

「[source 要素](#)」では、configuration 要素の子要素について説明します。

18.1.8 source 要素

次の表に、source 要素のプロパティについてまとめます。

プロパティ	値
親要素	configuration
属性	folder
子要素	file 注意: file 要素については、この章で前述しています。
出現回数	1 回
要素値	xml

source 要素は、コネクタ XML ファイルが格納されている、コネクタのインストール・メディアのディレクトリ内の xml フォルダを指定する場合に使用されます。インストール・プロセスでは、デプロイメント・マネージャが呼び出され、これらの XML ファイルがインポートされます。

次のコード行の例では、configuration、source、および file 要素の正しい使用方法を示しています。

```
<configuration>
  <source folder="xml">
    <file>xliADResourceObject.xml</file>
    <file>xliADXLResourceObject.xml</file>
  </source>
</configuration>
```

18.1.9 pre-Install 要素

次の表に、pre-Install 要素のプロパティについてまとめます。

プロパティ	値
親要素	connector
属性	なし
子要素	title
出現回数	1 回
要素値	該当なし

コネクタの中には、使用を開始する前に特定のタスクの実行が必要なものがあります。たとえば、Microsoft Active Directory コネクタは、Secure Sockets Layer (SSL) を構成して Oracle Identity Manager とターゲット・システム間の通信を保護する必要があります。これらの前提条件タスクは、pre-Install 要素の子要素を使用して、コネクタのインストール・プロセスの終了時に表示できます。

前提条件タスクをコネクタのインストール・プロセスの終了時に表示しない場合は、pre-Install 要素を XML ファイルに含めないでください。

「[title 要素](#)」では、pre-Install 要素の子要素について説明します。

18.1.10 title 要素

次の表に、title 要素のプロパティについてまとめます。

プロパティ	値
親要素	pre-Install
属性	description
子要素	step
出現回数	少なくとも 1 回
要素値	表示するテキストを含む、リソース・バンドル行のキー値

リソース・バンドルには、コネクタの前提条件タスクを含むセクション・タイトルが指定されている行があります。title 要素の description 属性は、このリソース・バンドル行のキー値の指定に使用されます。

注意：リソース・バンドルで、リソース・バンドル行のキー値は、等号 (=) の左側のテキストです。リソース・バンドルの詳細は、『Oracle Identity Manager グローバリゼーション・ガイド』を参照してください。

「step 要素」では、title 要素の子要素について説明します。この項の例では、この要素の正しい使用方法を示しています。

18.1.11 step 要素

次の表に、step 要素のプロパティについてまとめます。

プロパティ	値
親要素	title
属性	なし
子要素	なし
出現回数	1 回
要素値	表示するテキストを含む、リソース・バンドル行のキー値

step 要素は、コネクタの 1 つの前提条件タスクを説明しているリソース・バンドル行のキー値を指定する場合に使用します。

次の例では、Microsoft Active Directory コネクタを使用して、pre-Install、title、および step 要素の正しい使用方法を説明しています。

次に、Microsoft Active Directory コネクタのインストール後に表示される前提条件タスクの一部を示します。

Enabling LDAPS

- Ensure that Certificate Services are installed on the server.
- Open the default group policy for the Domain Controller on the server (in Active Directory Users and Computers).
- Right-click the domain node, and select Properties. Click the Group Policy tab.
- Select Default Domain Policy.
- ...

Setting Up the Microsoft Active Directory Certificate as a Trusted Certificate

- To make the Microsoft Active Directory certificate a trusted certificate, export the certificate and import it into the keystore of the Oracle Xellerate Identity

Provisioning server as a trusted CA certificate.

. . .

次に、Microsoft Active Directory コネクタのインストール後に表示される、前提条件タスクを含むリソース・バンドル行の一部を示します。

```
AD-connector.prerequisite.enablingldaps=Enabling LDAPS
```

```
AD-connector.prerequisite.enablingldapsteps=<ul><li>Ensure that Certificate Services
are installed on the server</li><li>Open the default group policy for the Domain
Controller on the server (in Active Directory Users and Computers).</li><li>Right-click
the domain node, and select Properties.</li><li>Click the Group Policy
tab.</li><li>Select Default Domain Policy.</li> . . </ul>
```

```
AD-connector.prerequisite.setupad=Setting Up the Microsoft Active Directory Certificate
as a Trusted Certificate
```

```
AD-connector.prerequisite.setupadsteps=<ul><li>To make the Microsoft Active Directory
certificate a trusted certificate, export the certificate and import it into the
keystore of the Oracle Xellerate Identity Provisioning server as a trusted CA
certificate.</li> . . </ul>
```

インストール・プロセスの終了時にこれらのリソース・バンドル行を表示可能にするには、次の行を構成 XML ファイルに追加する必要があります。

```
<pre-Install>
  <title description="AD-connector.prerequisite.enablingldaps">
    <step>AD-connector.prerequisite.enablingldapsteps</step>
  </title>
  <title description="AD-connector.prerequisite.setupad">
    <step>AD-connector.prerequisite.setupadsteps</step>
  </title>
</pre-Install>
```

18.1.12 dependency-connector 要素

次の表に、dependency-connector 要素のプロパティについてまとめます。

プロパティ	値
親要素	connector
属性	なし
子要素	dependency-connector-name、 dependency-connector-version
出現回数	少なくとも 1 回
要素値	該当なし

特定のコネクタは、他の特定のコネクタをインストールした後でのみ、使用を開始できます。たとえば、Novell GroupWise コネクタは、Novell eDirectory コネクタをインストールした後でなければ使用を開始できません。Oracle Identity Manager のコンテキストでは、インストールされていることが前提条件であるコネクタを**依存コネクタ**と呼びます。たとえば、Novell eDirectory コネクタは、Novell GroupWise コネクタの依存（必須）コネクタです。

dependency-connector 要素は、コネクタの依存コネクタに関する情報を保持するために使用されます。コネクタに複数の依存コネクタがある場合は、依存コネクタごとに XML ファイルで dependency-connector 要素を 1 つずつ追加します。

次の項では、`dependency-connector` 要素の子要素について説明します。

- [dependency-connector-name](#) 要素
- [dependency-connector-version](#) 要素

18.1.13 dependency-connector-name 要素

次の表に、`dependency-connector-name` 要素のプロパティについてまとめます。

プロパティ	値
親要素	<code>dependency-connector</code>
属性	なし
子要素	なし
出現回数	少なくとも 1 回
要素値	依存コネクタの名前

`dependency-connector-name` 要素は、コネクタの依存コネクタの名前を指定する場合に使用します。指定する名前は、依存コネクタの XML ファイルの `connector-name` 要素で指定した名前と同じにする必要があります。

「`dependency-connector-version` 要素」には、`dependency-connector-name` 要素の正しい使用方法を示す例が含まれています。

18.1.14 dependency-connector-version 要素

次の表に、`dependency-connector-version` 要素のプロパティについてまとめます。

プロパティ	値
親要素	<code>dependency-connector</code>
属性	なし
子要素	なし
出現回数	<code>dependency-connector-name</code> 要素が出現するたびに 1 回
要素値	依存コネクタのリリース番号

`dependency-connector-version` 要素は、コネクタの依存コネクタのリリース番号を指定する場合に使用します。指定するリリース番号は、依存コネクタの構成 XML ファイルの `connector-version` 要素で指定したリリース番号と同じにする必要があります。指定するコネクタのバージョンの値には空白が入らないようにしてください。

次の例は、`dependency-connector`、`dependency-connector-name`、および `dependency-connector-version` 要素の使用方法について示しています。

`DepConn1` および `DepConn2` は、使用するコネクタの依存コネクタです。それぞれのリリース番号は、9.0.3 および 9.0.4.1 です。これらの依存コネクタ用に、コネクタの構成 XML ファイルに次の行を追加する必要があります。

```
<dependency-connector>
  <dependency-connector-name>DepConn1</dependency-connector-name>
  <dependency-connector-version>9.0.3</dependency-connector-version>
</dependency-connector>
<dependency-connector>
  <dependency-connector-name>DepConn2</dependency-connector-name>
  <dependency-connector-version>9.0.4.1</dependency-connector-version>
</dependency-connector>
```

コネクタに依存コネクタがない場合は、`dependency-connector` 要素を追加する必要はありません。

18.1.15 サンプル構成 XML ファイル

サンプル構成 XML ファイルの内容は次のとおりです。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<connector orderid="1" xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
xsi:noNamespaceSchemaLocation=".¥ConnectorSchema.xsd">
<connector-name>Active Directory</connector-name>
<connector-version>9.1.0</connector-version>
<filecopy>
<destination folder="ConnectorResources">
  <file>ActiveDirectory.properties</file>
<destination folder="JavaTasks">
  <file>connector.jar</file>
</destination>
<destination folder="ScheduleTask">
  <file>connector.jar</file>
</destination>
</filecopy>
<configuration>
  <source folder="xml">
    <file>ActiveDirectory.xml</file>
  </source>
</configuration>
<pre-Install>
  <title description="AD-connector.prerequisite.enablingldaps">
    <step>AD-connector.prerequisite.enablingldapsteps</step>
  </title>
  <title description="AD-connector.prerequisite.setupad">
    <step>AD-connector.prerequisite.setupadsteps</step>
  </title>
</pre-Install>
<dependency-connector>
  <dependency-connector-name>DepConn1</dependency-connector-name>
  <dependency-connector-version>9.0.3</dependency-connector-version>
</dependency-connector>
<dependency-connector>
  <dependency-connector-name>DepConn2</dependency-connector-name>
  <dependency-connector-version>9.0.4.1</dependency-connector-version>
</dependency-connector>
```

18.2 コネクタ用のテスト・クラスの開発

コネクタ用のテスト・クラスを開発する必要があります。接続性、リコンシリエーション、またはプロビジョニングのテストで診断ダッシュボードを使用する場合、このクラスを使用してテストが実行されます。

テスト・クラスの作成に関するガイドラインを次に示します。

- テスト・クラスでは、`testBasicConnectivity`、`testProvisioning`、および `testReconciliation` メソッドを実装する必要があります。これらのメソッドでは、ハッシュマップ・パラメータを受け入れる必要があります。
- テスト・クラスの名前は、次の形式にする必要があります。

```
connector_nameConnectorTest.java
```


この形式を適用するには、次のファイルの SPD_KEY 要素の ITResourceDef 属性の値を connector_name に置換します。

```
Connector_Pack_Directory/xml/xliconconnector_nameResourceObject.xml
```

ITResourceDef 属性の値に空白が含まれる場合は、空白を削除します。たとえば、XML ファイルに次のような SPD_KEY 要素があるとします。

```
<SPD_KEY ITResourceDef="AD Server"/>
```

この場合、テスト・クラスの名前を ADServerConnectorTest.java に設定します。

- コネクタの JAR ファイルの中にテスト・クラスのファイルを含め、JAR ファイルをコネクタ・パック・ディレクトリの lib ディレクトリにコピーします。

18.3 コネクタ・パック・ディレクトリの構造

コネクタ・ファイルの作成後は、それらを表 18-2 で説明するディレクトリに配置する必要があります。これらのディレクトリは、使用するコネクタのコネクタ・パック・ディレクトリに配置されます。たとえば、Microsoft Active Directory コネクタのコネクタ・パック・ディレクトリは、ActiveDirectory です。

表 18-2 コネクタ・パック・ディレクトリの構造

ディレクトリ	説明
configuration	このディレクトリには、インストール・プロセスで使用される構成 XML ファイルを配置します。 例: ActiveDirectorConnectorConfig.xml
ext	このディレクトリには、すべてのサード・パーティ製 JAR ファイルを配置します。インストール・プロセスでは、このディレクトリ内のファイルが ThirdParty ディレクトリにコピーされます。 たとえば、Sun Java System Directory コネクタを使用するには、ldap.jar がファイルが必要です。
lib	このディレクトリには、リコンシリエーションおよびプロビジョニングの操作に必要な JAR ファイルを配置します。インストール・プロセスでは、リコンシリエーション用の JAR ファイルは ScheduleTask ディレクトリにコピーされ、プロビジョニング用の JAR ファイルは JavaTasks ディレクトリにコピーされます。 例: xliActiveDirectory.jar
resources	このディレクトリには、リソース・バンドルを配置します。インストール・プロセスでは、これらのリソース・バンドルが connectorResources ディレクトリにコピーされます。 例: ActiveDirectory_en.properties
scripts	このディレクトリには、手動によるコネクタ構成プロセスの一部として実行する必要があるスクリプトを配置します。これらのスクリプトは、管理およびユーザー・コンソールを使用して実行されたインストール・プロセスでは使用されません。
xml	このディレクトリには、信頼できるソース・リソースおよびターゲット・リソースのリコンシリエーション用のコネクタ XML ファイルを配置します。インストール・プロセスでは、構成 XML ファイルに記述されているコネクタ XML ファイルがデプロイメント・マネージャによってインポートされます。 例: ActiveDirectorConnectorConfig.xml

汎用テクノロジー・コネクタの概要

この章では、汎用テクノロジー・コネクタの概念と、汎用テクノロジー・コネクタを使用するために Oracle Identity Manager で提供される機能について説明します。

この章の内容は、次のとおりです。

- 汎用テクノロジー・コネクタの必要性
- 汎用テクノロジー・コネクタの機能アーキテクチャ
- 汎用テクノロジー・コネクタの機能
- このマニュアルでの汎用テクノロジー・コネクタに関する情報のロードマップ

19.1 汎用テクノロジー・コネクタの必要性

Oracle Identity Manager の事前定義済コネクタは、Microsoft Active Directory および PeopleSoft Enterprise Applications などの、一般的に使用されているターゲット・システムにあわせて設計されています。事前定義済コネクタはアダプタ・ファクトリ機能を使用して開発され、そのアーキテクチャは、ターゲット・システムがサポートしている API、またはターゲット・システムがユーザー・データを格納するデータ・リポジトリのタイプおよびスキーマのいずれかに基づきます。事前定義済コネクタは、アダプタ・ファクトリを使用して開発されるため、高度なワークフローおよびアダプタのカスタマイズ機能を備えています。ターゲット・システムでこれらのコネクタが使用できる場合は、統合の方法として事前定義済コネクタの使用をお勧めします。

対応する事前定義済コネクタがないターゲット・システムと Oracle Identity Manager を統合する場合があります。その例として、次のようなシナリオについて考えます。

シナリオ 1: Acme Inc. のすべての従業員は、バックアップ・サーバーにディスク領域を割り当てられています。従業員は、バックアップ・サーバー上の従業員アカウントを管理するようにシステム管理者にリクエストを送信します。システム管理者は、従業員からのリクエストを取得、確認および処理する Web ベース・アプリケーションを開発しています。このアプリケーションのフロント・エンドは、CSV 形式のデータを受け取って格納する Web サービスです。バックエンドに格納される従業員アカウント・データは、XML ファイルとして指定の場所にエクスポートできます。

シナリオ 2: Ceeam Travels Inc. では、顧客が航空運賃の見積りのリクエストに使用できるカスタムの Web ベース・アプリケーションを所有しています。Ceeam Travels の従業員でもあるエージェントは、これらのリクエストに対し、同じアプリケーションを使用して応答します。顧客は、自己登録によりこのアプリケーション内にアカウントを作成します。ただし、Ceeam Travels の従業員は、人事管理上の役職に基づいて自動的にプロビジョニングされたアカウントを持っている必要があります。アプリケーションのアカウント管理機能（作成、更新および削除など）は、Java API を介して使用可能です。

シナリオ 1 とシナリオ 2 のどちらの場合も、カスタム・コネクタを作成して、ターゲット・システムと Oracle Identity Manager をリンクする必要があります。カスタム・コネクタを作成する簡単な方法を模索しており、アダプタ・ファクトリのカスタマイズ機能は必要ないという場合には、コネクタの作成に Oracle Identity Manager の汎用テクノロジー・コネクタ機能を使用できます。19-2 ページの「汎用テクノロジー・コネクタの機能アーキテクチャ」で説明しているように、プロバイダは汎用テクノロジー・コネクタのビルディング・ブロックです。シナリオ 1 では、事前定義済の共有ドライブ・リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダおよび CSV リコンシリエーション・フォーマット・プロバイダを使用することにより、フラット・ファイルとして格納されているデータを Oracle Identity Manager に対してリコンサイルする汎用テクノロジー・コネクタを作成できます。シナリオ 2 では、カスタム・アプリケーションを Oracle Identity Manager に統合する場合に使用できる事前定義済プロバイダはありません。この場合は、第 21 章に記載されている手順を使用して、ターゲット・アプリケーションで公開されている Java API を呼び出すカスタム・プロバイダを作成します。

19.2 汎用テクノロジー・コネクタの機能アーキテクチャ

事前定義済コネクタと同様に、汎用テクノロジー・コネクタは、Oracle Identity Manager とターゲット・システムの間でリコンシリエーションおよびプロビジョニング操作を仲介する役割をはたします。機能面から見ると、汎用テクノロジー・コネクタは、リコンシリエーション・モジュールとプロビジョニング・モジュールに分けられます。汎用テクノロジー・コネクタを作成する際には、リコンシリエーション・モジュールとプロビジョニング・モジュールをともに組み込むか、どちらか一方のみ組み込むかを指定できます。

事前定義済コネクタは、同一のターゲットのコンテキストでリコンシリエーション機能とプロビジョニング機能を備えています。それに対して、汎用テクノロジー・コネクタのリコンシリエーション・モジュールおよびプロビジョニング・モジュールは、選択した再使用可能コンポーネントで構成されます。それぞれのコンポーネントでは、プロビジョニング時またはリコンシリエーション時に、特定の機能が実行されます。たとえば、フラット・ファイルから信頼できるソース・リコンシリエーションを実行するとともに、SPML プロトコルを使用した SPML 対応ターゲットへのターゲット・リソース・プロビジョニングを実行するコネクタを作成できます。

このマニュアルでは、汎用テクノロジー・コネクタを構成するコンポーネントを**プロバイダ**と呼びます。

それぞれのプロバイダでは、データに対して、トランスポート、フォーマット変更、検証または変換のいずれかの機能が実行されます。つまり、プロバイダによって処理されるデータ項目は、新しい場所への移動、指定された基準を満たしているかどうかの検証、または構造や値の変更が実行されます。このマニュアルでは、レイヤー形式に配列されたデータ構造を**データセット**と呼びます。プロビジョニング時およびリコンシリエーション時にはレイヤー間をデータが移動します。

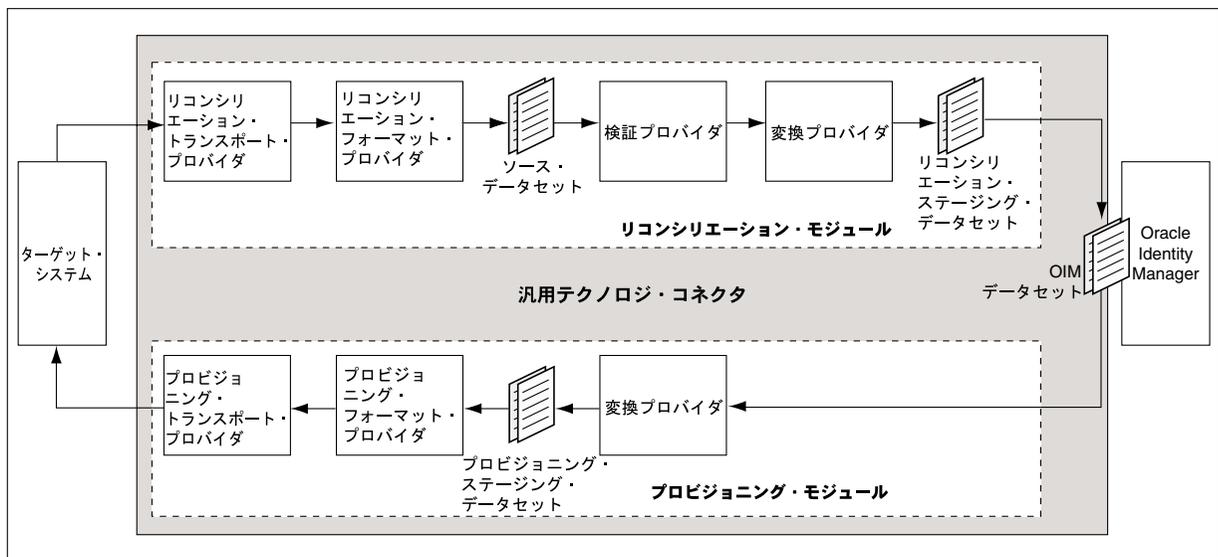
汎用テクノロジー・コネクタを作成する場合、各データセットに含まれる必要があるフィールド（ユーザー・アイデンティティ・メタデータ）を指定できます。また、異なるデータセットのフィールド間にマッピングを定義することもできます。マッピングは、次のいずれかを目的としています。

- プロビジョニングまたはリコンシリエーションを目的とする、2つのデータセットのフィールド間のデータ・フロー・パスの確立

このタイプのマッピングに基づいて、ターゲット・システムからフェッチされたデータの検証または変換が行われます。
- 2つのデータセットのフィールド値の比較（一致）の基盤の構築

図 19-1 は、汎用テクノロジー・コネクタの機能アーキテクチャを示しています。

図 19-1 汎用テクノロジー・コネクタの機能アーキテクチャ



次の各項では、汎用テクノロジー・コネクタを構成するプロバイダおよびデータセットについて説明します。

- リコンシリエーション・モジュールのプロバイダおよびデータセット
- プロビジョニング・モジュールのプロバイダおよびデータセット
- 「OIM」データセット

19.2.1 リコンシリエーション・モジュールのプロバイダおよびデータセット

リコンシリエーション・モジュールは、次のプロバイダおよびデータセットで構成されています。

- リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダ
リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダは、ターゲット・システムのリコンシリエーション・データが Oracle Identity Manager へ伝播されます。このプロバイダがリコンシリエーション・データを伝播する方法は、プロバイダの実装によって異なります。たとえば、リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダは、ファイルからのデータの読取り、Web サービスからのデータの受取り、またはデータベースへの問合せが可能です。
- リコンシリエーション・フォーマット・プロバイダ
リコンシリエーション・フォーマット・プロバイダは、リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダによりフェッチされたリコンシリエーション・データを解析して、このデータを Oracle Identity Manager に格納できるデータ構造に変換します。
- ソース
「ソース」データセットには、リコンシリエーション・フォーマット・プロバイダにより処理されたデータが保持されます。このデータセットは、子データセットを持つことが可能です。
- 検証プロバイダ
検証プロバイダでは、「ソース」データセット内のデータが指定した基準を満たしているかどうかを確認され、その後データが Oracle Identity Manager のリコンシリエーション・エンジンに渡されます。

注意：1つの汎用テクノロジー・コネクタには、複数の検証プロバイダを組み込むことができます。

- 変換プロバイダ
リコンシリエーション・モジュールに組み込まれている変換プロバイダでは、検証プロバイダから受け取ったデータが変更され、その後データがリコンシリエーション・イベントを作成するために Oracle Identity Manager へ渡されます。
変換プロバイダ機能の例を、次に説明します。
ターゲット・システムの2つのフィールドに、次のように値が設定されているとします。
名: John
姓: Doe
変換プロバイダを使用すると、次のようなリコンシリエーション・フィールドを出力できます。
ログイン ID: John.Doe
- リコンシリエーション・ステージング
「リコンシリエーション・ステージング」データセットには、検証プロバイダおよび変換プロバイダによって処理されたユーザー・データが保持されます。このデータセットは、子データセットを持つことが可能です。

19.2.2 プロビジョニング・モジュールのプロバイダおよびデータセット

プロビジョニング・モジュールは、次のプロバイダおよびデータセットで構成されています。

■ 変換プロバイダ

変換プロバイダを使用すると、次の段階でデータ項目を変更できます。

- リコンシリエーションの実行中、Oracle Identity Manager でリコンシリエーション・イベントが作成される前にデータを変更できます。
- プロビジョニング時に、Oracle Identity Manager プロセス・フォームに入力されたデータを、ターゲット・システムに送信する前に変更できます。

変換プロバイダ機能の例を、次に説明します。

ターゲット・システムの2つのフィールドに、次のように値が設定されているとします。

名: John

姓: Doe

変換プロバイダを使用すると、次のようなリコンシリエーション・フィールドを出力できます。

ログイン ID: john.doe

■ プロビジョニング・ステー징

「プロビジョニング・ステー징」データセットには、プロビジョニング・フォーマット・プロバイダに送信される前のユーザー・データが保持されます。このデータは、Oracle Identity Manager に格納されているユーザー・データまたはアカウント・データに対して変換機能を実行した場合の出力です。このデータセットは、子データセットを持つことが可能です。

■ プロビジョニング・フォーマット・プロバイダ

プロビジョニング・フォーマット・プロバイダでは、(変換プロバイダから受け取った) Oracle Identity Manager のプロビジョニング・データが、ターゲット・システムでサポートされているフォーマットに変換されます。

■ プロビジョニング・トランスポート・プロバイダ

プロビジョニング・トランスポート・プロバイダでは、プロビジョニング・フォーマット・プロバイダからターゲット・システムへプロビジョニング・データが伝播されます。このプロバイダがリコンシリエーション・データを伝播する方法は、プロバイダの実装によって異なります。たとえば、プロバイダでは、ファイルへのデータのコピー、Web サービスへのデータの送信、またはデータベースへのデータのポストが可能です。

19.2.3 「OIM」 データセット

「OIM」 データセットは、Oracle Identity Manager に格納されているデータを表します。これらのデータセットは、リコンシリエーション・モジュールまたはプロビジョニング・モジュールの一部ではありませんが、汎用テクノロジー・コネクタの一部とみなされます。これは、これらのデータセットにフィールドを追加して、そのフィールドとその他のデータセットとの間にマッピングを作成できるためです。「OIM」 データセットには次のものがあります。

- OIM - ユーザー

「OIM - ユーザー」 データセットには、OIM ユーザーを定義するメタデータ（アイデンティティ・フィールドのセット）が保持されます。信頼できるソース・リコンシリエーションの場合、このデータセットは、「リコンシリエーション・ステー징ング」データセットから、新規作成または変更されたユーザー・アカウント情報を受け取ります。ターゲット・リソース・リコンシリエーションの場合は、「OIM - ユーザー」データセットのフィールドを使用して、ターゲット・システムのユーザー・アカウントと既存の OIM ユーザーを一致させることができます。このデータセットは、子データセットを持つことはできません。

- OIM - アカウント

「OIM - アカウント」データセットには、Oracle Identity Manager の「プロセス・フォーム」フィールドに格納されているユーザー・アカウント情報が保持されます。このユーザー・アカウント情報は、「リコンシリエーション・ステー징ング」データセットから受け取ります。「OIM - アカウント」データセットは、子データセットを持つことが可能です。

19.3 汎用テクノロジー・コネクタの機能

次の各項では、汎用テクノロジー・コネクタの機能について説明します。

- [リコンシリエーション・モジュールに固有の機能](#)
- [その他の機能](#)

19.3.1 リコンシリエーション・モジュールに固有の機能

次の機能は、リコンシリエーション・モジュールに固有のものであります。

- [信頼できるソース・リコンシリエーション](#)
- [アカウント・ステータスのリコンシリエーション](#)
- [完全リコンシリエーションおよび増分リコンシリエーション](#)
- [バッチ・リコンシリエーション](#)
- [複数値属性データ（子データ）の削除のリコンシリエーション](#)
- [リコンシリエーション停止の失敗しきい値](#)

19.3.1.1 信頼できるソース・リコンシリエーション

汎用テクノロジー・コネクタは、信頼できるソース・リコンシリエーションに使用できます。信頼できるモードでのリコンシリエーションでは、次が実行されます。

- リコンシリエーション・エンジンでは、新規のターゲット・システム・アカウントが検出されると、対応する OIM ユーザーが作成されます。
- リコンシリエーション・エンジンでは、既存のターゲット・システム・アカウントに対する変更が検出されると、対応する OIM ユーザーに同様の変更が行われます。

注意：汎用テクノロジー・コネクタの作成時に「信頼できるソース・リコンシリエーション」オプションを選択しない場合は、ターゲット・リソース・リコンシリエーションが有効になります。ターゲット・リソース・リコンシリエーションでは、ターゲット・システム・アカウントに対する変更のみがリコンサイルされます。リコンシリエーション時に検出された新規のターゲット・システム・アカウントが、Oracle Identity Manager で自動的に作成されることはありません。

信頼できるソース・リコンシリエーションに使用する汎用テクノロジー・コネクタは、プロビジョニングには使用できません。このような設計機能が組み込まれているのは、信頼できるソースとして指定されたターゲット・システム上のユーザー・アカウント情報を、Oracle Identity Manager を介して作成または変更できないようにするためです。

IT リソースおよびリソース・オブジェクトなどのコネクタ・オブジェクトは、汎用テクノロジー・コネクタの作成プロセスの最後に自動的に作成されます。デフォルトでは、汎用テクノロジー・コネクタのリソース・オブジェクトは、信頼できるリソース・オブジェクトです。つまり、汎用テクノロジー・コネクタはあらかじめ、複数の信頼できるソースのリコンシリエーション機能と互換性があります。この機能は、『Oracle Identity Manager デザイン・コンソール・ガイド』の「複数の信頼できるソースのリコンシリエーション」で説明されています。

注意：信頼できるソース・リコンシリエーションでは、複数値（子）データのリコンシリエーションはサポートされていません。

19.3.1.2 アカウント・ステータスのリコンシリエーション

ユーザー・アカウント・ステータス情報は、ターゲット・システム・アカウントの所有者がそのアカウントへのアクセスおよび使用を許可されているかどうかをトラッキングする場合に使用されます。Oracle Identity Manager に格納されている形式のアカウント・ステータス情報がターゲット・システムに格納されていない場合は、事前定義済の翻訳変換プロバイダを使用して、アカウント・ステータスのリコンシリエーションを実装できます。

注意：

ユーザー・アカウント・ステータスのリコンシリエーションは、信頼できるソース・リコンシリエーションを選択するかターゲット・リソース・リコンシリエーションを選択するかに関係なく実装できます。

Design Console には、翻訳変換プロバイダを使用せずにアカウント・ステータスのリコンシリエーションを実装するための機能が用意されています。詳細は、『Oracle Identity Manager デザイン・コンソール・ガイド』のアカウント・ステータスのリコンシリエーションに関する項を参照してください。

19.3.1.3 完全リコンシリエーションおよび増分リコンシリエーション

汎用テクノロジー・コネクタを作成する際に、コネクタを完全リコンシリエーションまたは増分リコンシリエーションに使用するよう指定できます。

最後のリコンシリエーション実行後に変更されたレコードをリコンシリエーション・エンジンで識別する方法がターゲット・システムでサポートされている場合は、増分リコンシリエーションを選択します。たとえば、ターゲット・システムでユーザー・レコードの作成または変更にタイムスタンプが付けられている場合、リコンシリエーション・エンジンでは、最後のリコンシリエーション実行後に追加または変更されたレコードを識別できます。増分リコンシリエーションでは、最後のリコンシリエーション実行後に変更されたターゲット・システムのレコードのみが Oracle Identity Manager でリコンサイル（格納）されます。

次のいずれかの条件に該当する場合は、完全リコンシリエーションを選択します。

- 最後のリコンシリエーション実行後に変更されたレコードをリコンシリエーション・エンジンで識別する方法がターゲット・システムでサポートされていない場合
- ターゲット・システムのすべてのユーザー・アカウント・レコードに初めてリコンシリエーションを実行する場合

完全リコンシリエーションでは、すべてのリコンシリエーション・レコードがターゲット・システムから抽出されます。ただし、最適化リコンシリエーション機能により、Oracle Identity Manager ですでにリコンサイル済のレコードが識別されて無視されます。これは、リコンシリエーション・データで占有される領域を削減するために役立ちます。この機能がなければ、Oracle Identity Manager データベースに格納されるデータ容量は、リコンシリエーションを実行するたびに急速に増加することになります。

注意：完全リコンシリエーションと増分リコンシリエーションの結果は同じです。

- 最初のリコンシリエーション実行時に、すべてのターゲット・システム・レコードがリコンサイルされます。
 - 2回目のリコンシリエーション以降は、最後のリコンシリエーション実行後に作成または更新されたターゲット・システムのレコードが、Oracle Identity Manager によってリコンサイルされます。
-

19.3.1.4 バッチ・リコンシリエーション

リコンシリエーションのバッチ・サイズを指定できます。これにより、リコンシリエーション実行中にリコンシリエーション・エンジンがターゲット・システムからフェッチするレコードの総数をバッチに分割できます。この機能により、リコンシリエーション・プロセスをさらにきめ細かく制御できるようになります。

19.3.1.5 複数值属性データ（子データ）の削除のリコンシリエーション

ターゲット・システムの複数值属性データの削除を Oracle Identity Manager でリコンサイルするかどうかを指定します。

注意：汎用テクノロジー・コネクタでは、親データの削除のリコンシリエーションはサポートされていません。たとえば、ユーザー John Doe のアカウントがターゲット・システムから削除された場合、汎用テクノロジー・コネクタを使用してこのユーザー・アカウントの削除を Oracle Identity Manager でリコンサイルすることはできません。これについては、26-9 ページの「[一般的な既知の問題](#)」にも記載されています。

19.3.1.6 リコンシリエーション停止の失敗しきい値

リコンシリエーションの実行中、ターゲット・システム・データを Oracle Identity Manager に格納する前に、検証プロバイダでデータのチェックを実行できます。失敗しきい値を設定しておくと、検証チェックに通らなかったレコードの処理済レコードの総数に対する割合が指定のしきい値を超えた場合に、リコンシリエーションの実行を自動的に停止できます。

19.3.2 その他の機能

次の機能は、リコンシリエーション・モジュールまたはプロビジョニング・モジュールに固有のものではありません。

- カスタム・データ・フィールドおよびフィールド・マッピング
- カスタム・プロバイダ
- 多言語サポート
- カスタム日付書式
- OIM ユーザー属性に対する変更のターゲット・システムへの伝播

19.3.2.1 カスタム・データ・フィールドおよびフィールド・マッピング

汎用テクノロジー・コネクタを作成する場合、リコンシリエーションおよびプロビジョニングの実行中に使用する必要があるアイデンティティ・フィールドおよびフィールド・マッピング（データ・フロー・パス）を指定できます。

19.3.2.2 カスタム・プロバイダ

Oracle Identity Manager に付属の事前定義済プロバイダが、動作環境のトランスポート、フォーマット変更、検証または変換についての要件に対応していない場合は、カスタム・プロバイダを作成できます。

19.3.2.3 多言語サポート

汎用テクノロジー・コネクタは、ASCII 形式のユーザー・データも ASCII 形式以外のアイデンティティ・データも処理できます。

19.3.2.4 カスタム日付書式

汎用テクノロジー・コネクタの作成時は、次のような書式を指定できます。

- リコンシリエーション実行中に抽出されたターゲット・システム・レコードの日付の値の書式
- プロビジョニング実行中にターゲット・システムへ送信する必要がある日付の値の書式

19.3.2.5 OIM ユーザー属性に対する変更のターゲット・システムへの伝播

汎用テクノロジー・コネクタの作成時、OIM ユーザー属性に対する変更が自動的にターゲット・システムへ伝播されるように設定できます。

19.4 このマニュアルでの汎用テクノロジー・コネクタに関する情報のロードマップ

汎用テクノロジー・コネクタに関するその他の章および付録の概要を次に示します。

- **第 20 章「Oracle Identity Manager に含まれている汎用テクノロジー・コネクタの事前定義済プロバイダ」**
この章では、Oracle Identity Manager に付属の事前定義済プロバイダについて説明します。
- **第 21 章「汎用テクノロジー・コネクタ用カスタム・プロバイダの作成」**
この章では、カスタム・プロバイダの作成手順について説明します。
- **第 22 章「汎用テクノロジー・コネクタの作成」**
この章では、汎用テクノロジー・コネクタの作成手順について説明します。
- **第 23 章「汎用テクノロジー・コネクタの管理」**
この章では、汎用テクノロジー・コネクタの変更、エクスポートおよびインポートの手順について説明します。
- **第 24 章「汎用テクノロジー・コネクタの作成および使用に関するベスト・プラクティス」**
この章では、汎用テクノロジー・コネクタの作成時および使用時に適用する必要があるベスト・プラクティスについて説明します。これらのガイドラインには、このマニュアル内の該当箇所でも繰り返し言及されているものもあります。
- **第 25 章「汎用テクノロジー・コネクタ・エラーのトラブルシューティング」**
この章では、汎用テクノロジー・コネクタを使用してリコンシリエーションおよびプロビジョニングの実行中に一般的に発生する問題の解決方法について説明します。
- **第 26 章「汎用テクノロジー・コネクタに関する既知の問題」**
この章では、このリリースの Oracle Identity Manager における汎用テクノロジー・コネクタ・フレームワークの制限事項について説明します。これらの制限事項の多くは、マニュアル内の他の該当箇所にも記載されています。
- **第 27 章「Oracle Identity Manager をターゲット・システムとして使用したプロビジョニング操作」**
この章では、ターゲット Oracle Identity Manager インストールへのプロビジョニング・リンクとして使用する汎用テクノロジー・コネクタの作成に固有の手順について説明します。
- **第 28 章「汎用テクノロジー・コネクタ・フレームワークで作成されるコネクタ・オブジェクト」**
この章では、汎用テクノロジー・コネクタ・フレームワークにより自動的に作成されるコネクタ・オブジェクトについて説明します。

コネクタの関連ドキュメント

次のマニュアルには、コネクタの追加情報と、コネクタを使用するために Oracle Identity Manager で提供される機能について説明しています。

- 『Oracle Identity Manager デザイン・コンソール・ガイド』
汎用テクノロジー・コネクタの使用に関連した Design Console の操作手順に関する追加情報は、このマニュアルを参照してください。
- 『Oracle Identity Manager グローバリゼーション・ガイド』
このマニュアルには、製品の中でグローバリゼーションの対象となっている部分に関する情報、およびリソース・バンドルを使用したユーザー構成可能な文字列のローカライズに関する情報が記載されています。また、作成する汎用テクノロジー・コネクタ用にリソース・バンドルを開発する手順も記載されています。

Oracle Identity Manager に含まれている汎用テクノロジー・コネクタの事前定義済プロバイダ

Oracle Identity Manager の現在のリリースには、次の事前定義済プロバイダが含まれています。

注意： 使用するプロバイダ用のパラメータの値を決定する必要があります。この値は、管理およびユーザー・コンソールを使用して汎用テクノロジー・コネクタを作成する間に使用します。

- 共有ドライブ・リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダ
- CSV リコンシリエーション・フォーマット・プロバイダ
- SPML プロビジョニング・フォーマット・プロバイダ
- Web サービス・プロビジョニング・トランスポート・プロバイダ
- 変換プロバイダ
- 検証プロバイダ

20.1 共有ドライブ・リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダ

共有ドライブ・リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダは、ステージング・ディレクトリに格納されたフラット・ファイルからデータを読み取り、そのファイルをアーカイブ・ディレクトリに移動します。ステージング・ディレクトリとアーカイブ・ディレクトリを共有して、Oracle Identity Manager サーバーからアクセスできるようにする必要があります。

このプロバイダのパラメータを次に示します。

■ ステージング・ディレクトリ (親アイデンティティ・データ)

このパラメータを使用して、親データを含むファイルを格納するディレクトリのパスを指定します。このパラメータ値の指定は必須です。これはランタイム・パラメータです。

このマニュアルでは、**親データ**とは、ターゲット・システムに格納されているユーザー・アカウント情報を意味します。

このパラメータのサンプル値は次のとおりです。

```
T:/TargetSystemDirectory/ParentData
```

注意： Oracle Identity Manager がインストールされているサーバー上にステージング・ディレクトリがない場合、そのディレクトリを共有にして、Oracle Identity Manager サーバー上にネットワーク・ドライブとしてマップする必要があります。

親データ・ファイルに格納されるデータは、次の規則に準拠する必要があります。

- ファイルの 1 行目

親データ・ファイルの 1 行目は、ファイルの内容を示すファイル・ヘッダーである必要があります。

ファイル・ヘッダーの先頭にはシャープ記号 (#) を付けることができます。この記号はファイルの読み取り時には無視されます。ただし、ヘッダーの先頭に空白がないようにしてください。英語以外の言語を使用している場合、この行に非 ASCII 文字は入力できません。

注意： 1 行目に非 ASCII 文字を入力しないようにするチェック機能はありません。また、汎用テクノロジー・コネクタ・フレームワークでは非 ASCII 文字を解析できません。ただし、非 ASCII 文字を使用すると、作成した汎用テクノロジー・コネクタのコネクタ・オブジェクトが自動的に作成される時点で問題が発生します。この制限事項の詳細は、「汎用テクノロジー・コネクタに関する既知の問題」の章の「[多言語サポート](#)」(26-5 ページ) を参照してください。

- ファイルの 2 行目

親データ・ファイルの 2 行目には、ファイル内のデータのフィールド名 (メタデータ) を入力する必要があります。

注意： 汎用テクノロジー・コネクタのコンテキストでは、**メタデータ**という用語はユーザー・アカウント情報を構成する一連のアイデンティティ・フィールドを意味します。

英語以外の言語を使用している場合、この行に非 ASCII 文字は入力できません。この制限事項の詳細は、1 行目に関する「[注意](#)」を参照してください。

– ファイルの3行目以降

親データ・ファイルの3行目以降には、Oracle Identity Manager に対して選択した言語でデータを入力できます。この言語としては、ASCII キャラクタ・セットと非 ASCII キャラクタ・セットの両方を使用できます。

3行目以降にデータがなくても、リコンシリエーションが実行され、ファイルがアーカイブされます。

次に、サンプル親データ・ファイルの内容を示します。

```
##Active Directory user
Name TD,Address TD,User ID TD
John Doe,Park Street,jdoe
Jane Doe,Mark Street,jadoe
```

関連項目： 20-7 ページの「[ステージング・ディレクトリとアーカイブ・ディレクトリに設定する権限](#)」

■ **ステージング・ディレクトリ (複数値アイデンティティ・データ)**

このパラメータを使用して、複数値 (または子) ユーザー・データ (ロールまたはグループ・メンバーシップのデータなど) を含むファイルを格納するディレクトリのパスを指定します。このパラメータ値の指定は必須ではありません。これはランタイム・パラメータです。

注意： このマニュアルでは、**複数値ユーザー・データ**と**子データ**という用語は、同義的に使用されています。

このパラメータのサンプル値は次のとおりです。

T:/TargetSystemDirectory/ChildData

注意：

- 親データ・ファイルのステージング・ディレクトリを複数値ユーザー・データ・ファイルのステージング・ディレクトリと同じにすることはできません。また、Oracle Identity Manager がインストールされているサーバー上にステージング・ディレクトリがない場合、そのディレクトリを共有にして、Oracle Identity Manager サーバー上にネットワーク・ドライブとしてマップする必要があります。
 - 「ステップ 1: 基本情報の指定」 ページで「信頼できるソース・リコンシリエーション」 オプションを選択した場合、「ステージング・ディレクトリ (複数値アイデンティティ・データ)」 パラメータの値は指定できません。これは、信頼できるソース・リコンシリエーションでは、複数値 (子) データのリコンシリエーションがサポートされていないためです。
-

それぞれの型の複数値ユーザー・データに対し、共有ディレクトリに個別のファイルが必要です。たとえば、特定のターゲット・システムの複数値ユーザー・データがグループ・メンバーシップ・データとロール・データである場合、グループ・メンバーシップ・データのファイルとロール・データのファイルが別々に必要です。

子データ・ファイルに格納されているデータは、親データ・ファイルに指定されている規則 (1 行目、2 行目、3 行目以降) に準拠する必要があります。

また、同じ一意のフィールドが親データ・ファイルとそれぞれの子データ・ファイルに存在する必要があります。このフィールドは、子データ・ファイルの各レコードを親データ・ファイルのシングル・レコードに一意にリンクするために使用されます。この構造は、RDBMS の整合性制約 (主キーと外部キー) の概念に類似しています。

注意：一意のフィールドは、子データ・ファイルの最初のフィールドである必要があります。

次に示すサンプルの子データ・ファイルには、前述のサンプル親データ・ファイルにリンクされるロール情報が含まれています。

```
###Role
User ID TD,Role Name TD,Role Type TD
jodoe,admin1,admin
jadoe,admin2,admin
```

次に示すサンプルの子データ・ファイルには、前述のサンプル親データ・ファイルにリンクされるグループ・メンバーシップ情報が含まれています。

```
###Group Membership
User ID TD,Group Name TD,Group Type TD
jodoe,OracleDev1,OracleDev
jadoe,OracleDev2,OracleDev
jadoe,OracleDev3,OracleDev
jadoe,OracleDev4,OracleDev
jadoe,OracleDev5,ConnectorDev
```

一意のフィールドの名前 `User ID TD` は、子データ・ファイルと親データ・ファイルで同じであることに注意してください。

「ステップ 3: コネクタ構成の変更」ページでは、子データセットの名前は子データ・ファイルで指定したヘッダーと同じです。前述のサンプルの子データ・ファイルの場合、子データセットのラベルは `Role` と `Group Membership` になります。また、「ステップ 4: コネクタ・フォーム名の検証」ページでは、子データセットに対応するフォームに表示されるデフォルト名は `Role` と `Group Membership` になります。22-31 ページの「[ステップ 4: コネクタ・フォーム名の検証](#)」ページで説明しているとおり、デフォルトのフォーム名を受け入れるか、変更することができます。

関連項目： 20-7 ページの「[ステージング・ディレクトリとアーカイブ・ディレクトリに設定する権限](#)」

■ アーカイブ・ディレクトリ

このパラメータを使用して、すでにリコンサイルした親および子データ・ファイルを格納するディレクトリのパスを指定します。これはランタイム・パラメータです。

このパラメータ値の指定は必須です。

リコンシリエーション実行終了時に、データ・ファイルはアーカイブ・ディレクトリにコピーされ、ステージング・ディレクトリから削除されます。

アーカイブ・ディレクトリに移動したファイルにタイムスタンプまたはマークは付きません。このため、アーカイブ・ディレクトリのパスを指定するときは、次のガイドラインに注意してください。

- 指定するアーカイブ・ディレクトリ・パスは、ステージング・ディレクトリ・パスと同じものにしないでください。同じパスを指定すると、アーカイブ・ディレクトリ内の既存ファイルがリコンシリエーションの実行終了時に削除されます。
- 前回のリコンシリエーション実行で使用されたファイルと同じ名前のデータ・ファイルがステージング・ディレクトリに配置されていると、現在のリコンシリエーションの実行終了時にアーカイブ・ディレクトリ内の既存のファイルが、ステージング・ディレクトリからの新しいファイルで上書きされます。

この点については、24-3 ページの「[ステップ 2: パラメータ値の指定](#)」ページにも記載されています。

関連項目: 「ステージング・ディレクトリとアーカイブ・ディレクトリに設定する権限」

■ **ファイルの接頭辞**

このパラメータを使用して、親データ・ファイルと子データ・ファイルの両方について、ステージング・ディレクトリのファイル名に付ける接頭辞を指定します。リコンシリエーション中は、ファイル拡張子に関係なく、指定した接頭辞で始まる名前を持つ（ステージング・ディレクトリ内の）すべてのファイルが処理されます。これはランタイム・パラメータです。

例:

「ファイルの接頭辞」パラメータの値として `usrdata` を指定すると、複数値（子）ユーザー・データ・ファイルに関して、ステージング・ディレクトリに配置された次のファイルのデータが解析されます。

```
usrdataRoleData.csv
usrdataGroupMembershipData.txt
```

同じディレクトリにある次のファイルからはデータは抽出されません。これは、ファイル名が `usrdata` で始まらないためです。

```
RoleData.csv
GroupMembershipData.txt
```

■ **指定されたデリミタ**

このパラメータを使用して、親および子データ・ファイルでデリミタ文字として使用する文字を指定します。このパラメータの値として指定できるのは1文字のみです。これはランタイム・パラメータです。

注意: 空白 () はデリミタとして使用できません。

また、指定する文字が、そのデータ・ファイルでデリミタとしてのみ使用されることを確認する必要があります。この文字がデータ自体にも含まれる場合、データ行（レコード）は正しく解析されません。たとえば、カンマ (,) がデータ自体にも含まれる場合は、デリミタとしてカンマを使用できません。

■ **タブ区切り**

このパラメータを使用して、ファイルがタブ区切りかどうかを指定します。これはランタイム・パラメータです。「指定されたデリミタ」パラメータの値を指定すると、このパラメータは無視されます。

■ **固定列幅**

入力ファイルに固定幅データが含まれる場合は、このパラメータを使用してデータ列の文字幅を指定します。これはランタイム・パラメータです。

注意: ここでは、固定幅という用語は、データ・フィールドのバイト長ではなく文字数を意味します。たとえば、幅という意味ではシングルバイト・データ 4 文字とマルチバイト・データ 4 文字は同じになります。

「指定されたデリミタ」または「タブ区切り」パラメータの値を指定すると、このパラメータは無視されます。

■ 一意の属性 (親データ)

複数値ユーザー・データの場合は、このパラメータを使用して、親と子の両方のデータ・ファイルに共通するフィールドを指定します。前述の例では、一意の属性に対する要件は、親と子の両方のデータ・ファイルに存在する User ID TD フィールドで満たされます。これはランタイム・パラメータです。

注意: 「ステップ 1: 基本情報の指定」 ページで 「信頼できるソース・リコンシリエーション」 オプションを選択した場合、「一意の属性 (親データ)」 パラメータの値は指定できません。これは、信頼できるソース・リコンシリエーションでは、複数値 (子) データのリコンシリエーションがサポートされていないためです。

■ ファイル・エンコーディング

このパラメータを使用して、親およびデータ・ファイルで使用されるキャラクタ・セット・エンコーディングを指定します。これは設計パラメータです。

言語設定が英語のオペレーティング・システムを実行しているコンピュータでは、データ・ファイルに Cp1251 を指定します。これは、汎用テクノロジ・コネクタ・フレームワークでサポートされる java.io API の正規名です。19-9 ページの 「多言語サポート」 に示されたリストからその他の言語を選択する場合は、次の Web ページを参照して、対応する java.io API の正規名を指定する必要があります。

<http://java.sun.com/j2se/1.4.2/docs/guide/intl/encoding.doc.html>

注意: API に指定する正規名は、この Web ページに表示されているとおりに入力する必要があります。正規名の大 / 小文字は変更しないでください。

たとえば、Microsoft Windows コンピュータで繁体字中国語のエンコーディング・セットを指定する場合は、「ファイル・エンコーディング」 パラメータの値として MS950 を指定します。

ステージング・ディレクトリとアーカイブ・ディレクトリに設定する権限

ステージング・ディレクトリとアーカイブ・ディレクトリに必要な権限が設定されていることを確認してください。次の表に、ステージングおよびアーカイブのデータ・ファイルの保持に使用される共有ディレクトリに対する様々な権限の影響を示します。

記憶域エンティティ	アクセス権	アクセス権が必要な理由
親データ・ファイルのステージング・ディレクトリ	読取り	この権限は、リコンシリエーションの実行に必要です。この権限が適用されない場合、エラー・メッセージがログに記録されます。
親データ・ファイルのステージング・ディレクトリ	書込み	この権限は、アーカイブ・プロセスの最後にデータ・ファイルを親ステージング・ディレクトリから削除するために必要です。
親データ・ファイルのステージング・ディレクトリ	実行	適用外。
子データ・ファイルのステージング・ディレクトリ	読取り	この権限は、子データのリコンシリエーションに必要です。この権限が適用されない場合、エラー・メッセージがログに記録されます。
子データ・ファイルのステージング・ディレクトリ	書込み	この権限は、アーカイブ・プロセスの最後にデータ・ファイルを子ステージング・ディレクトリから削除するために必要です。
子データ・ファイルのステージング・ディレクトリ	実行	適用外。
アーカイブ・ディレクトリ	書込み	この権限は、アーカイブ・プロセス中に親および子データ・ファイルをアーカイブ・ディレクトリにコピーするために必要です。この権限が適用されなくても、次の処理が行われます。 <ul style="list-style-type: none"> 親および子データのリコンシリエーションが実行されます。 親および子ステージング・ディレクトリに必要な権限が設定されていない場合、ファイルはこれらのディレクトリから削除されます。
アーカイブ・ディレクトリ	実行	適用外。
ステージング・ディレクトリ内の親または子データ・ファイル	読取り	この権限は、ファイル内のデータのリコンシリエーションに必要です。この権限が適用されない場合、エラー・メッセージがログに記録されます。
ステージング・ディレクトリ内の親または子データ・ファイル	書込み	この権限は、アーカイブ・プロセスの最後にデータ・ファイルを削除するために必要です。この権限が適用されない場合、エラー・メッセージがログに記録されます。ただし、このファイル内のデータはリコンサイルされます。
ステージング・ディレクトリ内の親または子データ・ファイル	実行	適用外。

注意： ステージング・ディレクトリ内のデータ・ファイルは、いずれかのエディタで開かれていると削除できません。

20.2 CSV リコンシリエーション・フォーマット・プロバイダ

CSV リコンシリエーション・フォーマット・プロバイダは、文字区切り、タブ区切りまたは固定長形式のリコンシリエーション・データを Oracle Identity Manager でサポートされている形式に変換します。

CSV リコンシリエーション・フォーマット・プロバイダはスタンドアロン・プロバイダとしてパッケージングされていますが、そのパラメータはすべて共有ドライブ・トランスポート・プロバイダにバンドルされています。「ステップ 1: 基本情報の指定」ページで共有ドライブ・トランスポート・プロバイダを選択した場合は、CSV フォーマット・プロバイダを選択する必要があります。このプロバイダを選択すると、そのパラメータが共有ドライブ・トランスポート・プロバイダのパラメータとともに表示されます。

20.3 SPML プロビジョニング・フォーマット・プロバイダ

SPML プロビジョニング・フォーマット・プロバイダは、Oracle Identity Manager 上でのプロビジョニング操作中に生成されたプロビジョニング・データを SPML 対応のターゲット・システムで処理できる SPML リクエストに変換します。

注意：各 SPML リクエストは SOAP メッセージで送信されます。SOAP ヘッダーには、リクエストの認証情報が含まれます。SPML リクエストの実際のデータは、SOAP メッセージ本文に含まれます。

SPML-SOAP メッセージの構造の詳細は、『Oracle Identity Manager Tools リファレンス』の「SPML Web サービス」を参照してください。

サンプル SOAP メッセージは、次のディレクトリにあります。

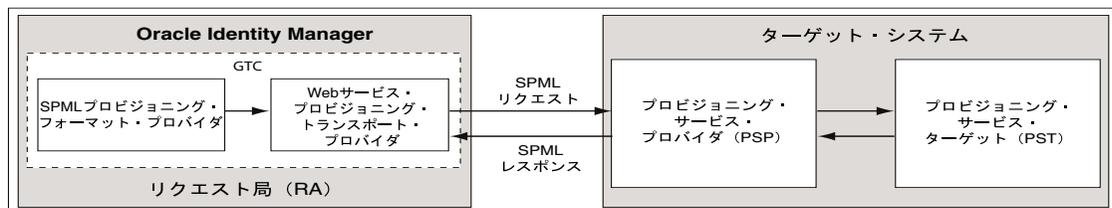
`OIM_HOME/xellerate/GTC/Samples/spml`

SPML 仕様の詳細は、OASIS の Web サイトの次の Web ページを参照してください。

<http://www.oasis-open.org/specs/index.php#spmlv2.0>

図 20-1 は、SPML プロビジョニング・フォーマット・プロバイダがリクエスト局 (RA) として機能し、ターゲット・システムがプロビジョニング・サービス・プロバイダ (PSP) およびプロビジョニング・サービス・ターゲット (PST) を提供するシステムの設定を示しています。

図 20-1 SPML プロビジョニング・フォーマット・プロバイダとターゲット・システム間の通信



実際のプロビジョニング中は、SOAP-SPML リクエストの作成に Velocity テンプレート・エンジンが使用されます。次のプロセスでは、プロバイダが SPML 2.0 DSML プロファイルに基づいて SOAP リクエストを生成します。

- リクエストの追加
- 次の Oracle Identity Manager プロセス・タスクに対するリクエストの変更：
 - フィールドの更新
 - 子データの追加
 - 子データの変更
 - 子データの削除
- リクエストの一時停止 (Oracle Identity Manager プロセス・タスクの無効化)
- リクエストの再開 (Oracle Identity Manager プロセス・タスクの有効化)
- リクエストの削除

「組織の作成」、「組織の更新」および「組織の削除」はサポートされていません。これは、汎用テクノロジー・コネクタ用に作成されたリソース・オブジェクトでは組織用のプロビジョニング操作がサポートされていないためです。「グループの作成」、「グループの更新」および「グループの削除」操作はサポートされていません。これは、グループのプロビジョニング操作が Oracle Identity Manager でサポートされていないためです。

このプロバイダを選択すると、デフォルトでは「ステップ 3: コネクタ構成の変更」ページに次のアイデンティティ・フィールドが「ID」フィールドとともに表示されます。

- objectClass
- containerID

各プロビジョニング・タスク（「ユーザーの作成」や「ユーザーの変更」など）について、このプロバイダによってリクエストが事前定義済の形式で生成されます。

次の各項では、このプロバイダのパラメータについて説明します。

- [ランタイム・パラメータ](#)
- [設計パラメータ](#)

使用するアプリケーション・サーバーによっては、一部のランタイム・パラメータと設計パラメータは必須になり、一部のパラメータは固定値になります。次の各項では、これらのパラメータについて説明します。

- [必須でないパラメータ](#)
- [値が事前定義済のパラメータ](#)

20.3.1 ランタイム・パラメータ

SPML プロビジョニング・フォーマット・プロバイダのランタイム・パラメータを次に示します。

- **ターゲット ID**

この値により、プロビジョニング操作のターゲット・システムを一意に識別します。
- **ユーザー名 (認証)**

これは、Web サービス・インタフェース (PSP) を介してターゲット・システム (PST) に接続するために必要なアカウントのユーザー名です。
- **ユーザー・パスワード (認証)**

これは、Web サービス・インタフェース (PSP) を介してターゲット・システム (PST) に接続するために必要なユーザー・アカウントのパスワードです。

20.3.2 設計パラメータ

SPML プロビジョニング・フォーマット・プロバイダの設計パラメータを次に示します。

関連項目：この項で説明する SOAP 要素および属性の詳細は、次の Web サイトを参照してください。

<http://www.w3.org/TR/wsdl20/>

- **Web サービスの SOAP アクション**

WSDL ファイルでは、これは operation 要素の soapAction 属性の値になります。

- **SPML Web サービスの WSSE が構成されていますか。**

WS-Security 資格証明を使用して着信リクエストを認証するように Web サービスが構成されている場合は、このチェック・ボックスを選択します。

- **カスタム認証資格証明ネームスペース**

注意：「SPML Web サービス WSSE が構成されていますか。」チェック・ボックスを選択した場合は、このパラメータの値を指定する必要はありません。

これは、Web サービス用に定義した資格証明ネームスペースの名前です。多くの場合、このネームスペースはターゲット・ネームスペースと同じになります。

- **カスタム認証ヘッダー要素**

注意：「SPML Web サービス WSSE が構成されていますか。」チェック・ボックスを選択した場合は、このパラメータの値を指定する必要はありません。

これは、ターゲット・システムへの接続に使用されるユーザー・アカウントの資格証明が格納される要素の名前です。つまり、SOAP メッセージ・ヘッダーのカスタム認証セクション内の親要素です。

- **ユーザー名を格納するカスタム要素**

注意：「SPML Web サービス WSSE が構成されていますか。」チェック・ボックスを選択した場合は、このパラメータの値を指定する必要はありません。

これは、「ユーザー名 (認証)」パラメータの値として指定するユーザー名が格納されるカスタム認証セクション内の要素の名前です。

- **パスワードを格納するカスタム要素**

注意：「SPML Web サービス WSSE が構成されていますか。」チェック・ボックスを選択した場合は、このパラメータの値を指定する必要はありません。

これは、「ユーザー・パスワード (認証)」パラメータの値として指定するユーザー名が格納されるカスタム認証セクション内の要素の名前です。

- **SPML Web サービスのバインディング・スタイル (DOCUMENT または RPC)**

WSDL ファイルでは、これは binding 要素の style 属性の値になります。DOCUMENT または RPC を入力する必要があります。

注意： 値 DOCUMENT または RPC を入力する必要があります。指定する値に小文字は使用しないでください。

- **SPML Web サービスの複合データ型**

WSDL ファイルでは、これは complexType 要素の name 属性の値になります。このパラメータは、バインディング・スタイルが DOCUMENT の場合にのみ適用されます。ターゲット Web サービスが Oracle Application Server 上で実行されている場合は、このパラメータの値を指定する必要があります。

- **SPML Web サービス操作名**

WSDL ファイルでは、これは operation 要素の name 属性の値になります。このパラメータは、バインディング・スタイルが RPC の場合にのみ適用されます。

- **SPML Web サービスのターゲット・ネームスペース**

WSDL ファイルでは、これは definition 要素の targetNamespace 属性の値になります。

- **SPML Web サービスの SOAP メッセージ本文の接頭辞**

これは、SOAP メッセージ本文を含んでいるカスタム接頭辞要素の名前です。ターゲット Web サービスが Oracle WebLogic Server、IBM WebSphere Application Server、JBoss Application Server または Oracle Application Server 上で実行されている場合は、このパラメータの値を指定する必要はありません。ただし、別のアプリケーション・サーバーを使用している場合は、カスタム接頭辞要素の名前を入力する必要があります。次に、Web サービスが Oracle Application Server 上で実行されている場合の接頭辞要素を示します。

```
<SPMLv2Document xmlns="http://xmlns.oracle.com/OIM/provisioning">
```

- **グループ・メンバーシップ情報を保持している子データセットの ID 属性**

これは、グループ・メンバーシップ情報を保持している「プロビジョニング・ステージング」子データセットの一意のアイデンティティ・フィールドの名前です。このフィールドを含む子データセットに対するプロビジョニング操作では、SOAP パケットにグループ操作の SPML コードが含まれます。次に、この型のグループ操作の SPML コード・ブロックを示します。

```
<modification modificationMode="add">
  <capabilityData capabilityURI="urn:oasis:names:tc:SPML:2:0:reference"
    mustUnderstand="true">
    <reference typeOfReference="memberOf"
      xmlns="urn:oasis:names:tc:SPML:2:0:reference">
      <toPsoID ID="Groups:1" targeted="120"/>
    </reference>
  </capabilityData>
</modification>
```

このフィールドを含まない子データセットに対するプロビジョニング操作では、SOAP パケットに通常の SPML コードが含まれます。次に、この型のグループ操作の SPML コード・ブロックを示します。

```
<modification>
  <dsml:modification name="Group Membership" operation="add">
    <dsml:value>AdminOra, System Admins, USA</dsml:value>
  </dsml:modification>
</modification>
```

20.3.3 必須でないパラメータ

使用するアプリケーション・サーバーによっては、次のパラメータ値を指定する必要はありません。

- **Oracle WebLogic Server**
 - SPML Web サービスの複合データ型
 - SPML Web サービスの SOAP メッセージ本文の接頭辞
 - グループ・メンバーシップ情報を保持している子データセットの ID 属性
- **IBM WebSphere Application Server**
 - SPML Web サービスの複合データ型
 - SPML Web サービスの SOAP メッセージ本文の接頭辞
 - グループ・メンバーシップ情報を保持している子データセットの ID 属性
- **JBoss Application Server**
 - SPML Web サービスの複合データ型
 - SPML Web サービスの SOAP メッセージ本文の接頭辞
 - グループ・メンバーシップ情報を保持している子データセットの ID 属性
- **Oracle Application Server**
 - SPML Web サービスの SOAP メッセージ本文の接頭辞
 - グループ・メンバーシップ情報を保持している子データセットの ID 属性

20.3.4 値が事前定義済みのパラメータ

使用するアプリケーション・サーバーによっては、次のパラメータに事前定義済みの値を指定できます。

- **Oracle WebLogic Server**
 - Web サービス URL:
`http://IP_address:port_number/spmlws/OIMProvisioning`
 - SPML Web サービスのバインディング・スタイル (DOCUMENT または RPC): RPC
 - SPML Web サービス操作名 : processRequest
- **IBM WebSphere Application Server**
 - Web サービス URL: `http://IP_address:port_number/spmlws/HttpSoap11`
 - SPML Web サービスのバインディング・スタイル (DOCUMENT または RPC): DOCUMENT
 - SPML Web サービス操作名 : processRequest
- **JBoss Application Server**
 - Web サービス URL:
`http://IP_address:port_number/spmlws/services/HttpSoap11`
 - SPML Web サービスのバインディング・スタイル (DOCUMENT または RPC): RPC
 - SPML Web サービス操作名 : processRequest

- Oracle Application Server
 - Web サービス URL: `http://IP_address:port_number/spmlws/HttpSoap11`
 - SPML Web サービスのバインディング・スタイル (DOCUMENT または RPC):
DOCUMENT
 - SPML Web サービスの複合データ型: `SPMLv2Document`
 - SPML Web サービス操作名: `processRequest`

20.4 Web サービス・プロビジョニング・トランスポート・プロバイダ

Web サービス・プロビジョニング・トランスポート・プロバイダは、Web サービス・クライアントとして機能し、プロビジョニング・リクエスト・データを Oracle Identity Manager からターゲット・システム Web サービスに転送します。

次のタイプのターゲット・システム Web サービスがサポートされています。

- RPC リテラル
- RPC エンコード
- DOCUMENT リテラル

Web サービス・プロビジョニング・トランスポート・プロバイダのパラメータを次に示します。

Web サービス URL

このパラメータを使用して、ターゲット・システムへのプロビジョニング・リクエストの送信に使用する Web サービスの URL を指定します。これはランタイム・パラメータです。WSDL ファイルでは、Web サービス URL は `wsdlsoap:address` 要素の `location` 属性の値になります。

作成する汎用テクノロジー・コネクタに Web サービス・プロビジョニング・トランスポート・プロバイダを含める場合は、ターゲット・システムと Oracle Identity Manager の間に Secure Sockets Layer (SSL) 通信を構成する場合があります。次の項では、この手順の詳細を説明します。

20.4.1 Oracle Identity Manager とターゲット・システム Web サービスの間の SSL 通信の構成

この項では、Oracle Identity Manager がインストールされているアプリケーション・サーバーを SSL 通信に構成する手順について説明します。

この項で説明する手順は、次の両方の条件を満たす場合にのみ実行できます。

- 作成する汎用テクノロジー・コネクタに Web サービス・プロビジョニング・トランスポート・プロバイダを含める場合
- ターゲット Web サービスが SSL 対応アプリケーション・サーバー上で実行されている場合

Oracle Identity Manager とターゲット・システム Web サービスの間の SSL 通信を構成するには、次の手順を実行します。

注意： この手順は、汎用テクノロジー・コネクタを作成する前でも実行できます。

1. 次のようにしてターゲット・アプリケーション・サーバーの証明書をエクスポートします。

- JBoss Application Server、Oracle WebLogic Server または Oracle Application Server 上にデプロイされているターゲット・システム Web サービスの場合は、次のコマンドを実行します。

```
JAVA_HOME/jre/bin/keytool -export -alias default -file
exported-certificate-file -keystore app-server-specific-keystore -storetype
jks -storepass keystore-password -provider sun.security.provider.Sun
```

このコマンドでは、次のように指定します。

- * `JAVA_HOME` を、SUN JDK ディレクトリのフルパスに置換します。
- * `exported-certificate-file` を、エクスポートした証明書を格納するファイルの名前に置換します。
- * `app-server-specific-keystore` を、アプリケーション・サーバーのキーストアのパスに置換します。
- * `keystore-password` を、キーストアのパスワードに置換します。

- IBM WebSphere Application Server または AIX 上の Oracle Application Server 上にデプロイされているターゲット・システム Web サービスの場合は、次のコマンドを実行します。

```
JAVA_HOME/jre/bin/keytool -export -alias default -file
exported-certificate-file -keystore app-server-specific-keystore -storetype jks
-storepass keystore-password -provider com.ibm.crypto.provider.IBMJCE
```

このコマンドでは、次のように指定します。

- * `JAVA_HOME` を、IBM JDK ディレクトリのフルパスに置換します。
- * `exported-certificate-file` を、エクスポートした証明書を格納するファイルの名前に置換します。
- * `app-server-specific-keystore` を、アプリケーション・サーバーのキーストアのパスに置換します。
- * `keystore-password` を、キーストアのパスワードに置換します。

コマンドを実行すると、エクスポートされた証明書ファイルは `exported-certificate-file` の値で指定したファイルに格納されます。

2. 次のようにして、前の手順でエクスポートした証明書ファイルを Oracle Identity Manager のトラストストアにインポートします。

- a. 前の手順でエクスポートした証明書ファイルを、Oracle Identity Manager サーバーの一時ディレクトリにコピーします。
- b. 次のコマンドを実行します。

```
JAVA_HOME/jre/bin/keytool -import -trustcacerts -alias servercert -noprompt
-keystore OIM_HOME%config%.x1keystore -file certificate_file
```

このコマンドでは、次のように指定します。

- * `JAVA_HOME` を、JDK ディレクトリのフルパスに置換します。IBM WebSphere Application Server にデプロイされている Oracle Identity Management Server の場合は、IBM JDK ディレクトリのパスにする必要があります。JBoss Application Server、Oracle WebLogic Server または Oracle Application Server にデプロイされている Oracle Identity Manager の場合は、SUN JDK ディレクトリのパスにする必要があります。
- * `OIM_HOME` を、Oracle Identity Manager ホーム・ディレクトリのパスに置換します。
- * `certificate_file` を、証明書ファイルをコピーした一時ディレクトリのパスに置換します。

注意： アプリケーション・サーバーで一方 SSL 通信が有効化されている場合は、残りの手順を実行する必要はありません。

3. 次のようにして、Oracle Identity Manager の証明書をターゲット・システム・アプリケーション・サーバーのトラストストアにインポートします。

注意： 次の手順は、アプリケーション・サーバーで双方向 SSL 通信が有効化されている場合のみ実行します。

- a. Oracle Identity Manager の証明書ファイルをエクスポートします。

JBoss Application Server、Oracle WebLogic Server または Oracle Application Server にデプロイされている Oracle Identity Manager の場合は、次のコマンドを実行します。

```
JAVA_HOME/jre/bin/keytool -export -alias xell -file OIM_HOME%config%xell.cert
-keystore OIM_HOME%config%.xllkeystore -storetype jks -provider
sun.security.provider.Sun
```

このコマンドでは、次のように指定します。

- `JAVA_HOME` を、SUN JDK ディレクトリのフルパスに置換します。

- `OIM_HOME` を、Oracle Identity Manager ホーム・ディレクトリのパスに置換します。

IBM WebSphere Application Server にデプロイされている Oracle Identity Manager の場合は、次のコマンドを実行します。

```
JAVA_HOME/jre/bin/keytool -export -alias xell -file OIM_HOME%config%xell.cert
-keystore OIM_HOME%config%.xllkeystore -storetype jks -provider
com.ibm.crypto.provider.IBMJCE
```

このコマンドでは、次のように指定します。

- `JAVA_HOME` を、IBM JDK ディレクトリのフルパスに置換します。

- `OIM_HOME` を、Oracle Identity Manager ホーム・ディレクトリのパスに置換します。

- b. 次のようにして、手順 3 でエクスポートした証明書ファイルをアプリケーション・サーバーのトラストストアにインポートします。

エクスポートした Oracle Identity Manager の証明書ファイルを、ターゲット・アプリケーション・サーバー上の一時ディレクトリにコピーします。

次に、ターゲット・アプリケーション・サーバーで次のコマンドを実行します。

- ターゲット・アプリケーション・サーバーが JBoss Application Server、Oracle WebLogic Server または Oracle Application Server である場合は、次のコマンドを実行します。

```
JAVA_HOME/jre/bin/keytool -import -alias alias -trustcacerts -file  
OIM-certificate-file -keystore app-server-specific-truststore -storetype  
jks -storepass truststore-password -provider sun.security.provider.Sun
```

このコマンドでは、次のように指定します。

* *JAVA_HOME* を、SUN JDK ディレクトリのフルパスに置換します。

* *alias* を、ターゲット・アプリケーション・サーバーのトラストストアにある証明書の別名に置換します。

* *OIM-certificate-file* を、エクスポートした Oracle Identity Manager 証明書ファイルの名前に置換します。

* *app-server-specific-truststore* を、ターゲット・アプリケーション・サーバーのトラストストアのパスに置換します。

* *truststore-password* を、ターゲット・アプリケーション・サーバーのトラストストアのパスワードに置換します。

- ターゲット・アプリケーション・サーバーが IBM WebSphere Application Server である場合は、次のコマンドを実行します。

```
JAVA_HOME/jre/bin/keytool -import -alias alias -trustcacerts -file  
OIM-certificate-file -keystore app-server-specific-truststore -storetype  
pkcs12 -storepass truststore-password -provider  
com.ibm.crypto.provider.IBMJCE
```

このコマンドでは、次のように指定します。

* *JAVA_HOME* を、SUN JDK ディレクトリのフルパスに置換します。

* *alias* を、ターゲット・トラストストアにある証明書の別名に置換します。

* *OIM-certificate-file* を、エクスポートした Oracle Identity Manager 証明書ファイルの名前に置換します。

* *app-server-specific-truststore* を、ターゲット・アプリケーション・サーバーのトラストストアのパスに置換します。

* *truststore-password* を、ターゲット・アプリケーション・サーバーのトラストストアのパスワードに置換します。

関連項目： ターゲット・アプリケーション・サーバーについては、SSL 構成のドキュメントを参照してください。

20.5 変換プロバイダ

注意: この項に示す情報は、22-16 ページの「[ステップ 3: コネクタ構成の変更](#) ページ」に記載されている手順を実行するときに使用してください。

変換プロバイダは、次の表に示すソース・データセットと宛先データセット間で移動中のユーザー・データを変換するために使用されます。

ソース・データセット	宛先データセット	変換の目的
ソース	リコンシリエーション・ステージング	リコンシリエーション・イベントの作成に使用する前にデータを変換します。
OIM	プロビジョニング・ステージング	ターゲット・システムに送信されるプロビジョニング・リクエストの作成に使用する前にデータを変換します。

Oracle Identity Manager の現在のリリースには、次の事前定義済変換プロバイダが含まれています。

- [連結変換プロバイダ](#)
- [翻訳変換プロバイダ](#)

20.5.1 連結変換プロバイダ

連結変換プロバイダは、データセットの 2 つのフィールドの値を連結して、別のデータセットの単一フィールドへの入力を作成するために使用します。

次の例では、このプロバイダの出力形式について説明します。

入力値が「ソース」データセットの次のフィールドであるとしてします。

- 名 : John
- 姓 : Doe

連結変換プロバイダをこの 2 つのフィールドに適用すると、出力値は次のようになります。

John Doe

注意: 前述の例に示すように、連結変換プロバイダでは 2 つの入力フィールドの値の間に空白を追加します。

次の手順では、汎用テクノロジー・コネクタの作成中に連結変換プロバイダを追加する方法について説明します。

注意: この手順は、22-23 ページの「[データセットのフィールドの追加または編集](#)」の手順 5 に記載されている手順を詳しく説明したものです。ここでは、「ステップ 1: フィールド情報」ページの「[アクションのマッピング](#)」リストから「[連結](#)」オプションをすでに選択し、このセクションのステップ 2 と 3 をすでに実行したことを前提にしています。

ポップアップ・ウィンドウの「ステップ 2: マッピング」ページで、次の手順を実行します。

1. 「入力 1」リージョンの「データセット」リストから、連結する最初のフィールドを含むデータセットを選択します。次に、「フィールド名」リストから最初のフィールドを選択します。または、「リテラル」オプションを使用してリテラル（固定）値を最初の連結入力として指定することも可能です。

前述の例の場合は、「入力 1」リージョンの「データセット」リストから、「名」フィールドを含むデータセットを選択します。次に、「フィールド名」リストから「名」を選択します。

2. 「入力 2」リージョンの「データセット」リストから、連結する 2 番目のフィールドを含むデータセットを選択します。次に、「フィールド名」リストから 2 番目のフィールドを選択します。または、「リテラル」オプションを使用してリテラル（固定）値を 2 番目の連結入力として指定することも可能です。

前述の例の場合は、「入力 2」リージョンの「データセット」リストから、「姓」フィールドを含むデータセットを選択します。次に、「フィールド名」リストから「姓」を選択します。

20.5.2 翻訳変換プロバイダ

変換操作では、特定の（リテラル）値を入力として受け入れ、それを別の値に変換します。

次に変換操作の例を示します。

「ソース」データセットに「国」フィールドが含まれており、このフィールドに格納されているデータ値が次のいずれかの値を取ることができるとします。

- オーストリア
- フランス
- ドイツ
- インド
- 日本

これらの値を「リコンシリエーション・ステーjing」データセットに伝播する場合、それぞれの値を次のように変換するとします。

- AT
- FR
- DE
- IN
- JP

この変換を自動化するには、翻訳変換プロバイダを使用できます。

翻訳変換プロバイダを使用するには、次の手順を実行します。

1. Design Console を使用して、入力およびデコード値を格納する参照定義を作成します。

関連項目： 参照定義の作成方法の詳細は、『Oracle Identity Manager デザイン・コンソール・ガイド』を参照してください。

注意： 参照定義を「Lookup Definition」フォームで作成する場合は、Field Type オプションではなく Lookup Type オプションを選択する必要があります。

前述の「国」フィールドの例では、コード・キーおよびデコードは次の表に示す値になります。

コード・キー	デコード
オーストリア	AT
フランス	FR
ドイツ	DE
インド	IN
日本	JP

2. 変換対象の入力フィールドと出力フィールドの間の変換マッピングを定義します。前述のとおり、変換は次のデータセットのペア間で設定できます。

- 「ソース」と「リコンシリエーション・ステー징ング」
- 「OIM」と「プロビジョニング・ステー징ング」

注意：この手順は、22-23 ページの「[データセットのフィールドの追加または編集](#)」の手順 5 に記載されている手順を詳しく説明したものです。ここでは、「ステップ 1: フィールド情報」ページの「[アクションのマッピング](#)」リストから「[連結](#)」オプションをすでに選択し、このセクションのステップ 2 と 3 をすでに実行したことを前提にしています。

- a. 「ステップ 3: マッピング」ページで、「入力」リージョンの「[データセット](#)」リストから、変換操作を行う入力値を提供するフィールドのあるデータセットを選択します。次に、「[フィールド名](#)」リストからフィールド自体を選択します。
- 前述の「国」フィールドの例では、「国」フィールドのあるデータセットを選択してから、「国」フィールドを選択します。
- b. 「参照コード名」リージョンで、「[リテラル](#)」を選択し、前の手順で作成した参照定義の名前を入力します。

注意：「参照コード名」リージョンではデータセット名およびフィールドを指定しないでください。データセット名およびフィールドの選択を無効にする検証は行われませんが、実際のリコンシリエーションまたはプロビジョニングの操作時に変換操作に失敗します。

これについては、24-5 ページの「[マッピング](#)」にも記載されています。

前述の「国」フィールドの例では、「[リテラル](#)」を選択してから、手順 1 で作成した参照定義を選択します。

20.5.2.1 アカウント・ステータスのリコンシリエーションの構成

ユーザー・アカウント・ステータス情報は、ターゲット・システム・アカウントの所有者がそのアカウントへのアクセスおよび使用を許可されているかどうかをトラッキングする場合に使用されます。必要に応じて、翻訳変換プロバイダを使用してアカウント・ステータス情報をリコンサイルできます。

注意：Design Console では、アカウント・ステータスのリコンシリエーションを構成する別の方法が提供されます。この方法では、汎用テクノロジ・コネクタは使用しません。この方法は、『Oracle Identity Manager デザイン・コンソール・ガイド』のアカウント・ステータスのリコンシリエーションに関する項を参照してください。

翻訳変換プロバイダを使用する必要があるのは、ターゲット・システムで使用されるアカウント・ステータスの値が、Oracle Identity Manager で使用される値と同じでない場合のみです。ターゲット・リソースに対して、Oracle Identity Manager では次の値が使用されます。

- 有効状態: Enabled
- 無効状態: Disabled

信頼できるソースに対しては、Oracle Identity Manager では次の値が使用されます。

- 有効状態: Active
- 無効状態: Disabled

次に、アカウント・ステータスのリコンシリエーションを構成する手順を簡単に説明します。

注意: これらの手順の詳しい説明はこの項で後述します。

1. ターゲット・システムで使用されるステータス値と Oracle Identity Manager で使用される値をマップする参照定義を作成します。
2. 汎用テクノロジー・コネクタを作成する際に、翻訳変換プロバイダを使用して、「ソース」データセットと「リコンシリエーション・ステージング」データセットのアカウント・ステータス値を含むフィールド間に変換マッピングを作成します。

次に、実行する必要があるアクションの例を示します。

アカウント・ステータス値を保持するために次のフィールドが使用されているとします。

- 「ソース」データセットの「ユーザー・ステータス」フィールドには、True (Enabled 状態のユーザー) と False (Disabled 状態のユーザー) の値が含まれます。
- 「リコンシリエーション・ステージング」データセットの「ユーザー・ステータス」フィールドは、次のいずれかの組合せの値を保持する必要があります。
 - ターゲット・リソースのリコンシリエーションでは、このフィールドは Enabled または Disabled を含む必要があります。
 - 信頼できるソースのリコンシリエーションでは、このフィールドは Active または Disabled を含む必要があります。

「ソース」データセットの「ユーザー・ステータス」フィールドの True/False 値を Enabled/Disabled 値または Active/Disabled 値に変換する変換マッピングを作成する必要があります。リコンシリエーション時には、これらの変換された値が「リコンシリエーション・ステージング」データセットの「ユーザー・ステータス」フィールドに送信されます。

3. 「リコンシリエーション・ステージング」データセットのアカウント・ステータス値を保持するフィールドと次のいずれかのフィールド間のマッピングを作成します。
 - 「OIM - アカウント」データセットの「OIM オブジェクト・ステータス」フィールド (ターゲット・リソースのリコンシリエーションの場合)
 - 「OIM - ユーザー」データセットの「ステータス」フィールド (信頼できるソースのリコンシリエーションの場合)

リコンシリエーション時には、このマッピングが使用されて、「リコンシリエーション・ステージング」データセットのステータス値が「OIM - アカウント」または「OIM - ユーザー」データセットに伝播されます。

アカウント・ステータスのリコンシリエーションを構成する詳しい手順を次に示します。

1. ターゲット・システムで使用されるステータス値と Oracle Identity Manager で使用される値をマップする参照定義を作成します。

関連項目：『Oracle Identity Manager デザイン・コンソール・ガイド』の「[Lookup Definition] フォーム」

参照定義のコード・キーの値は、ターゲット・システムでアカウント・ステータスを表すために使用されている値と同じである必要があります。信頼できるリソースとターゲット・リソースの両方のリコンシリエーションのコード・キーおよびデコードの値を次の表に示します。

コード・キー	デコード (信頼できるソースのリコンシリエーションの場合)	デコード (ターゲット・リソースのリコンシリエーションの場合)
Enabled 状態のユーザー・アカウントのターゲット・システム・ステータス値	Active	Enabled
Disabled 状態のユーザー・アカウントのターゲット・システム・ステータス値	無効	無効

コード・キーの値の例としては、True/False、Yes/No、1/0 などがあります。デコードの値は、表に示すとおり (大 / 小文字も含めて) 正確に設定する必要があります。

注意：参照定義を「Lookup Definition」フォームで作成する場合は、Field Type オプションではなく Lookup Type オプションを選択する必要があります。

2. 汎用テクノロジー・コネクタを作成する手順は、第 22 章で説明します。汎用テクノロジー・コネクタを作成するときは、次の手順を「ステップ 3: コネクタ構成の変更」ページで実行します。

注意：次の手順は、22-23 ページの「データセットのフィールドの追加または編集」で説明する手順を簡略にまとめたものです。ここで説明している用語や GUI 要素の詳細は、この項を参照してください。

- a. ターゲット・システムのステータス・フィールドが「ステップ 3: コネクタ構成の変更」ページに表示されている場合は、「リコンシリエーション・ステージング」データセットのフィールドに対する「編集」アイコンをクリックします。
フィールドが表示されていない場合は、「リコンシリエーション・ステージング」データセットの「追加」アイコンをクリックします。
- b. 「ステップ 1: フィールド情報」ページで次の GUI 要素の値を指定します。
 - **フィールド名：**フィールドを追加する場合は、そのフィールドの名前を指定します。非 ASCII 文字は使用できないため、指定するフィールド名には ASCII 文字のみを使用します。
 - **アクションのマッピング：**このリストで「変換ありでマッピングの作成」を選択します。
 - **一致のみ：**このチェック・ボックスは選択しないでください。
 - **エンドツーエンド・マッピングの作成：**フィールドを追加している場合は、このチェック・ボックスを選択します。

- **複数値フィールド:** このチェック・ボックスは選択しないでください。
 - **データ型:** フィールドのデータ型を選択します。
 - **長さ:** フィールドの文字の長さを指定します。
 - **必須:** フィールドに値が常に入力されるようにするには、このチェック・ボックスを選択します。
 - **暗号化:** このチェック・ボックスは選択しないでください。
 - **パスワード・フィールド:** このチェック・ボックスは選択しないでください。
- c. 「**続行**」をクリックします。
- d. 「ステップ 3: マッピング情報の指定」 ページで次の手順を実行します。
「入力」 リージョンで次のようにします。
- 「**データセット**」 リストで 「**ソース**」 を選択します。
 - 「**フィールド名**」 リストで、ステータス値を含むフィールドを選択します。
「参照コード名」 リージョンで、「**リテラル**」を選択し、手順 1 で作成した参照定義の名前を入力します。
- e. 必要な場合は、フィールドの検証チェックを選択して 「**追加**」 をクリックします。つまり、使用する検証プロバイダを選択します。
- f. 「**続行**」 をクリックし、「**閉じる**」 をクリックします。
3. 「リコンシリエーション・ステージング」 データセットのステータス・フィールドと、「OIM - アカウント」 データセットの 「OIM オブジェクト・ステータス」 フィールドまたは 「OIM - ユーザー」 データセットの 「ステータス」 フィールドのいずれかの中で次のようにマッピングを作成します。

注意: 次の手順は、22-23 ページの 「[データセットのフィールドの追加または編集](#)」 で説明する手順を簡略にまとめたものです。

- a. ターゲット・リソースのリコンシリエーションの場合は、「OIM - アカウント」 データセットの 「OIM オブジェクト・ステータス」 フィールドの編集アイコンをクリックします。

ターゲット・リソースのリコンシリエーションの場合は、「OIM - ユーザー」 データセットの 「ステータス」 フィールドの編集アイコンをクリックします。

注意: 「リコンシリエーション・ステージング」 データセットのステータス・フィールドと、「OIM オブジェクト・ステータス」 フィールドまたは 「ステータス」 フィールドの間にマッピングがすでに存在する場合は、必要な場合にのみこの手順を使用します。

- b. 「ステップ 1: フィールド情報」 ページで次の GUI 要素の値を指定します。
- **アクションのマッピング:** このリストで 「**変換なしでマッピングの作成**」 を選択します。
 - **一致のみ:** このチェック・ボックスは選択しないでください。
- c. 「**続行**」 をクリックします。
- d. 「ステップ 3: マッピング」 ページの 「入力」 リージョンで、「リコンシリエーション・ステージング」 データセットのステータス・フィールドを選択します。
- e. 「**続行**」 をクリックし、さらに 「**続行**」 をクリックしてから 「**閉じる**」 をクリックします。

- f. 「ステップ 3: コネクタ構成の変更」 ページに表示されるその他のフィールドを追加または編集するには、22-23 ページの「データセットのフィールドの追加または編集」の手順を実行します。

20.6 検証プロバイダ

表 20-1 に、Oracle Identity Manager の現在のリリースに含まれている検証プロバイダを示します。

注意: 日付書式の検証プロバイダを除き、この表のすべてのプロバイダは Apache Jakarta Commons API の `GenericValidator` クラスのメソッドの実装です。

表 20-1 検証プロバイダ

検証プロバイダ	説明
IsNotBlankOrNull	フィールド値が NULL または空白かどうかをチェックします。
IsValidDate	フィールド値が使用ロケールに対して有効な日付かどうかをチェックします。 注意: 日付書式はロケールによって異なります。このプロバイダを選択する場合は、検証に使用する日付書式のあるロケールも指定してください。
IsInRange	フィールド値が最小値と最大値のペアで指定された範囲内かどうかをチェックします。
IsByte	フィールド値を基本型 <code>byte</code> に変換できるかどうかをチェックします。
IsDouble	フィールド値を基本型 <code>double</code> に変換できるかどうかをチェックします。
IsFloat	フィールド値を基本型 <code>float</code> に変換できるかどうかをチェックします。
IsInteger	フィールド値を基本型 <code>integer</code> に変換できるかどうかをチェックします。
IsLong	フィールド値を基本型 <code>long</code> に変換できるかどうかをチェックします。
IsShort	フィールド値を基本型 <code>short</code> に変換できるかどうかをチェックします。
MatchRegexp	フィールド値が指定の正規表現と一致するかどうかをチェックします。 注意: 正規表現は、一連の文字列を特定の構文ルールに従って記述または一致させるために使用する文字列です。
MaxLength	フィールド値の長さが指定値以下かどうかをチェックします。
MinLength	フィールド値の長さが指定値以上かどうかをチェックします。
日付書式の検証	ターゲット・システム・レコード内の日付値を、Oracle Identity Manager へのリコンサイル前に検証します。 「ソース日付書式」パラメータの値が検証の基礎として使用されます。この検証プロバイダは、「ステップ 2: パラメータ値の指定」ページで「ソース日付書式」パラメータの値を指定した場合、このプロバイダを「ステップ 3: コネクタ構成の変更」ページで選択するかどうかに関係なく適用されます。 注意: この表の他のプロバイダとは異なり、「日付書式の検証」は Apache Jakarta Commons API の <code>GenericValidator</code> クラスのメソッドの実装ではありません。

汎用テクノロジー・コネクタ用カスタム・プロバイダの作成

事前定義プロバイダで対応できないプロバイダ要件に対して、カスタム・プロバイダを作成する必要があります。この章では、カスタム・プロバイダの作成手順について説明します。

注意：この手順はオプションです。事前定義済プロバイダでプロバイダ要件のすべてに対応できる場合は、カスタム・プロバイダを作成する必要はありません。

この章の内容は、次のとおりです。

- [プロバイダの役割](#)
- [カスタム・プロバイダの作成](#)
- [プロバイダの再利用](#)

21.1 プロバイダの役割

次の各項では、汎用テクノロジー・コネクタの作成中および使用中におけるプロバイダの役割を説明します。

- [汎用テクノロジー・コネクタ作成中のプロバイダの役割](#)
- [リコンシリエーション中のプロバイダの役割](#)
- [プロビジョニング中のプロバイダの役割](#)

21.1.1 汎用テクノロジー・コネクタ作成中のプロバイダの役割

汎用テクノロジー・コネクタは管理およびユーザー・コンソールで作成します。コネクタ作成手順のタスクの1つとして、データセットおよびデータセット間のデータ・フローが定義されます。このタスクは、メタデータの検出プロセスにより容易になります。

汎用テクノロジー・コネクタのコンテキストでは、**メタデータ**という用語はユーザー・アカウント情報を構成する一連のアイデンティティ・フィールドを意味します。**メタデータの検出**という用語は、プロバイダによるターゲット・システムのメタデータ読み込みおよび解析を指します。

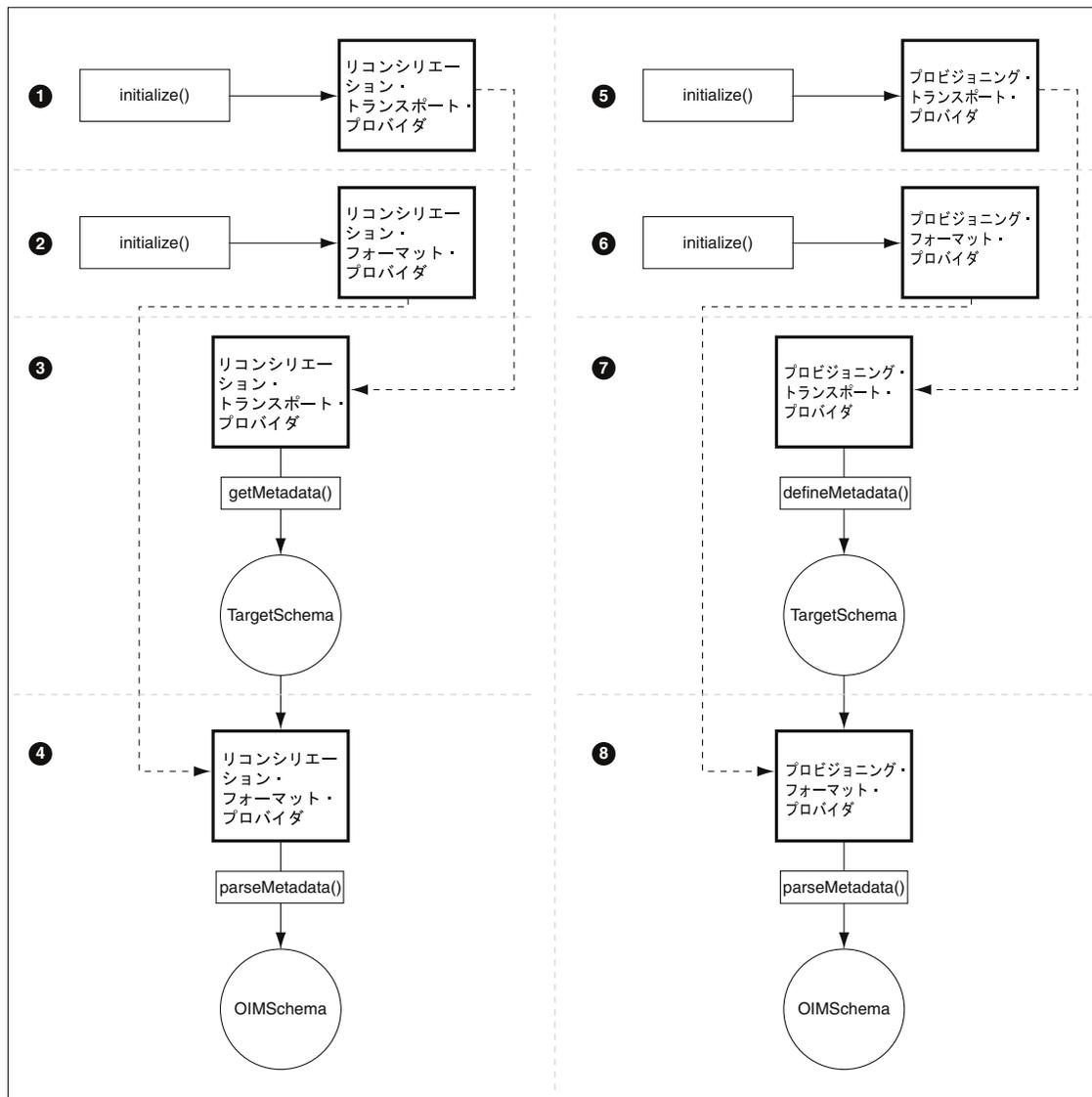
関連項目： 22-16 ページの「[ステップ 3: コネクタ構成の変更](#) ページ」

メタデータの検出機能は、すべてのタイプのプロバイダでサポートされます。つまり、カスタム・プロバイダの作成時に、メタデータ読み込み機能をプロバイダに組み込むことができます。

注意： Javadoc では、**メタデータの検出**という用語のかわりに**メタデータ定義**という用語が使用されています。

図 21-1 に、メタデータの検出プロセスを示します。

図 21-1 メタデータの検出プロセス



次の一連の手順で、メタデータの検出の実施方法について説明します。この一連の手順は、汎用テクノロジー・コネクタの作成時に「リコンシリエーション」オプションと「プロビジョニング」オプションの両方を選択するという想定に基づいています。「リコンシリエーション」オプションまたは「プロビジョニング」オプションのいずれかを選択しない場合、対応する手順は実施されません。

関連項目： 以降の手順で説明する SPI メソッドや値オブジェクトの詳細は、Javadoc を参照してください。

Javadoc は次の場所で参照できます。

OIM_HOME/documentation/SDK/javadocs/gc/index.html

Javadoc では、**メタデータの検出**という用語と**メタデータ定義**という用語が同義的に使用されています。

1. リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダの `initialize` メソッドが呼び出され、このプロバイダのインスタンスが作成されます。
2. リコンシリエーション・フォーマット・プロバイダの `initialize` メソッドが呼び出され、このプロバイダのインスタンスが作成されます。
3. リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダの `getMetadata` メソッドが呼び出され、ターゲット・システムからメタデータがフェッチされます。このメソッドの出力は `TargetSchema` 値オブジェクトであり、ここにターゲット・システムからフェッチしたメタデータが格納されています。
4. リコンシリエーション・フォーマット・プロバイダの `parseMetadata` メソッドが呼び出され、ターゲット・システムからフェッチしたメタデータが解析されます。このメソッドの出力は `OIMSchema` 値オブジェクトであり、ここにターゲット・システムからフェッチしたメタデータが格納されています。

注意：「ソース」データセットに対応する `OIMSchema` 値オブジェクトについては、19-4 ページの「[リコンシリエーション・モジュールのプロバイダおよびデータセット](#)」で説明します。

5. プロビジョニング・トランスポート・プロバイダの `initialize` メソッドが呼び出され、このプロバイダのインスタンスが作成されます。
6. プロビジョニング・フォーマット・プロバイダの `initialize` メソッドが呼び出され、このプロバイダのインスタンスが作成されます。
7. リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダおよびリコンシリエーション・フォーマット・プロバイダでメタデータを検出できない場合、プロビジョニング・トランスポート・プロバイダおよびプロビジョニング・フォーマット・プロバイダについて手順 1～4 が繰り返されます。

注意：プロバイダは初期化した後、次のいずれかのイベントが発生するまで Oracle Identity Manager のキャッシュに格納されています。

- キャッシュのパーシステンス
- Oracle Identity Manager の再起動
- 汎用テクノロジー・コネクタの作成後の変更

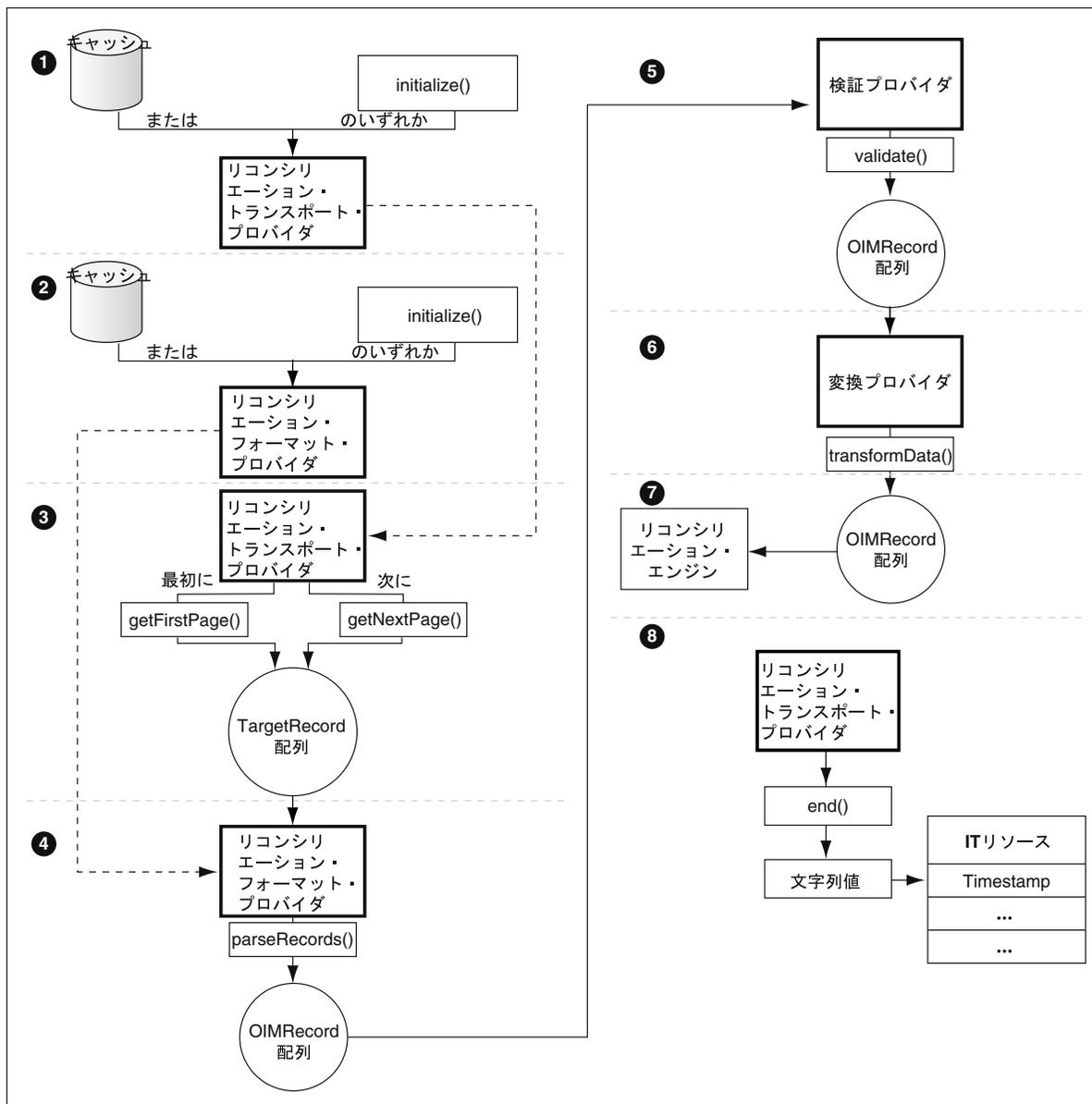
検証プロバイダおよびトランスフォーメーション・プロバイダは、必要な場合にのみインスタンス化されます。キャッシュには格納されません。

共有ドライブ・リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダと CSV リコンシリエーション・フォーマット・プロバイダでは、ターゲット・システムからメタデータを検出できません。ただし、Web サービス・プロビジョニング・トランスポート・プロバイダおよび SPML プロビジョニング・フォーマット・プロバイダでは、この機能はサポートされていません。

21.1.2 リコンシリエーション中のプロバイダの役割

図 21-2 は、リコンシリエーション中のプロバイダの役割を示しています。

図 21-2 リコンシリエーション中のプロバイダの役割



次の各手順で、リコンシリエーション中のプロバイダの役割について説明します。

1. リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダのインスタンスをキャッシュで使用できない場合、initialize メソッドが呼び出され、このプロバイダのインスタンスが作成されます。
2. リコンシリエーション・フォーマット・プロバイダのインスタンスをキャッシュで使用できない場合、initialize メソッドが呼び出され、このプロバイダのインスタンスが作成されます。

3. 管理およびユーザー・コンソールで汎用テクノロジー・コネクタを作成している場合、リコンシリエーション実行のバッチ・サイズを指定できます。このパラメータを使用して、リコンシリエーション実行中にリコンシリエーション・エンジンがターゲット・システムからフェッチするレコードの総数をバッチに分割します。このパラメータのデフォルト値は All です。

バッチ・サイズを指定しなかった場合、リコンシリエーションのこの段階でリコンシリエーション・トランスポート・プロバイダの `getFirstPage` メソッドが呼び出され、リコンシリエーション用に準備されているターゲット・システム・レコードの全体がフェッチされます。

バッチ・サイズを指定した場合、リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダの `getFirstPage` メソッドが呼び出され、リコンシリエーション用にターゲット・システム・レコードの最初のバッチがフェッチされます。リコンシリエーション用のターゲット・システム・レコードのバッチが複数ある場合は、同一プロバイダの `getNextPage` メソッドが（必要に応じて複数回）呼び出されます。

4. リコンシリエーション・フォーマット・プロバイダの `parseRecords` メソッドが呼び出され、`TargetRecord` 値オブジェクト配列の各レコードが処理されます。このメソッドの出力は `OIMRecord` 値オブジェクトの配列です。
5. 汎用テクノロジー・コネクタの作成時に、「ソース」データセットから「リコンシリエーション・ステージング」データセットへのデータの移動中にデータを検証するため検証プロバイダを選択してある場合、次のように実行されます。
 - a. 検証プロバイダのインスタンスが作成されます。
 - b. `OIMRecord` 値オブジェクト配列の各レコードに指定された属性に対して、それぞれの検証プロバイダの `validate` メソッドが実行されます。

汎用テクノロジー・コネクタの作成時に検証プロバイダを選択しなかった場合、手順 5 は実施されず、`OIMRecord` 値オブジェクトの配列の各要素は手順 6 に進みます。

6. 汎用テクノロジー・コネクタの作成時に、「ソース」データセットから「リコンシリエーション・ステージング」データセットへのデータの移動中のデータを変更するため変換プロバイダを選択してある場合、次のように実行されます。
 - a. 変換プロバイダのインスタンスが作成されます。
 - b. 変換プロバイダの `transformData` メソッドにより、次のいずれかの出力として生成された `OIMRecord` 値オブジェクト配列が処理されます。
 - 各検証プロバイダの `validate` メソッド（検証プロバイダを選択した場合）
 - リコンシリエーション・フォーマット・プロバイダの `parseRecords` メソッド（検証プロバイダを選択しなかった場合）

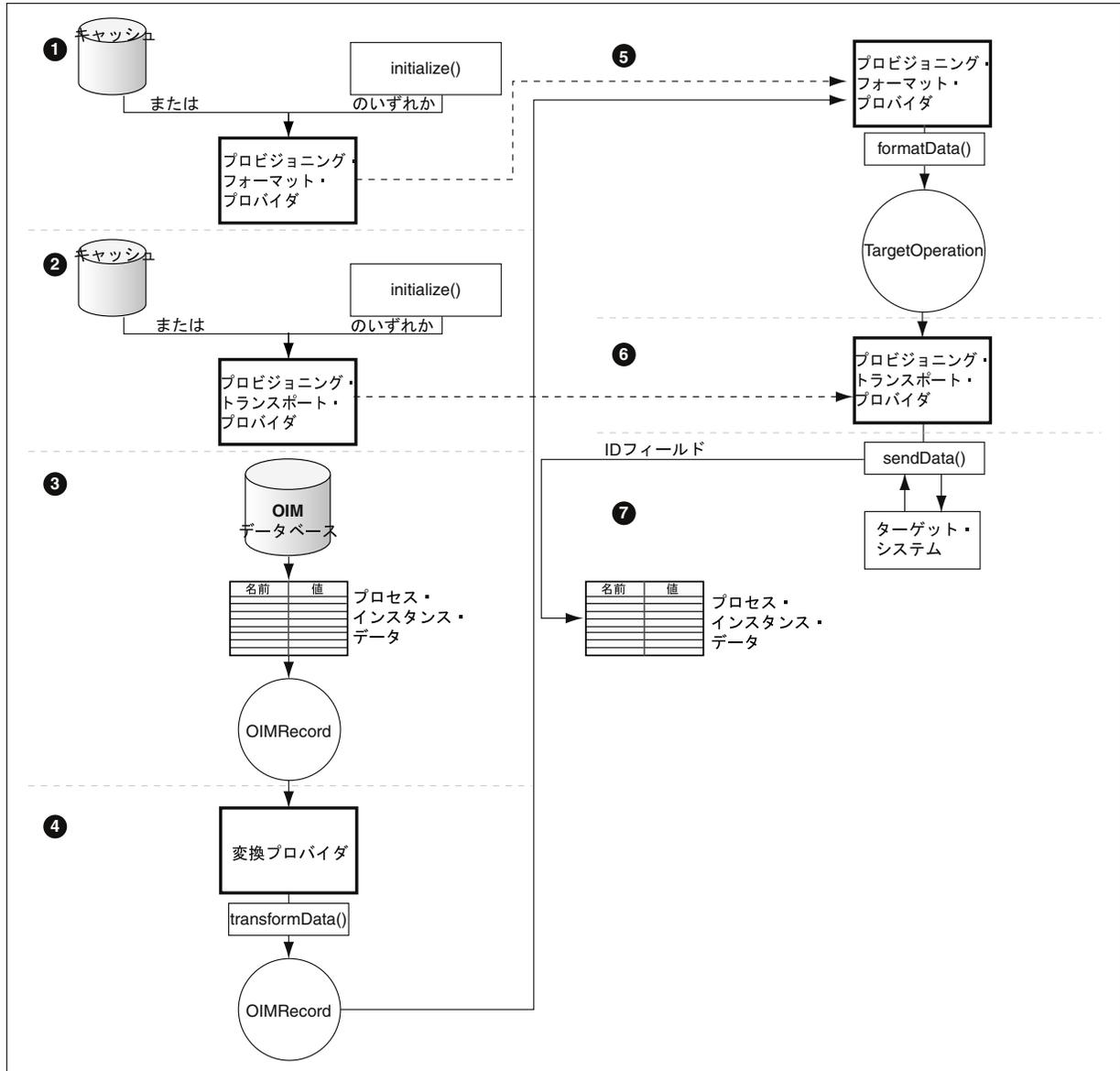
汎用テクノロジー・コネクタの作成時に変換プロバイダを選択しなかった場合、手順 6 は実施されず、前の手順（手順 4 または手順 5）で得られた `OIMRecord` 値オブジェクト配列の各要素は手順 7 に進みます。

7. この段階では、`OIMRecord` 値オブジェクト配列は、19-4 ページの「[リコンシリエーション・モジュールのプロバイダおよびデータセット](#)」で説明する「リコンシリエーション・ステージング」データセットに対応します。`OIMRecord` 値オブジェクト配列の各要素がリコンシリエーション・エンジンに渡されます。
8. リコンシリエーション手順の終了時には、リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダの `end` メソッドが呼び出されます。このメソッドから、汎用テクノロジー・コネクタ・フレームワークで IT リソースの `Timestamp` パラメータに格納される文字列値が戻されます。このフレームワークでは、リコンシリエーションの実行が完了した段階が `Timestamp` パラメータによりトラッキングされます。

21.1.3 プロビジョニング中のプロバイダの役割

図 21-3 は、プロビジョニング中のプロバイダの役割を示しています。

図 21-3 プロビジョニング中のプロバイダの役割



次の各手順で、プロビジョニング中のプロバイダの役割について説明します。

1. プロビジョニング・トランスポート・プロバイダのインスタンスをキャッシュで使用できない場合、initialize メソッドが呼び出され、このプロバイダのインスタンスが作成されます。
2. プロビジョニング・フォーマット・プロバイダのインスタンスをキャッシュで使用できない場合、initialize メソッドが呼び出され、このプロバイダのインスタンスが作成されます。

3. 汎用テクノロジー・コネクタの作成時に作成されるコネクタ・オブジェクトの1つに、汎用テクノロジー・コネクタ・アダプタがあります。このアダプタにより、プロビジョニング・データ・レコードが名前 / 値ペアのハッシュマップに変換されます。このハッシュマップにはプロセス・インスタンスのデータが含まれています。各ハッシュマップは、続いて OIMRecord 値オブジェクトの要素に変換されます。この段階では、OIMRecord 値オブジェクトは 19-6 ページの「**「OIM」データセット**」で説明する「OIM」データセットに対応します。
4. 汎用テクノロジー・コネクタの作成時に、「OIM」データセットから「プロビジョニング・ステージング」データセットへのデータの移動中のデータを変更するため変換プロバイダを選択してある場合、次のように実行されます。
 - a. 変換プロバイダのインスタンスが作成されます。
 - b. 変換プロバイダの `transformData` メソッドにより、入力した OIMRecord 値オブジェクトの指定の属性が処理され、これらのレコードが出力の OIMRecord 値オブジェクトに変換されます。この段階では、OIMRecord 値オブジェクトは 19-5 ページの「**プロビジョニング・モジュールのプロバイダおよびデータセット**」で説明する「プロビジョニング・ステージング」データセットに対応します。
5. プロビジョニング・フォーマット・プロバイダの `formatData` メソッドが呼び出され、OIMRecord 値オブジェクトが処理されます。このプロセスの出力は、TargetOperation 値オブジェクトです。
6. プロビジョニング・トランスポート・プロバイダの `sendData` メソッドが呼び出され、TargetOperation 値オブジェクトがターゲット・システムに送信されます。
7. プロビジョニング操作が作成リクエストの場合、結果は次のイベントのいずれかになります。
 - ターゲット・システムで作成操作が正常に完了した時点で、新しく作成されたユーザー・アカウントに割り当てられる「ID」フィールド値が、`sendData` メソッドから戻されます。この値はその後、汎用テクノロジー・コネクタ・フレームワークに渡され、このフレームワークによってデータベースにポストされます。
 - 「ID」フィールド値が戻されない場合は、作成操作が失敗したとみなされます。その場合、管理およびユーザー・コンソールにエラー・メッセージが表示されます。
 - 名前 / 値ペアの作成後の段階で操作が失敗すると、管理およびユーザー・コンソールにエラー・メッセージが表示されます。

プロビジョニング操作が更新または削除リクエストの場合、「ID」フィールドは名前 / 値ペアの1つです。このタイプのプロビジョニング・リクエストが送信された場合、結果は次のイベントのいずれかになります。

- 名前 / 値ペアの作成後の段階で操作が失敗すると、管理およびユーザー・コンソールにエラー・メッセージが表示されます。
- 「ID」フィールドの値は、更新操作または削除操作が正常に完了した時点で、プロビジョニング・トランスポート・プロバイダの実装に応じて戻される場合と戻されない場合があります。

どちらの場合も、汎用テクノロジー・コネクタ・フレームワークでは「ID」フィールド値は必要ありません。

21.2 カスタム・プロバイダの作成

カスタム・プロバイダの作成は次の各手順に分類できます。

1. [プロバイダ要件の確認](#)
2. [プロバイダ・パラメータの識別](#)
3. [値オブジェクトの Java コード実装の開発](#)
4. [プロバイダ SPI メソッドの Java コード実装の開発](#)
5. [ロギングおよび例外処理の Java コードの開発](#)
6. [プロバイダ XML ファイルの作成](#)
7. [プロバイダのリソース・バンドル・エントリの作成](#)
8. [プロバイダのデプロイ](#)

21.2.1 プロバイダ要件の確認

プロバイダ要件を判断するためのガイドラインは、次の各項に分けて説明します。

- [リコンシリエーション・プロバイダ要件の確認](#)
- [プロビジョニング・プロバイダ要件の確認](#)

21.2.1.1 リコンシリエーション・プロバイダ要件の確認

リコンシリエーション・プロバイダ要件の確認には、次のガイドラインが適用されます。

- ターゲット・システムを **Oracle Identity Manager** のユーザー・アカウント情報のソースとしてのみ使用する場合、リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダとリコンシリエーション・フォーマット・プロバイダのみが必要です。プロビジョニング・トランスポート・プロバイダとプロビジョニング・フォーマット・プロバイダは必要ありません。

汎用テクノロジー・コネクタにリコンシリエーション・モジュールを含める場合、リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダとリコンシリエーション・フォーマット・プロバイダの両方を（いずれかのプロバイダが不要な場合にも）含める必要があります。このガイドラインについては次の例で説明します。

リコンシリエーション・フォーマット・プロバイダの機能は、ターゲット・システムのデータを **Oracle Identity Manager** でサポートされている形式に変換するものです。ターゲット・システムで、**Oracle Identity Manager** のサポートする形式でデータが生成される場合にも、汎用テクノロジー・コネクタの作成時にはリコンシリエーション・フォーマット・プロバイダを含める必要があります。

- 事前定義済プロバイダで対応できないプロバイダ要件に対してのみ、カスタム・プロバイダの作成が必要になります。

汎用テクノロジー・コネクタに含める必要のあるプロバイダのタイプは、ターゲット・システムでサポートされているデータ・フォーマットおよびデータ転送メカニズムによって異なります。データ・フォーマットとデータ転送メカニズムの組合せが、事前定義プロバイダの組合せで対応できるものであれば、カスタム・プロバイダを作成する必要はありません。

たとえば、ターゲット・システムでカンマ区切り形式のリコンシリエーション・データ・ファイルを生成できる場合は、共有ドライブ・リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダと CSV リコンシリエーション・フォーマット・プロバイダを使用できます。カスタム・リコンシリエーション・プロバイダを作成する必要はありません。

関連項目： 21-17 ページの「[プロバイダの再利用](#)」

21.2.1.2 プロビジョニング・プロバイダ要件の確認

プロビジョニング・モジュール用プロビジョニング・プロバイダの要件の確認には、次のガイドラインが適用されます。

- ターゲット・システムを Oracle Identity Manager で開始されるプロビジョニング操作のターゲットとしてのみ使用する場合、プロビジョニング・トランスポート・プロバイダとプロビジョニング・フォーマット・プロバイダのみが必要です。リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダとリコンシリエーション・フォーマット・プロバイダは必要ありません。

汎用テクノロジー・コネクタにプロビジョニング・モジュールを含める場合、プロビジョニング・トランスポート・プロバイダとプロビジョニング・フォーマット・プロバイダの両方（いずれかのプロバイダが不要な場合にも）含める必要があります。このガイドラインについては次の例で説明します。

プロビジョニング・フォーマット・プロバイダの機能は、Oracle Identity Manager のデータをターゲット・システムでサポートされている形式に変換するものです。ターゲット・システムで Oracle Identity Manager の出力データ・フォーマットがサポートされている場合にも、汎用テクノロジー・コネクタの作成時にはプロビジョニング・フォーマット・プロバイダを含める必要があります。

- 事前定義済プロバイダで対応できないプロバイダ要件に対してのみ、カスタム・プロバイダの作成が必要になります。

汎用テクノロジー・コネクタに含める必要のあるプロバイダのタイプは、ターゲット・システムでサポートされているデータ・フォーマットおよびデータ転送メカニズムによって異なります。データ・フォーマットとデータ転送メカニズムの組合せが、事前定義プロバイダの組合せで対応できるものであれば、カスタム・プロバイダを作成する必要はありません。

たとえば、ターゲット・システムが Web サービスであり、SOAP メッセージにパッケージ化された SPML ベースのプロビジョニング・リクエストの受入れや解析が可能な場合は、SPML プロビジョニング・フォーマット・プロバイダと Web サービス・プロビジョニング・トランスポート・プロバイダを使用できます。カスタム・プロビジョニング・プロバイダを作成する必要はありません。

関連項目：21-17 ページの「[プロバイダの再利用](#)」

21.2.2 プロバイダ・パラメータの識別

プロバイダ・パラメータとは、プロバイダが目的の機能を実行する必要がある値です。たとえば、プロビジョニング・リクエスト・ファイルをターゲット・システム・サーバーにコピーするプロビジョニング・トランスポート・プロバイダには、ターゲット・システムへの接続に接続パラメータが必要になります。

汎用テクノロジー・コネクタの作成時に、その汎用テクノロジー・コネクタ用に選択するプロバイダのパラメータ値を指定します。

カスタム・プロバイダを作成する場合、そのプロバイダが機能するために必要なパラメータをすべて識別する必要があります。また、このようなパラメータをランタイム・パラメータと設計パラメータに分類する必要もあります。

ランタイム・パラメータは、プロバイダの設計に制約されない値を示します。たとえば、リコンシリエーション・データ・ファイルが格納されているディレクトリの場所がランタイム・パラメータ値となります。設計パラメータは、プロバイダ設計の一部として定義される 1 つまたは複数の値を表します。たとえば、リコンシリエーション・フォーマット・プロバイダで解析可能なキャラクタ・セット・エンコーディングのフォーマットなどは、そのプロバイダの設計パラメータに分類されます。

21.2.3 値オブジェクトの Java コード実装の開発

表 21-1 に示す値オブジェクトの Java コード実装を開発します。この章で前述したように、このような値オブジェクトはプロバイダ操作の様々な段階で使用されます。

注意：

- 汎用テクノロジー・コネクタに含めない値オブジェクトの Java コード実装については、開発する必要はありません。
- Javadoc は次の場所で参照できます。

`OIM_HOME/documentation/SDK/javadocs/gc/index.html`

表 21-1 プロバイダ操作中に使用される値オブジェクト

使用領域	値オブジェクト	Javadoc パッケージ
メタデータの検出	TargetSchema	com.thortech.xl.gc.vo.designtime
	OIMSchema	com.thortech.xl.gc.vo.designtime
プロビジョニング	TargetOperation	com.thortech.xl.gc.vo.runtime
リコンシリエーション	TargetRecord	com.thortech.xl.gc.vo.runtime
	OIMRecord	com.thortech.xl.gc.vo.runtime

各プロバイダ・タイプのサンプル・コード・ファイルには、次の場所のそれぞれのプロバイダ・タイプのディレクトリで参照できます。

`OIM_HOME/xellerate/GTC/Samples`

たとえば、TargetOperation 値オブジェクトの実装を作成する場合は、次のサンプル・コード・ファイルを参照してください。

`OIM_HOME/xellerate/GTC/Samples/provisioningTransportProvider/MapProvInput.java`

21.2.4 プロバイダ SPI メソッドの Java コード実装の開発

プロバイダ操作中に使用される SPI メソッドの Java コード実装を開発します。この章で前述したように、SPI メソッドはプロバイダ操作の様々な段階で呼び出されます。各プロバイダの SPI メソッドの情報へのリンクは、Javadoc の Package `com.thortech.xl.gc.spi` のページを参照してください。

各プロバイダ・タイプのサンプル・コード・ファイルには、次の場所のそれぞれのプロバイダ・タイプのディレクトリで参照できます。

`OIM_HOME/xellerate/GTC/Samples`

たとえば、プロビジョニング・フォーマット・プロバイダを作成する場合は、次のサンプル・コード・ファイルを参照してください。

`OIM_HOME/xellerate/GTC/Samples/provisioningFormatProvider/PrepareDataHMap.java`

注意： 汎用テクノロジー・コネクタに含めないプロバイダの SPI メソッドの Java コード実装については、開発する必要はありません。

21.2.5 ログイングおよび例外処理の Java コードの開発

値オブジェクトおよび SPI メソッドの Java コード実装には、ログイング機能を組み込むことをお勧めします。これにより、プロバイダ使用時に発生する可能性のあるエラーのトラブルシューティング・プロセスを簡略化できます。

汎用テクノロジー・コネクタ・フレームワーク用のログイング・モジュールは、Oracle Identity Manager のログイング拡張機能です。表 21-2 に、サポートされている各プロバイダ・タイプ固有の各モジュールを示します。

表 21-2 サポートされる各プロバイダ・タイプに固有のログイング・モジュール

ログイング・モジュール	汎用テクノロジー・コネクタ・フレームワークの機能モジュール
XELLERATE.GC.PROVIDER.PROVISIONINGFORMAT	プロビジョニング・フォーマット・プロバイダ
XELLERATE.GC.PROVIDER.PROVISIONINGTRANSPORT	プロビジョニング・トランスポート・プロバイダ
XELLERATE.GC.PROVIDER.RECONCILIATIONTRANSPORT	リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダ
XELLERATE.GC.PROVIDER.RECONCILIATIONFORMAT	リコンシリエーション・フォーマット・プロバイダ
XELLERATE.GC.PROVIDER.TRANSFORMATION	変換プロバイダ
XELLERATE.GC.PROVIDER.VALIDATION	検証プロバイダ

これらのモジュールを使用してカスタム・プロバイダにログイング機能を組み込むには、参照としてサンプル・コード・ファイルを使用できます。

カスタム・プロバイダに例外処理を組み込む方法の詳細は、Javadoc およびサンプル・コード・ファイルを参照してください。

21.2.6 プロバイダ XML ファイルの作成

プロバイダ XML ファイルには、汎用テクノロジー・コネクタ・フレームワークにプロバイダを登録するために必要なデータが含まれます。プロバイダ XML ファイルは必ず作成してください。表 21-3 では、カスタム・プロバイダのプロバイダ XML ファイルに含められる要素について説明します。

注意：1つのプロバイダ XML ファイルを使用して複数のプロバイダを定義できます。また、作成する各プロバイダについて、それぞれプロバイダ XML ファイルを作成することもできます。

プロバイダ XML ファイルは、次のファイルにあるスキーマ定義に従っている必要があります。

`OIM_HOME/xellerate/GTC/Schema/Providers-def.xsd`

表 21-3 プロバイダ XML ファイルの要素

要素	説明
Provider	プロバイダ XML ファイルのルート要素
Reconciliation	リコンシリエーション・プロバイダの記述に使用する構成要素の親要素
Provisioning	プロビジョニング・プロバイダの記述に使用する構成要素の親要素
Transformation	変換プロバイダの記述に使用する構成要素の親要素
Validation	検証プロバイダの記述に使用する構成要素の親要素
ReconTransportProvider	リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダの記述に使用する構成要素の親要素 この要素には次の属性があります。 <ul style="list-style-type: none"> ■ name: プロバイダの名前 ■ class: プロバイダ実装の Java クラスの名前
ReconFormatProvider	リコンシリエーション・フォーマット・プロバイダの記述に使用する構成要素の親要素 この要素には次の属性があります。 <ul style="list-style-type: none"> ■ name: プロバイダの名前 ■ class: プロバイダ実装の Java クラスの名前
ProvFormatProvider	プロビジョニング・フォーマット・プロバイダの記述に使用する構成要素の親要素 この要素には次の属性があります。 <ul style="list-style-type: none"> ■ name: プロバイダの名前 ■ class: プロバイダ実装の Java クラスの名前
ProvTransportProvider	プロビジョニング・トランスポート・プロバイダの記述に使用する構成要素の親要素 この要素には次の属性があります。 <ul style="list-style-type: none"> ■ name: プロバイダの名前 ■ class: プロバイダ実装の Java クラスの名前
TransformationProvider	変換プロバイダの記述に使用する構成要素の親要素 この要素には次の属性があります。 <ul style="list-style-type: none"> ■ name: プロバイダの名前 ■ class: プロバイダ実装の Java クラスの名前
ValidationProvider	検証プロバイダの記述に使用する構成要素の親要素 この要素には次の属性があります。 <ul style="list-style-type: none"> ■ name: プロバイダの名前 ■ class: プロバイダ実装の Java クラスの名前
Configuration	あらゆるタイプのプロバイダの構成要素の親要素

表 21-3 プロバイダ XML ファイルの要素 (続き)

要素	説明
Parameter	<p>プロバイダのパラメータに関する情報を提供する要素</p> <p>Parameter 要素には次の属性があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ type: パラメータのタイプ (Runtime または Designtime)。 ■ datatype: パラメータのデータ型 (String または Boolean)。ブール以外のデータ型のパラメータはすべて文字列で表す必要があります。 ■ required: パラメータが必須であるかどうかの指定。 ■ encrypted: パラメータの表示を暗号化するかどうかの指定。 ■ name: パラメータの名前。 ■ datalength: パラメータ値の文字数。
DefaultAttribute	<p>Configuration 要素の子要素</p> <p>この要素は ProvFormatProvider 要素にのみ含めます。この要素には次の属性があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ datatype: パラメータのデータ型 (String または Boolean)。ブール以外のデータ型のパラメータはすべて文字列で表す必要があります。 ■ name: パラメータの名前。 ■ encrypted: パラメータの表示を暗号化するかどうかの指定。 ■ size: デフォルトの属性のサイズ。 <p>プロビジョニング・リクエストに含めるデータ属性の一部は、プロビジョニング操作を正常に完了するために不可欠なものです。プロビジョニング・フォーマット・プロバイダでは最終的なプロビジョニング入力データ・フォーマットが生成されるため、このプロバイダの定義にはこのような必須データ属性を含める必要があります。したがって、このような属性がターゲット・システムで必要な場合は、プロビジョニング・フォーマット・プロバイダ XML ファイルで DefaultAttribute 要素を使用して定義する必要があります。</p>
Response	<p>Configuration 要素の子要素</p> <p>この要素は、ProvFormatProvider、ProvTransportProvider、TransformationProvider および ValidationProvider の各要素にのみ含めます。これは、プロビジョニング・エンジンで呼び出されたプロバイダから戻されるレスポンスを表します。このレスポンスは Oracle Identity Manager の管理およびユーザー・コンソールに表示されます。この要素には次の属性があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ code: Oracle Identity Manager で生成されるプロセス・タスクのレスポンス・コードに対応 ■ description: Oracle Identity Manager で生成されるプロセス・タスクのレスポンス・コードの説明に対応 <p>注意:</p> <p>プロビジョニング・フォーマット・プロバイダやプロビジョニング・トランスポート・プロバイダでは、ProvFormatProvider 要素または ProvTransportProvider 要素の name 属性の文字数と、Response 要素の文字数の合計を 70 文字以下にする必要があります。文字数の合計が 70 文字を超えると、レスポンス・コードはデータベースに格納できなくなり、エラーが発生します。</p>

各プロバイダ・タイプのサンプル XML ファイルの内容は、必要に応じて、次の場所のそれぞれのプロバイダ・タイプのディレクトリで参照できます。

`OIM_HOME/xellerate/GTC/Samples`

たとえば、プロビジョニング・フォーマット・プロバイダを作成する場合は、次のサンプル XML ファイルを参照してください。

`OIM_HOME/xellerate/GTC/Samples/provisioningFormatProvider/PrepareDataHMapProvFormat.xml`

21.2.7 プロバイダのリソース・バンドル・エントリの作成

リソース・バンドルとは、ロケール固有のテキスト文字列を含むファイルのことです。このようなテキスト文字列は、実行時に Oracle Identity Manager で読み込まれ、管理およびユーザー・コンソールに GUI 要素のラベルやメッセージとして表示されます。リソース・バンドルのファイル拡張子は .properties です。

サポートされる各言語のリソース・バンドルは、Oracle Identity Manager のインストール中に Oracle Identity Manager サーバーにコピーされます。これには事前定義済プロバイダのリソース・バンドルも含まれます。

カスタム・プロバイダの場合、使用する各ロケールに応じたリソース・バンドル・エントリを作成する必要があります。リソース・バンドルの作成手順の概要を次に示します。

関連項目： リソース・バンドル・エントリ作成の詳細は、『Oracle Identity Manager グローバリゼーション・ガイド』を参照してください。

このマニュアルでは、リソース・バンドル・ファイルのネーミング規則などのガイドラインについて説明します。

1. テキスト・エディタで新規ファイルを開きます。
2. このファイルに、次のテキスト文字列のエントリを作成します。

注意：

- リソース・バンドル・ファイルでは、各行の一部として等号記号 (=) の後にローカライズしたテキストを記述します。
 - この項で説明する Provider_Type、Parameter_Name および RESPONSE_CODE のそれぞれの値は、21-12 ページの「[プロバイダ XML ファイルの作成](#)」で説明する手順の実行時にプロバイダ XML ファイルに指定する値と同じである必要があります。
-
-

- **プロバイダ名**

プロバイダ名は次の形式で記述します。

```
gc.provider.Provider_Type.Provider_Name=Label_string_in_the_required_language
```

プロビジョニング・フォーマット・プロバイダのプロバイダ名エントリは、英語では次のようになります。

```
gc.provider.ProvFormatProvider.SPML=SPML
```

- **プロバイダ・パラメータのラベルおよび説明**

プロバイダのパラメータのラベルおよびその説明は、次の形式で記述します。

```
gc.Provider_Type.Provider_Name.Parameter_Name.label=Parameter_label_in_the_required_language
```

```
gc.Provider_Type.Provider_Name.Parameter_Name.description=Parameter_description_in_the_required_language
```

プロビジョニング・フォーマット・プロバイダのプロバイダ・パラメータのラベルおよびその説明エントリは、英語では次のようになります。

```
gc.ProvFormatProvider.SPML.targetID.label=Target ID
```

```
gc.ProvFormatProvider.SPML.targetID.description=Target ID of the provisioning target
```

- レスポンス・コードおよび説明

レスポンス・コードおよび説明は、次の形式で記述します。

```
GC.GCPROV.PROVIDER_TYPE.PROVIDER_NAME.RESPONSE_CODE=Response_code_in_the_required_language
GC.GCPROV.PROVIDER_TYPE.PROVIDER_NAME.RESPONSE_CODE.description=Description_in_the_required_language
```

プロビジョニング・フォーマット・プロバイダのレスポンス・コードおよび説明のエントリは、英語では次のようになります。

```
GC.GCPROV.ProvFormatProvider.SPML.SPML_VELOCITY_PROPERTIES_NOT_READ=SPML
Velocity Properties Not Read
GC.GCPROV.ProvFormatProvider.SPML.SPML_VELOCITY_PROPERTIES_NOT_READ.description
=Necessary SPML template properties could not be read.
```

- メタデータの検出のエラー・メッセージ

メタデータの検出のエラー・メッセージは、次の形式で記述します。

```
gc.error.Provider_Type.Provider_Name.ERROR_CODE=Error_Description
```

ここで、`ERROR_CODE` は例外クラスのコンストラクタに引数として渡される `errorCode` 文字列の値と同じである必要があります。たとえば、`ReconciliationTransportException` クラスのコンストラクタの1つを次に示します。

```
ReconciliationTransportException(java.lang.String errorCode, java.lang.String
isMessage)
```

リソース・バンドルでは、`errorCode` 文字列に考えられるすべての値のための行を追加する必要があります。

リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダのメタデータの検出エラー・メッセージは、英語では次のようになります。

```
gc.error.ReconTransportProvider.SharedDrive.NO_READ_FILE=There are no readable
files to detect metadata.
```

3. リソース・バンドルを保存して閉じます。

21.2.8 プロバイダのデプロイ

プロバイダをデプロイするには、次の手順を実行します。

1. JAR ファイルを次のようにデプロイします。

- a. Java コード・ファイルをすべてコンパイルし、JAR ファイルにパッケージ化します。

次の JAR ファイルには、すべてのサンプル・コード・ファイルのコード・ファイルが含まれます。

```
OIM_HOME/xellerate/GTC/Samples/xliGTCProviderSamples.jar
```

- b. JAR ファイルを次のディレクトリにコピーします。

```
OIM_HOME/xellerate/JavaTasks
```

注意： クラスタ化されている環境では、作成するそれぞれのファイルをクラスタの各ノードの対応ディレクトリにコピーする必要があります。

2. プロバイダ XML ファイルを次のようにデプロイします。
 - a. プロバイダ XML ファイルを次のディレクトリにコピーします。
`OIM_HOME/xellerate/GTC/ProviderDefinitions`

注意: クラスタ化されている環境では、作成するそれぞれのファイルをクラスタの各ノードの対応ディレクトリにコピーする必要があります。

 - b. Oracle Identity Manager を再起動します。
 - c. 次のようにプロバイダ XML ファイルが正しく登録されているかどうかを確認します。
 - i. 管理およびユーザー・コンソールにログインします。
 - ii. 「汎用テクノロジー・コネクタ」を開き、「作成」をクリックします。プロバイダ XML ファイルでエラーが発生した場合は、エラー・メッセージが表示されます。
 エラー・メッセージが表示される場合、XML ファイル内で問題を修正し、Oracle Identity Manager を再起動して手順 i と手順 ii を繰り返します。
 この手順は「作成」をクリックしてもエラー・メッセージが表示されなくなるまで繰り返します。
3. プロバイダのリソース・バンドルを次のようにデプロイします。
 - a. リソース・バンドルを次のディレクトリにコピーします。
`OIM_HOME/xellerate/connectorResources`

注意: クラスタ化されている環境では、作成するそれぞれのファイルをクラスタの各ノードの対応ディレクトリにコピーする必要があります。

 - b. 新しいリソース・バンドル・エントリを有効にするには、PurgeCache スクリプトを実行するか、アプリケーション・サーバーを再起動します。PurgeCache ユーティリティの実行の詳細は、『Oracle Identity Manager ベスト・プラクティス・ガイド』を参照してください。

21.3 プロバイダの再利用

フォーマット・プロバイダとトランスポート・プロバイダはペアで機能します。リコンシリエーションの実行中、リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダの出力がリコンシリエーション・フォーマット・プロバイダに渡されます。プロビジョニングの実行中には、プロビジョニング・フォーマット・プロバイダの出力がプロビジョニング・トランスポート・プロバイダに渡されます。つまり、トランスポート・プロバイダとフォーマット・プロバイダの実装は、この間で渡される値オブジェクトの実装を介してリンクしています。この依存性は、フォーマット・プロバイダおよびトランスポート・プロバイダの再利用に関するガイドラインの基礎となります。

一方、検証プロバイダや変換プロバイダには、他のプロバイダに対してこのような依存性はありません。そのため、検証プロバイダおよび変換プロバイダの再利用に関するガイドラインはありません。検証プロバイダと変換プロバイダは、事前定義されているものでも、カスタム・プロバイダとして作成したもので再利用できます。これは、これらのプロバイダの動作が、ターゲット・システムのデータ・フォーマットやデータ転送メカニズムに限定されていないためです。

フォーマット・プロバイダおよびトランスポート・プロバイダの再利用に関するガイドラインは、次の各項に分けて説明します。

- [リコンシリエーション・プロバイダの再利用](#)
- [プロビジョニング・プロバイダの再利用](#)

21.3.1 リコンシリエーション・プロバイダの再利用

21-5 ページの「[リコンシリエーション中のプロバイダの役割](#)」で説明するように、リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダとリコンシリエーション・フォーマット・プロバイダの間のデータ交換には、TargetRecord 値オブジェクトが使用されます。リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダにより、リコンシリエーション実行中にフェッチされたターゲット・システム・レコードに対して TargetRecord 値オブジェクトの配列が作成されます。その後、リコンシリエーション・フォーマット・プロバイダにより、値オブジェクト配列のデータが処理され、リコンシリエーション・エンジンに渡されます。

ユーザーの組織の操作環境に、TS1 および TS2 という 2 つのターゲット・システムがあるとします。TS1 では、リコンシリエーション中のデータ抽出に Web ベースのインタフェースを利用できます。TS2 では、そのアイデンティティ・ストアのデータを他のアプリケーションで読み取れるようにする API が用意されています。どちらのターゲット・システムでも同じデータ・フォーマットがサポートされています。両方のターゲット・システムのユーザー・データをリコンサイルする場合、各ターゲット・システムに対して汎用テクノロジー・コネクタを 1 つずつ作成する必要があります。それぞれの汎用テクノロジー・コネクタには、リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダを作成する必要があります。ただし、リコンシリエーション・フォーマット・プロバイダは、それぞれの汎用テクノロジー・コネクタに対して作成するのではなく、1 つのみ作成してそれを再利用できます。同様に、TS1 および TS2 で（同じデータ・フォーマットをサポートしていない場合でも）同じデータ転送メカニズムがサポートされていれば、リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダを再利用して別のリコンシリエーション・フォーマット・プロバイダを作成することが可能です。

リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダを再利用する場合は、TargetRecord 値オブジェクトの実装に、リコンシリエーション・フォーマット・プロバイダで実行される関数に固有のコードが含まれないようにしてください。リコンシリエーション・フォーマット・プロバイダを再利用する場合は、TargetRecord 値オブジェクトの実装に、リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダで実行される関数に固有のコードが含まれないようにしてください。

事前定義リコンシリエーション・プロバイダの再利用

共有ドライブ・リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダおよび CSV リコンシリエーション・フォーマット・プロバイダの実装は事前定義プロバイダであり、データ・フォーマットと単一のデータ転送メカニズムの固定の組合せ向けに作成されています。共有ドライブ・リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダでは、フラット・ファイルからデータを読み取り、CSV リコンシリエーション・フォーマット・プロバイダに TargetRecord 値オブジェクトの配列を渡します。共有ドライブ・リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダの実装は、ページ・リコンシリエーションと複数值（子）データ・リコンシリエーションという 2 つの要素に基づいています。この 2 つの要素では、TargetRecord 値オブジェクトの配列を作成する前に、プロバイダでのターゲット・システムのデータ解析を可能にする必要があります。つまり、共有ドライブ・リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダではターゲット・システム・データの特定の型を解析でき、CSV リコンシリエーション・フォーマット・プロバイダには共有ドライブ・リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダから提供される出力のみを使用できるため、相互依存の関係になっています。そのため、CSV リコンシリエーション・フォーマット・プロバイダのパラメータは、共有ドライブ・リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダのパラメータとバンドルされています。

このような理由のため、共有ドライブ・リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダとカスタム・リコンシリエーション・フォーマット・プロバイダは併用できず、また CSV フォーマット・プロバイダとカスタム・リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダは併用できません。

21.3.2 プロビジョニング・プロバイダの再利用

21-7 ページの「[プロビジョニング中のプロバイダの役割](#)」で説明するように、プロビジョニング・トランスポート・プロバイダとプロビジョニング・フォーマット・プロバイダの間のデータ交換には、TargetOperation 値オブジェクトが使用されます。プロビジョニング・フォーマット・プロバイダで、ターゲット・システムへの送信用にプロビジョニング・データから TargetOperation 値オブジェクトが作成されます。次にプロビジョニング・トランスポート・プロバイダで、この値オブジェクトがターゲット・システムに渡されます。

ユーザーの組織の操作環境に、TS1 および TS2 という 2 つのターゲット・システムがあります。TS1 では、プロビジョニング・リクエスト・データの受信に Web ベースのインタフェースを利用できます。TS2 では、そのアイデンティティ・ストアにプロビジョニング・データを書き込めるようにする API が用意されています。どちらのターゲット・システムでも同じデータ・フォーマットがサポートされています。両方のターゲット・システムでプロビジョニング操作を実行する場合、各ターゲット・システムに対して汎用テクノロジ・コネクタを 1 つずつ作成する必要があります。それぞれの汎用テクノロジ・コネクタには、プロビジョニング・トランスポート・プロバイダを作成する必要があります。ただし、プロビジョニング・フォーマット・プロバイダは、各汎用テクノロジ・コネクタに対して作成するのではなく、1 つのみ作成してそれを再利用できます。

TS1 および TS2 でサポートされているデータ転送メカニズムが同じであり、データ・フォーマットがそれぞれ異なる場合、プロビジョニング・トランスポート・プロバイダを再利用して別のプロビジョニング・フォーマット・プロバイダを作成できます。

プロビジョニング・トランスポート・プロバイダを再利用する場合は、TargetOperation 値オブジェクトの実装に、プロビジョニング・フォーマット・プロバイダで実行される関数に固有のコードが含まれないようにしてください。プロビジョニング・フォーマット・プロバイダを再利用する場合は、TargetOperation 値オブジェクトの実装に、プロビジョニング・トランスポート・プロバイダで実行される関数に固有のコードが含まれないようにしてください。

事前定義プロビジョニング・プロバイダの再利用

ターゲット・システムが Web サービスの場合、Web サービス・プロビジョニング・トランスポート・プロバイダと、ユーザーが作成する任意のカスタム・プロビジョニング・フォーマット・プロバイダを併用できます。次に、この例を示します。

このマニュアルで前述したように、SPML プロビジョニング・フォーマット・プロバイダでは SPML 仕様に従って記述されているプロビジョニング操作のサブセットのみがサポートされます。あらゆる SPML プロビジョニング操作をサポートする、カスタム・プロビジョニング・フォーマット・プロバイダを開発できます。ターゲット・システムが Web サービスの場合、Web サービス・プロビジョニング・トランスポート・プロバイダを使用して、カスタム・プロビジョニング・フォーマット・プロバイダからターゲット・システムに SPML リクエストを送信できます。

同様に、SPML プロビジョニング・フォーマット・プロバイダとカスタム・プロビジョニング・トランスポート・プロバイダを併用して、SPML リクエストを SPML ベースのターゲット・システムに送信することもできます。

SPML プロビジョニング・フォーマット・プロバイダで作成され、Web サービス・プロビジョニング・トランスポート・プロバイダの入力として使用される TargetOperation 値オブジェクトの実装について、次に示します。

```
com.thortech.xl.gc.impl PROV.WSTransportTargetOperation
```

このクラスの詳細は、Javadoc を参照してください。

SPML プロビジョニング・フォーマット・プロバイダを再利用する場合、このクラスのインスタンスを入力として受け入れ、関連する set メソッドを呼び出すカスタム・トランスポート・プロバイダを作成する必要があります。同様に、Web サービス・プロビジョニング・トランスポート・プロバイダを再利用する場合、このクラスのインスタンスを作成し、関連する get メソッドを呼び出すカスタム・プロビジョニング・フォーマット・プロバイダを作成する必要があります。

汎用テクノロジー・コネクタの作成

汎用テクノロジー・コネクタの作成手順は、次のステップで構成されています。

- プロバイダ要件の確認
- 汎用テクノロジー・コネクタに組み込むプロバイダの選択
- 汎用テクノロジー・コネクタの作成における前提条件への対応
- 管理およびユーザー・コンソールを使用した汎用テクノロジー・コネクタの作成
- リコンシリエーションの構成
- プロビジョニングの構成
- 汎用テクノロジー・コネクタのログインの有効化

22.1 プロバイダ要件の確認

このマニュアルで前述したとおり、作成する汎用テクノロジー・コネクタのビルディング・ブロックとして次のプロバイダを使用できます。

- リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダ
- リコンシリエーション・フォーマット・プロバイダ
- プロビジョニング・トランスポート・プロバイダ
- プロビジョニング・フォーマット・プロバイダ
- 変換プロバイダ
- 検証プロバイダ

これらのプロバイダの定義については、19-2 ページの「汎用テクノロジー・コネクタの機能アーキテクチャ」を参照してください。次に、ターゲット・システムがサポートしているデータ形式とデータ・トランスポート・メカニズムの知識に基づいて、作成する汎用テクノロジー・コネクタに組み込む必要のあるプロバイダを識別します。ターゲット・システムが複数のデータ形式とデータ・トランスポート・メカニズムをサポートしている場合は、最初の章で説明したトランスポート・プロバイダとフォーマット・プロバイダの1つの組合せを選択する必要があります。たとえば、1つの汎用テクノロジー・コネクタに複数のリコンシリエーション・フォーマット・プロバイダを組み込むことはできません。

関連項目： 21-9 ページの「[プロバイダ要件の確認](#)」

22.2 汎用テクノロジー・コネクタに組み込むプロバイダの選択

プロバイダ要件に適合する事前定義済みのプロバイダを識別します。事前定義済みプロバイダの詳細は、[第 20 章](#)を参照してください。

事前定義済みプロバイダでプロバイダ要件のすべてに対応できる場合は、カスタム・プロバイダを作成する必要はありません。事前定義済みプロバイダで対応できないプロバイダ要件に対してのみ、カスタム・プロバイダの作成が必要になります。カスタム・プロバイダの作成方法については、[第 21 章](#)を参照してください。

22.3 汎用テクノロジー・コネクタの作成における前提条件への対応

次の前提条件に対応する必要があります。

- 本番サーバーで汎用テクノロジー・コネクタを作成する場合は、次のキャッシュ・カテゴリのキャッシュを有効化します。
 - GenericConnector
 - GenericConnectorProviders

詳細は、『Oracle Identity Manager ベスト・プラクティス・ガイド』の「本番環境に最適なキャッシュ構成」を参照してください。

- ターゲット・システム・サーバーと Oracle Identity Manager サーバーの接続性のテスト
ターゲット・システム・サーバーと Oracle Identity Manager サーバーの間で接続を確立できるようにする必要があります。たとえば、Linux 環境では、ターゲット・システム・サーバーの /etc/hosts ファイルに Oracle Identity Manager サーバーの完全修飾ホスト名を入力する必要があります。
- 汎用テクノロジー・コネクタの作成に使用するユーザー・アカウントの作成

Oracle Identity Manager の SYSTEM ADMINISTRATORS グループに属するすべてのユーザーが汎用テクノロジー・コネクタを作成できます。また、必要なメニュー項目と権限を割り当てられているグループのメンバーが汎用テクノロジー・コネクタを作成できます。

関連項目： グループの作成とグループへのメニュー項目および権限の割当ての詳細は、[第 10 章「ユーザー・グループの作成と管理」](#)を参照してください。

必要なメニュー項目は次のとおりです。

- 汎用テクノロジー・コネクタの作成メニュー項目
- 汎用テクノロジー・コネクタの管理メニュー項目

必要な権限は次のとおりです。

- フォーム・デザイナー（挿入の許可、書込み権限、削除権限）
- 構造ユーティリティ . 追加の列（挿入の許可、書込み権限、削除権限）
- メタ表の階層（挿入の許可、書込み権限、削除権限）

これらの権限がグループに適切に割り当てられていない場合は、汎用テクノロジー・コネクタを作成する際に、管理およびユーザー・コンソールの最後のページで「作成」ボタンをクリックするとエラーが発生します。

22.4 管理およびユーザー・コンソールを使用した汎用テクノロジー・コネクタの作成

汎用テクノロジー・コネクタを作成するために管理およびユーザー・コンソールの最初のページへ移動するには、管理およびユーザー・コンソールを開き、「汎用テクノロジー・コネクタ」を展開し、「作成」をクリックします。

これ以降は、次の各項でページごとの操作手順を説明します。

- [「ステップ 1: 基本情報の指定」](#) ページ
- [「ステップ 2: パラメータ値の指定」](#) ページ
- [「ステップ 3: コネクタ構成の変更」](#) ページ
- [「ステップ 4: コネクタ・フォーム名の検証」](#) ページ
- [「ステップ 5: コネクタ情報の検証」](#) ページ

22.4.1 「ステップ 1: 基本情報の指定」 ページ

作成する汎用テクノロジー・コネクタの基本情報を指定するには、このページを使用して次の手順を実行します。

1. 「名前」フィールドで汎用テクノロジー・コネクタの名前を指定します。

汎用テクノロジー・コネクタの名前選択に関するガイドラインを次に示します。

- この Oracle Identity Manager インストールで使用されている他のコネクタ（事前定義済コネクタまたは汎用テクノロジー・コネクタ）と同じ名前を指定することはできません。
- この Oracle Identity Manager インストールで使用されている他のコネクタ・オブジェクト（リソース・オブジェクト、IT リソース、プロセス・フォームなど）と同じ名前を指定することはできません。

注意： 既存のコネクタと同じ名前を指定するとエラー・メッセージが表示されます。ただし、既存のコネクタ・オブジェクトと同じ名前を指定してもエラー・メッセージは表示されません。そのため、指定する名前が既存のコネクタ・オブジェクトの名前と同じでないことを確認する必要があります。

汎用テクノロジー・コネクタの作成プロセスの一環として自動作成されるコネクタ・オブジェクトの詳細は、[第 28 章](#)を参照してください。

- Oracle Identity Manager ではコネクタ名が非 ASCII 文字に対応していないため、コネクタ名に非 ASCII 文字は使用できません。ただし、アンダースコア文字 (_) は名前に使用できます。

関連項目： 汎用テクノロジー・コネクタの名前に関する制限事項については、「汎用テクノロジー・コネクタに関する既知の問題」の「[汎用テクノロジー・コネクタおよびコネクタ・オブジェクトの名前](#)」(26-2 ページ) を参照してください。

2. リコンシリエーションに汎用テクノロジー・コネクタを使用する場合は、「**リコンシリエーション**」を選択して次の手順を実行します。
 - このコネクタで使用するリコンシリエーション・トランスポート・プロバイダは、「**トランスポート・プロバイダ**」リストで選択します。このリストには、事前定義済のリコンシリエーション・トランスポート・プロバイダと作成するリコンシリエーション・トランスポート・プロバイダが表示されます。
 - このコネクタで使用するリコンシリエーション・フォーマット・プロバイダは、「**フォーマット・プロバイダ**」リストで選択します。このリストには、事前定義済のリコンシリエーション・フォーマット・プロバイダと作成するリコンシリエーション・フォーマット・プロバイダが表示されます。

注意： 共有ドライブ・リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダを選択する場合は、CSV リコンシリエーション・フォーマット・プロバイダも選択する必要があります。これは、このプロバイダのすべてのパラメータが、共有ドライブ・リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダのパラメータにバンドルされているためです。

- コネクタを使用して信頼できるソース・リコンシリエーションをターゲット・システムに対して実行する場合は、「**信頼できるソース・リコンシリエーション**」を選択します。

注意： 「信頼できるソース・リコンシリエーション」チェック・ボックスを選択すると、このページの「プロビジョニング」リージョンは無効になります。これは、信頼できるソースとして指定したターゲット・システムではプロビジョニングを実行できないためです。信頼できるソースによるデータのリコンサイルのみが可能です。

3. プロビジョニングに汎用テクノロジー・コネクタを使用する場合は、「**プロビジョニング**」を選択して次の手順を実行します。

注意： 「リコンシリエーション」のみ、「プロビジョニング」のみ、または「リコンシリエーション」と「プロビジョニング」の両方を選択できます。

- このコネクタで使用するプロビジョニング・トランスポート・プロバイダは、「**トランスポート・プロバイダ**」リストで選択します。このリストには、事前定義済のプロビジョニング・トランスポート・プロバイダと作成するプロビジョニング・トランスポート・プロバイダが表示されます。

Web サービス・プロビジョニング・トランスポート・プロバイダを選択し、ターゲットの Web サービスで Secure Sockets Layer (SSL) が有効化されている場合は、20-13 ページの「[Oracle Identity Manager とターゲット・システム Web サービスの間の SSL 通信の構成](#)」に記載されている手順を実行する必要があります。

- このコネクタで使用するプロビジョニング・フォーマット・プロバイダは、「**フォーマット・プロバイダ**」リストで選択します。このリストには、事前定義済のプロビ

ジョニング・フォーマット・プロバイダと作成するプロビジョニング・フォーマット・プロバイダが表示されます。

SPML プロビジョニング・フォーマット・プロバイダを選択する場合は、Web サービス・プロビジョニング・トランスポート・プロバイダも選択する必要があります。これは、このプロバイダのパラメータが、Web サービス・プロビジョニング・トランスポート・プロバイダのパラメータに関連しているためです。

4. 「**続行**」をクリックします。

表 22-1 に「ステップ 1: 基本情報の指定」ページの GUI 要素のサンプル・エントリを示します。

表 22-1 「ステップ 1: 基本情報の指定」ページのサンプル・エントリ

「ステップ 1: 基本情報の指定」ページのラベル	サンプル値またはアクション	参照情報
「名前」フィールド	MyGTC2	該当なし
「リコンシリエーション」チェック・ボックス	チェック・ボックス選択	該当なし
「トランスポート・プロバイダ」リスト	共有ドライブ	20-2 ページの「共有ドライブ・リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダ」
「フォーマット・プロバイダ」リスト	CSV	20-8 ページの「CSV リコンシリエーション・フォーマット・プロバイダ」
「プロビジョニング」チェック・ボックス	チェック・ボックス選択	該当なし
「トランスポート・プロバイダ」リスト	Web サービス	20-13 ページの「Web サービス・プロビジョニング・トランスポート・プロバイダ」
「フォーマット・プロバイダ」リスト	SPML	20-8 ページの「SPML プロビジョニング・フォーマット・プロバイダ」

図 22-1 に示す「ステップ 1: 基本情報の指定」ページには、表 22-1 のエントリが入力されています。

図 22-1 「ステップ 1: 基本情報の指定」ページ

ORACLE Identity Manager

ようこそ Administrator System ホーム | ログアウト | バージョン情報

汎用テクノロジー・コネクタの作成

ステップ 1: 基本情報の指定

* 必須フィールドを示します

名前

リコンシリエーション

トランスポート・プロバイダ

フォーマット・プロバイダ

信頼できるソース・リコンシリエーション

プロビジョニング

トランスポート・プロバイダ

フォーマット・プロバイダ

Oracle Identity Manager 9.1.0 Copyright © 2007, Oracle Corporation.

22.4.2 「ステップ 2: パラメータ値の指定」ページ

このページを使用して、「ステップ 1: 基本情報の指定」ページで選択したプロバイダのパラメータ値を指定します。

このページでは、プロバイダのパラメータは次の 2 つのカテゴリに分けられます。

- ランタイム・パラメータ

関連項目: 「ステップ 1: 基本情報の指定」ページで選択する事前定義済プロバイダのランタイム・パラメータの詳細は、[第 20 章「Oracle Identity Manager に含まれている汎用テクノロジー・コネクタの事前定義済プロバイダ」](#)を参照してください。

ランタイム・パラメータは、前のページで選択したプロバイダの入力変数です。ランタイム・パラメータは、プロバイダの設計に制約されない値を示します。たとえば、リコンサイルするデータ・ファイルが格納されているディレクトリの場所がランタイム・パラメータ値となります。

- 設計パラメータ

この項に示すパラメータは、プロバイダの設計パラメータ、またはすべての汎用テクノロジー・コネクタに共通するリコンシリエーション固有パラメータです。設計パラメータは、プロバイダ設計の一部として定義される 1 つまたは複数の値を表します。

関連項目: 「ステップ 1: 基本情報の指定」 ページで選択する事前定義済プロバイダの設計パラメータの詳細は、第 20 章「[Oracle Identity Manager に含まれている汎用テクノロジー・コネクタの事前定義済プロバイダ](#)」を参照してください。

例:

フォーマット・プロバイダで解析可能なデータ・ファイルの形式がこのプロバイダの設計パラメータとなります。プロバイダの設計時に、そのプロバイダが解析可能な一連の形式を定義します。「ステップ 2: パラメータ値の指定」 ページで、フォーマット・プロバイダのインスタンスが解析する必要のある特定の形式を（サポートしている形式の中から）指定します。

次に、リコンシリエーション固有の設計パラメータを示します。

注意: 前のページで「リコンシリエーション」 オプションを選択していない場合、リコンシリエーション固有の設計パラメータはこのページに表示されません。

- バッチ・サイズ

このパラメータを使用して、リコンシリエーション実行のバッチ・サイズを指定します。このパラメータを使用すると、リコンシリエーション実行中にリコンシリエーション・エンジンがターゲット・システムからフェッチするレコードの総数をバッチに分割できます。

このパラメータのデフォルト値は All です。

- リコンシリエーション停止のしきい値

リコンシリエーションの実行中、検証プロバイダは、リコンシリエーション・フォーマット・プロバイダからのデータを入力として受け入れます。一部のリコンシリエーション・データ・レコードは、検証チェックを通らない場合があります。「リコンシリエーション停止のしきい値」パラメータを使用すると、処理済のリコンシリエーション・レコード総数に対する検証チェックを通らなかったレコードの割合が指定値を超えた場合に、リコンシリエーションを自動的に停止できます。

次に、このパラメータの使用例を示します。

「リコンシリエーション停止のしきい値」パラメータの値として 20 を指定したとします。この場合は、処理済のレコード総数に対する失敗したレコードの割合が 20% 以上になるとリコンシリエーションが停止されます。2 番目と 8 番目のレコードが検証チェックに失敗したとします。この段階で失敗したレコードの数は 2、処理されたレコードの総数は 8 です。失敗したレコードの割合は 25% になり、指定したしきい値の 20 を上回ります。そのため、リコンシリエーションは 8 番目のレコードの処理後に停止します。

注意:

- 「ステップ 3: コネクタ構成の変更」 ページで検証プロバイダを選択した場合にのみ、リコンシリエーションの実行中に「リコンシリエーション停止のしきい値」パラメータが使用されます。
 - 失敗したレコードの実際の割合が指定値を超えたためにリコンシリエーションが停止しても、Oracle Identity Manager でリコンサイルが完了しているレコードは削除されません。
-
-

このパラメータのデフォルト値は None です。このデフォルト値では、リコンシリエーションの実行中、チェックに失敗したレコード数に関係なくターゲット・システムのレコードをすべて処理するように指定します。

- 停止しきい値最小レコード

「リコンシリエーション停止のしきい値」パラメータを使用した場合、リコンシリエーション実行の開始直後に無効レコードが発生するという問題が発生することがあります。たとえば、「リコンシリエーション停止のしきい値」パラメータの値として 40 を指定したとします。リコンシリエーションが開始され、最初のレコードが検証チェックに失敗します。この段階で、処理されたレコードの総数に対する失敗したレコードの割合は 100% に達します。そのため、リコンシリエーションは最初のレコードの処理後ただちに停止されます。

このような状況を避けるために、「停止しきい値最小レコード」パラメータを「リコンシリエーション停止のしきい値」パラメータと併用できます。「リコンシリエーション停止のしきい値」を有効化する前に、「停止しきい値最小レコード」パラメータで検証プロバイダが処理する必要のあるレコード数を指定します。

次に、このパラメータの使用例を示します。

次の値を指定したとします。

リコンシリエーション停止のしきい値: 20

停止しきい値最小レコード: 80

このように値を指定すると、81 番目以降のレコードに対して「リコンシリエーション停止のしきい値」の検証が有効化されます。つまり、80 番目のレコードが処理された後にレコードが検証チェックに失敗すると、処理された総レコード数に対する失敗したレコードの割合がリコンシリエーション・エンジンによって計算されます。

このパラメータのデフォルト値は None です。

注意:

- 「ステップ 3: コネクタ構成の変更」ページで検証プロバイダを選択した場合のみ、リコンシリエーションの実行中に「停止しきい値最小レコード」パラメータが使用されます。
- 「リコンシリエーション停止のしきい値」パラメータの値を指定する場合は、「停止しきい値最小レコード」パラメータの値も指定する必要があります。

- リコンシリエーション・タイプ

このパラメータを使用して、リコンシリエーション・エンジンで増分リコンシリエーションと完全リコンシリエーションのどちらを実行するかを指定します。

注意: 完全リコンシリエーションと増分リコンシリエーションの結果は同じです。すなわち、最後のリコンシリエーション実行後に作成または更新されたターゲット・システムのレコードは、Oracle Identity Manager によってリコンサイルされます。

増分リコンシリエーションでは、最後のリコンシリエーション実行後に新規追加または変更されたターゲット・システムのレコードのみが、Oracle Identity Manager に渡されます。リコンシリエーション・イベントが、それらの各レコードに対して作成されます。

完全リコンシリエーションでは、すべてのターゲット・システム・レコードが Oracle Identity Manager に渡されます。すでにリコンサイル済みのレコードは、最適化リコンシリエーション機能によって識別され、無視されます。リコンシリエーション・イベントが、残りのレコードに対して作成されます。

次のいずれかの条件に該当する場合は、増分リコンシリエーションを選択してください。

- * ターゲット・システムで生成されるファイルまたは個々のデータ・レコードにタイムスタンプが付けられるか、またはなんらかの方法によって一意のマークが付けられ、タイムスタンプまたはマークが付けられたレコードをリコンシリエーション・トランスポート・プロバイダが認識できる場合

例：

ターゲット・システムでは、ユーザー・データ・レコードの作成または変更時にタイムスタンプを付けることができます。このタイムスタンプ情報の読取りが可能なカスタム・リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダを作成すると、新規追加または変更されたデータ・レコードのみがリコンシリエーション実行中に Oracle Identity Manager に転送されます。

- * ターゲット・システムが、最後のリコンシリエーション実行後に新規追加または変更されたデータ・レコードのみを提供する場合

いずれの条件にも該当しない場合は、完全リコンシリエーションを選択する必要があります。

- 複数値属性データの削除の調整

このパラメータを使用して、ターゲット・システムの複数値属性データ（子データ）の削除を Oracle Identity Manager でリコンサイルするかどうかを指定します。

次に、この設計パラメータの使用例を示します。

ターゲット・システムにユーザー John Doe のアカウントがあります。このユーザーは、ターゲット・システムの2つのユーザー・グループ、CREATE USERS と REVIEW PERMISSIONS のメンバーです。このユーザー・アカウント（およびグループ・メンバーシップ情報）は、Oracle Identity Manager にも存在します。

ターゲット・システムでこのユーザーを REVIEW PERMISSIONS グループから削除したとします。次のリコンシリエーション実行中に Oracle Identity Manager が行うアクションは、「**複数値属性データの削除の調整**」チェック・ボックスを選択したかどうかによって異なります。

- * このチェック・ボックスを選択した場合、ターゲット・システムの REVIEW PERMISSIONS グループのメンバーであるこのユーザーの情報は Oracle Identity Manager データベースから削除されます。ターゲット・システムのこのユーザー・アカウントに加えられた他の変更もすべてリコンサイルされます。
- * このチェック・ボックスを選択しない場合、ターゲット・システムの REVIEW PERMISSIONS グループのメンバーであるこのユーザーの情報は Oracle Identity Manager データベースから削除されません。ただし、ターゲット・システムのこのユーザー・アカウントに加えられた他の変更はすべてリコンサイルされます。

- ソース日付書式

このパラメータを使用して、日付値がターゲット・システムに格納される書式を指定します。

指定する書式は、リコンシリエーション時にフェッチされる日付値を検証し、その日付値を Oracle Identity Manager の内部で使用される書式に変換するために使用されます。

日付書式の検証プロバイダは、事前定義されている検証プロバイダの1つです。日付書式の検証プロバイダは、リコンシリエーション実行時に、ターゲット・システムからフェッチした日付値をソース日付書式を使用して検証します。ソース日付書式と一致する日付値のみが、Oracle Identity Manager で使用される日付書式に変換され、リコンサイルされます。このような書式の検証と変換は、ターゲット・システムのすべての日付フィールド（生年月日や入社日など）に適用されます。

関連項目： 20-23 ページの「[検証プロバイダ](#)」

指定可能な日付書式の詳細は、Sun Java Web サイトの次のページを参照してください。

<http://java.sun.com/docs/books/tutorial/i18n/format/simpleDateFormat.html>

注意： 22-23 ページの「データセットのフィールドの追加または編集」で説明している手順の実行時に、ソース日付書式を日付検証で使用するには、次のようにする必要があります。

- 「ソース」データセットの日付フィールドを「リコンシリエーション・ステージング」データセットの日付フィールドにマップする。
 - 「リコンシリエーション・ステージング」データセットの各日付フィールドを編集し、データ型を「日付」データ型に設定する。
-

「ソース日付書式」パラメータのデフォルト値は、`XL.DefaultDateFormat` システム・プロパティの値として指定された日付書式です。「ソース日付書式」パラメータに値を指定しないと、リコンシリエーション時の日付検証でデフォルト日付書式が使用されます。

関連項目： Oracle Identity Manager のシステム・プロパティの詳細は、『Oracle Identity Manager リファレンス』の「ルール要素、変数、データ型およびシステム・プロパティ」を参照してください。

次に「ソース日付書式」パラメータの使用例を示します。

ターゲット・システムに、次のように日付値が設定されているとします。

- Date 1: 05/04/2007 06:25:44 PM
- Date 2: 05/06/2007 07:31:44 PM
- Date 3: Thu, Apr 9, '98
- Date 4: 07/03/2008 02:15:55 PM

使用例 1:

コネクタを作成するときに、「ソース日付書式」パラメータに次の値を入力しました。

`MM/dd/yyyy hh:mm:ss a`

リコンシリエーション実行時に、Date 3 の値を含むレコードは、指定したソース日付書式と一致しないためリコンサイルされません。

使用例 2:

コネクタを作成するときに、「ソース日付書式」パラメータの値を入力していません。このため、リコンシリエーション実行時に、4つのレコードすべてが `XL.DefaultDateFormat` システム・プロパティの値として指定された日付書式に対して検証されます。

次に、プロビジョニング固有の設計パラメータを示します。

注意： 前のページで「プロビジョニング」オプションを選択していない場合、このプロビジョニング固有の設計パラメータは表示されません。

■ ターゲット日付書式

このパラメータを使用して、プロビジョニング操作時に日付値をターゲット・システムに送信する書式を指定します。

プロビジョニング操作時には、日付値が「ターゲット日付書式」パラメータの値として指定した書式に変換されます。このような書式の変換は、プロビジョニング操作で使用されるすべての日付フィールド（生年月日や入社日など）に適用されます。

指定可能な日付書式の詳細は、Sun Java Web サイトの次のページを参照してください。

<http://java.sun.com/docs/books/tutorial/i18n/format/simpleDateFormat.html>

日付書式を指定しない場合は、次の日付書式がこのパラメータのデフォルト値として使用されます。

`yyyy/MM/dd hh:mm:ss z`

次に「ターゲット日付書式」パラメータの使用例を示します。

プロビジョニング操作では、入力したすべての日付値が `yyyy/MM/dd hh:mm:ss z` 書式になります。

使用例 1:

コネクタを作成するときに、「ターゲット日付書式」パラメータに次の値を入力しました。

`yyyy.MM.dd G 'at' hh:mm:ss z`

プロビジョニング操作では、Oracle Identity Manager の日付値（たとえば 2007/05/04 06:25:44 IST）はターゲット日付書式（たとえば 2007.05.04 AD at 06:25:44 IST）に変換されてからターゲット・システムに送られます。

使用例 2:

コネクタを作成するときに、「ターゲット日付書式」パラメータの値を入力していません。プロビジョニング操作では、日付値はターゲット・システムにデフォルトの `yyyy/MM/dd hh:mm:ss z` 書式で送られます。

ランタイム・パラメータと設計パラメータの値の指定が完了したら、「**続行**」をクリックします。

注意: このページで指定した値が正しくない場合は、「**続行**」をクリックするとページの上部にエラー・メッセージが表示されます。その場合は、パラメータ値を修正してから「**続行**」を再度クリックします。

表 22-2 に「ステップ 2: パラメータ値の指定」ページのサンプル・エントリを示します。このページに表示される GUI 要素は、「ステップ 1: 基本情報の指定」ページのエントリに基づきます。

表 22-2 「ステップ 2: パラメータ値の指定」ページのサンプル・エントリ

「ステップ 2: パラメータ値の指定」ページのラベル	サンプル値またはアクション	参照情報
共有ドライブ・リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダのランタイム・パラメータ		20-2 ページの「共有ドライブ・リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダ」
「ステージング・ディレクトリ (親アイデンティティ・データ)」フィールド	D:%gctestdata¥commaDelimited¥parent	該当なし
「ステージング・ディレクトリ (複数値アイデンティティ・データ)」フィールド	D:%gctestdata¥commaDelimited¥child	該当なし
「アーカイブ・ディレクトリ」フィールド	D:%gctestdata¥commaDelimited¥archive	該当なし
「ファイルの接頭辞」フィールド	file	該当なし
「指定されたデリミタ」フィールド	,	該当なし
「タブ区切り」チェック・ボックス	チェック・ボックス選択解除	該当なし
「固定列幅」フィールド		該当なし
「一意の属性 (親データ)」フィールド	UserIDTD	該当なし
Web サービス・プロビジョニング・トランスポート・プロバイダのランタイム・パラメータ		20-13 ページの「Web サービス・プロビジョニング・トランスポート・プロバイダ」
「Web サービス URL」フィールド	http://acme123:8080/spmlws/services/HttpSoap11	該当なし
SPML プロビジョニング・フォーマット・プロバイダのランタイム・パラメータ		20-8 ページの「SPML プロビジョニング・フォーマット・プロバイダ」
「ターゲット ID」フィールド	target	該当なし
「ユーザー名 (認証)」フィールド	xelsysadm	該当なし
「ユーザー・パスワード (認証)」フィールド		該当なし
共有ドライブ・リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダの設計パラメータ		20-2 ページの「共有ドライブ・リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダ」
「ファイル・エンコーディング」フィールド	Cp1251	該当なし
Web サービス・プロビジョニング・トランスポート・プロバイダの設計パラメータ		20-13 ページの「Web サービス・プロビジョニング・トランスポート・プロバイダ」
「Web サービスの SOAP アクション」フィールド	http://xmlns.oracle.com/OIM/provisioning/processRequest	該当なし
SPML プロビジョニング・フォーマット・プロバイダの設計パラメータ		20-8 ページの「SPML プロビジョニング・フォーマット・プロバイダ」
「SPML Web サービスの WSSE が構成されていますか。」チェック・ボックス	チェック・ボックス選択解除	該当なし
「カスタム認証資格証明ネームスペース」フィールド	http://xmlns.oracle.com/OIM/provisioning	該当なし
「カスタム認証ヘッダー要素」フィールド	OIMUser	該当なし

表 22-2 「ステップ 2: パラメータ値の指定」ページのサンプル・エントリ (続き)

「ステップ 2: パラメータ値の指定」ページのラベル	サンプル値またはアクション	参照情報
「ユーザー名を格納するカスタム要素」フィールド	OIMUserId	該当なし
「パスワードを格納するカスタム要素」フィールド	OIMUserPassword	該当なし
「SPML Web サービスのバインディング・スタイル (DOCUMENT または RPC)」フィールド	RPC	該当なし
「SPML Web サービスの複合データ型」フィールド		該当なし
「SPML Web サービス操作名」フィールド	processRequest	該当なし
「SPML Web サービスのターゲット・ネームスペース」フィールド	http://xmlns.oracle.com/OIM/provisioning	該当なし
「SPML Web サービスの SOAP メッセージ本文の接頭辞」フィールド		該当なし
「グループ・メンバーシップ情報を保持している子データセットの ID 属性」フィールド		該当なし
汎用設計パラメータ		この項
「ターゲット日付書式」フィールド	yyyy-MM-dd hh:mm:ss.fffffff	該当なし
「バッチ・サイズ」フィールド	すべて	該当なし
「リコンシリエーション停止のしきい値」フィールド	なし	該当なし
「停止しきい値最小レコード」フィールド	なし	該当なし
「ソース日付書式」フィールド	yyyy/MM/dd hh:mm:ss z	該当なし
「複数値属性データの削除の調整」チェック・ボックス	チェック・ボックス選択	該当なし
「リコンシリエーション・タイプ」リスト	増分	該当なし

図 22-2 は、表 22-2 に示すエントリで構成される「ステップ 2: パラメータ値の指定」ページの最初のセクションを示しています。

図 22-2 「ステップ 2: パラメータ値の指定」ページの最初のセクション

ORACLE Identity Manager

ようこそ Administrator System ホーム | ログアウト | バージョン情報

汎用テクノロジー・コネクタの作成 1 2 3 4 5

ステップ 2: パラメータ値の指定

* 必須フィールドを示します

ランタイム・パラメータ

共有ドライブ		
ステージング・ディレクトリ (親アイデンティティ・データ)	<input type="text" value="D:\gctestdata\commaDelimited\parent"/>	親アイデンティティ・データ・ファイルが格納されているディレクトリの場所です。
ステージング・ディレクトリ (複製値アイデンティティ・データ)	<input type="text" value="D:\gctestdata\commaDelimited\child"/>	複製値アイデンティティ・データ・ファイルが格納されているディレクトリの場所です。
アーカイブ・ディレクトリ	<input type="text" value="D:\gctestdata\commaDelimited\archive"/>	リコンシリエーション後にアイデンティティ・データ・ファイルがアーカイブされるディレクトリの場所です。
ファイルの接頭辞	<input type="text" value="file"/>	アイデンティティ・データ・ファイルの名前に付けられる接頭辞です。
指定されたデリミタ	<input type="text"/>	ファイルのデリミタです。設定すると、その他すべてのデリミタ設定が上書きされます。CSV形式のファイルでは、この値はカンマ(,)です。
タブ区切り	<input type="checkbox"/>	タブ区切りを使用するかどうかを指定します。設定すると、「固定列幅」フィールドの設定が上書きされます。
固定列幅	<input type="text"/>	アイデンティティ・フィールドの共通列幅です。この値は、デリミタが設定されていない場合に使用されます。
一意の属性(親データ)	<input type="text" value="UserIDTD"/>	親アイデンティティ・データの各レコードを一意に識別するCSVデータの列名です。
Webサービス		
WebサービスURL	<input type="text" value="http://177.32.74.8080/sprmlws/services/httpSoap11"/>	Webサービス・レセプタのURLです。
SPML		
ターゲットID	<input type="text" value="target"/>	プロビジョニング操作のターゲット・システムのID。
ユーザー名(認証)	<input type="text" value="xelsysadm"/>	Webサービスによる認証に必要なユーザー名。
ユーザー・パスワード(認証)	<input type="password" value="*****"/>	ターゲットWebサービスによる認証に必要なパスワード。

図 22-3 は、表 22-2 に示すエントリで構成される「ステップ 2: パラメータ値の指定」ページの 2 番目のセクションを示しています。

図 22-3 「ステップ 2: パラメータ値の指定」ページの 2 番目のセクション

設計パラメータ		
共有ドライブ		
ファイル・エンコーディング	Cp1251	データ・ファイルに使用するキャラクタ・セット・エンコーディング。Cp1251は英語のデフォルトです。
Webサービス		
WebサービスのSOAPアクション	oracle.com/OIM/provisioning/processRequest	WSDLファイルでは、"operation"要素の"soapAction"属性の値です。
SPML		
SPML WebサービスのWSSEが構成されていますか。	<input type="checkbox"/>	WS-Security資格証明を受信するようにターゲットのSPML Webサービスを構成するかどうかを指定します。
カスタム認証資格証明ネームスペース	http://xmlns.oracle.com/OIM/provisioning	カスタム認証資格証明を定義するネームスペース。WebサービスがWSSE対応に構成されていない場合のみ値を指定します。
カスタム認証ヘッダー要素	OIMUser	SOAPヘッダーに含めるカスタム認証セクションのヘッダー要素の名前。WebサービスがWSSE対応に構成されていない場合のみ値を指定します。
ユーザー名を格納するカスタム要素	OIMUserId	Webサービスによる認証に必要なユーザー名を格納するカスタム認証セクションの要素の名前。WebサービスがWSSE対応に構成されていない場合のみ値を指定します。
パスワードを格納するカスタム要素	OIMUserPassword	Webサービスによる認証に必要なパスワードを格納するカスタム認証セクションの要素の名前。WebサービスがWSSE対応に構成されていない場合のみ値を指定します。
SPML Webサービスのバインディング・スタイル (DOCUMENTまたはRPC)	RPC	WSDLファイルでは、バインディング要素のスタイル属性の値です。
SPML Webサービスの複合データ型		WSDLファイルでは、"complexType"要素の"name"属性の値です。このパラメータはバインディング・スタイルがDOCUMENTの場合のみ適用可能です。
SPML Webサービス操作名	processRequest	WSDLファイルでは、"operation"要素の"name"属性の値です。このパラメータはバインディング・スタイルがRPCの場合のみ適用可能です。
SPML Webサービスのターゲット・ネームスペース	http://xmlns.oracle.com/OIM/provisioning	WSDLファイルでは、"definition"要素の"targetNamespace"属性の値です。
SPML WebサービスのSOAPメッセージ本文の接頭辞		SOAPメッセージ本文を含むカスタム接頭辞要素の名前。ターゲットWebサービスがEAS WebLogic、EM WebSphere、JBoss Application ServerまたはOC4Jで実行されている場合、このパラメータの値を指定する必要はありません。
グループ・メンバーシップ情報を保持している子データセットのID属性		グループ・メンバーシップ情報を保持しているプロビジョニング・ステージング子データセットのID属性の名前。
ターゲット日付書式	yyyy-MM-dd hh:mm:ss.ffffff	プロビジョニング・ステージング・データセットの日付属性でサポートされている日付書式。デフォルト値は"yyyy-MM-dd hh:mm:ss.ffffff"です。

図 22-4 は、表 22-2 に示すエントリで構成される「ステップ 2: パラメータ値の指定」ページの 3 番目のセクションを示しています。

図 22-4 「ステップ 2: パラメータ値の指定」ページの 3 番目のセクション

バッチ・サイズ

リコンシリエーション停止のしきい値

停止しきい値最小レコード

ソース日付書式

複数値両性データの削除の調整

リコンシリエーション・タイプ

リコンシリエーション中に単一バッチ内で取得されたレコード数。

失敗したレコードの割合がこのしきい値を越えた場合、リコンシリエーションは停止します。

リコンシリエーションしきい値が適用されるまでに処理されたリコンシリエーション・レコードの最小数。

ソース・データセットの日付書式でサポートされている日付書式。デフォルト値は "XL_DefaultDateFormat" システム構成プロパティと同じです。

Oracle Identity Manager に対してターゲット・システムのユーザー・グループ割当ての削除を調整する場合、「複数値両性データの削除の調整」を選択します。

リコンシリエーション・プロセスのタイプ。「すべて」(変更されたデータに対してのみ生成されたイベント)または「増分」(すべてのレコードがリコンシリエーション・イベントを生成)

終了 << 戻る 続行 >>

Oracle Identity Manager 9.1.0 Copyright © 2007, Oracle Corporation.

22.4.3 「ステップ 3: コネクタ構成の変更」ページ

このページを使用して、データセットやデータセットのフィールド間のマッピングを定義します。つまり、次の処理を行うユーザー・データ・フィールドをこのページで指定します。

- リコンシリエーション時のターゲット・システムから Oracle Identity Manager への伝播
- プロビジョニング時の Oracle Identity Manager からターゲット・システムへの伝播

汎用テクノロジー・コネクタのコンテキストでは、**メタデータ**という用語は、ターゲット・システム上のユーザー・アカウント情報を構成する一連のアイデンティティ・フィールドを意味します。

「名」、「姓」、「入社日」および「部門 ID」は、メタデータを構成するユーザー・データ・フィールドの例です。これらのフィールドに割り当てられる値が、ターゲット・システムのユーザー・データを構成します。たとえば、ターゲット・システム上のユーザー John Doe のアイデンティティ情報は次のようなフィールドで構成されます。

- 名: John
- 姓: Doe
- 入社日: 04-December-2007
- 部門 ID: Sales
- ...

「ステップ 2: パラメータ値の指定」ページで「**続行**」ボタンをクリックした後に「ステップ 3: コネクタ構成の変更」ページに表示されるメタデータは、次の要因によって決まります。

- 「ステップ 1: 基本情報の指定」ページおよび「ステップ 2: パラメータ値の指定」ページの入力内容
- ターゲット・システムのサンプル・データの可用性

注意: 汎用テクノロジー・コネクタのコンテキストでは、**メタデータの検出**という用語は、サンプルのユーザー・データがターゲット・システムから読み取られ、対応するメタデータ (アイデンティティ・フィールド名) が「ステップ 3: コネクタ構成の変更」ページに表示されるプロセスを意味します。

Oracle Identity Manager では、メタデータの検出の試行中に次の手順が実行されます。

1. リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダとリコンシリエーション・フォーマット・プロバイダでは、ターゲット・システムからメタデータのフェッチおよび解析が試行されます。

同時に、共有ドライブ・リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダと CSV リコンシリエーション・フォーマット・プロバイダでは、ターゲット・システムからメタデータを検出できます。カスタム・プロバイダで同じ機能を実行する場合は、次の要件を満たす必要があります。

- リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダの Java コードに、`ReconTransportProvider` インタフェースの `getMetadata()` メソッドが実装されていること
- リコンシリエーション・フォーマット・プロバイダの Java コードに、`ReconFormatProvider` インタフェースの `parseMetadata()` メソッドが実装されていること

関連項目： [第 21 章「汎用テクノロジー・コネクタ用カスタム・プロバイダの作成」](#)

これらのプロバイダがターゲット・システムからメタデータをフェッチして解析すると、Oracle Identity Manager はこれらのプロバイダが戻した情報を使用してメタデータを表示します。この場合、次の手順は実行されません。

2. リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダとリコンシリエーション・フォーマット・プロバイダで、ターゲット・システムからメタデータをフェッチおよび解析できない場合は、プロビジョニング・トランスポート・プロバイダとプロビジョニング・フォーマット・プロバイダでこの機能の実行が試行されます。

Web サービス・プロビジョニング・トランスポート・プロバイダと SPML プロビジョニング・フォーマット・プロバイダでは、ターゲット・システムからメタデータを検出できません。カスタム・プロバイダでメタデータを検出できるようにするには、次の要件を満たす必要があります。

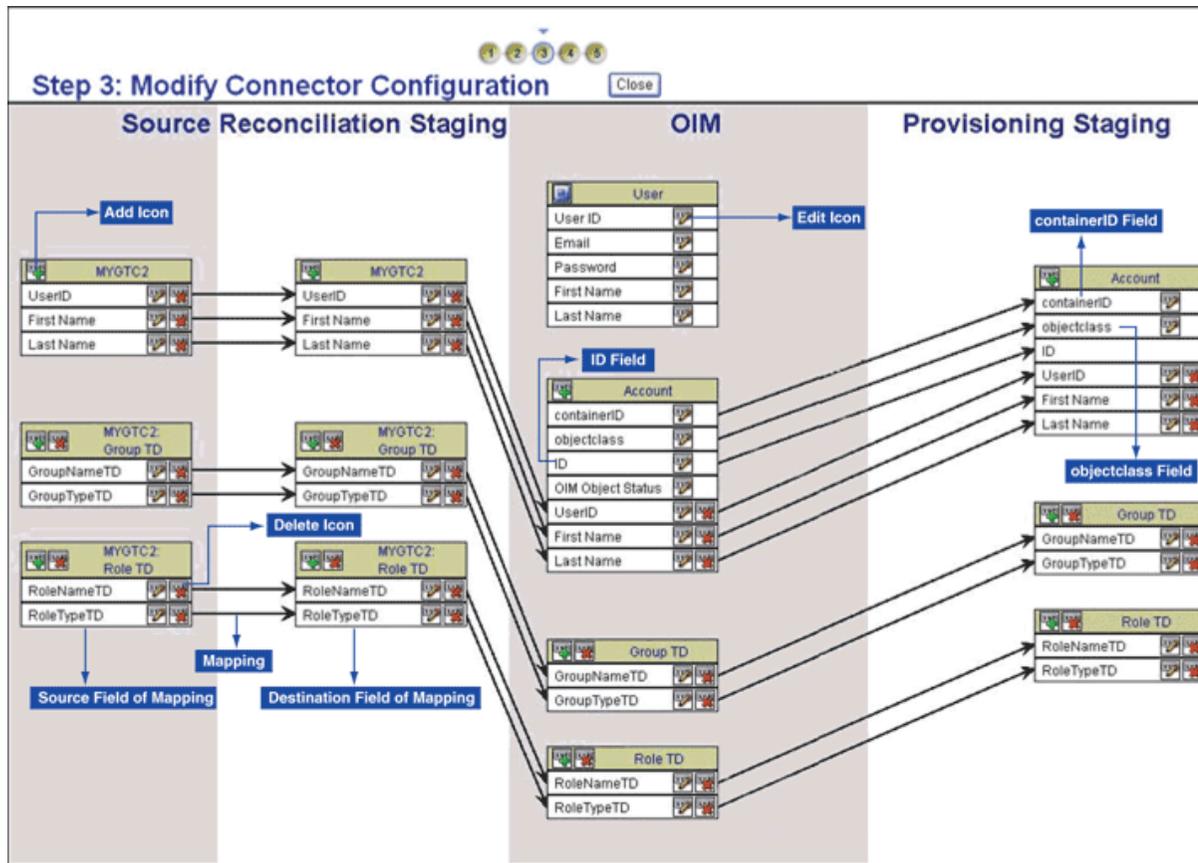
- プロビジョニング・トランスポート・プロバイダの Java コードに、`ProvisioningTransportProvider` インタフェースの `defineMetadata()` メソッドが実装されていること
- プロビジョニング・フォーマット・プロバイダの Java コードに、`ProvisioningFormatProvider` インタフェースの `parseMetadata()` メソッドが実装されていること

関連項目： [第 21 章「汎用テクノロジー・コネクタ用カスタム・プロバイダの作成」](#)

プロビジョニング・トランスポート・プロバイダとプロビジョニング・フォーマット・プロバイダがターゲット・システムからメタデータをフェッチおよび解析すると、Oracle Identity Manager はこれらのプロバイダが戻した情報を使用してメタデータを表示します。これらのプロバイダがフェッチおよび解析に失敗すると、選択したプロビジョニング固有のプロバイダのいずれかに定義されたデフォルト・フィールドのみが表示されます。たとえば、「OIM-アカウント」データセットの ID フィールドや「プロビジョニング・ステージング」データセットの `objectClass` フィールド、`containerID` フィールドがデフォルトで表示されます。これらのデータセットおよびフィールドについては後述します。

図 22-5 の「ステップ 3: コネクタ構成の変更」ページは、「ステップ 1: 基本情報の指定」ページと「ステップ 2: パラメータ値の指定」ページの最後に記載したサンプル・エントリを示しています。

図 22-5 「ステップ 3: コネクタ構成の変更」ページ



- データセット
- マッピング

データセット

「ステップ 3: コネクタ構成の変更」ページに表示されているデータセットは、次のカテゴリに分けられます。

関連項目: 19-2 ページの「汎用テクノロジー・コネクタの機能アーキテクチャ」

- ソース
「ソース」データセットは、「プロビジョニング」オプションの選択に関係なく、最初のページで「リコンシリエーション」オプションを選択した場合にのみ表示されます。
- リコンシリエーション・ステーキング
「リコンシリエーション・ステーキング」データセットは、「プロビジョニング」オプションの選択に関係なく、「ステップ 1: 基本情報の指定」ページで「リコンシリエーション」オプションを選択した場合にのみ表示されます。

■ OIM

「OIM」データセットは、「ステップ 1: 基本情報の指定」ページで選択したオプションに関係なく常に表示されます。ただし、「ステップ 1: 基本情報の指定」ページで「信頼できるソース・リコンシリエーション」オプションを選択した場合、「OIM - アカウント」データセットとその子データセットは表示されません。

「OIM - ユーザー」データセットに表示されるフィールドは、OIM ユーザーに対して事前定義されています。「OIM - ユーザー」データセットの上部にある矢印アイコンをクリックすると、このデータセットのリストの全体表示と最小表示を切り替えることができます。データセットを最小化した状態では、次のフィールドが表示されます。

- ユーザー ID
- 電子メール
- パスワード
- 名
- 姓

注意: 「ステップ 1: 基本情報の指定」ページで「信頼できるソース・リコンシリエーション」オプションを選択した場合は、「OIM - ユーザー」データセットのすべてのフィールドが表示されます。この場合は、矢印アイコンを使用して表示を最小化することはできません。

これらのフィールドによって、値の定義が必要な「OIM - ユーザー」フィールドの最小セットが構成されます。「OIM - ユーザー」データセットの残りのフィールドの一部または全部を Oracle Identity Manager インストールにおける必須の OIM ユーザー・フィールドとして指定できます。これを実行するには、OIM ユーザーの作成時にこれらのフィールドに必ず値が入力されるようにします。

注意: 一定の領域を超えるデータセットおよびフィールドの名前は切り捨てられ、切り捨てた箇所の後にはドットが表示されます。たとえば、「OIM - ユーザー」データセットの「デプロビジョニング日」フィールドは次のように表示されます。

Deprovisioning Da..

フィールドの完全名を表示するには、このフィールドまたはこのフィールドがマップされているフィールドの編集アイコンをクリックします。ポップアップ・ウィンドウでは、確認するフィールド名がそのフィールドが属するデータセットに応じて最初のページまたは 2 番目のページに表示されます。

Design Console を使用すると、事前定義済の「OIM - ユーザー」フィールドのリストにユーザー定義フィールド (UDF) を追加できます。これらの UDF は、「ステップ 3: コネクタ構成の変更」ページの「OIM - ユーザー」データセットに表示されます。

「ステップ 1: 基本情報の指定」ページで選択したオプションによっては、次のフィールドが「ステップ 3: コネクタ構成の変更」ページにデフォルトで表示されます。

- ID フィールド

ID フィールドは、「ステップ 1: 基本情報の指定」ページで「リコンシリエーション」オプションまたは「プロビジョニング」オプションを選択したかどうかに関係なく、「OIM - アカウント」セットにデフォルトで表示されます。アカウントの作成時、このフィールドには、Oracle Identity Manager とターゲット・システムでそのアカウントを一意に識別する値が格納されます。特定のユーザーについては、変更、削除、有効化、無効化などの他の操作、および子データ操作を指示する際にこの一意のフィールドが使用されます。

すべてのターゲット・システムは、ユーザー・アカウントの作成と更新をトラッキングするために一意のフィールドを備えています。カスタム・プロビジョニング・トランスポート・プロバイダの作成時には、「ユーザーの作成」操作の終了時にプロバイダがこの一意のフィールドの値をターゲット・システムから取得していることを確認する必要があります。その後、この値は、「OIM - アカウント」データセットの ID フィールドへの移入に使用されます。

リコンシリエーションの実行中、ID フィールドの値は「リコンシリエーション・ステージング」データセットの対応する一意のフィールドから取得する必要があります。この操作を設定するには、この 2 つのフィールド間のマッピングを作成します。マッピングの作成手順については、この項で後述します。

注意： 汎用テクノロジー・コネクタの作成時に「プロビジョニング」と「リコンシリエーション」の両方のオプションを選択しても、ID フィールドとターゲット・システムの一意的フィールドの間にマッピングを作成しない場合は、リコンシリエーションによってリンクされているレコードをプロビジョニング操作（変更、削除、有効化、無効化、子データ操作など）に使用できません。これは、リンクされているレコードが ID フィールドに移入されていないためです。

- objectClass フィールド

objectClass フィールドは、「ステップ 1: 基本情報の指定」ページで SPML プロビジョニング・フォーマット・プロバイダを選択した場合にのみ、「OIM - アカウント」データセットと「プロビジョニング・ステージング」データセットにデフォルトで表示されます。

- containerID フィールド

containerID フィールドは、「ステップ 1: 基本情報の指定」ページで SPML プロビジョニング・フォーマット・プロバイダを選択した場合にのみ、「OIM - アカウント」データセットと「プロビジョニング・ステージング」データセットにデフォルトで表示されます。

■ プロビジョニング・ステージング

「プロビジョニング・ステージング」データセットは、「リコンシリエーション」オプションの選択に関係なく、最初のページで「プロビジョニング」オプションを選択した場合にのみ表示されます。

「ステップ 3: コネクタ構成の変更」ページに表示されるデータセットは、「ステップ 1: 基本情報の指定」ページと「ステップ 2: パラメータ値の指定」ページの入力内容によって異なります。データセット内に表示されるフィールドは、メタデータの検出の有無によって決まります。

注意: 次のいずれかの条件に該当する場合、メタデータの検出は行われません。

- ターゲット・システムのサンプル・データ（メタデータを含む）を使用できない場合
- 選択したトランスポート・プロバイダやフォーマット・プロバイダが、ターゲット・システムのサンプル・データからメタデータを検出できない場合

次に、この例を示します。

「ステップ 1: 基本情報の指定」ページで「リコンシリエーション」オプションのみを選択したとします。また、メタデータの検出は行われなかったとします。この条件で、「ステップ 3: コネクタ構成の変更」ページに表示されるデータセットおよびフィールドは、次のように要約できます。

次のデータセットが表示されます。

- ソース
- リコンシリエーション・ステージング
- OIM

これらのデータセットを構成するフィールドは表示されません。

さらに、「ステップ 1: 基本情報の指定」ページで「信頼できるソース・リコンシリエーション」オプションを選択した場合、「OIM - アカウント」データセットとその子データセットは表示されません。

表 22-3 の使用例 1 は、この一連の入力条件の結果を示しています。この表の他の使用例は、表の最初の行と列に記載されている入力条件の組合せによって表示されるデータセットとフィールドを示しています。

表 22-3 様々な入力条件によるデータセットおよびフィールドの表示

	「リコンシリエーション」オプションのみ選択	「リコンシリエーション」と「プロビジョニング」の両方のオプションの選択	「プロビジョニング」オプションのみ選択
メタデータの検出なし	<p>使用例 1</p> <p>次のデータセットが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ソース ■ リコンシリエーション・ステージング ■ OIM <p>これらのデータセットを構成するフィールドは表示されません。</p> <p>「ステップ 1: 基本情報の指定」ページで「信頼できるソース・リコンシリエーション」オプションを選択した場合、「OIM - アカウント」データセットとその子データセットは表示されません。</p>	<p>使用例 2</p> <p>次のデータセットが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ソース ■ リコンシリエーション・ステージング ■ OIM ■ プロビジョニング・ステージング <p>これらのデータセットを構成するフィールドは表示されません。</p>	<p>使用例 3</p> <p>次のデータセットが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ OIM ■ プロビジョニング・ステージング <p>これらのデータセットを構成するフィールドは表示されません。</p>

表 22-3 様々な入力条件によるデータセットおよびフィールドの表示 (続き)

	「リコンシリエーション」オプションのみ選択	「リコンシリエーション」と「プロビジョニング」の両方のオプションの選択	「プロビジョニング」オプションのみ選択
メタデータの検出あり	<p>使用例 4</p> <p>次のデータセットが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ソース ■ リコンシリエーション・ステージング ■ OIM <p>これらのデータセットを構成するフィールドが表示されます。</p> <p>「ステップ 1: 基本情報の指定」ページで「信頼できるソース・リコンシリエーション」オプションを選択した場合、「OIM-アカウント」データセットとその子データセットは表示されません。</p>	<p>使用例 5</p> <p>次のデータセットが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ソース ■ リコンシリエーション・ステージング ■ OIM ■ プロビジョニング・ステージング <p>これらのデータセットを構成するフィールドが表示されます。</p>	<p>使用例 6</p> <p>次のデータセットが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ OIM ■ プロビジョニング・ステージング <p>これらのデータセットを構成するフィールドが表示されます。</p>

関連項目： このページの非 ASCII 文字の表示に関する制限事項については、「汎用テクノロジー・コネクタに関する既知の問題」の「[多言語サポート](#)」(26-5 ページ) を参照してください。

マッピング

「ステップ 3: コネクタ構成の変更」ページに表示されている流れ線は、異なるデータセットの 2 つのフィールド間のマッピング (リンク) をそれぞれ示しています。マッピングは、次のいずれかを目的としています。

- プロビジョニングまたはリコンシリエーションを目的とする、2 つのデータセットのフィールド間のデータ・フロー・パスの確立

このタイプのマッピングに基づいて、データの検証または変換が行われます。
- 2 つのデータセットのフィールド値の比較 (一致) の基盤の構築

次に、一致のみのマッピングの例を示します。

 - 「リコンシリエーション・ステージング」データセットと「OIM-ユーザー」データセットのフィールド間に作成されたマッピングは、リコンシリエーション・ルールの基礎を成します。
 - 「リコンシリエーション・ステージング」データセットの一意のフィールドと「OIM-アカウント」データセットの ID フィールドの間のマッピングを作成すると、リコンシリエーション一致のキー・フィールドの識別が容易になります。ID フィールドに加えて、「OIM-アカウント」データセットの他のフィールドを「リコンシリエーション・ステージング」データセットの対応するフィールドに (一致のみで) マップして、リコンシリエーション一致のコンボジット・キー・フィールドを作成できます。

「ステップ 3: コネクタ構成の変更」ページでは、次のアクションを実行できます。

- データセットのフィールドの追加または編集
- データセットのフィールドの削除
- フィールド間のマッピングの削除
- 子データセットの削除

22.4.3.1 データセットのフィールドの追加または編集

メタデータ検出で検出されたアイデンティティ・フィールドは、「ステップ 3: コネクタ構成の変更」ページに表示されます。これらのフィールドやフィールド間のマッピングを変更できます。必要に応じて、このページで新しいフィールドの追加や、フィールド間のマッピングの作成を行うこともできます。

「ステップ 3: コネクタ構成の変更」ページでフィールドの追加や編集の際に実行できるアクションの概要を次に示します。

注意：これらのアクションは、この後の手順で詳しく説明しています。この手順では、一部のアクションを実行する前に満たす必要がある条件についても説明しています。

- デフォルトの属性（データ型や長さなど）が、表示されるフィールドにメタデータ検出によって割り当てられます。これらのフィールドを編集して必要な属性を設定する必要があります。

注意：Oracle Identity Manager が、リコンシリエーション時にフェッチされた日付値を認識できるのは、「リコンシリエーション・ステー징」データセットのフィールドに「日付」データ型を設定した場合のみです。また、「ステップ 2: パラメータ値の指定」ページで「ソース日付書式」パラメータの値を指定した場合は、「ソース」データセットの日付フィールドを「リコンシリエーション・ステー징」データセットの対応する日付フィールドにマップする必要があります。

「ソース日付書式」パラメータについては、22-6 ページの「[ステップ 2: パラメータ値の指定](#)」ページで説明しています。

- 変換プロバイダを使用してフィールド間の変換マッピングを作成できます。このアクションを実行するときは、事前定義済の連結変換プロバイダまたは翻訳変換プロバイダ、あるいは自ら作成したカスタム変換プロバイダを使用できます。
- 「リコンシリエーション・ステー징」データセットと「OIM」データセットのフィールド間に一致のみのマッピングを作成できます。「リコンシリエーション・ステー징」データセットと「OIM-ユーザー」データセットの間に作成する一致のみのマッピングが、リコンシリエーション・ルールになります。「リコンシリエーション・ステー징」データセットと「OIM-アカウント」データセットの間に作成する一致のみのマッピングでは、リコンシリエーション一致のキー・フィールドが指定されます。
- 既存のデータセットに子データセットを追加できます。
- プロセス・フォームとデータベースの両方でフィールドの値を暗号化することができます。
- フィールドを参照フィールドに指定して、フィールドの入力ソースを選択できます。入力ソースには、参照定義か Oracle Identity Manager データベース表の列の組合せを指定できます。
- ユーザー・アカウント・ステータスのリコンシリエーションを構成できます。

ユーザー・アカウント・ステータスのリコンシリエーションを構成する場合は、20-19 ページの「[アカウント・ステータスのリコンシリエーションの構成](#)」を参照してください。

データセットのフィールドを追加または編集するには、次の手順を実行します。

注意： 次の手順で説明する GUI 要素とページの表示は、フィールドを追加または編集するデータセットによって異なります。たとえば、「ソース」データセットのフィールドを追加または編集する場合、「必須」チェック・ボックスと「暗号化」チェック・ボックスは表示されません。

1. フィールドの追加または編集のいずれかに応じて、データセットの「追加」アイコン、またはフィールドの編集アイコンをクリックします。
2. 「ステップ 1: フィールド情報」 ページで次の GUI 要素の値を指定します。

関連項目： フィールド名に適用される検証の詳細は、24-4 ページの「[ステップ 3: コネクタ構成の変更](#) ページ」を参照してください。

- **フィールド名：** フィールドを追加する場合は、そのフィールドの名前を指定します。非 ASCII 文字は使用できないため、指定するフィールド名には ASCII 文字のみを使用します。
- **アクションのマッピング：** マッピングの宛先フィールドとして、このフィールドで作成するマッピングのタイプを選択します。次のいずれかのマッピング・アクションを選択できます。
 - ソース（入力）フィールドと追加または編集するフィールドの間で 1 対 1 マッピングのみを作成し、変換プロバイダを使用しない場合は、「**変換なしでマッピングの作成**」を選択します。
 - フィールドを編集し、そのフィールドを宛先フィールドとするマッピングを削除する場合は、「**マッピングの削除**」 オプションを選択します。マッピングの削除手順の詳細は、22-30 ページの「[フィールド間のマッピングの削除](#)」を参照してください。
 - 「アクションのマッピング」 リストの変換マッピングのオプションは、事前定義された変換プロバイダと作成したカスタム変換プロバイダに基づいて表示されます。次のメニュー・オプションは、事前定義済の変換プロバイダに対応しています。

* **連結ありでマッピングの作成**

* **変換ありでマッピングの作成**

関連項目： これらの事前定義済の変換プロバイダの詳細は、20-17 ページの「[変換プロバイダ](#)」を参照してください。

変換マッピングの選択時には、次のガイドラインが適用されます。

- * 変換マッピングは、次のデータセットのフィールド間でのみ作成可能です。

- 「ソース」と「リコンシリエーション・ステージング」

- 「OIM」と「プロビジョニング・ステージング」

したがって、たとえば「リコンシリエーション・ステージング」データセットと「OIM」データセットのフィールド間では変換マッピングを作成できません。

次のソース・フィールドと宛先フィールドで 1 対 2 マッピングを作成することはできません。

ソース・フィールド： 「リコンシリエーション・ステージング」データセットの一意のフィールド

宛先フィールド： 「OIM-ユーザー」データセットの User ID フィールドおよび「OIM-アカウント」データセットの ID フィールド

このマッピングはサポートされていません。かわりに、「リコンシリエーション・ステージング」データセットの一意のフィールドと User ID フィールド（「OIM - ユーザー」データセット）または ID フィールド（「OIM - アカウント」データセット）の間の 1 対 1 のマッピングを作成する必要があります。

- * 「プロビジョニング・ステージング」データセットのすべてのフィールドは、「OIM - ユーザー」データセットおよび「OIM - アカウント」データセットの対応するフィールドにマップしてください。
- * ソース・フィールドまたは宛先フィールドとして「OIM - ユーザー」データセットのフィールドを指定したマッピングを作成すると、「OIM - ユーザー」データセットのフィールド・リストの表示はそのマッピングの作成時の位置（展開または最小化）で固定されます。「OIM - ユーザー」データセットの固定表示を解除して矢印アイコンを使用可能にするには、ソース・フィールドまたは宛先フィールドとして「OIM - ユーザー」データセットのフィールドを指定したマッピングをすべて削除する必要があります。
- * 変換フィールドの入力フィールドの 1 つとしてリテラル・フィールドを使用できます。「リテラル」オプションを選択した場合は、そのフィールドに値を入力する必要があります。このオプションの選択後は、リテラル・フィールドを空白にしないでください。

変換マッピングの作成に関する制限事項については、26-2 ページの「[ステップ 3: コネクタ構成の変更](#) ページ」を参照してください。

- **一致のみ:** 一致のみのマッピングの宛先フィールドとしてフィールドを使用する場合は、このチェック・ボックスを選択します。すでに説明したように、次のタイプの一致のみのマッピングを作成できます。

注意: 親と子の両方のデータセットで一致のみのマッピングを作成する必要があります。

- リコンシリエーション・ルールを作成するには、「リコンシリエーション・ステージング」データセットのフィールドと「OIM - ユーザー」データセットのフィールド間で一致のみのマッピングを作成します。各マッピングがリコンシリエーション・ルールの要素を表します。子データセットがある場合は、一致のみのマッピングの入力フィールドとなる「リコンシリエーション・ステージング」データセットのフィールドの名前が「リコンシリエーション・ステージング」の子データセットで使用されていないことを確認してください。
- リコンシリエーション一致のキー・フィールドを指定するには、「リコンシリエーション・ステージング」データセットの一意のフィールドと「OIM - アカウント」データセットの「ID」フィールドの間に一致のみのマッピングを作成します。ID フィールドに加えて、「OIM - アカウント」データセットの他のフィールドを「リコンシリエーション・ステージング」データセットの対応するフィールドに（一致のみで）マップして、リコンシリエーション一致のコンポジット・キー・フィールドを作成できます。

注意: 一致のみのマッピングで使用された「リコンシリエーション・ステージング」フィールドの名前がリコンシリエーション・ステージングの子データセットのフィールド名として再利用されると、リコンシリエーションの実行中に一致が行われません。

この既知の問題については、26-2 ページの「[ステップ 3: コネクタ構成の変更](#) ページ」で説明しています。

- **エンドツーエンド・マッピングの作成:** フィールドを追加している場合に、フィールドの追加先のデータセットの右側に表示されるすべてのデータセットにも同じフィールドを追加するには、このチェック・ボックスを選択します。

- **複数値フィールド:** 子データセットを追加する場合は、このチェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスを選択すると、「フィールド名」フィールドで指定する名前が子データセットの名前として使用されます。

注意: 「ステップ 1: 基本情報の指定」 ページで「信頼できるソース・リコンシリエーション」 チェック・ボックスを選択した場合、このチェック・ボックス（選択または選択解除の状態）は無視されます。これは、信頼できるソース・リコンシリエーションでは、複数値（子）データのリコンシリエーションがサポートされていないためです。

- **データ型:** フィールドのデータ型を選択します。
メタデータの検出後は、「リコンシリエーション・ステージング」 および「OIM - アカウント」データセットのすべてのフィールドに文字列データ型がデフォルトで適用されます。状況によっては、「データ型」リストを使用して各フィールドの実際のデータ型を指定する必要があります。
- **長さ:** フィールドの文字の長さを指定します。
- **必須:** フィールドに値が常に入力されるようにするには、このチェック・ボックスを選択します。
- **暗号化:** フィールドの値を暗号化形式で Oracle Identity Manager データベースに格納する必要がある場合は、このチェック・ボックスを選択します。
- **パスワード・フィールド:** フィールドの値をプロセス・フォームで暗号化する必要がある場合は、このチェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスを選択したフィールドの値は、アスタリスク (*) としてプロセス・フォームに表示されます。

注意: 「暗号化」 および「パスワード・フィールド」 チェック・ボックスを選択する場合は、順守する必要のあるガイドラインについて 24-5 ページの「[パスワード型フィールド](#)」を参照してください。

- **参照フィールド:** フィールドを参照フィールドにする場合は、このチェック・ボックスを選択します。
3. 「**続行**」をクリックします。

4. 「ステップ 1: フィールド情報」ページで「参照フィールド」チェック・ボックスを選択すると、「ステップ 2: 参照プロパティ」ページが表示されます。このページでは、表 22-4 に記載されている参照プロパティの任意の組合せの値を選択および指定できます。

表 22-4 参照プロパティ

参照プロパティ	値
列名	<p>「プロパティ値」フィールドに、参照ウィンドウでの表示が必要な値を格納するデータベース列の名前を入力します。必要に応じて、複数のデータベース列名をカンマで区切って入力できます。</p> <p>注意: 「参照列名」プロパティを選択する場合は、この「列名」プロパティも選択する必要があります。「参照列名」プロパティについてはこの表で後述します。</p> <p>「プロパティ値」フィールドに値を入力したら、「送信」をクリックします。</p> <p>次の SQL クエリを使用すると、「列名」および「参照列名」プロパティの使用方法を示すことができます。</p> <pre>SELECT USR_FIRST_NAME, USR_LOGIN, USR_LAST_NAME FROM USR</pre> <p>この 2 つのプロパティの値を次のように設定したとします。</p> <p>- 列名: USR_FIRST_NAME, USR_LAST_NAME</p> <p>- 参照列名: USR_LOGIN</p> <p>このユーザーが USR_FIRST_NAME, USR_LAST_NAME の特定の組合せを参照ウィンドウから選択すると、対応する USR_LOGIN の値がデータベースに格納されます。</p>
列見出し	<p>「プロパティ値」フィールドに、参照ウィンドウでの表示が必要な列ヘッダーの名前を入力します。参照ウィンドウに複数の列を表示する場合は、カンマで区切った複数の列見出しを入力します。例: 組織名, 組織ステータス。</p> <p>「プロパティ値」フィールドに値を入力したら、「送信」をクリックします。</p>
列幅	<p>「プロパティ値」フィールドに、参照ウィンドウでの表示が必要な列の文字幅を入力します。この値は、データ値を抽出して参照フィールドに移入するための基礎となるフィールドまたは列の最大長と同じにする必要があります。</p> <p>参照ウィンドウに複数の列を表示する場合は、カンマで区切った複数の列幅を入力します。</p> <p>「プロパティ値」フィールドに値を入力したら、「送信」をクリックします。</p>

表 22-4 参照プロパティ (続き)

参照プロパティ	値
参照問合せ	<p>「参照問合せ」プロパティの値を指定するには、次の手順を実行します。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「プロパティ値」フィールドに、(WHERE 句を指定せずに) SQL 問合せを入力します。この問合せは、ユーザーが参照フィールドをダブルクリックすると実行され、参照ウィンドウに表示されるデータ列に値が移入されます。 2. 「送信」をクリックします。 3. 「ステップ 2: 検証の追加」ページで次のリストから値を選択し、ステップ 1 で指定した SELECT 文の WHERE 句を作成します。 <ul style="list-style-type: none"> - フィルタ列 - ソース - フィールド名 選択した値によって、WHERE 句が次のように作成されます。 <pre>WHERE Filter_Column=Source.Field_Name</pre> 4. 「保存」をクリックします。 <p>問合せから戻されるデータを正しく表示するには、lookupfield.header プロパティを xlWebAdmin_locale.properties ファイルに追加する必要があります。</p> <p>関連項目: xlWebAdmin_locale.properties ファイルの詳細は、『Oracle Identity Manager グローバリゼーション・ガイド』を参照してください。</p> <p>たとえば、次の SQL 問合せについて考えます。</p> <pre>SELECT usr_status FROM usr</pre> <p>この問合せから戻されるデータを表示するには、xlWebAdmin_locale.properties ファイルに次のエントリを追加する必要があります。</p> <pre>lookupfield.header.users.status=User Status</pre> <p>指定した問合せの xlWebAdmin_locale.properties ファイルに lookupfield.header プロパティが含まれていない場合は、対応する「参照」アイコンをクリックすると、管理およびユーザー・コンソールに参照ウィンドウが表示されます。</p> <p>lookupfield.header プロパティの構文は次のとおりです。</p> <pre>lookupfield.header.column_code=display value</pre> <p>このエントリの column_code の部分には小文字を使用し、空白はアンダースコア文字 () に置き換える必要があります。</p> <p>デフォルトでは、参照フィールドの列ヘッダーとして次のエントリを xlWebAdmin_locale.properties ファイルで使用できます。</p> <pre>lookupfield.header.lookup_definition.lookup_code_information .code_key=Value lookupfield.header.lookup_definition.lookup_code_information .decode=Description lookupfield.header.users.manager_login=User ID lookupfield.header.organizations.organization_name=Name lookupfield.header.it_resources.key=Key lookupfield.header.it_resources.name=Instance Name lookupfield.header.users.user_id=User ID lookupfield.header.users.last_name=Last Name lookupfield.header.users.first_name=First Name lookupfield.header.groups.group_name=Group Name lookupfield.header.objects.name=Resource Name lookupfield.header.access_policies.name=Access Policy Name</pre>

表 22-4 参照プロパティ (続き)

参照プロパティ	値
参照コード	<p>「プロパティ値」フィールドに、参照定義コード名を入力します。このコードは、参照値や参照値の選択時に参照フィールドに表示されるテキストなど、参照フィールドに関する全情報を生成します。参照定義コードの分類タイプは参照タイプである必要があります (つまり、「Lookup Definition」フォームで Lookup Type オプションを選択する必要があります)。</p> <p>参照コードを入力するには、「Lookup Definition」フォームを開いて必須コードの間合せを実行し、そのコードを「プロパティ値」フィールドにコピーします。</p> <p>「プロパティ値」フィールドに値を入力したら、「送信」をクリックします。</p> <p>注意：</p> <p>「参照コード」プロパティを使用すると、「列見出し」、「列名」、「列幅」、「参照列名」、「名前」、「参照間合せ」の各プロパティの組合せを置き換えることができます。さらに、「参照コード」プロパティで指定されている情報は、これらの5つの参照プロパティで設定されている値よりも優先されます。</p> <p>参照フィールド・リコンシリエーションを実行する場合は、参照コードへの移入を行うスケジュール済タスクを作成します。</p>
参照列名	<p>「プロパティ値」フィールドに、参照ウィンドウでユーザーが選択した「列名」値に対応する値を格納するデータベース列の名前を入力します。必要に応じて、複数のデータベース列名をカンマで区切って入力できます。</p> <p>注意：「列名」プロパティを選択する場合は、この「参照列名」プロパティも選択する必要があります。これらの2つのプロパティの使用方法については、この表の「参照列名」行を参照してください。</p> <p>「プロパティ値」フィールドに値を入力したら、「送信」をクリックします。</p>
オートコンプリート	<p>「プロパティ値」フィールドに True を入力すると、ユーザーは参照ウィンドウに表示される値をフィルタ処理できます。フィルタ処理を行うには、選択する値の最初の2～3文字を入力して参照フィールドをダブルクリックします。このアクションによって、ユーザーが入力した文字で始まる参照値のみが参照ウィンドウに表示されます。たとえば、州の参照フィールドでは、ユーザーはフィールドに「New」を入力できます。ユーザーが州の参照フィールドをダブルクリックすると、New Hampshire、New Jersey、New Mexico、New York など、「New」で始まる州のみが参照ウィンドウに表示されます。</p> <p>参照フィールド値表示のユーザーによるフィルタ処理を許可しない場合は、「プロパティ値」に False を入力します。</p> <p>「オートコンプリート」プロパティのデフォルト値は False です。</p> <p>「プロパティ値」フィールドに値を入力したら、「送信」をクリックします。</p>

「ステップ 2: 参照プロパティ」ページの表に表示されているプロパティの値を編集するには、そのプロパティの編集オプションを選択して「**編集**」をクリックします。この表に表示されているプロパティを削除するには、そのプロパティの削除オプションを選択して「**削除**」をクリックします。

参照フィールドのプロパティの指定が完了したら、「**続行**」をクリックします。

- 「ステップ 1: フィールド情報」ページの「アクションのマッピング」リストで変換オプションを選択すると、「ステップ 3: マッピング」ページが表示されます。このページを使用して、追加するフィールドの入力データに対して実行する変換機能を定義します。実行する手順は、前のページで選択した変換プロバイダのオプション (連結、翻訳またはカスタム変換プロバイダ) によって異なります。

事前定義済の変換プロバイダ (連結または翻訳) を選択する場合、事前定義済の変換プロバイダのパラメータ値の指定方法の詳細は、20-17 ページの「**変換プロバイダ**」を参照してください。この項でも、ユーザー・アカウント・ステータスのリコンシリエーションの構成について詳しく説明しています。

ユーザー・アカウント・ステータス情報のリコンシリエーションを構成する場合は、翻訳変換プロバイダを使用する必要があります。この手順は、20-18 ページの「**翻訳変換プロバイダ**」で説明しています。

変換プロバイダの値の指定が完了したら、「**続行**」をクリックします。

6. 必要な場合は、フィールドの検証チェックを選択して「追加」をクリックします。つまり、使用する検証プロバイダを選択します。

このリストの検証オプションは、事前定義された検証プロバイダと作成したカスタム検証プロバイダに基づいて表示されます。

7. 「続行」をクリックし、「閉じる」をクリックします。
8. 「ステップ 3: コネクタ構成の変更」ページで他のアクションを実行しない場合は、このページの上部にある「閉じる」ボタンをクリックします。この「閉じる」ボタンをクリックするには、その前の手順を実行しておく必要があります。

22.4.3.2 データセットのフィールドの削除

データセットからフィールドを削除するには、次の手順を実行します。

1. そのフィールドの「削除」アイコンをクリックします。
2. 「ステップ 3: コネクタ構成の変更」ページで他のアクションを実行しない場合は、このページの上部にある「閉じる」ボタンをクリックします。

22.4.3.3 フィールド間のマッピングの削除

マッピングを削除するには、次の手順を実行します。

1. 削除するマッピングの宛先フィールドで編集アイコンをクリックします。

注意： この宛先フィールドが別のマッピングのソース・フィールドである場合、そのマッピングは削除されません。

2. 「ステップ 1: フィールド情報」ページの「変換」リストから「マッピングの削除」を選択します。
3. 「続行」をクリックします。
4. 最後のページで「閉じる」をクリックします。
5. 「ステップ 3: コネクタ構成の変更」ページで他のアクションを実行しない場合は、このページの上部にある「閉じる」ボタンをクリックします。

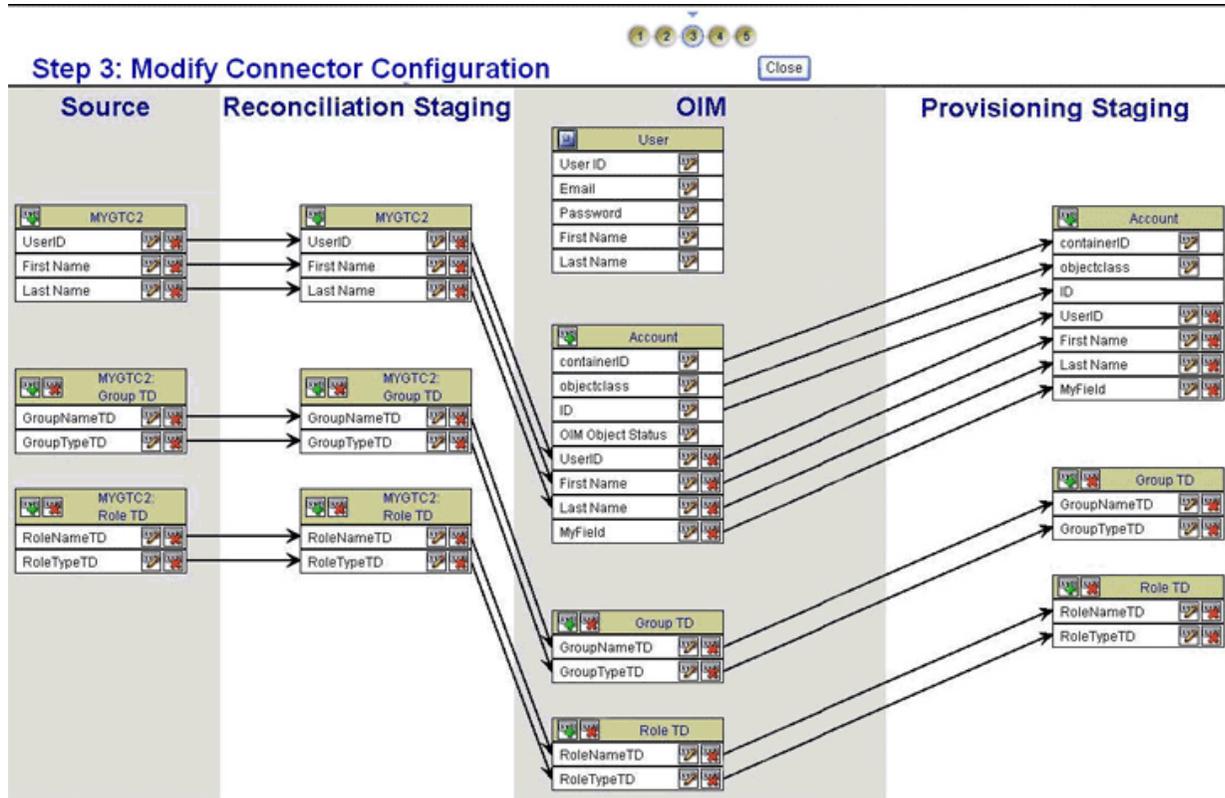
22.4.3.4 子データセットの削除

子データセットを削除するには、次の手順を実行します。

1. そのデータセットの「削除」アイコンをクリックします。
2. 「ステップ 3: コネクタ構成の変更」ページで他のアクションを実行しない場合は、このページの上部にある「閉じる」ボタンをクリックします。

図 22-6 は、「OIM - アカウント」データセットおよび「プロビジョニング・ステージング」データセットに MyField フィールドを追加した後の「ステップ 3: コネクタ構成の変更」ページを示しています。

図 22-6 フィールド追加後の「ステップ 3: コネクタ構成の変更」ページ



22.4.4 「ステップ 4: コネクタ・フォーム名の検証」ページ

このページを使用して、「OIM - アカウント」データセットとその子データセットに対応するプロセス・フォームのフォーム名を指定します。

注意: 「ステップ 1: 基本情報の指定」ページで「信頼できるソース・リコンシリエーション」オプションを選択した場合、「OIM - アカウント」データセットとその子データセットは作成されません。そのため、「信頼できるソース・リコンシリエーション」オプションを選択すると、このページは表示されません。

汎用テクノロジー・コネクタの作成に必要な情報をすべて送信すると、汎用テクノロジー・コネクタ・フレームワークによって特定のオブジェクトが自動的に作成されます。自動作成されるオブジェクトの例として、「OIM - アカウント」データセットに対応する親と子のプロセス・フォームがあります。特定の Oracle Identity Manager インストールの各プロセス・フォームは、一意の名前を必要とします。

関連項目: 第 28 章「汎用テクノロジー・コネクタ・フレームワークで作成されるコネクタ・オブジェクト」

「ステップ 4: コネクタ・フォーム名の検証」ページでは、汎用テクノロジー・コネクタ・フレームワークにより、対応するデータセットの名前に基づくプロセス・フォームのデフォルト名が表示されます。これらのフォーム名を検証し、必要な場合は、この Oracle Identity Manager インストールで一意になるようにフォーム名を変更します。フォーム名の変更には、ASCII 文字のみを使用する必要があります。一意でないフォーム名や非 ASCII 文字を含む名前を指定すると、エラー・メッセージが表示されます。

注意： このページに戻ることはできません。そのため、指定したフォーム名が要件をすべて満たしていることを確認してから「続行」をクリックしてください。

フォーム名の指定が完了したら、「**続行**」をクリックします。

「続行」をクリックするかわりに、「**戻る**」をクリックして「ステップ 2: パラメータ値の指定」ページに戻ることもできます。ただし、このページで変更を加えて「続行」ボタンをクリックしても、メタデータの検出は行われません。これは、このページの最初のパススルーで実行したデータセット構造とマッピングのカスタマイズが上書きされないようにするためです。「ステップ 3: コネクタ構成の変更」ページでは、フィールドおよびマッピングを手動で追加または編集できます。

図 22-7 は、「ステップ 4: コネクタ・フォーム名の検証」ページを示しています。

図 22-7 「ステップ 4: コネクタ・フォーム名の検証」ページ



22.4.5 「ステップ 5: コネクタ情報の検証」 ページ

このページを使用して、この時点までに指定した汎用テクノロジー・コネクタの作成に関する情報を確認します。これ以降は、既述ページで許可されている変更についてページごとに説明します。

- 「ステップ 1: 基本情報の指定」 ページ

「表示」リンクまたは「戻る」ボタンを使用すると、「ステップ 1: 基本情報の指定」ページで指定した情報を再度表示して確認できます。このページに表示されている情報は変更できません。これは、この情報を変更すると、汎用テクノロジー・コネクタを新規に作成することになるためです。

- 「ステップ 2: パラメータ値の指定」 ページ

「変更」リンクまたは「戻る」ボタンを使用すると、このページを再度表示できます。このページではパラメータ値を変更できます。ただし、変更した値を送信しても、メタデータの検出は行われません。これは、このページの最初のパススルーで実行したデータセット構造とマッピングのカスタマイズが上書きされないようにするためです。「ステップ 3: コネクタ構成の変更」ページでは、フィールドおよびマッピングを手動で追加または編集できます。

- 「ステップ 3: コネクタ構成の変更」 ページ

「変更」リンクを使用すると、このページを再度表示してフィールドやマッピングを追加または編集できます。

- 「ステップ 4: コネクタ・フォーム名の検証」 ページ

このページに戻ることはできません。

「ステップ 5: コネクタ情報の検証」ページに表示されている情報をすべて検証したら、「作成」をクリックします。

この段階で、汎用テクノロジー・コネクタ・フレームワークにより、すべての標準コネクタ・オブジェクトが指定の情報に基づいて作成されます。これらのオブジェクトのリストには、コネクタ XML ファイルが含まれます。このファイルは自動的に作成され、Oracle Identity Manager にインポートされます。フォーム名を除き、コネクタ・オブジェクトの名前は、GTCname_GTC の形式になります。

たとえば、作成する汎用テクノロジー・コネクタの名前として DB_conn を指定すると、(フォームを除く) すべてのコネクタ・オブジェクトの名前は DB_CONN_GTC となります。

関連項目： [第 28 章「汎用テクノロジー・コネクタ・フレームワークで作成されるコネクタ・オブジェクト」](#)

プロセスの最後に、コネクタが正常に作成されたことを通知するメッセージがこのページに表示されます。

注意： 作成プロセスに失敗しても、作成されるオブジェクトは自動的に削除されません。この点については、「汎用テクノロジー・コネクタに関する既知の問題」の「[コネクタ・オブジェクト](#)」(26-8 ページ)にも記載されています。

作成プロセスに関連するエラー・メッセージのリストについては、25-2 ページの「[コネクタ作成プロセスの最後に発生するエラー](#)」を参照してください。

図 22-8 は、「ステップ 5: コネクタ情報の検証」ページの最初のセクションを示しており、ここには、「ステップ 1: 基本情報の指定」ページと「ステップ 2: パラメータ値の指定」ページのセクションの最後にリストされるエントリ、および「ステップ 3: コネクタ構成の変更」ページのセクションの最後の変更内容が記載されています。

図 22-8 「ステップ 5: コネクタ情報の検証」ページの最初のセクション

The screenshot displays the Oracle Identity Manager interface for configuring a connector. The main content area is titled '汎用テクノロジー・コネクタの管理' (Management of General Technology Connectors) and shows 'ステップ 5: コネクタ情報の検証' (Step 5: Connector Information Verification). The page is divided into two sections:

基本情報の指定 (Basic Information Specification)

名前	MYGTC2
リコンシリエーション	
トランスポート・プロバイダ	共有ドライブ
フォーマット・プロバイダ	CSV
信頼できるソース・リコンシリエーション	いいえ
プロビジョニング	
トランスポート・プロバイダ	Webサービス
フォーマット・プロバイダ	SPML

パラメータ値の指定 (Parameter Value Specification)

ステー징・ディレクトリ(親アイデンティティ・データ)	/scratch/cwwong/imedia/OM/commaDelimited/parent
ステー징・ディレクトリ(複数値アイデンティティ・データ)	/scratch/cwwong/imedia/OM/commaDelimited/parent/child
アーカイブ・ディレクトリ	/scratch/cwwong/archive
ファイルの接頭辞	file
指定されたデリミタ	,
タブ区切り	いいえ
固定列幅	
一意の属性(親データ)	UserDTD
WebサービスURL	http://winrd10.us.oracle.com:7777/spml/ws/#httpSoesp11
ターゲットID	target
ユーザー名(認証)	xelsysadm

図 22-9 は、「ステップ 5: コネクタ情報の検証」ページの 2 番目のセクションを示しており、ここには、「ステップ 1: 基本情報の指定」ページと「ステップ 2: パラメータ値の指定」ページのセクションの最後にリストされるエントリ、および「ステップ 3: コネクタ構成の変更」ページのセクションの最後の変更内容が記載されています。

図 22-9 「ステップ 5: コネクタ情報の検証」ページの 2 番目のセクション

ユーザー・パスワード(認証)	*****
ファイル・エンコーディング	Cp1251
WebサービスのSOAPアクション	http://xmlns.oracle.com/OIM/provisioning/processRequest
SPML WebサービスのWSSEが構成されていますか。	いいえ
カスタム認証資格証明ネームスペース	http://xmlns.oracle.com/OIM/provisioning
カスタム認証ヘッダー要素	OIMUser
ユーザー名を格納するカスタム要素	OIMUserId
パスワードを格納するカスタム要素	OIMUserPassword
SPML Webサービスのバインディング・スタイル(DOCUMENTまたはRPC)	RPC
SPML Webサービスの複合データ型	
SPML Webサービス操作名	processRequest
SPML Webサービスのターゲット・ネームスペース	http://xmlns.oracle.com/OIM/provisioning
SPML WebサービスのSOAPメッセージ本文の接頭辞	
グループ・メンバーシップ情報を保持している子データセットのID属性	
ターゲット日付書式	yyyy-MM-dd hh:mm:ss.ffffff
バッチ・サイズ	すべて
リコンシリエーション停止のしきい値	なし
停止しきい値最小レコード	なし
ソース日付書式	yyyy/MM/dd hh:mm:ss z
複数値属性データの削除の調整	はい
リコンシリエーション・タイプ	すべて

コネクタ構成 変更

終了 << 戻る 保存

Oracle Identity Manager 9.1.0 Copyright © 2007, Oracle Corporation.

22.5 リコンシリエーションの構成

注意: 「ステップ 1: 基本情報の指定」ページで「プロビジョニング」オプションのみを選択した場合は、リコンシリエーションの構成が不要のため、このセクションをスキップできます。

リコンシリエーション・スケジュール済タスクは、汎用テクノロジー・コネクタの作成時に自動的に作成されます。このスケジュール済タスクを構成して実行するには、12-51 ページの「スケジュール済タスクの変更」の手順に従います。

注意: スケジュール済タスクの名前は次の形式になります。

`GTC_Name_GTC`

たとえば、汎用テクノロジー・コネクタの名前が `WebConn` である場合、スケジュール済タスクの名前は `WebConn_GTC` となります。

22.6 プロビジョニングの構成

注意: 「ステップ 1: 基本情報の指定」 ページで「リコンシリエーション」 オプションのみを選択した場合は、プロビジョニングの構成が不要のため、このセクションをスキップできます。

プロセス定義は、汎用テクノロジー・コネクタの作成時に自動的に作成されるオブジェクトの 1 つです。プロセス定義の名前は次の形式になります。

`GTC_name_GTC`

たとえば、汎用テクノロジー・コネクタの名前が `WebConn` である場合、プロセス定義の名前は `WebConn_GTC` となります。

このプロセス定義を構成するプロセス・タスクには、次の 2 種類があります。

- システム定義プロセス・タスク
システム定義プロセス・タスクは、新規に作成されるすべてのプロセス定義にデフォルトで含まれます。
- プロビジョニング固有のプロセス・タスク
プロビジョニング固有のプロセス・タスクは、「リコンシリエーション」 オプションの選択に関係なく、「ステップ 1: 基本情報の指定」 ページで「プロビジョニング」 オプションを選択した場合にのみ、汎用テクノロジー・コネクタのプロセス定義に含まれます。

次に、プロビジョニング固有のプロセス・タスクを示します。

- ユーザーの作成。
- ユーザーの削除。
- ユーザーの有効化。
- ユーザーの無効化。
- 更新された `Field_Name` (このタスクは ID フィールドを除く、「OIM-アカウント」データセットの各フィールドに対して作成されます)。
- 「OIM-ユーザー」データセットと「プロビジョニング・ステー징」データセットのフィールド間で作成されたマッピングでは、次のプロセス・タスクが作成されます。
 - `User_data_set_field_name` の変更
 - `Provisioning_Staging_field_name` の編集

たとえば、「OIM-ユーザー」データセットの「姓」フィールドと「プロビジョニング・ステー징」データセットの「LName」フィールドの間のマッピングを作成したとします。プロビジョニング固有のその他のプロセス・タスクとともに、次のプロセス・タスクが自動的に作成されます。

 - 姓の変更
 - LName の編集

さらに、次のプロビジョニング固有のプロセス・タスクが「OIM-アカウント」データセットの子データセットごとに作成されます。

- 子表の `Child_Form_Name` 行の挿入
- 子表の `Child_Form_Name` 行の更新
- 子表の `Child_Form_Name` 行の削除

すべてのプロビジョニング固有のプロセス・タスクには、次のデフォルト割当てがあります。

- ターゲット・タイプ: Group User With Highest Priority
- グループ: SYSTEM ADMINISTRATORS
- ユーザー: XELSYSADM

これらのデフォルトの割当ては必要に応じて変更できます。『Oracle Identity Manager デザイン・コンソール・ガイド』の「プロセス・タスクの変更」の手順に従ってください。

22.7 汎用テクノロジー・コネクタのロギングの有効化

注意: この手順はオプションです。この項で説明した手順は、汎用テクノロジー・コネクタのロギングを有効化する場合にのみ実行してください。

ロギングの有効化に必要な操作手順については、ご使用のアプリケーション・サーバーに対応した次のいずれかのガイドの「ログ・レベルの設定」を参照してください。

- 『Oracle Identity Manager Oracle WebLogic Server 用インストールおよび構成ガイド』
- 『Oracle Identity Manager IBM WebSphere Application Server 用インストールおよび構成ガイド』
- 『Oracle Identity Manager JBoss Application Server 用インストールおよび構成ガイド』
- 『Oracle Identity Manager Oracle Application Server 用インストールおよび構成ガイド』

汎用テクノロジー・コネクタの管理

汎用テクノロジー・コネクタのフレームワークには、汎用テクノロジー・コネクタを変更できる機能が用意されています。また、デプロイメント・マネージャを使用して、汎用テクノロジー・コネクタのエクスポートまたはインポートが可能です。

次の項では、これらの汎用テクノロジー・コネクタのフレームワークの機能について説明します。

- [汎用テクノロジー・コネクタの変更](#)
- [汎用テクノロジー・コネクタのエクスポート](#)
- [汎用テクノロジー・コネクタのインポート](#)
- [汎用テクノロジー・コネクタの Oracle Identity Manager リリース 9.1.0.1 へのアップグレード](#)

23.1 汎用テクノロジー・コネクタの変更

注意：汎用テクノロジー・コネクタの作成プロセスの最後に自動的に作成されるコネクタ・オブジェクトは、Design Console を使用して変更できます。Design Console でこの汎用テクノロジー・コネクタのコネクタ・オブジェクトがカスタマイズされている場合に、「汎用テクノロジー・コネクタの管理」機能を使用して汎用テクノロジー・コネクタを変更すると、Design Console を使用して行われたすべてのカスタマイズが上書きされます。そのため、次のガイドラインのいずれかを適用することをお勧めします。

- Design Console を使用して、汎用テクノロジー・コネクタ・オブジェクトを変更しないでください。

IT リソースについてはこのガイドラインは適用されません。IT リソースのパラメータは、Design Console を使用して変更できます。ただし、変更を有効にするには、IT リソース・パラメータの変更前または後にキャッシュをバージングする必要があります。PurgeCache ユーティリティの実行の詳細は、『Oracle Identity Manager ベスト・プラクティス・ガイド』を参照してください。

- Design Console を使用して汎用テクノロジー・コネクタ・オブジェクトを変更する場合、汎用テクノロジー・コネクタの変更に「汎用テクノロジー・コネクタの管理」機能を使用しないでください。

汎用テクノロジー・コネクタのフレームワークにより自動的に作成されるコネクタ・オブジェクトの詳細は、第 28 章を参照してください。

また、同時に変更できるコネクタは 1 つのみです。同じコンピュータ上で、2 つの異なるコネクタに「変更」ページを同時に使用しようとする、「変更」機能が正しく動作しません。

これらの点については、第 26 章「汎用テクノロジー・コネクタに関する既知の問題」を参照してください。

汎用テクノロジー・コネクタを変更するには、次の手順を実行します。

1. 管理およびユーザー・コンソールを開きます。
2. 「汎用テクノロジー・コネクタ」を開きます。
3. 「管理」をクリックします。
4. 変更するコネクタを検索します。検索を容易にするため、このページで提供される検索条件を組み合わせることができます。また、この Oracle Identity Manager のインストールで作成されたすべての汎用テクノロジー・コネクタを表示するには、検索条件を指定せずに「コネクタの検索」をクリックします。
5. 表示される結果から、変更する汎用テクノロジー・コネクタをクリックします。
6. 「パラメータの編集」をクリックします。コネクタ作成プロセスの「ステップ 2: パラメータ値の指定」ページが表示されます。これ以降は、22-6 ページの「ステップ 2: パラメータ値の指定」ページで説明されている手順に従ってください。

注意：この手順は、既存の汎用テクノロジー・コネクタを変更する際に自動のメタデータの検出が行われない点のみ、汎用テクノロジー・コネクタ作成の手順とは異なります。

注意: 「OIM - アカウント」 データセットまたはその子データセットのフィールド属性を変更する場合、これらのデータセットについて、Oracle Identity Manager データベース・エントリで対応する変更は加えられません。また、エラー・メッセージも表示されません。

そのため、Oracle Identity Manager のこのリリースに対しては、「OIM - アカウント」 データセットのフィールドや子データセットを変更しないことをお勧めします。

この点については、「汎用テクノロジー・コネクタに関する既知の問題」の「[ステップ 3: コネクタ構成の変更](#) ページ」 (26-2 ページ) にも記載されています。

23.2 汎用テクノロジー・コネクタのエクスポート

汎用テクノロジー・コネクタの XML ファイルはエクスポートできます。この XML ファイルには、コネクタを構成するすべてのオブジェクトの定義が含まれています。新しく Oracle Identity Manager をインストールする際に同じ汎用テクノロジー・コネクタを使用する場合、まず XML ファイルをエクスポートし、これを新しい Oracle Identity Manager のインストールにインポートします。

コネクタの XML ファイルをエクスポートするには、次の手順を実行します。

関連項目: 13-2 ページの「[デプロイメントのエクスポート](#)」

1. 管理およびユーザー・コンソールを開きます。
2. 「**デプロイメント管理**」を開きます。
3. 「**エクスポート**」をクリックします。
4. デプロイメント・マネージャ・ウィザードの最初のページで、リストから「**汎用コネクタ**」を選択し、「**検索**」をクリックします。
5. 検索結果から、XML ファイルをエクスポートする汎用テクノロジー・コネクタを選択します。
6. 「**子の選択**」をクリックします。
7. 選択した汎用テクノロジー・コネクタに対して、エクスポートする子エンティティを選択し、「**依存性の選択**」をクリックします。
8. エクスポートする依存性を選択し、「**確認**」をクリックします。
9. ページに表示された要素がエクスポートの要件を満たしていることを確認したら、「**エクスポート用に追加**」をクリックします。
10. 「**ウィザードを終了し、すべての選択を表示します**」をクリックし、続いて「**OK**」をクリックします。

23.3 汎用テクノロジー・コネクタのインポート

汎用テクノロジー・コネクタを別の Oracle Identity Manager のインストールにコピーするには、次の手順を実行します。

1. コネクタがカスタム・プロバイダを使用する場合、プロバイダ作成中に作成されたファイルをコピー先となる Oracle Identity Manager インストール上の適切なディレクトリにコピーする必要があります。

関連項目：これらのプロバイダ・ファイルおよびそのコピー先となるディレクトリの詳細は、[第 21 章「汎用テクノロジー・コネクタ用カスタム・プロバイダの作成」](#)を参照してください。

2. コピー元となる Oracle Identity Manager インストール上で、コネクタ XML ファイルをエクスポートします。
3. コピー先となる Oracle Identity Manager インストール上で、コネクタ XML ファイルをインポートします。

注意：ステージング・サーバー上の汎用テクノロジー・コネクタおよびそれを構成するオブジェクト用に選択する名前は、本番サーバー上の既存のコネクタやオブジェクトの名前と競合しないようにする必要があります。

次のシナリオで、このガイドラインの順守が必要な理由を説明します。

ステージング・サーバー上で汎用テクノロジー・コネクタを作成し、このコネクタを本番サーバーにインポートするとします。ステージング・サーバー上で汎用テクノロジー・コネクタを作成する際、汎用テクノロジー・コネクタおよびコネクタ・オブジェクトの名前がそのサーバー上で一意であることを確認します。同時に、これらの名前が本番サーバーのコネクタおよびコネクタ・オブジェクトの名前と同じではないことも確認する必要があります。

同じ名前がある場合は、コネクタ XML ファイルをステージング・サーバーから本番サーバーへインポートする際、古いオブジェクトが新しいオブジェクトによって上書きされます。上書き処理中はメッセージが表示されないため、該当するコネクタが最終的に失敗します。

この点については、「汎用テクノロジー・コネクタに関する既知の問題」の「[汎用テクノロジー・コネクタおよびコネクタ・オブジェクトの名前](#)」(26-2 ページ)にも記載されています。

オブジェクトが上書きされたとき、正常に機能する状態に戻せるようにするには、コネクタ XML ファイルをインポートする前に、インポート先の Oracle Identity Manager データベースのバックアップを取得する必要があります。

コネクタの XML ファイルをインポートするには、次の手順を実行します。

1. 管理およびユーザー・コンソールを開きます。
2. 左ナビゲーション・バーの「**デプロイメント管理**」リンクをクリックします。
3. 「デプロイメント管理」にある「**インポート**」リンクをクリックします。ファイルの場所を検索するダイアログ・ボックスが表示されます。
4. コネクタ XML ファイルのコピー先ディレクトリから、このファイルを検索して開きます。
5. 「**ファイルの追加**」をクリックします。
6. 「**次へ**」→「**次へ**」→「**スキップ**」とクリックします。

7. 「選択内容の表示」をクリックします。

コネクタ XML ファイルの内容が「インポート」ページに表示されます。複数のノードのある十字のアイコンが表示される場合があります。これらのノードは、冗長な Oracle Identity Manager エンティティを表します。コネクタ XML ファイルをインポートする前に、ノードごとに右クリックし、「削除」を選択してこれらのエンティティを削除する必要があります。

8. 「インポート」をクリックします。コネクタ・ファイルが Oracle Identity Manager にインポートされます。

コネクタ XML ファイルをインポートした後、汎用テクノロジー・コネクタのランタイム・パラメータを更新する必要があります。

注意：これらの値は、コネクタ XML ファイルをエクスポートしても、そこにはコピーされません。

ランタイム・パラメータの値を更新するには、23-2 ページの「汎用テクノロジー・コネクタの変更」で説明する手順を実行してください。

23.4 汎用テクノロジー・コネクタの Oracle Identity Manager リリース 9.1.0.1 へのアップグレード

Oracle Identity Manager リリース 9.0.3.x からリリース 9.1.0.1 へアップグレードする場合、Oracle Identity Manager リリース 9.0.3.x を使用して作成した汎用テクノロジー・コネクタもアップグレードする必要があります。汎用テクノロジー・コネクタをアップグレードする手順は、アップグレード処理を実行する条件に応じて異なります。

- シナリオ 1: 汎用テクノロジー・コネクタを、Oracle Identity Manager 9.0.3.x 上で作成した場合。これは後で Oracle Identity Manager 9.1.0.1 にアップグレードします。
- シナリオ 2: 汎用テクノロジー・コネクタを、Oracle Identity Manager リリース 9.0.3.x 上で作成した場合。汎用テクノロジー・コネクタを Oracle Identity Manager リリース 9.1.0.1 インストールに移植するとします。これを実現するには、まずリリース 9.0.3.x インストール上の汎用テクノロジー・コネクタの XML ファイルをエクスポートし、その後、リリース 9.1.0.1 インストール上でこの XML ファイルをインポートします。

どちらのシナリオにおいても、次のステップでは、23-2 ページの「汎用テクノロジー・コネクタの変更」で説明されている手順を実行します。この手順の実行中に、プロバイダのパラメータ値、フィールド定義、およびフィールド・マッピングなどの値を要件に応じて変更できます。同時に、「汎用テクノロジー・コネクタの管理」ページで、検証で入力が求められた場合は値を指定または変更する必要があります。

シナリオ 2 では、リリース 9.0.3.x の汎用テクノロジー・コネクタをリリース 9.1.0.1 の Oracle Identity Manager インストールにインポートすると、アプリケーション・サーバーのログ・ファイルに致命的でない例外が記録されます。この例外は、コネクタがリコンシリエーションをサポートしているかどうかに関係なく、プロビジョニングをサポートしている場合にのみ記録されます。この例外は無視してかまいません。管理およびユーザー・コンソールには、エラー・メッセージは表示されません。これについては、26-9 ページの「一般的な既知の問題」にも記載されています。

汎用テクノロジー・コネクタの作成および使用に関するベスト・プラクティス

この章では、汎用テクノロジー・コネクタの作成および使用に関するベスト・プラクティスまたはガイドラインについて説明します。

注意：ベスト・プラクティスには、マニュアル内の他の該当箇所でも繰り返し言及されているものもあります。この章では、他の箇所では扱われていないベスト・プラクティスに関する詳細説明を取り扱います。

ベスト・プラクティスは、適用するコンテキストに応じて次の各項で説明されています。

- [「ステップ 1: 基本情報の指定」 ページ](#)
- [「ステップ 2: パラメータ値の指定」 ページ](#)
- [「ステップ 3: コネクタ構成の変更」 ページ](#)
- [共有ドライブ・リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダ](#)
- [カスタム・プロバイダ](#)
- [コネクタ・オブジェクト](#)
- [汎用テクノロジー・コネクタの変更](#)

24.1 「ステップ 1: 基本情報の指定」 ページ

汎用テクノロジー・コネクタの名前を指定する場合は次のガイドラインを適用します。

■ サマリー:

名前には ASCII 文字のみを使用するようにします。アンダースコア () 文字は使用できませんが、それ以外の非 ASCII 文字は名前に使用しないでください。

説明:

コネクタ作成プロセスの終了時に自動的に作成されるコネクタ・オブジェクトの大部分では、オブジェクト自体の名前の一部に汎用テクノロジー・コネクタの名前が使用されます。たとえば、汎用テクノロジー・コネクタの名前が WebConn である場合、そのスケジュール済タスクの名前は WebConn_GTC となります。

Oracle Identity Manager データベースでは、非 ASCII 文字の名前が指定されたオブジェクトを格納するプロビジョニングは実行されません。そのため、汎用テクノロジー・コネクタの名前を指定するときに非 ASCII 文字を入力すると、エラー・メッセージが表示されません。

- Oracle Identity Manager インストールで使用されているコネクタまたはコネクタ・オブジェクトの名前と同じ名前を指定しないでください。
- 汎用テクノロジー・コネクタをステージング・サーバー上に作成してから本番サーバーに移動する場合、汎用テクノロジー・コネクタの名前が本番サーバー上の既存のコネクタまたはコネクタ・オブジェクトの名前と競合しないようにしてください。
- ステージング・サーバー上に作成した汎用テクノロジー・コネクタを本番サーバーにインポートする前には、宛先の Oracle Identity Manager データベースのバックアップを作成して、コネクタ・オブジェクトが上書きされた場合に作業状態に戻れるようにしてください。
- 共有ドライブ・トランスポート・プロバイダを選択する場合は、CSV フォーマット・プロバイダを選択する必要があります。
- SPML プロビジョニング・フォーマット・プロバイダを選択する場合は、Web サービス・プロビジョニング・トランスポート・プロバイダを選択する必要があります。
- 共有ドライブ・リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダを選択する場合は、リコンシリエーション用にターゲット・システムから提供される親データおよび子データのファイルにおいて、少なくとも最初の 2 行に所定のフォーマットのデータがあることを確認してください。データの所定のフォーマットの詳細は 20-2 ページの「共有ドライブ・リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダ」で説明しています。
- 共有ドライブ・リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダを選択する場合は、リコンシリエーションの開始前に、ステージング・ディレクトリおよびアーカイブ・ディレクトリに必要な権限が設定されていることを確認してください。必要な権限の詳細は、20-7 ページの「ステージング・ディレクトリとアーカイブ・ディレクトリに設定する権限」で説明しています。
- 一度に複数の汎用テクノロジー・コネクタを作成しようとしないでください。同じ Oracle Identity Manager インストールの管理およびユーザー・コンソールで、別のセッションから作成する場合も同様です。

24.2 「ステップ 2: パラメータ値の指定」 ページ

ここでは、「ステップ 2: パラメータ値の指定」 ページで指定する入力に関する既知の問題について説明します。

■ サマリー:

共有ドライブ・リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダを使用する場合、次の点に注意します。

- ステージング・ディレクトリとアーカイブ・ディレクトリに同じパスを指定しないでください。両方のディレクトリに同じパスを指定すると、アーカイブ・ディレクトリの既存のファイルが削除されます。
- ステージング・ディレクトリ内のファイルの名前が、アーカイブ・ディレクトリ内のファイルの名前と異なるようにしてください。ファイル名が同一になると、アーカイブ・ディレクトリ内の既存のファイルがリコンシリエーションの実行終了時に上書きされます。

説明:

共有ドライブ・リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダを使用する場合、各リコンシリエーションの実行後にデータ・ファイルがステージング・ディレクトリからアーカイブ・ディレクトリに移動します。アーカイブ・ディレクトリに移動したファイルにタイムスタンプまたはマークは付きません。そのため、共有ドライブ・トランスポート・プロバイダの使用時には、次のガイドラインに注意してください。

- 指定するアーカイブ・ディレクトリのパスおよび名前は、ステージング・ディレクトリのパスおよび名前と同じものにしないでください。同じパスおよび名前を指定すると、アーカイブ・ディレクトリ内の既存のファイルがリコンシリエーションの実行終了時に削除されます。
- 現行のリコンシリエーションの実行時に、最後のリコンシリエーションの実行で使用されたファイルと同じ名前のデータ・ファイルがステージング・ディレクトリに配置されていると、アーカイブ・ディレクトリ内の既存のファイルが、ステージング・ディレクトリからの新しいファイルで上書きされます。次に、この例を示します。

最後のリコンシリエーションの実行終了時に、ステージング・ディレクトリからアーカイブ・ディレクトリに次の各ファイルが自動的に移動したとします。

```
usrdataParentData.csv
usrdataRoleData.csv
usrdataGroupMembershipData.txt
```

現行のリコンシリエーションの実行用に、ステージング・ディレクトリに次の各ファイルを配置します。

```
usrdataParentData.csv
usrdataRoleData_04Feb07.csv
usrdataGroupMembershipData_04Feb07.txt
```

これらのファイルは、現行のリコンシリエーションの実行終了時にアーカイブ・ディレクトリに移動します。その際、古い `usrdataParentData.csv` ファイルが新しいファイルで上書きされます。

そのため、アーカイブ・ディレクトリ内のファイルがリコンシリエーションの実行終了時に上書きされないようにするには、ステージング・ディレクトリ内のファイルの名前がアーカイブ・ディレクトリ内のファイルの名前と同一にならないようにする必要があります。

- サマリー:

「ステップ 2: パラメータ値の指定」 ページに戻っても、2 回目にはメタデータの検出は行われません。そのため、必要に応じて「ステップ 3: コネクタ構成の変更」 ページに表示されるフィールドおよびフィールド・マッピングを手動で変更する必要があります。

- 説明:

「ステップ 2: パラメータ値の指定」 ページで指定した値を変更するとします。このページには、「ステップ 4: コネクタ・フォーム名の検証」 ページまたは「ステップ 5: コネクタ情報の検証」 ページから戻れます。ただし、プロバイダ・パラメータ値を変更した後に「続行」 ボタンをクリックしても、2 回目にはメタデータの検出は行われません。これは、「ステップ 3: コネクタ構成の変更」 ページで手動で行われた可能性のある変更の保護を目的とした機能です。

この機能が適用されるため、既存の汎用テクノロジー・コネクタを変更しても、メタデータの検出は行われません。

24.3 「ステップ 3: コネクタ構成の変更」 ページ

ここでは、次の領域に関するベスト・プラクティスについて説明します。

- [フィールドの名前](#)
- [パスワード・フィールド](#)
- [パスワード型フィールド](#)
- [マッピング](#)
- [「OIM」 データセット](#)

24.3.1 フィールドの名前

フィールドの追加時または編集時にフィールド名を指定する場合、次の検証が適用されることに注意してください。

- 同じデータセット（親または子）に属する 2 つのフィールドには同じ名前を指定できません。
- 同じ親データセットの 2 つの子データセットには同じ名前を指定できません。
- 親データセットのフィールドの名前には、その子データセットのいずれかと同じ名前は指定できません。
- その 2 つの子データセットが同じ親データセットに属しているかどうかに関係なく、2 つの異なる子データセットに同じ名前のフィールドをそれぞれ指定することは可能です。たとえば、UsrID という名前のフィールドを GroupMembership データセットと Role データセットのそれぞれに指定できます。
- 2 つの異なる親データセットに同じ名前のフィールドをそれぞれ指定することは可能です。同様に、これらのデータセットに同じ名前の子データセットをそれぞれ指定することも可能です。
- 子データセットの名前には、そのフィールドのいずれかと同じ名前を指定できます。

24.3.2 パスワード・フィールド

パスワードの安全性を確保するため、パスワード情報は汎用テクノロジー・コネクタでリコンサイルしないでください。つまり、「ソース」 データセットおよび「リコンシリエーション・ステージング」 データセットには「パスワード」 フィールドが含まれないようにします。また、「リコンシリエーション・ステージング」 データセットのフィールドを「OIM-ユーザー」 データセットの「パスワード」 フィールドにマップしないでください。

24.3.3 パスワード型フィールド

パスワード型フィールドは、「暗号化」属性および「パスワード・フィールド」属性を（「暗号化」チェック・ボックスおよび「パスワード・フィールド」チェック・ボックスを選択して）設定するフィールドです。「OIM-アカウント」データセットに追加するフィールドにこれらの2つの属性を設定すると、パスワード型フィールドを作成できます。

パスワード型フィールドの内容を保護するため、これらのフィールドの追加時または編集時には次のガイドラインに注意してください。

- 「パスワード・フィールド」チェック・ボックスおよび「暗号化」チェック・ボックスを使用すると、Oracle Identity Manager でのパスワード情報の表示および格納を保護できます。ただし、パスワード型フィールドを「プロビジョニング・ステー징」データセットのフィールドにマップする場合は、これらのフィールドに伝播されるデータを保護するため、必要なすべての予防措置をとってください。たとえば、このデータがプロビジョニング操作の終了時にターゲット・システムのプレーン・テキスト・ファイルに格納されないようにする必要があります。

「OIM-アカウント」データセットと「プロビジョニング・ステー징」データセットのパスワード・フィールド間には、1対1のマッピングのみ作成することをお勧めします。つまり、このパスワード・フィールドを、「プロビジョニング・ステー징」フィールドとの変換マッピングの入力フィールドとして使用しないようにしてください。「OIM-ユーザー」データセットの「パスワード」フィールドについても同様の予防措置をとる必要があります。

- 前述したとおり、「パスワード」フィールドは「OIM-ユーザー」データセットの事前定義済フィールドの1つです。このフィールドには「パスワード・フィールド」属性および「暗号化」属性が設定されます。Design Console を使用すると、作成する UDF に「パスワード・フィールド」属性および「暗号化」属性を設定できます。このように設定すると、新規作成される UDF に既存の「パスワード」フィールドと同じプロパティが指定されます。ただし、汎用テクノロジ・コネクタ・フレームワークではこのフィールドは他のテキスト・フィールド（文字列データ型）と同様に扱われ、その内容は管理およびユーザー・コンソールまたはデータベースでは暗号化されません。

これについては、26-9 ページの「一般的な既知の問題」にも記載されています。

24.3.4 マッピング

「OIM」データセットのフィールドを使用する場合は次のベスト・プラクティスを適用します。

- **サマリー:**

翻訳変換プロバイダを選択してマッピングを作成する場合、「参照コード名」リージョンに参照定義の名前を指定してください。データセット名およびフィールドを「参照コード名」リージョンに指定すると、実際のリコンシリエーションまたはプロビジョニングの操作時に変換に失敗します。

- **説明:**

マッピングの作成時に翻訳変換プロバイダを選択すると、「ステップ 2: マッピング」ページに、データセットからフィールドを選択してリテラルを指定するオプションが表示されます。翻訳変換プロバイダを使用しているため、「リテラル」オプションを選択して、変換用のコード・キーおよびデコードの値を含む参照定義の名前を入力する必要があります。「参照コード名」リージョンにデータセット名およびフィールドを選択しないでください。データセット名およびフィールドの選択を無効にする検証は行われませんが、実際のリコンシリエーションまたはプロビジョニングの操作時に変換操作に失敗します。

- 「OIM-アカウント」データセットの ID フィールドと、「リコンシリエーション・ステーjing」データセットのレコードを一意に識別するフィールドとのマッピングを作成します。
- ID フィールドに加えて、「OIM-アカウント」データセットの他のフィールドを「リコンシリエーション・ステーjing」データセットの対応するフィールドに（一致のみで）マップして、リコンシリエーション一致のコンポジット・キー・フィールドを作成できます。
- 「プロビジョニング・ステーjing」データセットのすべてのフィールドと、「OIM」データセットの対応するフィールドとのマッピングを作成します。

- リコンシリエーション・ルールを作成するには、「リコンシリエーション・ステージング」データセットのフィールドと「OIM-ユーザー」データセットのフィールド間で一致のみのマッピングを作成します。子データセットがある場合は、一致のみのマッピングの入力フィールドとなる「リコンシリエーション・ステージング」データセットのフィールドの名前が「リコンシリエーション・ステージング」の子データセットで使用されていないことを確認してください。このガイドラインに従っていないと、リコンシリエーションは失敗します。

これについては、26-2 ページの「[ステップ 3: コネクタ構成の変更](#) ページ」にも記載されています。

- 変換マッピングの入力フィールドの 1 つとしてリテラル・フィールドを使用できます。「リテラル」オプションを選択した場合は、そのフィールドに値を入力する必要があります。このオプションの選択後は、リテラル・フィールドを空白にしないでください。

24.3.5 「OIM」 データセット

「OIM」データセットのフィールドを使用する場合は次のベスト・プラクティスを適用します。

- 信頼できるソースのリコンシリエーションでは、「OIM-ユーザー」データセットの次の各フィールドに常に値が保持されている必要があります。

- ユーザー ID
- 名
- 姓
- 組織名
- Xellerate のタイプ
- ロール

また、この他に選択できる「OIM-ユーザー」のフィールドにも、ユーザー・アカウントがリコンシリエーションを通じて作成された場合に入力が必要なものがあります。これらの各フィールドに対し、「リコンシリエーション・ステージング」データセットの対応するフィールドとのマッピングを作成する必要があります。リコンシリエーションの実行中は、これらのフィールドのソースとなるターゲット・システムのフィールドに、常に値が保持されているようにしてください。

プロビジョニングに選択できる「OIM-ユーザー」データセットまたは「OIM-アカウント」データセットのフィールドには、ターゲット・システムへの値の伝播が必要なものがあります。これらのフィールドは、特定した後に、「プロビジョニング・ステージング」データセットの対応するフィールドとのマッピングを作成してください。プロビジョニング操作中に、これらの各フィールドに値を入力する必要があります。

- 必要に応じて、**Design Console** を使用すると、事前定義済の「OIM-ユーザー」フィールドのリストにユーザー定義フィールド (UDF) を追加できます。

ただし、UDF の「パスワード・フィールド」属性および「暗号化」属性の設定に **Design Console** を使用しないでください。 **Design Console** を使用して「パスワード・フィールド」属性および「暗号化」属性がフィールドに設定された場合、UDF の内容は暗号化されません。

これについては、26-9 ページの「[一般的な既知の問題](#)」にも記載されています。

- 既存の汎用テクノロジー・コネクタで、「OIM-アカウント」データセットのフィールドの属性を変更または削除しないでください。

24.4 共有ドライブ・リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダ

サマリー

親レコードと子データ・レコードが作成され、ターゲット・システムおよび Oracle Identity Manager の両方でリンクされる場合は、各リコンシリエーションの実行開始時に、親データと子データ両方のファイルがステージング・ディレクトリに格納されていることを確認してください。

説明

ターゲット・システムに、子データ・レコードの関連付けられた親データ・レコードがあるとします。これらのレコードを Oracle Identity Manager でリコンサイルするには、レコードが含まれる親データ・ファイルおよび子データ・ファイルをステージング・ディレクトリに配置します。リコンシリエーションの実行中、子データ・レコードがその対応する親データ・レコードにリンクされます。その後、別のリコンシリエーションを実行する前に、ステージング・ディレクトリから子データ・ファイルを削除すると、このような形の子データ・レコードの削除に対してリコンシリエーション・イベントは作成されなくなります。特定の親データ・レコードの子データ・レコードを削除する場合、子データ・ファイルから子データ・レコードを削除してください。各リコンシリエーションの実行時には、子データ・ファイルがステージング・ディレクトリに配置されていることを確認してください。そのファイルに子データ・レコード（3行目以降）がない場合にも同様です。

24.5 カスタム・プロバイダ

カスタム・プロバイダを使用する場合は次のガイドラインを適用します。

カスタム・プロビジョニング・トランスポート・プロバイダのコードを開発する場合、「ユーザーの作成」操作の終了時にプロバイダが一意のフィールドの値を戻すことを確認してください。この機能は、プロビジョニング・トランスポート・プロバイダの `sendData` メソッドによって実装されます。詳細は 21-7 ページの「[プロビジョニング中のプロバイダの役割](#)」を参照してください。

24.6 コネクタ・オブジェクト

汎用テクノロジー・コネクタの作成時に自動的に作成されたコネクタ・オブジェクトを使用する場合は、次のガイドラインを適用します。

■ サマリー:

リコンシリエーションのみの汎用テクノロジー・コネクタ用に自動的に作成されたリソース・オブジェクトは、プロビジョニングに使用しようとししないでください。

説明:

汎用テクノロジー・コネクタの作成時に「リコンシリエーション」オプションのみを選択したとします。作成プロセスの終了時に、この汎用テクノロジー・コネクタ用に自動的に作成されるオブジェクトの1つとして、リソース・オブジェクトが作成されます。ただし、リコンシリエーションのみの汎用テクノロジー・コネクタには汎用アダプタが作成されないため、このリソース・オブジェクトはいずれのユーザーにもプロビジョニングできません。

- サマリー:

汎用テクノロジー・コネクタのリソース・オブジェクトを、Oracle Identity Manager で定義されている組織にプロビジョニングしようとししないでください。

- 説明:

リソース・オブジェクトは、汎用テクノロジー・コネクタの作成中に自動的に作成されるコネクタ・オブジェクトの1つです。このリソース・オブジェクトは、OIM ユーザーにのみプロビジョニングできます。Oracle Identity Manager で定義されている組織にはプロビジョニングしようとししないでください。

これについては、26-8 ページの「コネクタ・オブジェクト」にも記載されています。

- Design Console を使用すると、汎用テクノロジー・コネクタの作成中に自動的に作成されるコネクタ・オブジェクトをカスタマイズできます。コネクタ・オブジェクトをカスタマイズした後に「汎用テクノロジー・コネクタの管理」操作を実行すると、そのコネクタ・オブジェクトに対して行ったすべてのカスタマイズが上書きされます。そのため、次のガイドラインのいずれかを適用することをお勧めします。

- Design Console を使用して、汎用テクノロジー・コネクタ・オブジェクトを変更しないでください。

IT リソースについてはこのガイドラインは適用されません。IT リソースのパラメータは、Design Console を使用して変更できます。ただし、GenericConnector カテゴリおよび GenericConnectorProviders カテゴリのキャッシュを有効にしている場合は、IT リソースのパラメータを変更する前後のいずれかにキャッシュをパージする必要があります。詳細は、『Oracle Identity Manager ベスト・プラクティス・ガイド』の「キャッシュの消去」を参照してください。

- Design Console を使用して汎用テクノロジー・コネクタ・オブジェクトを変更する場合、汎用テクノロジー・コネクタの変更に「汎用テクノロジー・コネクタの管理」機能を使用しないでください。

これについては、26-8 ページの「コネクタ・オブジェクト」にも記載されています。

- 事前移入アダプタは、汎用テクノロジー・コネクタの作成時に自動的に作成されるコネクタ・オブジェクトのセットの一部ではありません。ただし、汎用テクノロジー・コネクタの作成中に、プロビジョニングの入力をリテラル・フィールドおよびユーザー・データ・フィールドにマップすることはできます。この機能を使用してもユーザー定義フォームへの事前移入はできませんが、プロビジョニング・データ・パケットに事前移入することは可能です。

24.7 汎用テクノロジー・コネクタの変更

汎用テクノロジー・コネクタを変更する場合は次のベスト・プラクティスを適用します。

一度に複数の汎用テクノロジー・コネクタを変更しようとししないでください。同じ Oracle Identity Manager インストールの管理およびユーザー・コンソールで、別のセッションから作成する場合も同様です。

汎用テクノロジー・コネクタ・エラーの トラブルシューティング

この章では、汎用テクノロジー・コネクタの使用に関連して一般的に発生する問題の解決方法について説明します。この章の内容は、次のとおりです。

- コネクタ作成プロセスの最後に発生するエラー
- リコンシリエーション中に発生する一般的なエラー
- プロビジョニング中に発生する一般的なエラー

25.1 コネクタ作成プロセスの最後に発生するエラー

次のエラー・メッセージは、汎用テクノロジー・コネクタ作成プロセスの最後に表示される可能性があります。各メッセージでは、エラーの原因となる事象やエラー・メッセージが表示されるタイミングについて説明します。

- 汎用テクノロジー・コネクタ `connector_name` のインポート XML ファイルの生成中にエラーが発生しました
- 汎用テクノロジー・コネクタ `connector_name` のランタイム・プロバイダ・パラメータに指定された値で IT リソース・パラメータを更新中にエラーが発生しました。
- 汎用テクノロジー・コネクタ `connector_name` の XML ファイルの生成中、または Oracle Identity Manager データベースでの同ファイルの保存中にエラーが発生しました。
- 汎用テクノロジー・コネクタ `connector_name` の XML ファイルのインポート中にエラーが発生しました。インポート操作に必要なロックを取得できませんでした。
- 汎用テクノロジー・コネクタ `connector_name` の情報を保存中にエラーが発生しました。詳細はアプリケーション・ログを確認してください。
- 汎用テクノロジー・コネクタ `connector_name` のリソース・オブジェクトの作成中にエラーが発生しました。このリソース・オブジェクトに割り当てられた名前と同じ名前を持つ既存のリソース・オブジェクトが存在します。

25.2 リコンシリエーション中に発生する一般的なエラー

表 25-1 に、リコンシリエーション・プロセスに関連して一般的に発生する問題の解決方法について説明します。

注意：これらのエラーがロギングされるのは、共有ドライブ・リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダおよび CSV リコンシリエーション・フォーマット・プロバイダを使用している場合のみです。

これらのいずれかのエラーが発生した場合、エラー・メッセージはアプリケーション・サーバーのログ・ファイルに書き込まれます。

表 25-1 リコンシリエーション中に発生する一般的なエラー

問題の説明 (エラー・メッセージ)	解決方法
使用可能なランタイム・プロバイダ・パラメータがありません	「汎用テクノロジー・コネクタの管理」機能を使用して、ランタイム・パラメータに指定された値を確認します。その後、リコンシリエーションを再試行します。
使用可能な設計時プロバイダ・パラメータがありません	「汎用テクノロジー・コネクタの管理」機能を使用して、設計パラメータに指定された値を確認します。その後、リコンシリエーションを再試行します。
ステージング・ディレクトリの場所が定義されていません	「汎用テクノロジー・コネクタの管理」機能を使用して、「ステージング・ディレクトリ (親アイデンティティ・データ)」パラメータに指定された値を確認します。その後、リコンシリエーションを再試行します。
ファイル・エンコーディングが定義されていません	「汎用テクノロジー・コネクタの管理」機能を使用して、ファイル・エンコーディング (親データ) パラメータに指定された値を確認します。その後、リコンシリエーションを再試行します。
アーカイブ・ディレクトリの場所が定義されていません	「汎用テクノロジー・コネクタの管理」機能を使用して、「アーカイブ・ディレクトリ」パラメータに指定された値を確認します。その後、リコンシリエーションを再試行します。
固定幅区切りが定義されていないため、ファイルを処理できません	「汎用テクノロジー・コネクタの管理」機能を使用して、次のいずれかのパラメータに値が指定されているかどうかを確認します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 指定されたデリミタ ■ タブ区切り ■ 固定列幅 その後、リコンシリエーションを再試行します。
ステージング・ディレクトリに親ファイルがありません 読取り用のファイルがありません	「ステージング・ディレクトリ (親アイデンティティ・データ)」パラメータの値として指定されたディレクトリにデータ・ファイルがあることを確認します。その後、リコンシリエーションを再試行します。
ステージング・ディレクトリに子データがありません 読取り用のファイルがありません	「ステージング・ディレクトリ (複数値アイデンティティ・データ)」パラメータの値として指定されたディレクトリにデータ・ファイルがあることを確認します。その後、リコンシリエーションを再試行します。
ステージング・ディレクトリにアクセスできません。ディレクトリ・パスが存在しないか、必要なアクセス権限がありません	パラメータ値として指定されたディレクトリに必要な権限があることを確認します。必要な権限の詳細は、20-2 ページの「 共有ドライブ・リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダ 」を参照してください。その後、リコンシリエーションを再試行します。
使用されているファイル・エンコーディングがサポートされていないため、データ・ファイルを読み取れませんでした	「汎用テクノロジー・コネクタの管理」機能を使用して、「ファイル・エンコーディング」パラメータに指定された値を確認します。その後、リコンシリエーションを再試行します。
メタデータを解析できません	親データ・ファイルおよび子データ・ファイルにあるメタデータ (2 行目の内容) を確認します。ファイルで使用されている区切りに問題がある可能性があります。問題を解決してから、リコンシリエーションを再試行します。
ヘッダーを解析できません	データ・ファイルのヘッダー (1 行目の内容) を確認します。ヘッダーの形式に問題がある可能性があります。ヘッダーの形式の詳細は、20-2 ページの「 共有ドライブ・リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダ 」を参照してください。 問題を解決してから、リコンシリエーションを再試行します。
現行のレコードに問題があるため解析できません	アプリケーション・サーバーのログ・ファイルに書き込まれるエントリを確認します。解析できないエラーが含まれる可能性があります。問題を解決してから、リコンシリエーションを再試行します。

25.3 プロビジョニング中に発生する一般的なエラー

次の表に、プロビジョニング・プロセスに関連して一般的に発生する問題の解決方法について説明します。

注意：これらのエラーのほとんどがログギングされるのは、Web サービス・プロビジョニング・トランスポート・プロバイダおよび SPML プロビジョニング・フォーマット・プロバイダを使用している場合のみです。

これらのいずれかのエラーが発生すると、エラー・メッセージが UI に表示され、アプリケーション・ログ・ファイルに書き込まれます。

表 25-2 プロビジョニング中に発生する一般的なエラー

問題の説明	解決方法
<p>レスポンス・コード： SPML の Velocity プロパティを読み取れません</p> <p>レスポンスの説明： SPML のテンプレート・プロパティを読み取れませんでした。</p>	<p>Oracle Identity Manager インストールに問題があります。Oracle サポート・サービスに連絡して、この問題に関する情報と、表示されるレスポンス・コードおよび説明を送ってください。また、ログギングを DEBUG レベルに設定して Oracle Identity Manager を実行した後、生成された関連するログも送ってください。</p>
<p>レスポンス・コード： SPML のテンプレートを読み取れません</p> <p>レスポンスの説明： SPML のテンプレート・ファイルが見つかりませんでした。</p>	<p>Oracle Identity Manager インストールに問題があります。Oracle サポート・サービスに連絡して、この問題に関する情報と、表示されるレスポンス・コードおよび説明を送ってください。また、ログギングを DEBUG レベルに設定して Oracle Identity Manager を実行した後、生成された関連するログも送ってください。</p>
<p>レスポンス・コード： SPML の不明な操作</p> <p>レスポンスの説明： このプロビジョニング操作は、許可されている操作 (作成、削除、有効化、無効化、変更の操作、または子表に関する操作) ではありません。</p>	<p>Oracle Identity Manager インストールに問題があります。Oracle サポート・サービスに連絡して、この問題に関する情報と、表示されるレスポンス・コードおよび説明を送ってください。また、ログギングを DEBUG レベルに設定して Oracle Identity Manager を実行した後、生成された関連するログも送ってください。</p>
<p>レスポンス・コード： SPML のプロビジョニングの入力が NULL です</p> <p>レスポンスの説明： SPML のプロビジョニングの入力データが NULL です。</p>	<p>プロバイダ・パラメータを正しく指定したかどうかを確認します。 プロビジョニングがダイレクト・プロビジョニングまたはリクエスト・プロビジョニングのどちらによって開始されたかを確認します。ダイレクト・プロビジョニングのオプションを使用して手順を再実行します。</p>
<p>レスポンス・コード： SPML のテンプレート・コンテキスト処理エラー</p> <p>レスポンスの説明： SPML リクエスト生成用のテンプレート・コンテキストの処理中にエラーが発生しました。</p>	<p>Oracle Identity Manager インストールに問題があります。Oracle サポート・サービスに連絡して、この問題に関する情報と、表示されるレスポンス・コードおよび説明を送ってください。また、ログギングを DEBUG レベルに設定して Oracle Identity Manager を実行した後、生成された関連するログも送ってください。</p>

表 25-2 プロビジョニング中に発生する一般的なエラー（続き）

問題の説明	解決方法
<p>レスポンス・コード: SPML のプロビジョニングの操作名がありません</p> <p>レスポンスの説明: プロビジョニングの操作名がありません。</p>	<p>汎用テクノロジー・コネクタが正しく作成されていない可能性があります。構成（プロバイダ）のセットは変えずに属性を減らして別のコネクタを作成してみてください。ダイレクト・プロビジョニングを試行します。</p>
<p>レスポンス・コード: SPML のプロビジョニングの子の名前がありません</p> <p>レスポンスの説明: 子の名前がありません。</p>	<p>このエラーが発生した場合、特定のタイプの複数値属性（たとえば、ロールまたはメンバーシップ）に対してプロビジョニングを試行していた可能性があります。</p> <p>コネクタが正しく作成されていない可能性があります。構成（プロバイダ）のセットは変えずに、複数値属性を1つのみ（最初に失敗した属性）にして、別のコネクタを作成してみてください。ダイレクト・プロビジョニングを試行します。</p>
<p>レスポンス・コード: SPML のプロビジョニングの子のメタデータが NULL です</p> <p>レスポンスの説明: 子のメタデータ・リストが NULL です。</p>	<p>このエラーが発生した場合、特定のタイプの複数値属性（たとえば、ロールまたはメンバーシップ）に対してプロビジョニングを試行していた可能性があります。</p> <p>コネクタが正しく作成されていない可能性があります。構成（プロバイダ）のセットは変えずに、複数値属性を1つのみ（最初に失敗した属性）にして、別のコネクタを作成してみてください。ダイレクト・プロビジョニングを試行します。</p>
<p>レスポンス・コード: SPML のプロビジョニングの子のメタデータの問題</p> <p>レスポンスの説明: 子のメタデータ・リストのソート中にエラーが発生しました。</p>	<p>このエラーが発生した場合、特定のタイプの複数値属性（たとえば、ロールまたはメンバーシップ）に対してプロビジョニングを試行していた可能性があります。</p> <p>コネクタが正しく作成されていない可能性があります。プロビジョニング・フィールドに対して設定された順序に問題があります。関連する複数値フィールドの属性を減らして別のコネクタを作成してみてください。ダイレクト・プロビジョニングを試行します。プロビジョニングが正常に終了するたびに「汎用テクノロジー・コネクタの管理」手順を実行して、フィールドを1つずつ追加してみてください。この問題が再び再び出現した時点で、順序が正しくないフィールドが明らかになります。</p>
<p>レスポンス・コード: SPML のプロビジョニングの ID がありません</p> <p>レスポンスの説明: 一意の ID がありません。</p>	<p>作成済ユーザーに対して操作を実行しようとしています。ただし、「ユーザーの作成」操作そのものが正常に実行されていない可能性があります。レスポンスとして予期される一意の ID (psoid) が受信されていません。このため、プロビジョニング済インスタンス・データが Oracle Identity Manager で更新されませんでした。この操作が失敗した原因を確認します。</p>
<p>レスポンス・コード: SPML のプロビジョニング・ターゲット ID がありません</p> <p>レスポンスの説明: 一意のターゲット ID がありません。</p>	<p>入力されたプロバイダ・パラメータを確認します。ターゲット ID がない可能性があります。</p>
<p>レスポンス・コード: OIM API エラー</p> <p>レスポンスの説明: Oracle Identity Manager API レイヤーでエラーが発生しました。</p>	<p>Oracle Identity Manager が他の操作で正しく動作しているかどうかを確認します。Oracle Identity Manager フロント・エンドとデータベースの間の接続を確認します。</p> <p>注意: このエラーは、使用しているプロバイダには関係ありません。</p>

表 25-2 プロビジョニング中に発生する一般的なエラー（続き）

問題の説明	解決方法
<p>レスポンス・コード: OIM プロセス・フォームが見つかりません</p> <p>レスポンスの説明: Oracle Identity Manager にプロセス・フォームが見つかりませんでした。</p>	<p>汎用テクノロジー・コネクタが正しく作成されていない可能性があります。同じ構成のセットを使用して別のコネクタを作成してみてください。ダイレクト・プロビジョニングを試行します。</p> <p>注意: このエラーは、使用しているプロバイダには関係ありません。</p>
<p>レスポンス・コード: OIM プロセス・フォーム・インスタンスが見つかりません</p> <p>レスポンスの説明: 指定されたフォームのプロセス・フォーム・インスタンスが更新中に見つかりませんでした。</p>	<p>Oracle Identity Manager データベースのプロビジョニング済インスタンスの情報が破損している可能性があります。ダイレクト・プロビジョニングを試行します。</p> <p>問題が解消されない場合は、汎用テクノロジー・コネクタに問題がある可能性があります。同じ構成のセットを使用して別の汎用テクノロジー・コネクタを作成します。</p> <p>注意: このエラーは、使用しているプロバイダには関係ありません。</p>
<p>レスポンス・コード: OIM アトミック・プロセス・インスタンスが見つかりません</p> <p>レスポンスの説明: 検出されたプロセス・インスタンスはアトミック・プロセスではありません。</p>	<p>Oracle Identity Manager データベースのプロビジョニング済インスタンスの情報が破損している可能性があります。ダイレクト・プロビジョニングを試行します。</p> <p>問題が解消されない場合は、汎用テクノロジー・コネクタに問題がある可能性があります。同じ構成のセットを使用して別の汎用テクノロジー・コネクタを作成します。</p> <p>注意: このエラーは、使用しているプロバイダには関係ありません。</p>
<p>レスポンス・コード: 列が見つかりません</p> <p>レスポンスの説明: 必要な列が結果セットに見つかりませんでした。</p>	<p>汎用テクノロジー・コネクタが正しく作成されていない可能性があります。同じ構成のセットを使用して別のコネクタを作成してみてください。ダイレクト・プロビジョニングを試行します。</p> <p>注意: このエラーは、使用しているプロバイダには関係ありません。</p>
<p>レスポンス・コード: 無効なプロバイダ</p> <p>レスポンスの説明: 指定されたプロバイダ名が無効です。</p>	<p>使用しているプロビジョニング・フォーマット、変換、またはプロビジョニング・トランスポートいずれかのプロバイダが正しく登録されていない可能性があります。プロバイダの登録手順を正しく実行したかどうかを確認します。事前定義済プロバイダの使用時にこのエラーが表示される場合は、Oracle Identity Manager サーバーのディレクトリでこれらのプロバイダの XML ファイルを確認します。これらの XML ファイルは次のディレクトリにあります。</p> <p><code>OIM_HOME/xellerate/GenericConnector/ProviderDefinitions</code></p>
<p>レスポンス・コード: IT リソース・インスタンスが見つかりません</p> <p>レスポンスの説明: Oracle Identity Manager に IT リソース・インスタンスが見つかりませんでした。</p>	<p>汎用テクノロジー・コネクタが正しく作成されていない可能性があります。同じ構成のセットを使用して別の汎用テクノロジー・コネクタを作成してみてください。ダイレクト・プロビジョニングを試行します。</p> <p>注意: このエラーは、使用しているプロバイダには関係ありません。</p>
<p>レスポンス・コード: バージョンが見つかりません</p> <p>レスポンスの説明: 必要なプロセス・フォーム・バージョンが Oracle Identity Manager に見つかりませんでした。</p>	<p>汎用テクノロジー・コネクタが正しく作成されていない可能性があります。同じ構成のセットを使用して別のコネクタを作成してみてください。新しいフィールドを既存のデータセットに追加して既存のコネクタを編集した場合、その操作が失敗している可能性があります。コネクタで再度同じ変更を行ってください。</p> <p>注意: このエラーは、使用しているプロバイダには関係ありません。</p>

表 25-2 プロビジョニング中に発生する一般的なエラー（続き）

問題の説明	解決方法
<p>レスポンス・コード: バージョンが定義されていません</p> <p>レスポンスの説明: 必要なプロセス・フォームのバージョンが Oracle Identity Manager に定義されていませんでした。</p>	<p>汎用テクノロジー・コネクタが正しく作成されていない可能性があります。同じ構成のセットを使用して別のコネクタを作成してみてください。新しいフィールドを既存のデータセットに追加して既存のコネクタを編集した場合、その操作が失敗している可能性があります。コネクタで再度同じ変更を行ってみてください。</p> <p>注意: このエラーは、使用しているプロバイダには関係ありません。</p>
<p>レスポンス・コード: Web サービスが見つかりません</p> <p>レスポンスの説明: ターゲット・サーバーに Web サービスが見つかりませんでした。サービス名と IP アドレスを確認してください。</p>	<p>Web サービスの URL に指定したサービス名と IP アドレスを確認します。これらが正しい場合は、Web サービスが稼働しているかどうかを確認します。</p>
<p>レスポンス・コード: Web サービス接続が拒否されました</p> <p>レスポンスの説明: Web サービス接続を確立できませんでした。サーバーが稼働中で、指定されたポートが正しいことを確認してください。</p>	<p>Web サービスが稼働中かどうかを確認します。</p>
<p>レスポンス・コード: Web サービスにそのようなメソッドはありません</p> <p>レスポンスの説明: Web サービスのメソッドを開始できませんでした。操作名とパラメータを確認してください。</p>	<p>操作名とパラメータを確認します。</p>
<p>レスポンス・コード: Web サービスのパラメータ値が NULL です</p> <p>レスポンスの説明: Web サービスに渡されたパラメータ値が NULL です。</p>	<p>プロビジョニング・プロセスが正しく実行されたかどうかを確認します。プロビジョニング・フォーマット・プロバイダが正しく実行されなかったために NULL 出力を生成した可能性があります。</p>
<p>レスポンス・コード: Web サービスの HTTP ライブラリがありません</p> <p>レスポンスの説明: クラスパスに Web サービスの HTTP ライブラリが含まれていません。</p>	<p>Oracle Identity Manager インストールに問題があります。Oracle サポート・サービスに連絡して、この問題に関する情報と、表示されるレスポンス・コードおよび説明を送ってください。また、ロギングを DEBUG レベルに設定して Oracle Identity Manager を実行した後、生成された関連するログも送ってください。</p>
<p>レスポンス・コード: Web サービスの結果値が NULL です</p> <p>レスポンスの説明: Web サービスの結果値が NULL です。</p>	<p>Web サービスが正しく稼働しているかどうかを確認します。現時点で、Web サービスは、Oracle Identity Manager プロビジョニング・リクエストへのレスポンスとして NULL 出力を生成しています。</p>

表 25-2 プロビジョニング中に発生する一般的なエラー（続き）

問題の説明	解決方法
<p>レスポンス・コード: Web サービス呼出しの問題</p> <p>レスポンスの説明: Web サービスの呼出し中にエラーが発生しました。</p>	<p>Web サービスの資格証明を確認します。</p>
<p>レスポンス・コード: Web サービスのターゲット URL がありません</p> <p>レスポンスの説明: Web サービスの呼出しに必要な Web サービスのターゲット URL がありません。</p>	<p>プロバイダ・パラメータの値を確認します。Web サービスの URL がない場合があります。汎用テクノロジー・コネクタを変更して、再度この値を指定しなおします。</p>
<p>レスポンス・コード: Web サービスのターゲット・メソッド名がありません</p> <p>レスポンスの説明: Web サービスの呼出しに必要な Web サービスのターゲット・メソッド名がありません。</p>	<p>プロバイダ・パラメータの値を確認します。Web サービスの操作名がない場合があります。汎用テクノロジー・コネクタを変更して、再度この値を指定しなおします。</p>
<p>レスポンス・コード: Web サービスのレスポンスの XML 解析エラー</p> <p>レスポンスの説明: Web サービスのレスポンスの XML 解析中にエラーが発生しました。</p>	<p>Web サービスが正しく稼働しているかどうかを確認します。Web サービスが、Web サービス・プロバイダに対して指定された形式に準拠しない SPML レスポンスを生成しています。</p>
<p>レスポンス・コード: Web サービスのレスポンス ID エラー</p> <p>レスポンスの説明: Web サービスから一意の ID が生成されていないか、レスポンス XML ファイルの属性名が不適切なため、値が解析されませんでした。</p>	<p>Web サービスが正しく稼働しているかどうかを確認します。「ユーザーの作成」操作で、Web サービスが、指定された形式に準拠しない SPML レスポンスを生成しています。また、ターゲット・システムで作成された psoID を戻していません。Web サービス・プロバイダのプロバイダ指定では psoID フィールドを戻すように指定されています。</p>
<p>レスポンス・コード: Web サービスのプロトコル接続エラー</p> <p>レスポンスの説明: Oracle-SOAP HTTP 接続でエラーが発生しました。</p>	<p>Web サービスの URL に指定したサービス名と IP アドレスを確認します。これらが正しい場合は、Web サービスが稼働しているかどうかを確認します。操作名とパラメータを確認します。</p>
<p>レスポンス・コード: Web サービスのプロトコル処理エラー</p> <p>レスポンスの説明: Oracle-SOAP API のコール中にエラーが発生しました。</p>	<p>Web サービスの URL に指定したサービス名と IP アドレスを確認します。これらが正しい場合は、Web サービスが稼働しているかどうかを確認します。操作名とパラメータを確認します。</p>

表 25-2 プロビジョニング中に発生する一般的なエラー（続き）

問題の説明	解決方法
<p>レスポンス・コード: 日付を解析できません</p> <p>レスポンスの説明: 日付の解析中にエラーが発生しました。</p>	<p>「ターゲット日付書式」パラメータに指定した値が正しくありません。指定可能な日付書式の詳細は、次の Web ページを参照してください。</p> <p>http://java.sun.com/docs/books/tutorial/i18n/format/simpleDateFormat.html#datepattern</p>
<p>レスポンス・コード: データ・アクセス・エラー</p> <p>レスポンスの説明: 問合せの実行中または結果セットのロード中にデータ・アクセス・エラーが発生しました。</p>	<p>Oracle Identity Manager が他の操作で正しく動作しているかどうかを確認します。Oracle Identity Manager フロント・エンドとデータベースの間の接続を確認します。</p> <p>注意: このエラーは、使用しているプロバイダには関係ありません。</p>
<p>レスポンス・コード: SSL ハンドシェイクは実行されませんでした</p> <p>レスポンスの説明: ターゲット Web サービスとのセキュアな通信中に SSL ハンドシェイクは実行されませんでした。</p>	<p>Oracle Identity Manager とターゲット・システムの間の Secure Sockets Layer (SSL) 構成が正しく完了しているかどうかを確認します。必要に応じて手順を再度実行します。</p>
<p>レスポンス・コード: SSL 関連プロパティの初期化でエラーが発生しました</p> <p>レスポンスの説明: SSL 関連プロパティの初期化中にエラーが発生しました。関連する値は、OIM_SERVER/xellerate/config/xlconfig.xml ファイルの "RMSecurity" 要素から読み取られます。</p>	<p>xlconfig.xml ファイルの RMSecurity 要素に対応する構成エントリを確認します。</p>
<p>レスポンス・コード: Web サービスのキーストアまたはパスワードが無効です</p> <p>レスポンスの説明: OIM_HOME/xellerate/config/xlconfig.xml ファイルで無効なキーストアの名前またはパスワードが見つかりました。"RMSecurity" 要素に対応する構成エントリを確認してください。</p>	<p>xlconfig.xml ファイルの RMSecurity 要素に対応する構成エントリを確認します。</p>
<p>レスポンス・コード: Web サービスのキーストア初期化中にエラーが発生しました</p> <p>レスポンスの説明: キーストアの初期化に失敗しました。キーストアの資格証明は、RMSecurity 要素の下の OIM_HOME/xellerate/config/xlconfig.xml ファイルに示されています。</p>	<p>xlconfig.xml ファイルの RMSecurity 要素に対応する構成エントリを確認します。</p>

表 25-2 プロビジョニング中に発生する一般的なエラー（続き）

問題の説明	解決方法
<p>レスポンス・コード: ID が無効です</p> <p>レスポンスの説明: 入力 SPML リクエストに無効な ID があります。</p>	<p>「ターゲット ID」パラメータに指定した値を確認します。</p>
<p>レスポンス・コード: オブジェクトはすでに存在します</p> <p>レスポンスの説明: このオブジェクトはターゲット・システムにすでに存在します。</p>	<p>作成しようとしているオブジェクトがすでにターゲット・システムに存在していないかどうかを確認します。</p>
<p>レスポンス・コード: 操作はサポートされていません</p> <p>レスポンスの説明: リクエストされたプロビジョニング操作はサポートされていません。</p>	<p>リクエストしたプロビジョニング操作がターゲット・システムでサポートされているかどうかを確認します。SPML プロビジョニング・フォーマット・プロバイダを使用して実行できる SPML プロビジョニング操作のタイプの詳細は、20-8 ページの「SPML プロビジョニング・フォーマット・プロバイダ」を参照してください。</p>
<p>レスポンス・コード: 入力 SPML リクエストの ID タイプが無効です</p> <p>レスポンスの説明: 入力 SPML リクエストに無効な ID タイプがあります。</p>	<p>送ったリクエストのタイプに対応するサンプル SPML リクエストを確認し、ターゲット・システムでそのリクエストに含まれていたすべての ID 値がサポートされているかどうかを確認します。</p> <p>サンプル SPML リクエストには、次のディレクトリでアクセスできます。</p> <p><code>OIM_HOME/xellerate/GTC/Samples/spml</code></p>
<p>レスポンス・コード: 入力 SPML リクエストにある ID がターゲット・システムに存在しません</p> <p>レスポンスの説明: 入力 SPML リクエストにある ID がターゲット・システムに存在しません。</p>	<p>リクエストで送った psoID 値がターゲット・システムに存在することを確認します。</p>
<p>レスポンス・コード: リクエストされた実行モードはサポートされていません</p> <p>レスポンスの説明: リクエストされた実行モードはサポートされていません。</p>	<p>同期モードでのリクエストの実行が、ターゲット・システムでサポートされていることを確認します。</p>
<p>レスポンス・コード: 無効なコンテナ</p> <p>レスポンスの説明: 指定されたコンテナにオブジェクトを追加できません。詳細はログ・ファイルを参照してください。SPML レスポンスにある要素 "errorMessage" の値を確認します。</p>	<p>リクエストで指定したコンテナ ID に対応するコンテナが、ターゲット・システムに存在するかどうかを確認します。</p>

表 25-2 プロビジョニング中に発生する一般的なエラー（続き）

問題の説明	解決方法
<p>レスポンス・コード: 非標準の SPML のエラーが発生しました</p> <p>レスポンスの説明: ターゲット固有のエラーが発生しました。詳細はログ・ファイルを参照してください。SPML レスポンスにある要素 "errorMessage" の値を確認します。</p>	<p>SPML レスポンスの errorMessage 要素の値を確認します。この要素には、エラーの発生時に生成された、ターゲット・システムのエラー・メッセージが含まれます。</p>
<p>レスポンス・コード: SPML レスポンスは非同期モードです</p> <p>レスポンスの説明: SPML レスポンスは非同期モードですが、このリリースではサポートされていません。</p>	<p>リクエスト実行の同期モードに対応するレスポンスが、ターゲット・システムから送信されていることを確認します。</p>
<p>レスポンス・コード: Web サービス URL の構成要素の解析中にエラーが発生しました</p> <p>レスポンスの説明: Web サービス URL の構成要素の解析中にエラーが発生しました。指定した URL にプロトコル、ホスト名、ポートおよびエンドポイントが含まれているかどうかを確認します。コネクタ作成中にプロバイダ・パラメータ値を指定するとき、関連 WSDL ファイルから URL をコピーすることをお勧めします。</p>	<p>指定した URL にプロトコル、ホスト名、ポートおよびエンドポイントが含まれているかどうかを確認します。コネクタ作成中にプロバイダ・パラメータ値を指定するとき、関連 WSDL ファイルから URL をコピーすることをお勧めします。</p>
<p>レスポンス・コード: SPML レスポンスは、V2 スキーマ検証に失敗しました</p> <p>レスポンスの説明: 受信した SPML レスポンスは、SPML V2 標準仕様に準拠していません。</p>	<p>ターゲット・システムによって戻された SPML レスポンスが、SPML V2 標準仕様に準拠していることを確認します。</p>

汎用テクノロジー・コネクタに関する既知の問題

汎用テクノロジー・コネクタに関連する既知の問題は、次のカテゴリに分類されます。

- [汎用テクノロジー・コネクタおよびコネクタ・オブジェクトの名前](#)
- [「ステップ 3: コネクタ構成の変更」 ページ](#)
- [多言語サポート](#)
- [コネクタ・オブジェクト](#)
- [一般的な既知の問題](#)

26.1 汎用テクノロジー・コネクタおよびコネクタ・オブジェクトの名前

ここでは、次のような汎用テクノロジー・コネクタおよびコネクタ・オブジェクトに対して指定する名前に関連する既知の問題について説明します。

サマリー:

- 汎用テクノロジー・コネクタに指定した名前が既存のコネクタ・オブジェクトと同一の名前でも、警告が表示されません。
- コネクタ XML ファイルのインポート時に既存のコネクタ・オブジェクトが新規コネクタ・オブジェクトで上書きされても、警告が表示されません。

説明:

汎用テクノロジー・コネクタの作成中や変更中は、汎用テクノロジー・コネクタ・フレームワークによって様々なオブジェクトが自動的に作成または変更されます。その際、汎用テクノロジー・コネクタとプロセス・フォームに対して名前を指定するよう求められます。その他のオブジェクトの名前は、フレームワークによって自動的に生成されます。自動生成される名前は、汎用テクノロジー・コネクタに指定した名前に基づきます。

汎用テクノロジー・コネクタに対して名前を指定する場合、名前がその Oracle Identity Manager インストールのすべてのオブジェクト・カテゴリ（リソース・オブジェクトや IT リソースなど）において一意である必要があります。同様に、プロセス・フォーム名も一意である必要があります。このガイドラインは、汎用テクノロジー・コネクタ XML ファイルを別の Oracle Identity Manager インストールにインポートする際にも順守する必要があります。XML ファイルに定義されているオブジェクト名は、インポート先となる Oracle Identity Manager インストールでの同じカテゴリに属するオブジェクト名と重複しないようにします。たとえば、XML ファイルに定義されているスケジュール済タスクの名前は、インポート先となる Oracle Identity Manager インストール上の他のスケジュール済タスクの名前と同一にはできません。

このガイドラインは、インポート先となる Oracle Identity Manager インストールにおいて、オブジェクトが事前定義済コネクタ、あるいは汎用テクノロジー・コネクタに使用されるかどうかに関係なく、すべてのコネクタ・オブジェクトに適用されます。

このガイドラインを順守しない場合、XML ファイルのインポート中、インポートされるオブジェクトと同じ名前の既存オブジェクトは上書きされます。上書き処理中はメッセージが表示されないため、該当するコネクタが最終的に失敗します。

これについては、26-8 ページの「[コネクタ・オブジェクト](#)」にも記載されています。

26.2 「ステップ 3: コネクタ構成の変更」 ページ

ここでは、「ステップ 3: コネクタ構成の変更」 ページでの入力に関する既知の問題について説明します。

■ サマリー:

既存の汎用テクノロジー・コネクタを変更する際、「OIM - アカウント」データセットのフィールドまたは子データセットを変更しても、これらのデータセットに基づくフォームの Oracle Identity Manager データベース・エントリに対応する変更が加えられません。また、エラー・メッセージも表示されません。

説明:

「ステップ 3: コネクタ構成の変更」 ページには、フィールドおよびフィールド・マッピングの追加、変更および削除の機能があります。これらの機能を使用すると、「OIM - アカウント」データセットまたはその子データセット内のフィールドの長さおよびデータ型を変更できます。ただし、このような変更は、このデータセットに対する Oracle Identity Manager データベース・エントリに対する変更として反映されません。また、エラー・メッセージも表示されません。

この問題は、Oracle Identity Manager の将来のリリースで解消される予定です。それまでは「OIM - アカウント」データセットのフィールドや子データセットを変更しないようにしてください。

- **サマリー:**

汎用テクノロジー・コネクタを作成して、それをプロビジョニングまたはリコンシリエーションに使用し、その後で「OIM-アカウント」データセットのフィールドまたは子データセットを削除するとします。次にプロビジョニングまたはリコンシリエーションを実行するときに同じ汎用テクノロジー・コネクタを使用すると、エラーが発生します。

説明:

汎用テクノロジー・コネクタを作成し、それをプロビジョニングまたはリコンシリエーションに使用するとします。さらに、この汎用テクノロジー・コネクタの「OIM-アカウント」データセットのフィールドまたは子データセットを一部削除するとします。次回、同じ汎用テクノロジー・コネクタを使用してプロビジョニングまたはリコンシリエーションを実行すると、例外がスローされます。

一度でも汎用テクノロジー・コネクタを使用してプロビジョニングまたはリコンシリエーションを実行すると、「OIM-アカウント」データセットのフィールドまたは子データセットを削除する操作は無効になります。これは、削除しようとしているフィールドまたは子データセットにリンクしているデータが、すでに Oracle Identity Manager データベースに格納されているためです。

このため、すでに汎用テクノロジー・コネクタを使用してプロビジョニングまたはリコンシリエーションを実行している場合は、「OIM-アカウント」データセットのフィールドまたは子データセットは削除しないでください。

現在は例外がスローされますが、将来のリリースでは、適切なエラー・メッセージが表示されるようになる予定です。

- **サマリー:**

一致のみのマッピングで使用された「リコンシリエーション・ステー징」フィールドの名前が「リコンシリエーション・ステー징」子データセットのフィールドの名前として再利用されると、リコンシリエーションに失敗します。

説明:

「リコンシリエーション・ステー징」データセットと「OIM-ユーザー」データセットのフィールド間で一致のみのマッピングを作成すると、リコンシリエーション・ルールが作成されます。子データセットがある場合は、一致のみのマッピングの入力フィールドとなる「リコンシリエーション・ステー징」データセットのフィールドの名前が「リコンシリエーション・ステー징」の子データセットで使用されていないことを確認してください。一致のみのマッピングで使用された「リコンシリエーション・ステー징」フィールドの名前が「リコンシリエーション・ステー징」子データセットのフィールドの名前として再利用されると、リコンシリエーションに失敗します。

次に、このシナリオの具体例を示します。

AD_User データセットは「リコンシリエーション・ステー징」親データセットです。このデータセットには、次のようなフィールドがあります。

- ユーザー ID
- 名前
- 指定
- 場所

Admin_Groups データセットは、AD_User データセットの子データセットです。AD_User データセットの「ユーザー ID」フィールドを使用して、「OIM-ユーザー」データセットとの「一致のみ」のマッピングを作成する場合、Admin_Groups データセット内のフィールドに「ユーザー ID」という名前は使用できません。この子データセットに「ユーザー ID」という名前のフィールドがある場合、リコンシリエーションに失敗します。

- **サマリー:**

「パスワード」フィールドがリコンシリエーション・エンジンでリコンサイルされていなくても、このフィールドは「OIM-ユーザー」データセットに表示されます。

説明:

「ステップ 1: 基本情報の指定」 ページで「信頼できるソース・リコンシリエーション」 オプションを選択すると、「パスワード」 フィールドはリコンシリエーション・エンジンでリコンサイルされていなくても、「ステップ 3: コネクタ構成の変更」 ページの「OIM- ユーザー」 データセットに表示されます。このフィールドとそれに対応する「リコンシリエーション・ステージング」 データセット内のターゲット・システム・フィールドとの間にマッピングを作成すると、自動的に生成されるリコンシリエーション・フィールド・マッピングにより、このフィールドの「パスワード」 フィールドへのマッピングが試行されます。このため、リコンシリエーション・イベントが失敗します。

- 次のデータセット間のトランスフォーメーション・マッピング作成には制限があります。
 - 「ソース」と「リコンシリエーション・ステージング」
 - 「OIM」と「プロビジョニング・ステージング」

制限は次のとおりです。

- 「ソース」 データセットまたは「OIM」 データセットの子データセットと、「リコンシリエーション・ステージング」 データセットまたは「プロビジョニング・ステージング」 データセットの異なる（つまり対応しない）子データセットの間には、トランスフォーメーション・マッピングを作成できません。これは、1つの親データセットに含まれる複数の子データセットから、別の親データセットに含まれる1つの子データセットへの多対1マッピングは作成できないことも意味します。

次に、この制限の具体例を示します。

「ソース」 親データセットに、次のような子データセットがあるとします。

MyGTC: グループ・データセット

- * フィールド 1: グループ名
- * フィールド 2: グループ・タイプ

MyGTC: ロール・データセット

- * フィールド 1: ロール名
- * フィールド 2: ロール・タイプ

「リコンシリエーション・ステージング」 親データセットに、次のような子データセットがあるとします。

MyGTC: グループ・データセット

- * フィールド 1: グループ名
- * フィールド 2: グループ・タイプ

MyGTC: ロール・データセット

- * フィールド 1: ロール定義

この制限により、たとえば「ソース」 データセットの「グループ名」 フィールドと「リコンシリエーション・ステージング」 データセットのロール定義フィールドの間には、トランスフォーメーション・マッピングを作成できません。

ただし、たとえば「ソース」 データセットの「ロール名」 フィールドおよびロール・タイプ・フィールドと、「リコンシリエーション・ステージング」 データセットのロール定義フィールドの間には多対1マッピングを作成することはできます。

- 「ソース」 親データセットまたは「OIM」 親データセットと、「リコンシリエーション・ステージング」 子データセットまたは「プロビジョニング・ステージング」 子データセットの間には、トランスフォーメーション・マッピングを作成できません。

次に、この制限の具体例を示します。

次のような「OIM」データセットおよびそのフィールドがあるとします。

「OIM - アカウント」データセット

- * フィールド 1: 名前
- * フィールド 2: 住所
- * フィールド 3: ユーザー ID
- * ...

次のような「プロビジョニング・ステージング」子データセットおよびそのフィールドがあるとします。

「グループ」データセット

- * フィールド 1: グループ名
- * フィールド 2: グループ・タイプ

この制限により、たとえば「OIM - アカウント」データセットの「名前」フィールドと「グループ」データセットの「グループ名」フィールドの間には、トランスフォーメーション・マッピングを作成できません。

- リコンシリエーション・ルールを作成するには、「リコンシリエーション・ステージング」データセットのフィールドと「OIM - ユーザー」データセットのフィールド間で一致のみのマッピングを作成します。子データセットがある場合は、一致のみのマッピングの入力フィールドとなる「リコンシリエーション・ステージング」データセットのフィールドの名前が「リコンシリエーション・ステージング」の子データセットで使用されていないことを確認してください。

このガイドラインに従っていないと、リコンシリエーションは失敗します。

- 子フォームでフィールドに「日付」データ型を設定するとします。子レコード削除のプロビジョニング操作時にこのフィールドに日付値があると、操作が失敗します。

26.3 多言語サポート

この項では、次のような多言語サポート機能に関連する既知の問題について説明します。

■ サマリー:

ステージング・ディレクトリにあるデータファイルの 1 行目または 2 行目に非 ASCII 文字があっても、警告は表示されません。

説明:

ターゲット・システム・ユーザー・データのメタデータに対しては、非 ASCII データがサポートされていません。CSV リコンシリエーション・フォーマット・プロバイダを使用する場合、このような制約があるため、ステージング・ディレクトリに格納されている親データファイルや子データファイルのメタデータ行（2 行目）には非 ASCII 文字を使用できません。

この制約は、次の理由により設定されています。

汎用テクノロジ・コネクタ・フレームワークでは、Oracle Identity Manager でユーザー定義プロセス・フォームが作成され、入力したメタデータに基づいてフォームとフィールドに名前が指定されます。また、これらのフォームおよびそのフィールドに対して、それぞれデータベース表および列が作成されます。ただし、データベース・オブジェクト名には非 ASCII 文字を使用できないため、ターゲット・システムのメタデータでも非 ASCII 文字はサポートされません。

汎用テクノロジ・コネクタ・フレームワークでは、データファイルの 1 行目および 2 行目にある非 ASCII 文字を解析し、正しく表示する場合があります。ただし、コネクタ・オブジェクトが正しく作成されるようにするには、データファイルの 1 行目および 2 行目に非 ASCII 文字を使用しないようにする必要があります。

注意： データファイルの3行目以降は、フィールド・データ値に非 ASCII 文字を使用できます。これらのデータ値はリコンサイルされ、Oracle Identity Manager データベースに格納されます。

■ **サマリー：**

Oracle Identity Manager でサポートされている任意の言語について、ブラウザの言語設定が Oracle Identity Manager サーバーのオペレーティング・システムの言語設定と一致しない場合、「ステップ 3: コネクタ構成の変更」ページにデータが正しく表示されません。

説明：

「ステップ 3: コネクタ構成の変更」ページには、汎用テクノロジー・コネクタ・フレームワークによって動的に作成されるイメージが表示されます。このページでのローカライズされたテキスト・アイテムの表示には、次のような制限があります。

フィールド・ラベルの表示に使用する言語は、次の言語設定と一致している必要があります。

- Oracle Identity Manager の言語
- オペレーティング・システムの言語
- ブラウザの言語

ブラウザの言語設定が Oracle Identity Manager サーバーのオペレーティング・システムの言語設定と同じであれば、すべてのテキスト・アイテム（フィールド名および GUI 要素ラベル）は目的の言語で表示されます。

注意：

- ローカライズされた GUI 要素ラベルは、このような GUI 要素についてローカライズされたラベルを含むリソース・バンドルを作成し、使用している場合のみ表示されます。
 - 繁体字中国語または簡体字中国語を使用する場合、すべてのテキスト・アイテムを目的の言語で表示するには、ブラウザのロケール（言語および国 / 地域）がオペレーティング・システムのロケールと同じである必要があります。
-
-

ブラウザの言語がオペレーティング・システムの言語と異なる場合は、次の静的ラベルが（ブラウザの言語に関係なく）英語で表示されます。

- 「OIM - ユーザー」データセットおよび「OIM - アカウント」データセットのラベル：
「ユーザー」および「アカウント」
- 「OIM - ユーザー」データセットに含まれるフィールドのラベル：
 - * ユーザー ID
 - * 電子メール
 - * 名
 - * 姓

「ステップ 3: コネクタ構成の変更」ページのその他のアイテムのラベルについては、非 ASCII 言語は正しく表示されません。

■ サマリー:

「ステップ 3: コネクタ構成の変更」 ページのテキスト・アイテムの一部は、常に英語で表示されます。

説明:

このリリースでは、「ステップ 3: コネクタ構成の変更」 ページに表示される静的テキスト・アイテムの一部がローカライズされていません。たとえば、MyGTC という名前の汎用テクノロジー・コネクタを作成するとします。このコネクタのリソース・オブジェクトをあるユーザーにプロビジョニングした場合、ページに次のテキストが表示されます。

Provisioning form for MyGTC

Child Form of MyGTC representing child-dataset: *child_data_set_name*

このリリースの Oracle Identity Manager では、このテキストの静的部分は常に英語で表示されます。

必要であれば、次の手順に従って静的テキストをローカライズできます。

関連項目: 『Oracle Identity Manager グローバリゼーション・ガイド』

1. テキストをローカライズする言語について、`customResources.properties` ファイルを開きます。Oracle Identity Manager でサポートされている各言語に対応するファイルはすべて、`OIM_HOME/xellerate/customResources` ディレクトリに格納されています。

次に、この手順の操作の一例を示します。

汎用テクノロジー・コネクタの作成時に、次のような値を指定したとします。

- コネクタ名: MyGTC
- 親フォーム名: ADUser
- 子データセット名: ADUserRole
- 子フォーム名: ADURole1

静的テキストをスペイン語で表示する場合は、`customResources_es.properties` ファイルを開きます。このファイルは `OIM_HOME/xellerate/customResources` ディレクトリに格納されています。

2. 目的の言語に対応する `customResources.properties` ファイルに、次の行を追加します。

```
global.UD_PARENT_FORM_NAME.description=Localized_text_for_"Provisioning form for" GTC_name
```

```
global.UD_CHILD_FORM_NAME.description=Localized_text_for_"Child Form of" GTC_name Localized_text_for_"representing the child data set": child_data_set_name
```

この 2 つの行で、次のように置換します。

- * `PARENT_FORM_NAME` の親フォーム名への置換

Oracle Identity Manager では、親フォーム名はすべて大文字に変換されます。そのため、名前は大文字で入力する必要があります。

- * `Localized_text_for_"Provisioning form for"` の「Provisioning form for」部分のローカライズ・テキストへの置換

- * `GTC_name` の汎用テクノロジー・コネクタ名への置換

- * `CHILD_FORM_NAME` の子フォーム名への置換

Oracle Identity Manager では、子フォーム名はすべて大文字に変換されます。そのため、名前は大文字で入力する必要があります。

- * `Localized_text_for_"Child Form of"` の「Child Form of」部分のローカライズ・テキストへの置換
- * `child_data_set_name` の子データセット名への置換

例:

スペイン語の場合、`customResources_es.properties` ファイルに、次の行を追加します。

```
global.UD_ADUSER.description=Spanish_text_for_"Provisioning form for" MyGTC
```

```
global.UD_ADUROLE1.description=Spanish_text_for_"Child Form of" MyGTC
Spanish_text_for_"representing the child data set": ADUserRole
```

26.4 コネクタ・オブジェクト

この項では、次のような汎用テクノロジ・コネクタ・フレームワークにより自動的に作成されるコネクタ・オブジェクトに関連する既知の問題について説明します。

■ サマリー:

- 汎用テクノロジ・コネクタに指定した名前が既存のコネクタ・オブジェクトと同一の名前でも、警告が表示されません。
- コネクタ XML ファイルのインポート時に既存のコネクタ・オブジェクトが新規コネクタ・オブジェクトで上書きされても、警告が表示されません。

説明:

これについては、26-2 ページの「汎用テクノロジ・コネクタおよびコネクタ・オブジェクトの名前」にも記載されています。

■ サマリー:

汎用テクノロジ・コネクタの作成中にエラーが発生した後、「ステップ 5: コネクタ情報の検証」ページの「戻る」をクリックして「ステップ 4: コネクタ・フォーム名の検証」ページに戻ると、ページ上にフォーム名が表示されません。

これは意図的なものであり、ソフトウェアの問題や制限に起因するものではありません。

説明:

このマニュアルで前述したとおり、汎用テクノロジ・コネクタの作成プロセスが失敗した場合でも、一部のコネクタ・オブジェクトは自動的に作成されます。このようなコネクタ・オブジェクトには、「ステップ 4: コネクタ・フォーム名の検証」ページで名前を指定したプロセス・フォームも含まれます。コネクタの作成プロセスが失敗した場合は、「ステップ 4: コネクタ・フォーム名の検証」ページに表示される空白のフィールドに新規フォーム名を入力するよう求められます。これにより、新規フォーム名を送信する際、プロセス・フォーム名が一意かどうかのチェックが必ず行われます。

前のページに戻って汎用テクノロジ・コネクタ作成に必要なデータを入力するかわりに、再度「ステップ 1: 基本情報の指定」ページから開始して、汎用テクノロジ・コネクタを作成しなおすこともできます。

■ サマリー:

汎用テクノロジ・コネクタのリソース・オブジェクトは、Oracle Identity Manager で定義されている組織にプロビジョニングできません。

説明:

リソース・オブジェクトは、汎用テクノロジ・コネクタの作成中に自動的に作成されるコネクタ・オブジェクトの 1 つです。このリソース・オブジェクトは、OIM ユーザーにのみプロビジョニングできます。Oracle Identity Manager で定義されている組織にはプロビジョニングしようとししないでください。

- **サマリー:**

「汎用テクノロジー・コネクタの管理」操作を実行すると、汎用テクノロジー・コネクタのオブジェクトに対するカスタマイズが上書きされます。

- **説明:**

Design Console を使用すると、汎用テクノロジー・コネクタの作成中に自動的に作成されるコネクタ・オブジェクトをカスタマイズできます。ただし、コネクタ・オブジェクトをカスタマイズした後に「汎用テクノロジー・コネクタの管理」操作を実行すると、そのコネクタ・オブジェクトに対して行ったカスタマイズが上書きされます。そのため、次のガイドラインのいずれかを適用することをお勧めします。

- Design Console を使用して、汎用テクノロジー・コネクタ・オブジェクトを変更しないでください。
IT リソースについてはこのガイドラインは適用されません。IT リソースのパラメータは、Design Console を使用して変更できます。ただし、GenericConnector カテゴリおよび GenericConnectorProviders カテゴリのキャッシュを有効にしている場合は、IT リソースのパラメータを変更する前後のいずれかにキャッシュをパージする必要があります。PurgeCache ユーティリティの実行の詳細は、『Oracle Identity Manager ベスト・プラクティス・ガイド』を参照してください。
- Design Console を使用して汎用テクノロジー・コネクタ・オブジェクトを変更する場合、汎用テクノロジー・コネクタの変更に「汎用テクノロジー・コネクタの管理」機能を使用しないでください。
- 自動的に作成されたコネクタ・オブジェクトは、汎用テクノロジー・コネクタの作成プロセスが失敗した場合でも削除されません。

26.5 一般的な既知の問題

この項では、前述のどのカテゴリにも該当しない次のような既知の問題について説明します。

- **サマリー:**

汎用テクノロジー・コネクタの作成プロセス中に安全でないファイル名の例外がスローされる場合があります。

- **説明:**

Oracle WebLogic Server および Oracle Application Server では、汎用テクノロジー・コネクタの作成プロセス中に安全でないファイル名の例外がスローされる場合があります。この例外は無視してかまいません。汎用テクノロジー・コネクタの作成プロセスは、これらの例外が発生しても影響を受けません。この問題は、IBM WebSphere Application Server および JBoss Application Server では発生しません。

- 汎用テクノロジー・コネクタでは、親データの削除のリコンシリエーションはサポートされていません。

親データの削除をリコンサイルする場合、汎用テクノロジー・コネクタは使用できません。たとえば、ユーザー John Doe のアカウントがターゲット・システムから削除された場合、汎用テクノロジー・コネクタを使用してこのユーザーの削除を Oracle Identity Manager でリコンサイルすることはできません。

■ サマリー:

Design Console を使用して「パスワード・フィールド」属性および「暗号化」属性がフィールドに設定された場合、UDF の内容は暗号化されません。

説明:

前述したとおり、「パスワード」フィールドは「OIM-ユーザー」データセットの事前定義済フィールドの1つです。このフィールドには「パスワード・フィールド」属性および「暗号化」属性が設定されます。Design Console を使用すると、作成する UDF に「パスワード・フィールド」属性および「暗号化」属性を設定できます。このように設定すると、新規作成される UDF に既存の「パスワード」フィールドと同じプロパティが指定されます。ただし、汎用テクノロジー・コネクタ・フレームワークではこのフィールドは他のテキスト・フィールド（文字列データ型）と同様に扱われ、その内容は管理およびユーザー・コンソールまたはデータベースでは暗号化されません。

- このリリースの Oracle Identity Manager では、Design Console でリコンシリエーション・ルールの作成に使用できる機能の一部が、汎用テクノロジー・コネクタ・フレームワークでは使用できません。次のパターンのリコンシリエーション・ルールのみを作成できます。

A equals B

"and"

C equals D

"and"

E equals F

リコンシリエーション・ルールの使用の詳細は、『Oracle Identity Manager デザイン・コンソール・ガイド』を参照してください。

- 汎用テクノロジー・コネクタを作成する際、ターゲット・システムとの通信に Remote Manager を使用するようには指定できません。そのため、汎用テクノロジー・コネクタでは Remote Manager を使用できません。
- プロビジョニング中にターゲット・システムへ送信する必要がある日付の値の書式を指定する場合は、「ターゲット日付書式」パラメータを使用します。日付を数値形式で入力すると、このパラメータの日付の検証は行われません。指定可能な日付書式の詳細は、次の Web ページを参照してください。

<http://java.sun.com/docs/books/tutorial/i18n/format/simpleDateFormat.html#datepattern>

- 現在実行されていないスケジュール済タスクのステータスは INACTIVE です。これらのタスクは、次の指定の日時に実行されます。ある特定の条件下では、スケジュール済タスクに NONE ステータスが自動的に割り当てられます。ただし、このステータスへの変更はタスクの機能には反映されず、機能は継続して指定の日時に実行されます。
- リリース 9.0.3 の汎用テクノロジー・コネクタをリリース 9.1.0.1 の Oracle Identity Manager インストールにインポートすると、アプリケーション・サーバーのログ・ファイルに致命的でない例外が記録されます。

この例外は、コネクタがリコンシリエーションをサポートしているかどうかに関係なく、プロビジョニングをサポートしている場合にのみ記録されます。この例外メッセージは無視してかまいません。管理およびユーザー・コンソールには、エラー・メッセージは表示されません。

- 「OIM-アカウント」データセットのフィールドのデータ型を変更すると、汎用テクノロジー・コネクタの管理操作の際に、「ステップ 5: コネクタ情報の検証」ページで「作成」をクリックしたときにエラーがスローされます。

Oracle Identity Manager をターゲット・システムとして使用したプロビジョニング操作

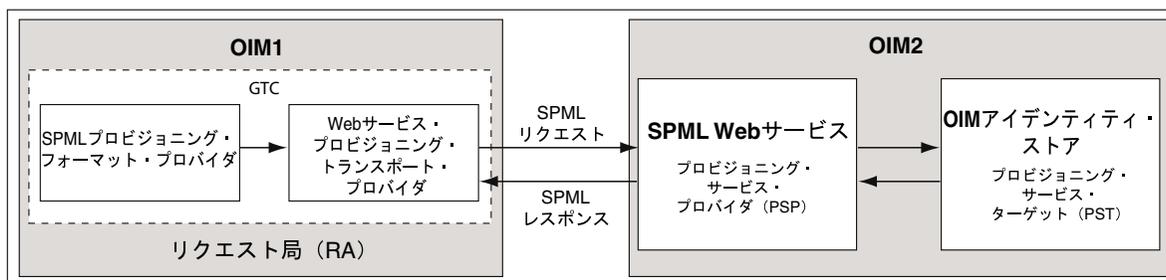
ターゲット Oracle Identity Manager インストール上でプロビジョニング操作を実行する汎用テクノロジー・コネクタを作成できます。つまり、Oracle Identity Manager インストールを別の Oracle Identity Manager インストールのプロビジョニング専用ターゲット・システムとして使用できます。

関連項目：

- 20-8 ページの「[SPML プロビジョニング・フォーマット・プロバイダ](#)」
- 『Oracle Identity Manager Tools リファレンス』の「SPML Web サービス」

図 27-1 は、ターゲット・システムとして構成されている Oracle Identity Manager インストールに SPML リクエストを送信する設定を示しています。

図 27-1 Oracle Identity Manager をプロビジョニング・ターゲットとして使用するための設定



次のサンプル・シナリオは、この設定の動作を示しています。

OIM1 と OIM2 は、2つの異なる Oracle Identity Manager インストールです。OIM1 上には、SPML プロビジョニング・フォーマット・プロバイダと Web サービス・プロビジョニング・トランスポート・プロバイダを含む汎用テクノロジー・コネクタ (GTC1) を作成済です。OIM2 は、OIM1 のターゲット・システムです。SPML Web サービスは、OIM2 上で実行されています。

関連項目： サポートされている SPML 操作の詳細は、20-8 ページの「[SPML プロビジョニング・フォーマット・プロバイダ](#)」を参照してください。

OIM1 上の OIM ユーザーは、ターゲット・リソース・アカウントを OIM2 上で作成、変更または削除できます。OIM1 を介してユーザーの OIM2 (ターゲット・リソース) アカウントを作成、変更または削除すると、次のイベントのシーケンスが発生します。

1. GTC1 の SPML プロビジョニング・フォーマット・プロバイダがプロビジョニング操作のデータを SPML リクエストに変換し、それを SOAP パケットにバンドルします。
2. GTC1 の Web サービス・プロビジョニング・トランスポート・プロバイダが SOAP パケットを OIM2 の SPML Web サービスに送信します。
3. SPML Web サービスが SPML リクエストを解析し、プロビジョニング操作を実行します。
4. プロビジョニング操作が OIM2 で正常に実行されたため、SPML Web サービスが (操作の成功を示す) SPML レスポンスを Web サービス・プロビジョニング・トランスポート・プロバイダに返信します。
5. psoID の値が Web サービス・トランスポート・プロバイダによって SPML レスポンスから抽出され、汎用テクノロジ・コネクタ・フレームワークに ID フィールド値として渡されます。

ターゲット Oracle Identity Manager インストールへのプロビジョニング・リンクとして使用する汎用テクノロジ・コネクタを作成するには、22-3 ページの「[管理およびユーザー・コンソールを使用した汎用テクノロジ・コネクタの作成](#)」に記載の手順を実行します。この汎用テクノロジ・コネクタの作成に固有の手順は次のとおりです。

1. 「ステップ 1: 基本情報の指定」 ページ:

「プロビジョニング」 オプションの選択後、次のプロバイダを選択します。

- Web サービス・プロビジョニング・トランスポート・プロバイダ
- SPML プロビジョニング・フォーマット・プロバイダ

2. 「ステップ 2: パラメータ値の指定」 ページ:

ランタイム・パラメータおよび設計パラメータの値を指定します。この手順の実行時に、「ターゲット日付書式」パラメータの値を指定する必要はありません。これは、日付書式のデフォルト値を使用するためです。

3. 「ステップ 3: コネクタ構成の変更」 ページ:

Web サービス・プロビジョニング・トランスポート・プロバイダと SPML プロビジョニング・フォーマット・プロバイダには、メタデータを検出する機能はありません。このため、次に示すように、「ステップ 3: コネクタ構成の変更」 ページでフィールドの追加とマッピングの作成を手動で行う必要があります。

- a. 「プロビジョニング・ステージング - アカウント」 データセットに次のフィールドを作成します。これらのフィールドは必須です。

- Users.User ID
- Users.First Name
- Users.Last Name
- Organizations.Organization Name
- Users.Xellerate Type
- Users.Role
- Users.Password

SPML プロビジョニング・フォーマット・プロバイダを使用しているため、次のフィールドはメタデータの検出中に「プロビジョニング・ステージング - アカウント」データセットに自動的に作成されます。

- containerID
- objectclass
- ID

注意: プロビジョニング操作では、containerID フィールドの値は Organizations.Organization Name フィールドの値より優先されます。汎用テクノロジー・コネクタによって送信された SPML リクエストに containerID と Organizations.Organization Name の両方のフィールドの値が含まれている場合は、containerID フィールドの値がプロビジョニング操作で使用されます。

必要に応じて、「プロビジョニング・ステージング」データセットに次のフィールドを作成することもできます。これらのフィールドは必須ではありません。

- Users.Middle Name
- Users.Status
- Users.Provisioned Date
- Users.Creation Date
- Users.Manager Login
- Users.End Date
- Users.Start Date

- b. 次の表に示すマッピングを作成します。1 列目のヘッダーの「推奨」という言葉は、2 列目に記載のフィールドとのマッピングの作成時に、1 列目に記載のソース・フィールドを使用することは必須ではないことを示します。

「OIM - ユーザー」データセットの推奨ソース・フィールド	「プロビジョニング・ステージング - アカウント」データセットの宛先フィールド
ユーザー ID	Users.User ID
名	Users.First Name
姓	Users.Last Name
組織	Organizations.Organization Name
ユーザー・タイプ	Users.Xellerate Type
従業員タイプ	Users.Role
パスワード	Users.Password

SPML プロビジョニング・フォーマット・プロバイダを使用しているため、次のマッピングはメタデータの検出中に自動的に作成されます。

「OIM - アカウント」データセットのソース・フィールド	「プロビジョニング・ステージング - アカウント」データセットの宛先フィールド
containerID	containerID
これは推奨ソース・フィールドです。任意のフィールドを使用できます。	
objectclass	objectclass
これは推奨ソース・フィールドです。任意のフィールドを使用できます。	
ID	ID

手順 3.a に記載の必須でないフィールドを追加する場合は、そのフィールドと対応するフィールドとのマッピングを「OIM」データセットに作成する必要があります。

-
- c. 必要に応じて、「OIM - アカウント」および「プロビジョニング・ステージング - アカウント」データセットの子データセットを作成し、子データセットの対応するフィールド間のマッピングを作成します。

「ステップ 2: パラメータ値の指定」ページで、「グループ・メンバーシップ情報を保持している子データセットの ID 属性」パラメータの値を指定します。指定する値と同じ名前のフィールドが子データセットに含まれていることを確認してください。

関連項目: 「グループ・メンバーシップ情報を保持している子データセットの ID 属性」パラメータの詳細は、20-8 ページの「[SPML プロビジョニング・フォーマット・プロバイダ](#)」を参照してください。

前述のステップの実行後、「ステップ 3: コネクタ構成の変更」ページで「**閉じる**」をクリックします。

4. 「ステップ 4: コネクタ・フォーム名の検証」ページ:
このページに表示される値を受け入れるか、変更します。
5. 「ステップ 5: コネクタ情報の検証」ページ:
このページに表示される情報の確認後、「**作成**」をクリックします。

汎用テクノロジー・コネクタ・フレームワークで作成されるコネクタ・オブジェクト

汎用テクノロジー・コネクタ・フレームワークで作成されるコネクタ・オブジェクトのリストは、「ステップ1: 基本情報」ページで選択した「リコンシリエーション」オプションおよび「プロビジョニング」オプションの組合せによって異なります。

- 「リコンシリエーション」と「プロビジョニング」の両方の選択
- 「リコンシリエーション」のみの選択
- 「プロビジョニング」のみの選択

注意: フォーム名を除き、汎用テクノロジー・コネクタ・オブジェクトの名前は `GTC_NAME_GTC` の形式になります。`GTC_NAME` は、コネクタに割り当てた名前です。

たとえば、作成する汎用テクノロジー・コネクタの名前として `DBTables_conn` を指定すると、すべてのコネクタ・オブジェクト（フォーム以外）の名前は `DBTables_conn_GTC` となります。

28.1 「リコンシリエーション」と「プロビジョニング」の両方の選択

「ステップ 1: 基本情報」ページで「リコンシリエーション」オプションおよび「プロビジョニング」オプションの両方を選択した場合、次のオブジェクトが作成されます。

- IT リソース・タイプ

IT リソース・タイプのパラメータは、最初のページで選択した、リコンシリエーションとプロビジョニングの両方のフォーマット・プロバイダとトランスポート・プロバイダのランタイム・パラメータです。

- IT リソース

IT リソースは、IT リソース・タイプのインスタンスです。プロバイダのランタイム・パラメータ値が含まれます。

- リソース・オブジェクト

リソース・オブジェクトは、「リコンシリエーション・ステー징」親データセットを構成するフィールドの値を保持します。各リコンシリエーション・ステー징子データセットでは、複数値のリコンシリエーション・フィールドが、(対応する子フィールドを属性として)自動的に作成されます。

注意: 「信頼できるソース・リコンシリエーション」オプションを選択した場合、信頼できるリソース・オブジェクトは、コネクタ作成プロセスの最後に自動的に作成されるオブジェクトの 1 つになります。

- 親フォームと子フォーム

親フォームと子フォームは「OIM - アカウント」データセットおよびその子データセットにそれぞれ基づいています。デフォルトでは、フォームの名前は対応するデータセットの名前と同じです。「ステップ 3: フォーム名の検証」ページで、必要に応じてフォーム名を変更できます。

- プロセス定義

プロセス定義には、リコンシリエーション・フィールド・マッピングと、システム定義およびプロビジョニング固有のプロセス・タスクが含まれます。プロセス定義に含まれるプロセス・タスクの詳細は、22-36 ページの「[プロビジョニングの構成](#)」を参照してください。

- 汎用アダプタ

汎用アダプタには、汎用テクノロジ・コネクタが実行するすべてのプロビジョニング機能のコードが含まれます。

- スケジュール済タスク

リコンシリエーションの実行中、スケジュール済タスクは事前定義済の順序でリコンシリエーション・プロセスをトリガーします。スケジュール済タスクの設定の詳細は、22-35 ページの「[リコンシリエーションの構成](#)」を参照してください。

- リコンシリエーション・ルール

リコンシリエーション・ルールはルール要素で構成されています。単一ルール要素は、「リコンシリエーション・ステーjing」データセットと「OIM - ユーザー」データセットのフィールド間で作成されたマッピングを表します。

- アクション・ルール

ターゲット・リソースのリコンシリエーションのために作成されるデフォルトのアクション・ルールを次に示します。

ルール条件	アクション
1つのエンティティ一致の検出	リンクの確立
1つのプロセス一致の検出	リンクの確立

信頼できるソースのリコンシリエーションのために作成されるデフォルトのアクション・ルールを次に示します。

ルール条件	アクション
一致の検出なし	ユーザーの作成
1つのエンティティ一致の検出	リンクの確立
1つのプロセス一致の検出	リンクの確立

汎用テクノロジー・コネクタの作成者が属するユーザー・グループは、汎用テクノロジー・コネクタの作成プロセス中に自動的に作成される次のコネクタ・オブジェクトの管理者となります。

- IT リソース
- リソース・オブジェクト（管理者およびオブジェクト認可者）
- すべてのフォーム
- プロセス定義
- リコンシリエーション・フィールド
- リコンシリエーション・フィールド・マッピング

28.2 「リコンシリエーション」のみの選択

「リコンシリエーション」オプションおよび「プロビジョニング」オプションの両方を選択した場合に作成されるオブジェクトのリストは、28-2 ページの「[「リコンシリエーション」と「プロビジョニング」の両方の選択](#)」を参照してください。「ステップ 1: 基本情報」ページで「リコンシリエーション」オプションのみを選択した場合、そのリストの中の次のオブジェクトは作成されません。

- 汎用アダプタ
- プロビジョニング固有のプロセス・タスク

ただし、プロセス定義自体とそれを構成するシステム定義プロセス・タスクは作成されません。

28.3 「プロビジョニング」のみの選択

「リコンシリエーション」オプションおよび「プロビジョニング」オプションの両方を選択した場合に作成されるオブジェクトのリストは、28-2 ページの「[「リコンシリエーション」と「プロビジョニング」の両方の選択](#)」を参照してください。「ステップ 1: 基本情報」ページで「プロビジョニング」オプションのみを選択した場合、そのリストの中の次のオブジェクトは作成されません。

- スケジュール済タスク
- リコンシリエーション・ルール
- リコンシリエーション・フィールド
- リコンシリエーション・フィールド・マッピング

第III部

付録

第III部は次の付録で構成されています。

- [付録A「管理者のためのシステム設定上の考慮事項」](#)

管理者のためのシステム設定上の考慮事項

以前のリリースでは、ユーザー登録やアカウント作成などの構成機能のための管理およびユーザー・コンソールの設定は、この付録で説明していました。現在のリリース以降、この情報は『Oracle Identity Manager リファレンス』の「管理およびユーザー・コンソール機能の構成の設定」を参照してください。

索引

C

containerID フィールド, 22-20
CSV ファイル, 26-5
CSV リコンシリエーション・フォーマット・プロバイダ, 20-8, 21-4, 21-18

I

ID フィールド, 22-19, 22-22, 22-36
IT リソース, 管理, 12-47
IT リソース, 削除, 12-48
IT リソース, 作成, 12-45
IT リソース, 表示, 12-47
IT リソース, 変更, 12-48
IT リソースの管理, 12-47
IT リソースの削除, 12-48
IT リソースの作成, 12-45
IT リソースの表示, 12-47
IT リソースの変更, 12-48

O

objectClass フィールド, 22-20
「OIM - アカウント」データセット, 19-6, 26-2, 26-5
「OIM - ユーザー」データセット, 19-6, 26-3
「OIM」データセット, 19-6, 22-19, 22-31, 24-6
OIM ユーザー, 19-9
Oracle Identity Manager, 1-1
 アテステーション, 15-2
 検索, 3-2
 使用, 3-1
Oracle Identity Manager から Oracle Identity Manager
 へのプロビジョニング, 27-1
Oracle Identity Manager 間のプロビジョニング, 27-1

S

SPML Web サービス, 20-8, 27-1
「SPML Web サービス操作名」パラメータ, 20-11
「SPML Web サービスの SOAP メッセージ本文の接頭辞」
 パラメータ, 20-11
「SPML Web サービスの WSSE が構成されていますか。」
 パラメータ, 20-10
「SPML Web サービスのターゲット・ネームスペース」
 パラメータ, 20-11
「SPML Web サービスのバインディング・スタイル
 (DOCUMENT または RPC)」パラメータ, 20-10

「SPML Web サービスの複合データ型」パラメータ,
 20-11
SPML 操作, サポート, 20-9
SPML プロビジョニング・フォーマット・プロバイダ,
 20-8, 21-4, 21-10, 21-19
SSL, Web サービス用の構成, 20-13

T

To-Do リスト, 7-1
 アテステーション・リクエスト, 7-7
 オープン・タスク, 7-3
 保留中の承認, 7-2

U

UDF, 26-10

W

Web サービス, SSL の構成, 20-13
「Web サービス URL」パラメータ, 20-13
「Web サービスの SOAP アクション」パラメータ, 20-10
Web サービス・プロビジョニング・トランスポート・プ
 ロバイダ, 20-13, 21-10, 21-19

X

XML ファイル
 汎用テクノロジー・コネクタ, 22-33
 プロバイダ, 21-12

あ

アーカイブ・ディレクトリ, 権限, 20-7
「アーカイブ・ディレクトリ」パラメータ, 20-4
アカウント
 作成, 2-2
 パスワードの変更, 2-3, 4-2
 「マイ・アカウント」リンク, 4-1
アカウント・ステータスのリコンシリエーション, 19-7
アカウント・ロックのステータス, 16-10
アクセス・ポリシー, 11-1
 管理, 11-5
 作成, 11-3
 「リソース管理者」オプション, 12-3
値オブジェクト, 21-11
アップグレード, 23-5

- アテストーション, 15-1
- アテストーション・タスク
 - アクション, 15-7
 - アテストーション・ドリブンのワークフロー機能, 15-10
 - 権限に対するレビューア・レスポンス, 15-7
 - 作成, 15-6
 - 送信したタスクの処理, 15-8
 - ワークフロー・ダイアグラム, 15-6
- アテストーション・タスクのコンポーネント
 - アテストーション・アクション, 15-4
 - アテストーション・データ, 15-4
 - アテストーション日, 15-4
 - タスク・ソース, 15-4
 - レビューア, 15-4
- アテストーション・ダッシュボード, 15-20
 - アテストーション・リクエスト詳細の表示, 15-21
 - 使用, 15-20
 - スケジュール済タスク, 15-22
 - 電子メール通知, 15-22
- アテストーション・プロセス, 15-14
 - アテストーション・エンジン, 15-9
 - アテストーション受信ボックス, 15-4
 - アテストーション・ダッシュボード, 15-20
 - アテストーション・リクエスト, 15-5
 - 委任, 15-5
 - 委任されたレビューアへの通知, 15-11
 - 管理, 15-17
 - 管理者の管理, 15-19
 - 拒否されたアテストーション権限, 15-12
 - 削除, 15-3, 15-18
 - 作成, 15-15
 - 実行, 15-19
 - 実行履歴の表示, 15-19
 - スケジュール済タスク, 15-10
 - スケジュールの定義, 15-3
 - スコープ, 15-3
 - 設定, 15-14
 - タスク・コンポーネント, 15-4
 - 定義, 15-3
 - 電子メール, 15-11
 - プロセス管理者, 15-3
 - プロセス所有者, 15-3
 - 編集, 15-18
 - 無効化, 15-3, 15-18
 - 有効化, 15-18
 - ライフサイクル, 15-6
 - レビューア, 15-13
 - レビューア設定, 15-3
 - レビューアへの通知, 15-11
- アテストーション・リクエスト, 7-7
 - コメントと委任の更新, 7-9
 - 表示, 7-7
 - 保存, 7-8

い

「一意の属性 (親データ)」パラメータ, 20-6

お

オープン・タスク, 7-3
再試行, 7-4

再割当て, 7-5
手動による完了, 7-5
表示, 7-3
表示の管理, 7-6
レスポンスの設定, 7-5

か

カスタム・コネクタ

- 構成 XML ファイル, 18-2
- コネクタ・パック・ディレクトリ, 18-11
- 作成, 18-1
- テスト・クラス, 18-10

「カスタム認証資格証明ネームスペース」パラメータ, 20-10

「カスタム認証ヘッダー要素」パラメータ, 20-10

カスタム・プロバイダ, 19-9, 21-1, 24-7

完全リコンシリエーション, 19-7

管理およびユーザー・コンソール, 1-1, 3-3

- エンドユーザー, 1-2
- 管理者, 1-2
- 承認者, 1-2
- ユーザー・ロール, 1-2
- ログアウト, 2-4
- ログイン, 2-4

管理グループ, 10-4

- 権限の更新, 10-5
- 作成, 10-5
- 割当て, 10-4

管理者グループ

- 権限の更新, 12-5
- 作成, 12-4
- 割当て, 12-4

き

共有ドライブ・リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダ, 20-2, 21-18, 24-3, 24-7

く

グループ権限, 22-2

「グループ・メンバーシップ情報を保持している子データセットの ID 属性」パラメータ, 20-11

け

権限, 汎用テクノロジー・コネクタの作成, 22-2

検索

- 検索の動作, 3-3
- リクエスト, 6-11
- ワイルドカードの使用, 3-2

検証プロバイダ, 19-4, 22-30

検証プロバイダ, 事前定義済, 20-23

こ

「固定列幅」パラメータ, 20-5

子データセット, 19-4, 19-5, 19-6, 22-26, 22-30, 24-4, 26-4

コネクタ, インストール, 17-1

コネクタ・オブジェクト, 22-33, 23-4, 24-7, 26-2, 26-8, 28-1

コネクタのインストール, 17-1

さ

参照フィールド, 22-26

し

自己登録, 2-1

自己登録, リクエストのトラッキング, 2-3

システム設定上の考慮事項, A-1

事前定義済コネクタ, インストール, 17-1

事前定義済コネクタのインストール, 17-1

事前定義済プロバイダ

CSV リコンシリエーション・フォーマット・プロバイダ, 20-8, 21-4, 21-18

SPML プロビジョニング・フォーマット・プロバイダ, 20-8, 21-4, 21-10, 21-19

Web サービス・プロビジョニング・トランスポート・プロバイダ, 20-13, 21-10, 21-19

共有ドライブ・リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダ, 20-2, 21-18, 24-3, 24-7

検証プロバイダ, 20-23

変換プロバイダ, 20-17

「指定されたデリミタ」パラメータ, 20-5

承認の詳細, 6-12

承認プロセス, 1-3

診断ダッシュボード, 16-1

JBoss へのデプロイ, 16-4

WebLogic へのデプロイ, 16-5

WebSphere へのデプロイ, 16-5

インストール, 16-3

インストール確認, 16-2

インストール後チェック, 16-3

起動, 16-6

使用, 16-7

テスト, 16-8

診断ダッシュボードのテスト

Java VM システム・プロパティのレポート, 16-12

JMS メッセージ機能の検証, 16-11

Microsoft SQL Server の JDBC ライブラリ可用性のチェック, 16-8

Microsoft SQL Server の前提条件チェック, 16-9

Oracle Identity Manager のライブラリと拡張機能のバージョンのレポート, 16-12

Oracle Identity Manager のライブラリと拡張機能のマニフェストのレポート, 16-12

Oracle の前提条件チェック, 16-9

Remote Manager のステータス, 16-11

SSO 診断情報, 16-13

WebSphere の埋込み JMS サーバーのステータス, 16-10

WebSphere のバージョンのレポート, 16-12

アカウント・ロックのステータス, 16-10

基本接続性のテスト, 16-13

スケジューラ・サービスのステータス, 16-11

ターゲット・システムの SSL トラストの検証, 16-12

データ暗号化キーの検証, 16-11

データベース接続性のチェック, 16-10

信頼できるソース・リコンシリエーション, 19-6, 22-4

す

スケジュール済タスク, 22-35

スケジュール済タスク, 管理, 12-50

スケジュール済タスク, 作成, 12-49

スケジュール済タスク, 表示, 12-51

スケジュール済タスク, 変更, 12-51

スケジュール済タスクの管理, 12-50

スケジュール済タスクの作成, 12-49

スケジュール済タスクの変更, 12-51

ステージング・ディレクトリ, 権限, 20-7

「ステージング・ディレクトリ (親アイデンティティ・データ)」パラメータ, 20-2

「ステージング・ディレクトリ (複数値アイデンティティ・データ)」パラメータ, 20-3

「ステップ 1 基本情報の指定」ページ, 20-8, 22-3, 22-33, 24-2, 27-2, 28-1

「ステップ 2 パラメータ値の指定」ページ, 22-6, 22-33, 24-3, 24-4, 27-2

「ステップ 3 コネクタ構成の変更」ページ, 20-4, 22-16, 22-33, 24-4, 26-2, 26-6, 26-7, 27-2

「ステップ 4 コネクタ・フォーム名の検証」ページ, 20-4, 22-31, 22-33, 26-8, 27-4

「ステップ 5 コネクタ情報の検証」ページ, 22-33, 26-8, 27-4

せ

設計パラメータ, 22-6

そ

操作レポート, 14-2

増分リコンシリエーション, 19-7

ソース, 19-4

「ソース」データセット, 22-18

「ソース日付書式」パラメータ, 22-9

組織, 9-1

管理, 9-2

検索と表示, 9-2

作成, 9-2

詳細の管理, 9-4

組織詳細, 9-4

た

「ターゲット ID」パラメータ, 20-9

ターゲット Oracle Identity Manager インストール, 27-1

「ターゲット日付書式」パラメータ, 22-10

多言語サポート, 19-9, 21-15, 26-5, 26-6

「タブ区切り」パラメータ, 20-5

ち

チャレンジ質問と回答, 4-3

て

「停止しきい値最小レコード」パラメータ, 22-8

データセット, 19-4, 22-18

OIM, 22-19, 22-31, 24-6

OIM - アカウント, 26-2, 26-5

「OIM - アカウント」データセット, 19-6

OIM - ユーザー, 26-3
「OIM - ユーザー」データセット, 19-6
「OIM」データセット, 19-6
子, 19-4, 19-5, 19-6, 22-26, 22-30, 24-4, 26-4
ソース, 22-18
「ソース」データセット, 19-4
フィールド, 追加または編集, 22-23
プロビジョニング・ステージング, 22-20
「プロビジョニング・ステージング」データセット,
19-5
リコンシリエーション・ステージング, 19-4, 22-18,
26-3
データ表示のカスタマイズ, 3-3
デプロイメント・マネージャ, 13-1
デプロイメントのインポート, 13-4
デプロイメントのエクスポート, 13-2
ベスト・プラクティス, 13-6

と

トランッキング
リソース・リクエスト, 6-10
トラブルシューティング, 25-1

は

パスワード型フィールド, 24-5, 26-10
パスワード・フィールド, 24-4, 26-10
「パスワードを格納するカスタム要素」パラメータ,
20-10
「バッチ・サイズ」パラメータ, 22-7
バッチ・リコンシリエーション, 19-8, 22-7
汎用テクノロジー・コネクタ
アーキテクチャ, 19-3
アカウント・ステータスのリコンシリエーション,
19-7
アップグレード, 23-5
インポート, 23-4, 26-2
エクスポート, 23-3
完全リコンシリエーション, 19-7
管理, 23-1
機能, 19-6
機能アーキテクチャ, 19-2
コネクタ・オブジェクト, 22-33, 23-4, 26-2, 26-8,
28-1
作成, 22-1
信頼できるソース・リコンシリエーション, 19-6
増分リコンシリエーション, 19-7
データセット
「データセット」を参照
トラブルシューティング, 25-1
バッチ・リコンシリエーション, 19-8
日付書式, 19-9
必要性, 19-2
複数値属性データの削除のリコンシリエーション,
19-8
プロバイダ
「プロバイダ」を参照
プロビジョニング・モジュール, 19-5
ベスト・プラクティス, 24-1
変更, 23-2, 24-8
マッピング, 目的, 19-3
汎用テクノロジー・コネクタのアップグレード, 23-5

汎用テクノロジー・コネクタ・フレームワーク
機能, 19-6

ひ

日付書式, 19-9
表示
「...」を伴うテキスト・エントリ, 3-3
アテステーション・リクエスト, 7-7
承認の詳細, 6-12
スケジュール済タスク, 12-51
プロセス・フォームでの子表, 3-5
プロビジョニングの詳細, 6-12
リクエスト・ステータス履歴, 6-14
リクエストのコメント, 6-13

ふ

「ファイル・エンコーディング」パラメータ, 20-6
「ファイルの接頭辞」パラメータ, 20-5
フォーム名, 20-4, 22-31, 26-2
「複数値属性データの削除の調整」パラメータ, 22-9
複数値属性データの削除のリコンシリエーション, 19-8
プロキシ指定, 4-3
プロセス・フォーム, 20-4, 22-31, 26-2, 26-5
プロバイダ
XML ファイル, 21-12
検証プロバイダ, 19-4, 22-30
再利用, 21-17
選択, 22-2, 22-3
定義, 19-3
パラメータ, 設計, 22-6
パラメータ, ランタイム, 22-6
プロビジョニング・トランスポート・プロバイダ,
19-5, 21-4, 22-4
プロビジョニング・フォーマット・プロバイダ,
19-5, 21-4, 22-5
変換プロバイダ, 19-4, 19-5, 22-24
役割, 21-2
要件, 確認, 22-2
リコンシリエーション・トランスポート・プロバイ
ダ, 19-4, 21-4, 21-9, 22-4
リコンシリエーション・フォーマット・プロバイダ,
19-4, 21-4, 21-9, 22-4
リソース・バンドル, 21-15
「事前定義済プロバイダ」も参照
プロバイダの再利用, 21-17
プロビジョニング, 構成, 22-36
プロビジョニング・エラー, 25-4
プロビジョニング・ステージング, 19-5
「プロビジョニング・ステージング」データセット,
22-20
プロビジョニング・トランスポート・プロバイダ, 19-5,
21-4, 22-4
プロビジョニングの詳細, 6-12
ユーザー / 組織ごとの表示, 6-13
リソースごとの表示, 6-13
プロビジョニング・フォーマット・プロバイダ, 19-5,
21-4, 22-5
プロビジョニング・プロセス, 1-3

へ

変換プロバイダ, 19-4, 19-5, 20-17, 22-24
 翻訳変換プロバイダ, 20-18
 連結変換プロバイダ, 20-17

ほ

保留中の承認, 7-2
 確認, 7-2
保留中の承認, 表示の管理, 7-3
翻訳変換プロバイダ, 20-18

ま

マイ・アカウント, 4-1
 パスワードの変更, 4-2
 表示と変更, 4-2
マッピング, 19-9, 22-22, 22-24, 24-5
 制限, 26-4
 トランスフォーメーション・マッピング, 26-4
 例, 22-22

め

メタデータ, 22-16
メタデータの検出, 21-3, 22-11, 22-16, 23-2, 24-4,
 25-3
メタデータの定義
 「メタデータの検出」を参照
メニュー項目, 汎用テクノロジ・コネクタの作成, 22-2

ゆ

ユーザー, 8-1
 管理, 8-6
 作成, 8-2
ユーザー・アカウント権限, 22-2
ユーザー・アカウント・ステータスのリコンシリエーション, 20-19, 22-23, 22-29
ユーザー・アカウントのメニュー項目, 22-2
ユーザー・アカウント要件, 22-2
「ユーザー・パスワード(認証)」パラメータ, 20-9
「ユーザー名(認証)」パラメータ, 20-9
「ユーザー名を格納するカスタム要素」パラメータ,
 20-10

よ

要件, 22-2

ら

ランタイム・パラメータ, 22-6

り

リクエスト, 6-1
リクエストのコメント, 6-13
リコンシリエーション, 構成, 22-35
リコンシリエーション・エラー, 25-2
リコンシリエーション・スケジュール済タスク, 22-35

「リコンシリエーション・ステージング」データセット,
 19-4, 22-18, 26-3
「リコンシリエーション・タイプ」パラメータ, 22-8
「リコンシリエーション停止のしきい値」パラメータ,
 22-7
リコンシリエーション停止の失敗しきい値, 19-8
リコンシリエーション・トランスポート・プロバイダ,
 19-4, 21-4, 21-9, 22-4
リコンシリエーション・フォーマット・プロバイダ,
 19-4, 21-4, 21-9, 22-4
リソース
 管理, 12-2
 許可, 6-3
 「このリソースに関連付けられた組織」オプション,
 12-3
 再有効化, 6-7
 失効, 6-8
 表示, 5-2
 マイ・リソース, 5-1
 無効化, 6-5
 モデル, 概要, 1-2
 リクエスト, 5-3, 5-4
 リクエストのトラッキング, 6-10
 「リソース認可者」オプション, 12-5
 「リソース・ワークフロー」オプション, 12-6
 ワークフロー, 12-6
 ワークフロー・ビジュアルライザ, 12-6
リソース管理, 12-1
リソース管理者, 12-3
リソース・バンドル, 21-15
リソース・リクエスト
 表示, 5-3
履歴レポート, 14-3

れ

例外処理, 21-12
レポート, 14-1
 Crystal Reports, 14-5
 CSV エクスポート, 14-5
 サード・パーティ製ソフトウェア, 14-5
 実行, 14-4
 詳細の表示, 14-5
 操作, 14-2
 入力パラメータの変更, 14-5
 表示, 14-4
 フィルタ, 14-5
 履歴, 14-3
連結変換プロバイダ, 20-17

ろ

ロギング, 21-12
ロギング, 有効化, 22-37

わ

ワークフロー定義のプロビジョニング, 12-9

 イベント・タブ, 12-9

 タブ, 12-9

ワークフロー・ビジュアライザ, 12-6, 12-7

 タスク詳細へのアクセス, 12-15

 展開ノード, 12-14

 開く, 12-6

 要素, 12-7

 ワークフロー定義のプロビジョニング, 12-9